

奇譚クラス

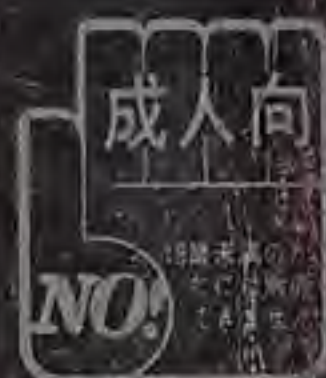
■ 新しい風俗文献誌 ■

3
月
号



'69

3



〔最近版〕粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13種) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号箕田京二宛お申込み下さい。

☆

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、お好きなポーズをお選び下さい。

☆

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦唐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛りを見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 涙涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた淫哉生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた拳句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒縋ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 溶槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
56 高小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 市吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をながく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸股体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 龜貫用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺責(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦唐に泣く美女(安井喜久子)

「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円
十組十枚 一〇〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
3 裏う影に慄のく (佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
6 縛られて困るわ (金原奈加子)
7 私を裏わないで (左近麻里子)
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛るの (金原奈加子)
18 感泣する胸縛り (ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦膚 (関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はく字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
30 出跡を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
44 私は縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 麗身を横たえて (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
52 突き出したお尻 (中河 恵子)
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで悶 (関谷富佐子)
58 罵られる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
60 もう虐めないで (金原奈加子)
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)
70 遅ましき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
74 捧げられる女体 (中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
78 開股の股間縛り (大島 照代)
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)
85 投げ出された裸 (金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupai

Osaka Japan



定価三五〇円

3月号 ¥ 350

〔秘蔵版特選SM資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よひ▽
全裸入墨女賊拷問折檻
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よせ▽
女賊笞打ち白洲糾問
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よゆ▽
入墨女賊ハリツケ拷問
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よめ▽
入墨女賊海老責め拷問
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よす▽
入墨女賊全裸四道い木馬責
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よも▽
入墨女賊逆さ吊り仕置
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よき▽
女賊全裸大の字磔処刑
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△よさ▽
女囚拷問木馬責め
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もと▽
女囚石抱き算盤責め
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もへ▽
美人女囚海老責め拷問
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もに▽

白洲女囚竹棒羞恥責め
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もち▽
美人女囚笞打ち折檻
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もほ▽
女囚開股羞恥責め
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もぬ▽
美貌女囚土壇で胴斬り
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もり▽
艶美女囚白洲に悶える
大手札三枚一組 四〇〇円
美木乃々子 略号△もは▽
全裸強烈羞恥縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なの▽
猿ぐつわにあえぐ裸女
大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号△なむ▽
女奴隷を弄ぶ二人の女
大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△きあ▽
くすぐり責め地獄
大手札三枚一組 四〇〇円
大塚・東浦 略号△きす▽
灼熱の蠟涙責め
大手札四枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△きせ▽
豊満な乳房を責める女
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きそ▽
女奴隷を飼育する美女
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きて▽

凌辱されるマソ女
大手札五枚一組 七〇〇円
大塚・東浦 略号△きと▽
鼻責め悦楽
大手札二枚一組 三〇〇円
大塚・東浦 略号△きな▽
可憐な牝犬の調教
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めあ▽
足舐めをたのしむマソ女
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めく▽
足舐めを強要されたマソ女
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めゆ▽
足舐め訓練を受ける牝犬
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めや▽
愛玩用牝犬の生態
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△めえ▽
足首縛りの表情美
大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あひ▽
美しき足首の縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あは▽
素足を縛られる快味
大手札三枚一組 四〇〇円
一宮百合子 略号△あふ▽
生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ
大手札四枚一組 五〇〇円
木村 洋子 略号△むこ▽
股間縛り恍惚境場面
大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るね▽

鼻責めいたぶられ集
大手札四枚一組 五〇〇円
一宮百合子 略号△るえ▽
首縄股間膝頭縛り
大手札五枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るそ▽
鼻いじめ三態
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△はね▽
鼻責め万華鏡
大手札八枚一組 一二〇〇円
山原清子外一名 略号△はた▽
乳房責め五態
大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号△てら▽
全裸女麻縄強烈縛り
大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号△いね▽
刺青裸女を踏みにじる
大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△いつ▽
洋髪全裸刺青強烈縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いこ▽
可憐島田髻全裸縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△いみ▽
黒フンドシ高手小手縛り
大手札八枚一組 一二〇〇円
山原 清子 略号△ひろ▽
刺青女体エビ責め地獄
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほか▽
文身女体股間縛り
大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号△ほき▽



奇譚クラブ 第三三卷 第三号・通刊第二五〇号

(昭和四十四年) 三月号 目次

本 文

告白 (和子と私) 被征服願望開眼	渋谷 青樹	(10)
ミモザ館 「獣のたわむれ」	睦月笛一郎	(16)
切腹史談 三村家の人人	中康 弘通	(26)
懸賞人選作品 「悦虐のモーター」	大山 太郎	(32)
雑感 妊婦嗜好あれこれ	羽鳥 水江	(39)
連載小説 「大噴火」 (6)	千葉 青鬼	(44)
懸賞人選作品 「妖童記」	秤 蕩也	(52)
ストッキングブーツのレミ	芳野 眉美	(66)
あぶ・らぶす・こんと	水沢 登	(73)
女武者決斗シリーズ 「女熊谷」	川上 米子	(76)
はじめて奇クを読んで		
罪悪感と人間性	梶山鴻一郎	(83)
新連載M小説 「ピエロ床屋」 (1)	鬼山 絢策	(86)

奇クサロン……………編集部構成……………(233)

私の緊縛写真観……………	間宮 芝利
「ボクの責め方」遺稿……………	
古寺巡礼……………	宝塚二三夫
縛り場面を追って「映画通信」……………	美津木 守
刺青賛歌……………	江戸川乱走
短歌「正坐」……………	関 輝穂
忘れ難き梨花嬢……………	風流極道軒
サロン楽我記(第五十一回)……………	辻村 隆
重恥責め「あぐら縛り七態」……………	安井喜久子
淫虐魔の夢……………	真柄 剣平
編集部だより……………	編集部
CM・改作遊び……………	原 喜一
イメージ画「捕獲」……………	赤ちやん
いいたい放題……………	
「奇クサロンの投稿に思う」……………	金剛 敏三
映画「花と蛇」への一考……………	板橋 高志
イメージ画「サアお飲み」……………	西・アキラ
菱組マニアのくりごと……………	
「一月号を読んで」……………	早木 夢二
僕のイメージ画集……………	
「獲物を狙う女」……………	室井亜砂路
再現する禪……………	江川 乱
イメージ画「野晒し放置」……………	宮城 昌子
マニアのフォト通信……………	
「煙草責めプレイ」……………	域野 道一

告白(白い誘惑) マスクの妖美……………暗闇 太郎……………(93)

読むためのシナリオ 「お長受縛譜」……………風流極道軒……………(96)

男性虐待快樂術(第二話)

「魔子さま御尊像」……………馬族 保……………(110)

舞台のマゾ花 被虐の旅……………葉夜川澄尾……………(119)

SMマンガ△マゾミちゃん……………九美 淳……………(123)

連載時代伝奇小説「緋縮緬地獄」(第十一回)……………白鳥 大蔵……………(128)

SMカメラ・ハント△志摩桜子の巻

「牝豹のたわむれ」……………辻村 隆……………(136)

体験記「A子さんとのプレイ」……………大川 恵子……………(156)

S・C・Rへ質問なさる方へお願いと要領……………弓削 達人……………(158)

鬼六談義「一皮むけば」……………岡 鬼六……………(160)

アマゾン考察 女性乗馬のクリテリオン……………佐野 寿……………(168)

太田さんの短歌評釈「征服劇」……………田代 俊夫……………(174)

濡れにぞ濡れし△聖牡丹餅の洗礼……………芳野 眉美……………(180)

連載小説「花と蛇」(続篇第五十一回)……………岡 鬼六……………(194)

娘相撲物語「女の斗志」……………海野三津男……………(202)

セミ・フィクション 或る女……………大久保 新……………(215)

東映正月映画「元禄女系図」

「にわかスター出演の記」……………辻村 隆……………(220)

(目次カット「仲良し」……………室井亜砂路)

(扉カット「イヤリング」……………日本武士)

【最新緊縛資料写真一覽】

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様写真

大手札十枚一組 一〇〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 六〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間諜の拷問

大手札四枚一組 五〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと樂ぐり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 三〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶり

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶醉

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大中判三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大中判五枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大中判五枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大中判五枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一〇〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一〇〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 五〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号(いね)

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 3 月 号

(1969年・3月号<第23巻第3号・通刊第250号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



告白「和子と私」

被征服願望開眼

洪 谷 青 樹

誰にでも想い出というものはあるであろうし、後年に至って、それが自分の生涯に大きな影響を及ぼすものであったことに気付くのも一般的であるのだろう。ただ数え切れないほどのささやかな事柄に当面して来ながら、特に昔の一事をありありと思い出すというのは、他から見ればとるに足らないことでも、本人にとっては何よりも重要なポイントであったからに違いない。私の場合、異性に対する憧憬は被征服願望に通じるのだが、それが私の先天的に内蔵していたものか、この小事

件によって、植えつけられたものかは知らない。ただ誰しもが経験しただろうと思える幼い頃の、たわいのないふざけ遊びが忘れられず、十六年も経て、尚強烈な力を持って浮かび上ってくるのである。

戦争が終わって七年目の春。当時六年生になったばかりの私の室には、近所に住む一年下の和子という女の子が来ていた。

和ちゃん——幼なじみのその子と私は、三年生の頃まで毎日のように一緒に遊んだも

のだった。しかし、高学年になるにつれて、段々と私は男の仲間同志で、彼女は女の子同志で遊ぶことが多くなり、二人で一緒に遊ぶ機会はもう滅多になくなっていったが、その時には、私の貸してやった本を返しに来て、そのまま室にあがり込んでいたように憶えている。

彼女は、母親からそうしつけられていたらしく、小さい頃から私を「おにいちゃん」と呼んで非常によくなついていた。当然ながら私も年上らしく振舞おうと、子供なりにそう

心掛けていたのである。

しかし、「おにいちゃん」とは言っても、子供達の間では実際には全く対等な遊び友達であり、一旦遊びの世界に入ってしまうと年長者を呼ぶ言葉としての意味は全く失われてしまうのが普通である。私と彼女の間も結局はそうしたものであったようだ。

私は、少年雑誌の付録として付いて来た組立て工作を机いっぱいに拡げ、それを作り上げるのに夢中になっていた。

彼女は、私のうしろで畳に寝そべり、本棚から取り出した私の雑誌を、これ又夢中で読みふけていた。

静かな日曜日の昼下り——本の頁をめくる音だけが、時折りいやに大きく響いた。南向きの室にはいつの間にか西へ回った午後の暖かい日差しが差し込んでいた。父は朝からどこかへ出掛けており、母も買物にでも出掛けたらしく、家の中はひっそりと静まり返っていた。

私は幼い頃、近所のおばさん連中の「和ちゃんはきつと、素晴らしい美人になるよ」と話し合うのを聞いていた覚えがあるが、当時の私には美人というのが、いったいどういうことなのかわかる筈もなかった。ただ、可愛い

女の子を意味し、彼女がそれに該当するということ、そしてそれが、彼女から「おにいちゃん」と呼ばれる私にとって、若干の自慢の種になり得るということだけは理解できていたようだった。

しかし、小学校も高学年になると、可愛い女の子は漠然たるあこがれの対象から、子供達の間のアイドル的存在に成長し、近づきたい、一緒に遊びたいという欲望が、いろいろな形をとって現われてくる、そのような年代であった。

彼女の立ち上がる気配に振り向いた時、彼女は棚の上に置かれた本を取ろうと爪先立ちになって、手を伸ばしているところだった。背伸びしたためスカートが少し持ち上がり、裾からのぞいた健康そうな両足が、なぜか強く私の目を捕えた。

長く伸ばした黒い髪。物資の少ない頃にしては珍しい小ぎれいな服装。改めて見直した私の目は彼女のうしろ姿に釘付けになり、心の奥に、何か遠いあこがれのようなものを感じていた。

「何かして遊ぼうか」

私は机の上に散らかったものを片付けながら彼女に声をかけた。

「うん」

彼女は、手にした雑誌を元へ戻して振り返り、私の肩越しに机の上をのぞき込んだ。

「出来上がったの？」

私は、まだ完全に仕上がっていない西洋風の城を持って室の隅に置き、周囲に空のマツチ箱やキャラムルの箱を並べたてて、城壁のような形を整えた。

「これが僕のお城だよ。和ちゃんも、お城を向う側に造れよ」

私は、彼女に古い積木や紙の空箱等を与えて、同じように城らしきものを造らせた。

そのころ、子供の間ではゴム輪銃というのが、はやっていた。ちょうどゴム輪が出回り始めた頃で、文具店に行けば一箱数十本入りのものを五円で売っていた。物差しや棒、又は針金を曲げて造った手製の銃で、そのゴム輪を撃ち合っては遊んでいたのである。

私と彼女は二つの城をはさんで、このゴム輪で戦争ゴッコを始めた。撃つ目標はお互いの城で、早く相手の城を撃ち壊した方が勝ちという、たわいもない遊びである。しかし細かいゴム輪であっても、うまく命中すればキャラムルの空箱程度はポンポンと面白いように倒れ、二人ともいつの間にかその遊びに熱中

していた。

しかし、やがて戦況は私にとって、あまり芳ばしい状況ではなくなってきた。私の城は全て紙。ちよつとでもゴム輪が当たれば城壁はもろくも倒れてしまう。未完成の新しい城も、はや数カ所が破れてしまっていた。それにひきかえ、彼女の城は積木が使ってあり、ゴム輪の一本や二本ではビクともしない。

私は、あせりだした。最初は武士道に従って室の隅から向う隅の彼女の城めがけて撃っていたのであるが、それでは、とうてい効果がなない。私は戦さのルールを無視して、彼女の城のすぐ前まで身を進めた。そして、目と鼻の先の城めがけてゴム輪の弾をいっせいに浴びせかけたのである。

「にいちゃん、ずるい！」

彼女の一喝に押し戻されて、やむなく自分の陣地に退いたものの、私の城はもはや壊滅状態であった。

「やーい、壊れた。壊れた」

彼女の歓声に我を忘れた私は、机の下にあった将棋の駒を取ると、敵城めがけて力まかせに投げつけ始めた。

「あっ！ だめよっ！」

という彼女の声と同時に、さしもの堅固な

敵城もガラガラと崩れはじめた。

「やったわね！」

彼女は立ち上るなり、いかにも負けず嫌いらしい態度で私に向って来た。

「ざまあみろ」

私は彼女を両手で突き離しながら、更に足で彼女の城を滅茶苦茶に壊してしまったのである。

「いやっ！ そんなの卑怯よっ！」

彼女は泣きべそをかきながら、物凄い勢いで私に突っかって来た。彼女は一人娘として育てられたこともあってか、人一倍気の強い女の子であった。こうなれば、もう後は喧嘩である。

その時、私の頭をかすめたことは、今、彼女に泣かれてしまつては困る。やがて帰って来るであろう母に告げ口などされたら……ということであった。年下の女の子を泣かせば立場が悪いということくらい、子供の私にも十分計算することができたし、ましてや悪いのは私の側である。私は自然、守勢にまわらざるを得なかった。

「いいよ。いいよ。僕の負けだよ。降参するからもうやめようよ」

「バカ！ バカ！」

くやしがつてくつてかかる彼女の攻撃を防ぎながら、私はその剣幕に威圧されながら、事の收拾に成すすべもなく、タジタジと後ずさりするばかりだった。

そのうち、どこに隙を見出したのか彼女が突然、満身の力を込めて私にぶつかって来たのである。そうでなくても受身で浮足立っていた私は、ひとたまりもなく尻もちをつき、不様な恰好を彼女の前にさらけ出してしまった。いけない……そう思った私は、あわてて起き上がろうとした。が、その瞬間、私は彼女の重圧を真正面から、もろに受け、あつという間もなく仰向けに押し潰されていた。

私は、あわてた。私も彼女と同様、一人っ子であり負けん気の強い男の子であった。もちろん、女の子から馬乗りになられたことなど一度もなかったし、女の子の下に仰向けに組敷かれて不様な姿をさらすなどということも考えてもみなかった。

男としての威信を、大いに傷つけられた私は、すぐさま彼女を、はね返そうと試みた。が、胸の上に跨って必死になぐりかかってくる彼女の顔を見たとき、私はその気魄に押され、当惑した。よほど口惜しかったとみえ、彼女の目にはくやし涙があふれ、今にも泣き

出さんばかりであった。

はね返して逃げることは出来る。しかしそうなれば、彼女は、ワッと泣き出すに違いない。泣かれては、まずい……何とかうまく機嫌を取って彼女をなだめるしか手段はない。私は彼女の攻撃を適当に両手であしらいつつ、しばらく成るがままに任せてみようと考えた。

が、現実には決してそんなに生やさしいものではなかった。なぐりかかるのが無理とみた彼女は、仰向けに組み敷いた私の腹の上で、ドシン、ドシンと体を弾ませ始めたのであった。

「苦しい。まいった、まいった」

私は体をよじって、彼女の攻撃から必死に身を守らねばならなかった。いかに女の子とは言え、腹の上で暴れられては死ぬ苦しみである。

「苦しい。やめろ。やめろってば！」

私は彼女の尻の下から、悲鳴にも似た苦痛の声を張り上げた。彼女はやっとのこと、体を弾ませるのをやめてはくれたが、私が安堵の息をつく間もなく、再び激しい勢いで胸の上に跨がり直して来た。

「バカ、バカ！」

彼女はまだ、激しい怒りに燃えているらしく、跨ったまま激しく体をゆさぶる。私はその攻撃を少しでも封じようと、両手で彼女の手を掴んでしばらくもみ合った。しかし、それはどうも逆効果のようであった。彼女は、私が抵抗すればする程、よけいにむきになってかかって来た。彼女に組み敷かれたままの恰好での攻防が続いた。

と、突然、胸の上の重圧がずっと消えた。かと思う間もなく、真っ白いパンティ……もともその当時はズロースと言うのが正しいのであろうが……の塊りが、顔めがけて急降下して来たのである。

全く予期しない空爆攻撃であった。私は瞬間的に防手を張って、やっこの思いで支え止め、辛うじて直撃は免れた。

しかし、それが今日というハプニングではなく、明らかに彼女の攻撃作戦であるとかわかるまでに時間はかからなかった。彼女は攻撃目標を変えてもなく、明確に私の顔をめがけて、再び三たびと爆撃を繰り返して来たのである。疑いもなくそれは、私の顔をパンティの下に押し潰そうとする彼女の試みに違いなかった。

私は狼狽した。このようなことは、多少、

物心ついた子供同志にとっても一種のタブーである。それが女の子に依って、それも分別のない小さな子ではなく、私と年の一つしか違わない五年生の女の子に、そのタブーを犯されようとしているのだ。

私は余りのことに声も出せなかった。それは私にとって、今までに経験したことのない恐怖であった。ただ無我夢中で、顔に迫ってくるものを押し返し、払い退けていた。それ以上どうすればいいのかわからなかった。しかし、それと同時に自分自身、得体の知れない何かが、喉の奥から、突き上げて来るような、そして体が全身しびれ切って動けないような、それまでに感じたことのない異常な興奮に駆られてくるを覚えたのだった。

加速度的に繰り返えされる幾度目かの攻撃を、私はついに避けきれなかった。いや、何故か自分でもわからないが、今思い返してみると、避けようとする意志が、その時にはもう、働かなかったのではないかと思うのである。

目の前に迫る白いパンティが大きくクロージアップされた時、私は反射的に両手でそれを防いだはみたが、もう腕に力が入らなかった。いや入れなかったようだ。

彼女はそのまま全身の重みをかけて、のしかかって来た。それでも一秒か二秒、私は持ちこたえたであろう。が、それが私の自身に対する抵抗の限界であった。

私はしばし、その初めて知る異常な重圧にただ呆然とするばかりだった。が、やがて、『苦しい！』

そう感じた瞬間、私の頭の中を思考がもつれ合って駆けめぐった。私は、夢中で顔を左右にねじ曲げ、とにかく息をしようとした。

が、顔を完全に蹂躪している彼女のパンティと両足は、その試みをも許さなかった。彼女は私の抵抗を封ずるかのように、更に重圧を加えて来た。私は呻いた。

顔が、胸が、いや体全体が、カーッと燃え上がるように、急激に熱くなって来るのが自分でもわかった。

『このまま、私は降伏させられるのか』

そんな思いが、私の頭をよぎった。こんな筈ではなかった。理由のわからないくやしさが、それまで経験したこともないような激しい恥ずかしさと共に湧き上るのを覚えた。

息が出来ない！

苦しい！

私は万事、休した。こうなってはもう、必

死になってもがくしかなかった。グイグイと締めつけている太股を何とかして振り解こうとした。容赦なく圧している尻を何とかして押しのけようとした。私の最後の力をふり絞ってのあがきであった。が、彼女の重圧は私の呻き声すら自由にさせなかった。

私は夢中で彼女の体を引きずり降ろしにかかった。身をそらせて、彼女を前に押し出してやれば、比較的容易に抜け出せる——落着いて考えてみれば直ぐ分ることであり、又、

後日の体験から私はそれが確かであることを知ったのであるが、思考力すらあいまいになっていたその時の私にとって、そのような作戦を考え巡らせることは所詮、無理な話であった。羞恥と激怒と、更に、いい表わし難い異様な心理状態が、働いていたに違いないのだが、その時にはただ、苦しまぎれに、もがき、あばれ、呻くだけであった。

と、どうしたはずみか、私は夢中のうちに彼女の長い髪を掴んでいた。私は力まかせにそれを引っばった。

「痛いッ！」

さすがの彼女も、これには参ったとみえて腰を浮かせた。

息が出来た。

私は、ようやく流れ込んできた甘い新鮮な空気を、むさぼるように吸い込んだ。助かった。本当にそう思った。

がしかし、それは束の間の安堵であった。私の手を振り解いた彼女は、何の苦もなく私の両の腕を足下に組敷いてしまったのだ。ハッと気が付いた時は、すでに遅かった。

私は起き上がることもできないまま、再び彼女の下に、完全征服されてしまったのである。

私の頭は混乱した。早くこの恥すべき重圧から脱け出さなければ……そう考えると気ばかりあせるのであるが、それとは全く逆に、いつまでもこのままでもいいような不思議な感覚にすっかり支配されてしまっているのであった。

力では私が負ける筈がなかった。最初は彼女をなだめるつもりで、わざと負けてやったのである。が、それにしても、こうもむごい屈伏を、こうも無残な屈辱を、私が受けなければならぬ破目に陥るとは思ってもよらなかったことだ。こんな筈ではなかったのだ。私の計算は全く狂ってしまったのである。

『母が帰って来たらどうしよう』

『こんな姿を人に見られたらどうしよう』

『こんな事を、もし人に言いふらされたらどうしよう』

私の頭の中で、そんな不安が激しく渦巻いた。しかし、次の瞬間、私の体のどこからか噴き出した、自分でも、何かわからない感情が、怒濤のように押し寄せ、それらの不安をあっという間に押し流していった。

やがて、抵抗する気力をすっかり失った私は、彼女の下に長々とのびていた。

苦しかった。が、幸いなことに、今度は彼女が両ひざで私の腕を押え付けているため、何とかかすかに息をつけるだけの隙ができていた。

どのくらい経ったであろうか、彼女は思い出したように体を引くと、肩の辺りにゆっくりと跨がり直した。しかし、私の両手はパンザイの姿で押えつけられており、前かがみになったためにたるんで出来たパンティのしわが、私の目の前に二重になって覆いかぶさっていた。それはすでに屈辱を与えるものではなく、私の体から全ての力と気力を奪い去る不思議な力を持つものに変わっていた。

「ごめんよ。もう降参だから……」

不明瞭な発音で、やっとこれだけの言葉が

出た。あごを強く膝で、挟み付けられている上、口に張りつくようなパンティが邪魔になつて、思うようには、しゃべれなかった。

「フフフ……」

彼女のふくみ笑いが落ちて来た。

彼女は私の両手を離すと、顔に被さっているスカートをたくし上げ、私はやっとのこと、暗闇から解放された。上目づかいに見上げると、彼女は、してやったりという顔つきで見下ろしていた。すでにべそをかけた顔は消え、本来の活発な彼女の顔に戻って、何か悪いことをしたというような、うしろめたい影はどこにも見当らなかった。

彼女にとっては、馬乗りになったり、顔を敷き潰したりすることは、何らの抵抗も感じない子供同志の単なる遊びにすぎなかったのかもしれない。

いや、「しれない」のではなく、「そうであった」のだ。「尻」「太腿」「異性の肌」などに、何らかのためらいなり羞恥なりを感じて、口にすることや、筆にすることにも抵抗を覚えるのは、セックス意識過剰になった成人のみの感覚であろう。

当時の彼女に、私とは限らず男の子を組敷いて羞恥を覚える感情が芽生えていたとは思

えない。純真に子供同志のケンカ(?)なればこそ出来た格闘劇だったに違いない。

私とても、その時点に於ては同じであったと思う。ただ、少なくとも彼女よりは羞恥を感じていたことは確かであったようだ。それは、女に負けた恥ずかしさもあったであろうが、何か本能的に冒してはならないタブーを破ったような、説明のつかない複雑な恥ずかしさであったことを想い出すのである。彼女に対して感じていた漠然たるあこがれの気持と、はね返す力を自ら抜いたということ、更には押し伏せられて感じとった怒濤のような感情を思うとき、明らかに私には思春期の兆しがあったのだろうが、現在、私の憶れる被征服願望とは程遠い感情であったように思えてならないのである。

しかし、あの瞬間から私の心には、眠っていたものを呼び醒められたにしろ植付けられたにしろ、白いパンティ、健康そうな太もも、弾力性の強い臀が、強烈な残像となって焼付けられたのである。そして、苦しみ、呻いた数十分は、私にとって一生忘れることの出来ない、そして、それ以後の私の人生を左右する程の、激しい体験となったのであった。



ミモザ館

獣のたわむれ

陸月笛一郎

志乃は、一糸も纏わぬ自然の姿で、ハウス
キーパーの浅茅と遅い朝食を執っていた。

これは、哀しい女の業かも知れなかった。
夜を徹しての背徳の秘めごとに、わが身を

被虐の極限にまで、追い込んで堪能した証拠
に、近頃、衰えをみせ始めていた志乃の皮膚
が、上気して油を流したように艶があった。

「疲れたけど、本当に愉しかったわ。蕩けて
しまいそう。打たれた跡に汗が滲みて痛痒ゆ
いくらいよ」

志乃の肌には、背中から脇腹にかけて無数
の爬虫類が踊り、のた打ち廻ったように赤黒

い鞭の跡が、醜く幾重にも盛上っていた。眼
を閉じて、記憶から薄れてゆく、昨夜の遊戯
を、今も漂う痛覚によって反芻して居た。

カーテンの隙間を洩れた一筋の朝の陽が、
無防備の半身を眩しく浮び上らせていた。

「アスパラをとって」

「……」

浅茅は、不気嫌な表情でマヨネーズとアス
パラの缶を片手で差出した。

此の奇妙な女の主従には、世間一般に共通
するような、女性の話題といったものが無か
った。必要なことだけを命令口調で短かく、

志乃が用を言付けるほか、家の中は森閑とし
てしわぶき一つ聞えなかった。

(一)

志乃は、昭和の始め、裕福な貿易商の一人
娘として育った。商館は神戸に在ったが、志
乃達の住む邸は葦屋川だった。色が浅黒くて
美人では無かったが、育ちから来る気品と碧
い瞳は、見る人をして深い淵に曳き入れるよ
うな魔性が宿っているようだった。多少、捲
れ気味の下唇は、甘酸っぱく顔の欠点を隠し
て魅力が溢れた。

深窓の育ちに似合わず小学校四年生の時、すでに女の徴しを見せた。紅い血が糸のように脛を伝うのを見て、志乃は大声で浅茅に告げた。

「浅茅、わたし怪我しちゃった」

当時の初潮年令が、平均して十四、五才であつたのに較べれば遙かに早く、その異常の原因が、他の女性のそれとは別に、志乃をして一生、暗い数奇な運命を辿らしめることになった。

昭和初期の月経帯というのは、ベルト型のネル布地に、替えゴム（生ゴム）だけを、直接にボタンやレイズンスナップで留めた、極めて簡単なものだった。ゴムの風化を防ぐため、ブリキ缶に収められて、名称だけは可憐な花の名前がつけられていた。

しかし、月経帯に対する認識が一般の女性に薄く、塵紙や脱脂綿で済ますのが普通で、一寸、上品な家庭では晒で造ったT字帯を使用するぐらいであつた。そのために、期間中は穢れと称して、家に籠った。地方によっては、別火（家）^{べつか}と言って部落外れの女宿^{おんなやど}に入る習慣があり、おとめは此処で性知識を身につけた。

「ビクトリヤバンド」や「フレンドバンド」

が、欧米大陸式を真似て、ズロースに直接ゴムを張り、其の上に替ゴムを吊った式のものや、和装用に前開き式を創り出し始めた頃から、飛んだり跳ねたりのキャッチフレーズと共に、有名女優の乗馬姿の宣伝も効果があつて、近代的な女性達に愛用されるようになった。

志乃の邸に近い薬局では、里見家が高価な月経帯を、毎月のように購入してゆくのを不審に思つただろうが、べつに町の噂にはならなかつた。

志乃は、神戸の富裕な令嬢の例に洩れず、伝導派の聖霊女学院に入学した。小柄で可愛いらしい新入生の志乃の周囲^{まわり}を上級生達が、自分の妹^{シス}にするために、狎犬のように競い合つた。

靴脱ぎ場の志乃の下足箱の中に、たわいのないプラトニックラブを述べた桃色の小封筒が入っていたり、宝塚への誘いが後を絶たなかつたが、さして興味は湧かなかつた。

そのうち、三年上の犬巻みどりが、志乃の被護者（おねえ様）になった。頬骨の張った骨太のみどりは、獣にたとえれば狼のような貌^{かお}立^{たち}だった。

志乃は幾度か、犬巻みどりの家に遊びに行

くようになった。そして二カ月後に、奇妙な出来事が二人の間に起こつた。

何時になく、何か落着きを失つたような態度だったみどりは、暫くの間、座敷に通した志乃を見詰めていた。

「志乃、うちを好いてる？」

「うん」

「そんなら、あんたを抱いてやる」

「うん」

志乃の反応は呆れるぐらいに簡単だった。みどりは志乃が何かほかのことと感違いしているようにすら思つた。

二人は畳の上に崩れた。奈落の底に躰が落ちこんで行くように志乃は気が遠くなり、二人の間に静寂^{しじま}が流れた。

ようやく身を起こしたみどりは軀を小刻みに震わせながら物憂くズロースを脱ぎ、臉を閉じた。志乃に万年筆を握らせた。

白昼夢のような、あっけない一刻だったが志乃は簡単に応じはしたものの初めて経験する異常な驚きだった。みどりととの数度に亘る隠湿な時間は、志乃をして急速に大胆にせしめた。志乃は水道の蛇口に着いているゴムホースを切り取って持参した。

俯伏せになったみどりは、何かを期待して

息を弾ませた。志乃は、馬乗りになった。みどりは、白眼を剥き、奇妙にもつれた悲鳴を挙げてもがいた。志乃は、構わずに力を入れた。紅い血が畳の上にしたたり落ちた。

「ひいーっ！」

生殺しにされた蛇のように、全身を痙攣させて青臭い脂汗を流すみどりを、馬乗りになったまま眺める志乃の眼は、獲物を仕止めた豹のように燃えた。

みどりは、一週間ばかり学校を休んだが、本能的にみどりと仲を感じとった他の上級生達は、その結末を知ってか知らずか、誰も志乃を誘おうとはしなかった。

志乃が四年生になった時、里見家の遠縁に当る建築金具専門の老舗、犬飼の跡取りで大学に在学中の庄三が、志乃を見染めて夢中になった。

京都で、金具商の犬飼といえは西洋建築の上等な金具を一手に引受け、どれ程資産があるか判らない財閥だった。庄三の願いで犬飼家は、人を介して志乃を是非とも嫁に欲しいと申入れて来たが里見家では遠回しに断わった。だが執心の庄三は直接、里見家を訪問して膝詰談判に及んだ。

「志乃はまだ女学生ですよ。嫁入修業はこ

れからです。それに庄三さんとは血筋が近過ぎますので、悪しからず」

「待てと仰言るなら何時迄も待ちますし、養子でなければ駄目だと言われるなら、入婿でも何にでもなります」

志乃の母親は、狼狽して顔を蒼白にすると手厳しく拒絶した。

「いいえ。一寸事情があつて、志乃は当分結婚をさせませんのよ。以後、庄三さんも志乃に近づかないで下さいませ」

里見家では、若い庄三の熱心さが意外に強いを感じとり、面倒を引起こすのを恐れて六甲の別荘に志乃を隠した。

六甲山は、明治三十四年に英人アーサー・グルーが山頂にゴルフコースを開いたのが濫觴で、阪神地区の富豪が山麓に競って別荘を建てた。花崗岩質の白く粗い山肌が、紺青に映える瀬戸内海に調和して、夏の別荘地としては申分なかった。

だが、明るく爽快な、周囲の風光とは裏腹に、重厚なイギリスのヨークシア風の里見邸は、何か不幸——異常な出来事——を暗示させる、たたずまいであった。

庄三が、志乃の居所を嗅ぎ付けて六甲の別荘に到着した時、生憎、付女中の浅茅は買物

に下山した跡だった。

志乃は、母親の注意を忘れて、不注意にも庄三を居間に通してしまった。

とりとめのない話の途中、庄三は、志乃が手洗いに立った隙を狙ってテーブルの上のレモンスカッシュに睡眠剤を入れた。庄三は垂れる髪を掻き上げながら、志乃が睡眠剤入りの飲物をとり上げるのを、落着きの無い態度で待った。志乃が舌触りの変った飲物に不審を抱いた瞬間、

「志乃ちゃん、お願いだ。僕と一緒に死んでおくれ」

庄三は、志乃の肩を驚愕みにしていきなり押倒した。

スカートが捲れて白い腿が宙に踊ったが、庄三は眼もくれなかった。両肩に膝を乗せて鼻をつまみ、荒い息を吐いて暴れる志乃の口に、睡眠剤入りの飲物を無理矢理に流し込んだ。グラスが歯に当って壊れ、志乃の唇が切れた。

苦し気に跳く志乃を、うつろな眼で見詰めながら庄三も睡眠剤を叩いた。

「僕も直ぐ志乃ちゃんの処へ行くよ」

果せぬ恋として、無理心中を計ったのだが、庄三の方はその場で直ぐ吐いて、大事に

は至らなかった。

三十分後に、浅茅が戻って来て大騒ぎになった。

きょとんとしたような庄三に較べて志乃の方は、医院に担ぎ込まれ診察台に乗せられた時は無残な姿だった。

看護婦に手足を押え付けられて、口から除々に胃袋まで太く長いネラトンのカテーテルが挿入された。

「もう手遅れかも知れんが、一応、出来るだけの処置はしてみるよ。若いから案外、保つかも知れんしね」

という伏線を、医師に張られるほどの状態だった。

医師は、内径八ミリのカテーテルを五十糎ばかり嚥下させると、漏斗から洗滌液を注ぎながら眼鏡を光らせた。

胃洗滌の冷たい液が、一瞬の間、志乃の白濁した意識を正常に戻した。

天井の無影燈が脳髓を刺戟し、網膜の下を紅彩が万華鏡のように廻った。見えない筈の咽喉一杯に差込まれた褐色のカテーテルの輪郭だけが、不思議にも志乃の混濁した記憶の底に残った。

喻えようも無い苦痛と吐気がふと消え去っ

て、神前に捧げられた犠牲のように静止した軀から、昇華する悦楽が白金の線のように脊髄を走った。

強い苦痛の波が連続して襲えば襲う程、その後は深い海底からもがきながら浮かび上るように窒息寸前のエクスタシーにも似た恍惚感が脹れあがった。志乃は、遠い意識の中で臍指を反らした。

「おやおや、このお嬢さんにおしっこを掛けられたよ。この分なら大丈夫だな」

医者は、白衣の胸のあたりを濡らされて苦笑した。

翌日の午後、仮死から覚めた志乃は天井の染みを眺めていた。未だ体全体が麻痺して他人からの借物のようだった。

志乃は、診察台での様々な屈辱に満ちた我が身を思い浮かべ自分の心を虐げて自己嫌悪に陥っていた。

『あんな時に、死に勝る苦しみを超えた悦びがあったのはどういうことなの。私には生理的な欠陥があるけど、心の中にも病気があるのかしら』

双方の親は、世間態を慮ばかって先ず新聞社に手を打って報道を押えた。又、庄三の無理心中とは考えず、未だ若い二人が単純に死

を選んだと解釈した。

安易な妥協案として、志乃を直ちに退学させ、庄三の妻になるようにと仕向けた。志乃は、母親の思惑とは別に、あっさりこの結婚を承知した。

志乃は、庄三という男が好きになったのではなく、結婚という事に期待を持っていた。庄三と一緒になれば、あの時のように強烈な倒錯した陶醉が、又得られるのではないかと胸を焦した。又、女同志だけで話題になる初夜の不安と苦痛、男性の乱暴を夢見た。期待は輪をかけてふくらんだ。

庄三は、夢にまで描いた志乃と結婚出来ることになったものの何故か当初程の感激はなかった。志乃を危く殺しかけた強迫観念が、一層、負い目を深くした。

二人の密月旅行は白浜のホテルで二日間を過ごしたが、庄三は滑稽な程打ちひしがれて充血した眼をしていたのに引き換え、志乃は花嫁らしからぬ風情で、パリ祭などを口ずさんでいたのだった。

結婚後、最初の生理が終って、二週間目の夜、庄三は、志乃の腰にかちりと月経帯が喰い込んでいるのに不審を感じた。生理にかこつけて無知な夫を拒む手段かと思ってみた。

が、証拠はまさしく生理の最中であることを示していた。

庄三は、慌てて手を引いた。以後、庄三が注意深く観察していると、志乃は二十八日周期七日の生理の中に二週間目に少量の出血が五日続くのが例であった。

月に二度、半月近く生理のある女として新妻を観た場合、医学的にも性的にも知識の乏しい庄三でも、疑念が湧いた。その事以外にも異常と思えることが感じとれた。庄三は錯乱し、益々瘦せた。

里見家から付いて来た女中の浅茅が、今は無遠慮に黒い月経帯を幾枚も、風呂場や生垣の日陰に並べて干すのを見ると、庄三に絶望の色が浮かんだ。

その後も、志乃の生理は大抵、規則正しく月に二度ずつ、必ず訪れた。生理の前になると、志乃の眼は異様に輝いて、浅黒い皮膚が艶っぽくなった。そして自由に夫をリードした。そんな時だけ、志乃は恍惚の淵に辿り着くようだった。

夫の庄三は、自分が浅間しい煩惱の犬に成り下った錯覚に襲われて、自分から望んだ宿命を呪った。

しかし志乃の生理が止まり、顔に寒れが目

立ったのに気付いて、庄三は不審に思った。

浅茅にそつと志乃の妊娠の徴候を耳打ちされた庄三は、夢ではないかと喜び、今度こそ本当の幸福を掴む機会に恵まれた事を神に感謝した。

しかし、この志乃の妊娠こそ、庄三に対する運命の神の、最も残酷なしっぺ返しだったのだ。

激しい悪阻^{つわり}の後、胎児は順調に育っているかに見えたが、五カ月に入った頃、志乃は、突然の変調を来たして入院した。驚いた庄三が、手術台上の志乃をドア越しに見てから二時間が過ぎた。

「患者は、手術しなければなりません。五カ月を過ぎていますし、それに初産ですから、流産の形を執りますよ」

五カ月ともなると胎児も大きく育っているので早期分娩の形をとる以外にないと聞かされても庄三にはピンと来ない。ただ頭をさげるだけだった。

双鉤鉗子を持って、周章てふためき始めた古参看護婦を見て、医師がブラシで手を消毒するのを止めて怒鳴りつけた。

「昨日や今日の駆け出し看護婦でもあるまいし、そのざまは何事だ」

「でも先生、この患者さん、一寸おかしいんです。私ではとても判断出来ません。早く診て下さい」

医師は舌打ちして看護婦と代ったが、志乃の牀を一眼診て唸った。

「こんなことは、長い私の医務生活でも初めてだ。小さな異常は経験したが、これは全く珍しい症例だ」

医師は、急いで他の医師達を臨床させるように看護婦に命じた。

かっきり二時間後、手術用の手袋を脱ぎながら、医師は庄三を呼んで囁いた。

「奥様の流産の原因は、誠に御気の毒とは存じますが、御知らせして置いた方が良いと思います。奥様は、双角双頸子宮といって、すべてが二つずつある奇形体なのです。胎児は両方の子宮に二胎ずつ這入って居ました。手遅れになると大変な処でした。手術によって矯正することは出来ませんが、どの道、御子様は生めないお体です。勿論、医師として奥様の秘密は守ります」

庄三の牀中から水分が干上がった。眼の前が真暗になり、やっと立っていた。志乃の牀の秘密に対する今まで感じた数々の疑問が氷解すると同時に、自分に背負わされた贖罪が

大石のようにのし掛かって来て、庄三は打ちひしがれそうだった。

庄三は、病院からの帰途、一年前に志乃の母親が言った『事情があつて当分、嫁にやりませんのよ』を、^{うわごと}諺言のように繰返した。

志乃は、肉体の秘密が夫に知れると、かえって大胆に、そして奔放に振舞うようになった。庄三はいよいよ痩せて一層寡黙になり酒に溺れた。

或る晩、志乃の我儘から些細な事で言い争い、庄三は思わず志乃の尻を強く打った。しまったと思つたが、どうしたことかその一打ちで、反抗的だった志乃の態度がころりと變つて、奇妙な反応を示した。とたんに眼を瞞り、なよなよとし始め、そして膝を床につけて四つん這いになった。

「もっと打って、もっと強く打って。死ぬ程撲って頂戴」

庄三は、西洋の夫婦が寝室でお尻をスパンキングするという話を聞いた事がある。それは残酷でも、倒錯の世界でも無く、ごく自然の欲求だと謂う。

今、妻がそれを口にした時、庄三は甘いものと解する余裕は無く、只憎しみだけを覚えた。庄三は、洋服箆笥の中から革ベルトを取

り出し、力一杯、憎悪をこめて叩きつけた。

志乃は、舐をのけぞらせ、低い呻きを洩らした。猛り立った庄三のベルトが鳴る度に、志乃の形の良い髪が乱れ、肌に紅い条痕が走った。悲鳴が一打ち毎に大きくなり、床の上をのた打ち廻った。

庄三はますます焦立ち、狂気のように鞭の雨を降らせた。

鞭が海蛇のように志乃の肉を噛むと、汗が飛び散り、舐から芳香が周囲に漂った。

体を床に横たえて、志乃の開いた口から糸を引くような音が洩れるだけになった。すでに苦痛の表情は消えて、喜悅の極限にあることが、打ち据える庄三にもわかった。彼の錯乱は、ますます増大した。

次の日、庄三が書斎に籠ったまま、昼近くなつても出て来ないので、命じられた浅茅がドアを開けた。

「ぎやあっ」

浅茅の悲鳴に志乃が飛んで行った。庄三は書斎の梁にぶら下っていた。

志乃は、十九才の若き寡婦^{ウイドウ}になった。

(二)

ロイヤルオークの扉が静かに叩かれた。

「ウイ、アントーレ」

「喜久さん、御邪魔しますよ」

喜久が読んでいた書籍を閉じ、椅子から立って振り返ると、マダム・フランソワの満ちた姿があった。

グレイのジャージイに薄茶を合わせたローウエストのドレスは、流行に左右されず、マダムを気品のあるものにしていた。

喜久は、思わず嘆息をついた。

「まあ、フランソワ様、美しい。眩しいくらいですわ」

「喜久さんの御口上手な……。美しさは若い人達にだけ言えることよ。私も喜久さんのような若さが欲しい。明日、私達は神戸に旅行します。犬飼夫人の招待に依るものです。喜久さんは、夫人を御存知？」

マダムは、白磁のような彫りの深い貌に、謎めいた微笑を浮かべている。問われた喜久は首を傾けた。

「誰方でしょうか。私、お名前はすぐに忘れてしまつて」

「喜久さんが、一番最初に此の家でお逢いした、ほら、関西の三人の奥様方、一番小柄な方ですよ」

喜久は思い出した。三人とも名前は忘れた

が、犬飼夫人の風貌は、強く印象に残っていた。控え目な態度と、浅黒い皮膚ながら大きな陰翳^{かげ}のある眼差しは、奇妙に忘れることが出来なかった。

「あちらに行く前に、少し勉強して置きましょう。喜久さんは、犬についてどんなことを御承知？」

階段を降りながら、マダムが尋ねた。

「イヌって、あの可愛いスピッツやプードルのことですか」

「そうです。他には何か御存知ない？」

喜久は、困惑して頭を振った。

「縛獄の苦しみを人生の総てに賭けて没入出来る崇高な世界も、住む場所が違うと無関心である事が多いわけね」

マダムは、立上って書棚から百科全書の分厚い一冊を引出して来た。

「い」の項目を繰くと、

いぬ、犬、狢、狗、戌——は、脊椎動物、

哺乳類、食肉用、犬科、犬属に属する動物

で、起源は不明であるが狼に近い動物とし

て、有史以来、人間の忠実な従者として今

日に至っている。これは、狼の雄の指導者

に集団が服従して来た習性に依る。牝犬は

生後、八〜十カ月で成犬になり、年二回発

情し、期間は平均十日間である。交尾期間は、発情後、七〜八日頃で、二日間位である。受胎すれば、発情衰退し、尾を巻いて牡犬の接近を拒む。受胎しない時は、三〜四週間後に又発情する。受胎後、六十日前後で分娩する。

「次を読みますよ」

犬神とは、犬の頭だけを出して土中に埋め餌えさせた後、食物を見せて犬の執念が食物に集中した処に、首を打落し、人通りの多い四辻に埋めて、通行人に踏ませ、骸骨にした後、執念の残った食物を盛った盆に入れて、その霊を遣うを謂う。犬の霊はその人に乗り移り、種々の妖術を行う。この人が死んでも、子々孫々に乗り移ると謂われている。村々には、犬神使い、犬神憑きの家系が在って恐れられ、普通の家は婚姻を嫌った。四国、九州に多い。

「喜久さん、里見家は、所謂犬神使いの家系ですよ。排除すべき迷信ですし、被害者が謂れの無い圧迫を受けることを悲しみます。しかし、巫蠱^{ふこ}の術は、心靈学的に興味があります」

新幹線を乗り継いで、有馬で一泊した、翌日、六甲山麓の里見邸（犬飼家）を訪れた。

マダムと喜久がノッカーの獅子頭で、ドアを叩く前に、ドアの内側を搔きむしる音と共に、けたたましく犬達の吠える声がした。犬を追う気配がして、覗き窓から大柄な女の顔が見えた。女中の浅茅だった。案内された喜久達は、まずソファの傍に蹲踞まる小牛程のマスチーフに驚かされた。女二人だけの生活に、外部からの侵入者に隙を与えないようにするための知恵だと、その時は愚かにも喜久は信じた。

フランスでも有名な洪いニナ・リッチのネービーブルーの衣裳は、志乃に良く似合って齡を隠した。志乃は、ハウスキーパーの浅茅を紹介した。志乃と四、五才位いしか年の違わない浅茅は、髪をひつつめて、口が大きく飢えた野獣の面影があった。

「貴女も倒錯の世界は、御存知ね。私にとって、浅茅は忠実な女中。優しい夫。厳しい調教師でもあるのよ。私は幼い頃、何か悪戯をして母に罪としてむき出しのお尻を叩かれると、何となく泣きながら快感を覚えたもので。小学校で生理の徴しがあり、黄色いゴムの付いた月経帯を穿いた時は、幼い心に何とも言えないショックを感じました。二週間目に、再び出血をみた時、母は非常に驚きまし

た。女中になったばかりの浅茅が、汚れた下着を嫌がりもせず仕末してくれました。女の生理にとって一番嫌な夏、むれたゴムの臭いは生理中の女性にとって死にたい程の苦痛でした。でも私は、ゴワゴワと音をたてるゴムに肌がむれて、赤くかぶれても生理帯が離せませんでした。

幼な心に、浅茅のサド的傾向を感じた私は昼間は、里見家の令嬢として浅茅にかしずかれ、夜は浅茅の振舞うサジスチックな仕打の下に、虐たげられる小動物になりました。

私は、女としての失格者、子供も産めない不具者だという強迫観念が昂じると、何時の間にか牝犬に変身していました。父がしばしば、金に物を言わせて、いかがわしい女を家に引入れ、寝台に手足を縛りつけて、変態的な乱行を強制しているのを、母は浅間しいと言って泣きましたが、私の妖しい血は体中を駆けめぐって、好奇心がかえって昂まりました。

又、通学の途中、道端で発情期の犬を見掛けた時も、私は自分が牝犬になって無残にも犯されているような妄想に襲われて気が狂いそうでした。

私は、嗜虐が罪惡なら、一切の罪科を身に

求めて、我が身を賤しめ、責め、血みどろになる程鞭打って欲しい。そのためには、ナザレのマリアのように群衆に石を投げられ殺されてもよいと思います。今晚、私達の遊戯を見て戴いたら、私の血がどのようなものかお分りでしょう」

喜久は、犬飼夫人の語る言葉の半分も意味が理解出来なかった。志乃が仕度のために席を立った。マダムは、ベルモットを口に含むと、静かに喜久に話し掛けた。

「関が原の役で、因州の領主宮部長照が所領を没収されると、一族である里見家の祖先は山間に落延びて帰農したのです。幕府の意向を受けた因州藩が、落人の帰農武士おちうどに限り、身分を本百姓の下に墜しました。不明確ではありましたが穢多、非人と同格に扱ったのです。年貢を免ぜられた代りに、犯罪人の召捕り、処刑の手助けなど、御成敗御用一式を課せられました。因州一円の燈芯の販売権を与えられ、ただの水呑み百姓と違って、武家並みの格式門を構え、蔵には財宝が溢れていました。御成敗御用は人の忌む、最も賤しい仕事と見られていました。

これが、中国地方以西に蔓延はびこる犬神憑きと混同され、普通の百姓は路で逢うことも避け

たのです。婚姻は、勢い近親結婚が重なり、精神異常者が出たことから、いよいよ、犬神憑きとして恐れられて、部落から孤立しました。長い屈辱の年月の後、藩閥制度が崩潰して、明治二年、代議院が招集されました。

各藩の有為な下級武士で、封建制の矛盾の体験者だった議員は、「里数御改正」の議を建言し、先ず穢多解放を決議したのです。

志乃の曾祖父は、これを聞き、千両箱を二つ馬の鞍に振分けて、神戸に出て来ました。因習の抜き難い鳥取の田舎を出れば、里見家が犬神使いだと言う者はいませんでした。唐物商を営むかたわら、堂島の米相場に手を染めて大儲けをし、今日の里見家の基礎を築いたのです」

マダムの博識には、何時もながら喜久は驚くばかりだった。マダムの話はまだ続いた。「処が不運なことに、明治三十五年秋、里見家にとって不幸な事件が起きました。取引先の外人商会アーレンスの英人支配人が、日本の婦人を裸にして縛りつけ愛犬をけしかけたという、忌わしい行為の疑いで新聞に報道され、里見家迄が爪弾きされてしまいました。汚辱されたといわれる精薄の下女は、支配人に頼まれて、里見家が鳥取から世話した女だ

ったからです。

この報道に激昂した居留地の一般外人は、報道元の新聞社を相手どり告訴しましたが、汚名は消えませんでした。志乃様は異常体に加えてマゾ的傾向と家系に対する劣等感が、虐げられる牝犬に変身することによって、我が身を昇華させる一種のパラノイアね」

ようやく、薄暗くなった応接間の壁に、ぼんやりと八十号大の日本画が掛かっているのが見えた。喜久は今迄気が付かなかったこの絵を改めてしみじみと眺めた。初めは象に乗った菩薩かと思ったが、絵の動物は巨大な犬のようだった。

「これは、滝沢馬琴の書いた南総里見八犬伝の伏姫ですね」

マダムは喜久の疑念をすぐ解いて呉れた。

広間の窓に、厚いカーテンが二重に曳かれた。重苦しい空気の中で、女達はやがて始まる狂宴に、興奮し饒舌になり、ベルモットを口に運ぶ回数が次第に速くなった。

「さて、遊戯を始めましょう。雰囲気をかもしだすために、御客様も裸になって戴きましようか」

浅茅は、客二人に着衣を脱ることを要求した。マダムが躊躇なくドレスを脱ぎ、スリッ

プをソファの上に置くのを見て、喜久も恥らいつながら秘めやかにブラジャアを外し、パンティガードルを取り去った。喜久は闇の中に光る犬達の眼を意識して、蒼い筋の浮く可愛いらしい乳房を両手で覆った。

浅茅は、志乃に手伝わせて、肌を喰い込む程、カッシリと黒革製のブラジャーとコルセット兼用のスリーインワンを着けた。緊めた腰が蜂の胴のように細くくびれ、鞭を持って立った浅茅は、童話の世界の魔女に他ならなかった。

浅茅は、神経質に鞭を鳴らし、志乃にも裸になることを命じた。

「痩せて可愛気のない犬さん。犬に衣裳は不用です。さあ、早くお脱ぎよ」

今は、主従の地位が完全に転倒しているようだった。

志乃は、ブラジャーを外しかけてから新しい客を意識して躊躇した。浅茅の右手の鞭が鋭く空を切り、ブラジャーの上から押えた片手を強く打った。瞬間的な痛みにはひるんだ両手を離すとブラジャーが床に落ちた。弛るんだ乳房には闇にも煌めくスパンコールが張りつけてあった。

両膝について俯向いた腰に再び鞭が絡みつ

くと、志乃は頭から転倒した。浅茅が片手で志乃の髪を掴んで引据えた。志乃は抗がったが浅茅は手荒く剥がしに掛かった。パンティに手が掛かると、志乃は流石に、

「堪忍してェー」

と、悲鳴を挙げて絨緞の上に踞まった。「今晚は、何時になく手間を掛けさせるよ。この牝犬は」

浅茅は、激しい平手打を志乃の頬に喰らわして、ひるむ隙に鞭を捨てると、志乃の両手を捻じり上げた。

馴れた手付で、ひたと縄を掛けて床に突飛ばすと、志乃は不様に転がった。ポメラニアが跳び上って、身動きの出来ない志乃の軀の汗を嘗めた。浅茅は、鞭で犬を除けるとグイッと踏みにじった。

「何時ものように、私の言うことをよおく御聞き。お前は我儘の許されない飼犬なのよ。今晚はお客様の見ていらっしゃる前で、徹底的に苛めてやるからね」

浅黒く痩せた肉体をべったりと床につけた志乃の乳房だけが異常に大きく、出産の経験のある母親のように揺れていた。

志乃の細い頸筋に犬輪を穿めて、鎖を床の環に巻きつけた。犬輪は黒い色の革に人工ダ

イヤを埋めた豪華なものだった。次に絨口具を取り上げ、先端の丸い塊りを傾張らせ、唇を覆うように、うなじの尾錠を緊めた。

「ム……」

志乃が眼を瞑ったまま、何か言ったが声にならなかった。浅茅は、志乃の両手を縛った縄を解いて、腰を蹴って四つ這いにさせた。

腰に、馬具に似た薄い帯の当て具をとり付け、力一杯引き緊めた。具合を試すために一鞭当てた。鞭が空気を切り裂いて鋭い摩擦音と同時に『ばしっ』と、心地よい音が志乃の腰で鳴った。四つん這いの志乃は、二三歩膝で歩いた。声にならない啞の呻きが、啞わえさせられた絨口具の中から洩れて、涎れが垂れた。

今度は、鞭が円弧を描いて、力一杯振り降ろされた。志乃の軀が、雷に打たれた獣のようにひっくり返った。二度目の鞭を避けようと、上半身をもたげたが伸び切った鎖に引張られ、又浅間しい姿態になった。

浅茅は宙に鞭を鳴らした。

「早く四つん這いにおなり」

鞭の先で力まかせに突かれて、志乃は暫く動けなくなった。背中から腹にかけて赤い筋が生き物のように二筋交叉していた。

喜久は、鞭が鳴るたびに我が身を切り裂かれる思いで眼を覆った。

犬達は、浅茅の鞭が志乃の背中で鳴るたびに、加虐者の足許を駆け走り、獲物に飛びかかった。

連続的に唸りを生じる鞭の音と、志乃の悲鳴との交錯に、喜久は、耳鳴りがしてソファに竦まってしまった。志乃を苛む浅茅の鞭は、追いつめられた獣のように、限られた鎖の範囲内で逃げ廻る志乃の軀に執念深く巻きついた。

志乃は、遂に露わな肋骨を喘がせて動かなくなった。浅茅がブーツで踏みつけたが、

「ひゅー」

と、海女が水面に出た時に吐く呼吸音と同じ音が、絨口具から洩れるだけだった。

浅茅が、髪髪の毛のまとわりついた絨口具を脱し、丸い塊りを取り去ると、志乃は白い歯を見せて大きく息を吸い込んだ。

「とってもいい気分だわ。もっと責めて」

呻きながら小さな声で呟いた。どうやら恍惚の境地をさまよっているようだった。背中は無残にも蚯蚓ばれで怪奇な絵模様を描いていた。

喜久は、その無残さに吐気を催したが、マ

ダムは冷静な眼差しで志乃の心理を読んでいくようだった。

「次の責めに移りますよ」

浅茅は、サイドテーブルを、ひっくり返した。志乃をその上に首輪をつけたまま仰臥させ、足を持上げてそれぞれの脚に緊縛した。志乃は最も恥かしい姿勢の俛、身動き一つ出来なくなった。

「犬達もお腹が空いたでしょう。お前は食卓代りだよ」

バターや肉類が、犬に見せつけられて胸や腹の上に置かれた。

犬達は、唸り声を挙げ、争って志乃の軀を踏みつけ、爪をたてた。腹の上の食物に牙を鳴らし、絨緞に撒き散らした。喰い荒された残りがこぼれ落ち、溶けたバターが首筋を伝って流れた。犬達に踏み荒され、ざらついた舌で舐められた食卓が、苦しげに息づいて呻いた。

喜久は、ダラリと口をあけ、虚ろな眼差しで宙を見詰めて犬の蹂躪に甘んじている志乃を、不思議な想いで眺めていた。

(おわり)



談史腹切

三村家の人人 (上)

中原弘通

一、兵乱濫觴

天正二年の秋、織田信長から備中松山の城主、三村修理進元親に密書が届いた。

披見してみると、近々に備中備後両国征討の意を述べたものであったから、元親は早速に一族の者を集めて、この計を謀った。

当時の足利將軍義昭は、信長の勢威に対抗するために西下し、中国一円を従えて帰洛の予定を着々と進めていたところとて、信長としては放っておけない状態であった。そこで宇喜多、毛利両氏に含むところのある三村氏を唆かして中国に乱を起こさせ、それにより中国の武將たちを釘づけしておこうという、自分自身出向けぬ信長の巧妙な作戦であった。

元親は、成羽の城主三村孫兵衛親成、同じく孫太郎親宣、新見^{にいみ}杠^{かう}の城主三村宮内少輔元範、山田鬼の身の城主上田孫次郎実親ら、備中一円に散在する一族の城主たちと計り、信長の助力を得て怨敵討滅の議を定めたが、中に親成父子は、

「先父の怨みを晴らすのに、他の力を藉るのにはよろしくない。信長の謀計に乗って毛利家に叛くことは、末代まで不義の汚名を残すことに相成ろう。不義不仁の信長など、大将と頼むに足らぬと存ずる」

言葉きびしく反論した。

しかし一族は、挙げて信長と協力すべしと議を決し、むしろ親成をまず討つべしとする者さえあったので、親成父子は^{とも}鞆の津に在っ

た義昭のもとへ注進に及んだ。時に天正二年十一月七日の夜で、元親の家臣らが集まり、親成と和を講じようとしていた矢先のことである。

当時、備後の国三原に在った小早川左衛門佐隆景は義昭の使いを受け、ただちに翌八日毛利一門へ、廻状を以って備中鞆に参るべき由を触れたから、江羽、福原、穴戸、熊谷ら重臣をはじめ、九日には毛利輝元みずから出馬し、備中笠岡の浦に陣した。その勢およそ八万余騎と称せられる。

備中の古豪とはいえ、毛利家に叛旗をひるがえしてまで、三村氏が勝算の乏しい合戦を挑むに至ったのには、悲風慘雨の歴史があった。

もと三村氏は備中成羽の城主であったが、永祿二年三月、紀伊守家親は毛利氏の援助で時の松山城主、莊ノ勝資を攻め、代って備中松山の城主に納まったくらいで、毛利氏に何の含むところもなかった。ところが、当時、まだ備前の国は上道郡、沼の城主宇喜多直家が、毛利と尼子の抗争に便乗して備前美作を切り従えはじめた。

美作は尼子領であったが、尼子氏が毛利元就に攻められ、自然、美作の諸城も毛利氏に帰していったから、元就としても宇喜多へ対策の要がある。といって、尼子氏と対峙している手前、みずから出馬もかなわぬので、家親に美作攻めを命じた。そこで家親は、一万の軍勢をもよおし、美作の国は穂村の、興禪寺という寺に入った。

直家とても、三村を容易ならぬ敵と知っていたから、正面から戦うのは得策でないと、家臣の遠藤喜三郎を側近く呼び寄せた。

「三村家親が備中成羽に在城のころ、その方も成羽に在って、よく見知っておろう。このたび秘かに三村が陣に忍び入り、首尾よく家親を討ち取る手立てはあるまいか」

というのである。

喜三郎は畏まって、弟修理と同道で美作へ

潜行、興禪寺の様子をうかがううち、家親主従が欲談の気配を察し、夜陰に乗じて居間の障子に穴をあけ、鉄砲で家親を射殺した。おどろきあわてる三村の家臣どもを尻目に、兄弟とも無事に逃げ帰ったのである。

直家の喜びは一と方ならず、喜三郎は河内守を名乗り十万石、修理にも三千石を賜わるという異例の出世ぶりであったのを見ても、この対三村作戦に直家が慎重を期した度合いも察せられるというものである。

さて家親の長子元祐は、備中の國小田郡猿掛山の城主で、養子として庄の姓を名乗り、次子は修理進元親として松山に在った。

父家親の悲報に接し、何とか備前に進攻し恨みを報ぜんものと悲憤していたが、何分、宇喜多は強兵ゆえ、やむなく時節を待って、さまたま備前の様子を探っていた。

するうち、上道郡沢田村山に、妙善寺という宇喜多の、出城があるのに目をつけた元親は、数百の軍勢をもよおし、不意に攻略してそのまま軍勢をとどめ、己が勢力下のものとした。

直家もとより立腹し、兵を出して奪回を図ったが、はかばかしくない。みずから出陣するにしくはなしと、直家も沼の城を進発と決

したとき、かねて松山から忍びの者が、たちまち元親へ通じたから、願うところと一門に触れを廻し、元親は一族二万余の大軍を擁して備前一の宮に進入した。

一方、それとも知らず直家は、日のうちに妙善寺を奪回しようとして進攻して来る。それと間者から通報を受けた元親は、

「今日直家を討ち取らねば、何時の日かまたと機会があるうか。直家の首に併せて遠藤兄弟を搦めとり、亡父の手向け、孝養すべし」

語気もはげしく全軍を叱咤して、辛川を渡り首部村に至り、ここで軍を三分した。

一手は庄の元祐を将として妙善寺の後詰に六千余騎、一手は幸山の城主石川左衛門尉を将として五千騎、岡山の北、石岡町より原尾島村まで進んで直家の本陣へ突入を期し、総大将元親は一万余騎を率い、津島村から本街道を取って沼の城に押し寄せ、直家不在の間に攻略しようと、都合、三方から直家を囲む作戦である。

直家もまた物見の兵から、備中勢が首部村で三分した由を聞き、更に後報を待つうち、再度物見の兵が帰陣して、

「三方の敵の、近い一手は春日の宮にて芥川をこえ、妙善寺の後詰つかまつる様子と見え

ます」

報告を聞きもあえず立ちあがって、兜をつけ馬にまたがった直家は、

「者ども続け、妙善寺の城、一気にもみつぶせ。さなくば今日の戦い、生きては帰れまいぞ。妙善寺さえ落とさば、備中勢何千何万たりと屍をこの国に曝させようぞ」

叫びつつ真一文字、田といわず畑といわず二十余町の道のりを、砂塵を卷いて攻め寄せた。もとより、先陣後陣の部将ども、御大将におくれじと妙善寺さして馳せ進む。一方、妙善寺を囲む先発軍も、直家の出馬を見るなり、先手がおくれては面目立たずと、天嶮利した城ながら、兵を連ねて乱入した。

城兵必死の防戦も、後陣の大軍が息をつがせず押し寄せたので、あえなく三の木戸まで破れて、ついに火を城に放って退去した。

直家は先手の者を城にとどめ、勝に誇った幕下の将士を従え、三桿山を経て国留村上の山に登った。

三村勢は芥川を渡ったものの、沼の城へ向かうまもなく、妙善寺の陥落を知り、進退に窮する有様。しかも元祐の勢は妙善寺失陥を知らず、国留村まで来て敗軍に遭遇、はじめて事の次第を察する程もあらず、直家の

先陣数千騎が襲いかかった。

案に相違して、行く手の峰々に宇喜多の旗指物ひるがえる様に、士気おとろえた備中勢は、たちまち浮き足立って崩れかかる。中にも、元祐ばかりは後へ退かず、ついに乱軍中に討死。国留村から芥川に至る山野に、討たれた備中勢その数を知らず。まことに惨胆たる敗北を喫したのである。

こうして直家の先陣が元祐の勢を討ち崩すまに、中央を進んで来た備中勢もまた、宇喜多勢の中の手、花房志摩守、同助兵衛、河本対馬守らに迎え討たれ、これまた妙善寺の失陥に続く南軍の敗北に意気おとろえたところとて、防戦し、行田河原に退いて、大方は討死をとげた。

北方を国府市場村まで来て事態を察した元親は、たちまち無念の齒がみして南に転じ、直家の旗下に鼻づら揃えて突入した。その鋒先の鋭どさに、直家旗下の先陣は見るみる切り崩された。

しかし、折よく先に国留村で庄の元祐を討って東帰して来た戸川肥後守、長船紀伊守らの宇喜多勢が、勝に乗ずる備中勢の側面を衝いたので、たちまち攻守逆転して三村方は、わずかに東北方に活路を見出だすのみの惨状

となった。

敗軍と知って、元親が更に宇喜多勢に突入しようとするところを、家臣どもが立ちふさがり、

「合戦は今日に限らず、御身を全うして仇を報じたまうべし」

と、口をきわめて諫めたので、仕方なく元親は西に馬首を転じ、備中に戻るあいだ、退き口を防いで、譜代の者どもまた数多討たれた。

二万余の備中勢も、都合、渴迫、出田、沢田八幡の村里に大方、骨を埋め、帰還した者わずかに四千余騎にすぎなかった。

そのうち元親は、毛利家に援助を乞い、宇喜多を討とうと計画するうちに、かえって直家は毛利に取り入り、ついに、

「毛利家に別心なし。天下の旗あげなされるにおいて、先陣つかまつるべし」

とまでいい、三村家と縁切れの条件で毛利は備前美作の帰属をみとめて、宇喜多を幕下に加えた。従って、三村一族は、毛利家にも恨みを含むようになったのである。

二、疾風枯葉

天正二年十一月、毛利の軍勢が備中松山を

指して押し寄せる気配に、松山城でも守りを固めた。同月十八日には、出城の佐井田山、穂田猿熊などの将士が、支え切れずに帰城したが、十二月七日には八千余の首級を得て、大いに士気が挙げた。その態は、

栖棲ヲ組テ櫓ヲアゲ、屏ヲヌリ左間ヲキリ、弩ヲハリ動木ヲツリ、石ヲタタミ埒ヲ結ヒ、天羅ヲカラミ乱櫛ヲ打、柵ヲ掛ケ、低キヲウメ、芝ヲツケ長木ヲユリタテ、帆篷ヲヒキ、惣ジテ廿一丸ヲバ、犬ノ潜ルベキ様モナク、天ハ鳥モ通ハヌ体ニ拵ス

とあるから、当時の山城として最善の防備を整えたのであつたろう。元親は将士の功に従い武具、衣服の類を分かち、みずから感状をしたためて授けたから、士気は一層盛んになった。

笠岡に陣した輝元のもとでは、連日軍議が開かれ、諸将が座に列なつて、評議した中にも、一人が、

「もし元親が望むならば、ひとまず扱いにかけては如何？」

と、申し述べた。つまり、誅伐一方ではなく、いい分も聞いてやつては、というのである。

すると小早川隆景が進み出て、

「各々方ご思案もごもつともなれど、昔から挙ぐべきを挙げず、罪すべきを罪せぬは大将の過誤なり、と申されている。このたび元親が当家をないがしろにして謀叛を企らむところ、もし宥しおいたならば、諸国の武士みな真似を致そうものを、如何なる事情ありとも誅伐すべきものと存ずる」

理に叶う言葉には、一同、もつともと承服し、次いで一人が、

「さればまず端城は残しおいて、松山に全力を尽くさば落城まちがいなし。端城はおのずから陥ちるものと存ぜられまする」

と建議したところ、輝元が、

「いやいや、松山は何としても弱いとは思えぬわ。そこへ無理に押し寄せて、軍兵どもを無駄に死なせてはならぬ。弱い端城をも強い松山同様に心得て押し寄せたならば、きつと勝利はわがものぞ」

思うところを力強く述べたので、衆議ここに一決した。折しも、三村孫兵衛親成が三百余騎の軍勢で馳せ参じ、

「拙者、地の理、城の嶮易、勢の多少をよく存じおれば、先陣にお加え下されたく、忠を尽くし申さん」

と訴え出たので、義昭の耳にも達し、当座の賞として名馬に御剣まで添えて賜わり、先陣を仰せつかったのである。

さて誅伐の手はじめには、十二月二十三日国吉の城に三村右京亮政親を囲んだ。政親は勇将なり、兵糧の用意も乏しからず、たやすくは落ちまいと思われたが、何しろ勝手知った親成の案内で、寄せ手は難所を越え岸ぎわまで攻め寄せた。

城からは政親の弟大蔵、七郎左衛門はじめ宮内蔵大輔、丹下与兵衛以下馳せ出でて槍を合わせ、合戦数度にして手負い死人数限りなく、中にも城方の丹下与兵衛尉は首二つ取つて帰るところを、輝元の同朋衆覚阿弥なる者に追い討たれ、組討ちとなつて、取組んだまま互いに刺し違え戦場の露と消えた。今日こそ戦功をと望んで突進した覚阿弥は年わずかに十八才の若武者、与兵衛尉は疲れてもいたのであつたろうか。

同じく城方の宮内蔵大輔は、三村孫太郎の臣、有木平内という者と名乗り合わせ、みごとに組み伏せて首を揚げたが、平内も剛の者ゆえ、組み伏せられながら二た刀まで内蔵大輔を刺し透した。その傷手に大輔は二町と歩み得ず、倒れたまま二度と起たなかった。

こうして、双方の軍勢あまた討死するうちに、次第に城方は追いつめられ、二十九日の早朝には、数万騎の寄手が四方の山に登り、旗指物を風にひるがえして関を揚げた。

城からも矢玉を雨の如く注いだが、何分、寄手は多勢、城は小勢、息つく暇もなしに攻め立てられ、大晦日の夜半には、三村大蔵以下、城を明けて松山に引き退いた。

明くれば天正三年、正月も七日をすぎて、^{にいみづり}新見杜の城に毛利勢が押し寄せた。もとより杜も天險を利した山城、たとえ松山が落ちて、ここは容易に落ちまいといわれたに相違して、城主三村元範が、股肱と頼む宮尾大炊助、曾爾、八田以下の面々が叛旗をひるがえし、八日の昼前には寄手を城内に引き入れ、火を放って元範の居城に迫ったのである。

もっとも、元範も気配を察し、七日は城中の女、わらべに至るまでを集め、美食をとらせていろいろ様子を探ったのであるが、側近の者も気づかぬままに、誰一人その疑惑に答える者としてなかった。

翌る八日の早朝、近習の者に

「今朝がたの夢に、予の首を予の兜が実検すると見て覚めたが、不思議な夢を見たもの、いずれ永うはなからうぞ」

からからと打ち笑い、女どもにも暇乞いと重代の大刀を与え、近習の者には盃を遣わして覚悟のほどを見せたばかりであったから、異変に際して少しも騒がず、七千余騎をひきい、夜半まで三度び干戈を交えた末、忠義の郎党も、あるいは手を負い、あるいは疲れ果てて大方は討死。中には兜をぬいで降る者あり、退散するもありで、残るはわずか十余人となった。

今はこれまでと元範が切腹の覚悟を定めたところ、伊勢入道という古老が側近く寄り、「夜戦なれば人にも知れますまい。夜明けまでお忍びあって、ひとまず落ち給え」

強く諫言した。

主従は石指という在所まで一里ばかりを落ち延び秘かに休息するところへ、寄手の一人多治部雅楽頭が五十余騎で攻め寄せた。

さて、岩と岩との狭間とて、騎手も槍長刀をひらめかして騒ぐばかりで、如何ともしがたい中より、

「石州の住人、太田源八」

と名乗りをあげた荒武者一騎、進み寄るところを、此方でも弓の名手三村左介が、火急の退城にもかかわらず携えて来た塗籠の藤の弓に、当国名代の国重が鍛えた鋒矢を番え、

ひょうふっと切って放せば、狙い過まらず、みごと源八の太股を射通してのけた。

残る矢で四人まで射伏せたのち、元範の前に膝まずき、

「お暇乞いつかまりまする」

いいさま、右手の刃をわれとわが腹に突き立て、正十文字にかき切って相果てた。

付き従う面々も小人数ながら切先するどく切って出たものの、多勢に無勢、疲れ果てた末といい条、たちまち討死をとげる。

最後に残った伊勢入道も進み出て、「主君元範この岩中にこもると思ひ、攻め寄せたか。笑止なり。元範は松山に志し、早く石蟹口へ退きしものを、われら四、五人、落ち延び給うまでを踏みこらえんと残ったまですよ」

大音に呼ばわったから、寄手は容赦なく襲いかかる。とうとう奮迅の入道を組み伏せ、討ち取った。

かねて覚悟の元範は、大刀を抜き、

「ただいま伊勢入道、予がことを偽わり松山へ退きたりと申したが、ここに残って候よ。

吾と思わん者には、最後の働き見せようぞ」

いいもあえず我先にと進み来る兵を、一人切り伏せ三人まで手を負け、さて腹を切ら

んと辺りを見廻す折しも、遠矢ひとすじ飛び来て咽喉のはずれに深々と刺さった。さしも剛勇の元範も深傷にたまらず倒れるところを備後の住人東江平内が寄って首を打った。

元範の首は輝元の実検に供した後、山田鬼の身の城主、上田孫次郎実親の許へ送り、次いで正月十六日には、攻囲軍の全力が鬼の身に迫って、城下五里四方は野山といわず田畠といわず、寸尺の隙もなく軍兵で埋めた。

十七日まず荒手の城を落し、二十三日には七重八重に囲んで昼夜四日間を間断なく攻め立てたところ、元親譜代の臣明石与次郎が内通の気配を見せた。彼は実親の補佐として松山から鬼の身へ遣わされたほど、元親の信厚い者であったから、城内は忽ち混乱し、女子供は早や退散の準備までする有様であった。

この様子を見て取った実親は、もはや崩れ立った人心を収めるすべもなく、時後ればなおのこと明石に心を合わす者も増えようし、この上は身を捨てて城内の者どもを助けるほかなし、と、若いだけに潔よい覚悟である。

毛利方へ使者を送っての申し入れには、「実親ひとり腹切らば、軍兵どもの生命助けて賜わるや、その件、まちがいなき証しを賜わりたいし」

とあったので、毛利方でも、まことの武士かな、古語にも、死して名を万代にとどむとあるもこのことなり、と直ちに返書を使者に托した。

実親はなお兄の元親にあて、家臣の者どもを罪せぬようにと一筆したため、二十九日辰の刻（午前十時）に切腹と、城内にも知らせた。

郎従どもも今は、己が命の助かることをのみ喜ぶはかなさ。やがて、刻限を待つて実親は、城中の士三百余騎、広庭に肅然と居流れるところに立ち出でて、

「このたび、皆の者粉骨の働き、二世までも忘れぬわ。運あらば恩賞すべき心底も、今は空しく、他家に奉公いたさるること、まことに本意ない限りであった。女子供にまで無益に憂き目を見せたことよ」

最後の挨拶しつつ鎧を脱ぎ、下って二の丸に早くも用意の重ね畳に、気色すずしく端座した。西に向かって合掌し、

「南無西方極楽教主の如来、父のために切る腹なれば、如来も済度し給うべし、ただ今、先父源清公と一つ蓮の台に迎え給え」

念仏高声に唱えたのち、大脇差に中巻してくつろげた左の脇腹に突立て、右の脇まで引

き廻した。

さすがに苦しい息を継いだ、柄も拳も砕けよとばかり、腹の真っ唯中に、取り直した刃で、力の限り臍を通れと切り下げて、みごとな十字腹かき切ってしまった。

介錯は古老の荒木右京進が承わり、腹切りおえた実親に立寄って首を打ったのち、みずからも鬚を切って死骸に添えた。

時に実親、わずか二十代、ころも初春、花なら薔の散りぎわであった。

折しも末座に泣き伏した藤若という少年武士一人、

「誰ひとりお供なさらぬか」

まなじり裂いていいさま、敵陣に駆け入り無二無三、振るう大刀で二、三人に傷を負わせたのち、実親のもとへ駆け戻るとその場で腹かき切って跡を追うた。思うにこの少年、美形であって、特に実親の寵愛も深かったのではあるまいか。

城は二月末までに整理し、その二十八日には輝元が入城した。

こうして実親が、三村家の悲愴な切腹史の第一番を果たしたのである。

(未完)

懸賞△告白・手記・体験▽入選作品



夫婦プレイ・ルポ

悦虐のモーター

大山 太郎

二カ月前のことであるが、妻と二人で映画を見ての帰りに、

「どうだ、ちょっと寄ってみるか」

と言うなり、妻の返事も聞かずに、あるモーターに車を取り入れた。ドアの外で妻を見ると見返して笑った。映画での縛り場面が、急にこのような気持ちにさせたのである。

「こうなると思った」

といって妻は含み笑いしながら両手を背に組んだ。

その時は、縄の準備もないままに、備え付けの浴衣の紐を、後手縛りと猿轡に使い、ベッドの上で鞭打ちをした。

普段であれば、縛りまではおとなしく私の言う俚になるが、鞭打ちとなると、

「イヤッ、止めて……痛いからいや、叩くのはいや、許して……」

と、なり振り構わず絶叫して拒否するのであるが、この時は場所が変わってとまどったのか、桃色の鞭痕をいたる所に残し、短いうめ

きをあげながらも、最後まで止めてくれとは言わなかったのである。

そのモーターは私も最初であったが、広い硝子戸の外には、ちょっとした竹や松を植えた庭が造られ、庭の周囲は高い塀で遮蔽されており、プレイするにはもってこいのつくりであった。

私は、KK誌の中では、創作された小説よりも、カメラルポ、カメラハントのようなルポ形式の記事が好きである。それは美辞麗句

で飾られた創作より、簡素な文ではあるが、同時に掲載される写真と共に、その文中に真実性がにじみ出て、その場の雰囲気はひしひしと身近に感じられるところにルポとしての共鳴感を覚えるのである。

したがって私も一度夫婦プレイを、このよなルポ形式で、投稿したいと考えていたので、ルポの第一歩として、このモーターの利用をその時、心に定めていた。

勤休みの昼さがりに、食事の後片付をして
いる妻に、

「おい、今日は虐めてやるから、外出の仕度をしろよ」

と急に言いだしたのも、私には予め計画された行動であったが、何も知らずにいた妻は、吃驚した顔で、

「エッ、何処へ行くの？」

「前に行ったモーターに行つて、写真撮ってやるよ」

「マァ、そんなこといやだわ」

妻は軽く拒否はしたが、変った責めへの好奇心に心を動かしているような甘えた顔つきである。私は妻の言葉を聞き流したまま、カメラの準備を始めた。



「痛い程叩くのはいやよ」

と化粧しながら、鞭打ちに対する予防線を張ってくる。それは、行けば鞭打ちになる事を予測しての牽制でもあり、またある程度の鞭打ちを覚悟しているというようにも受けとれる口振りであった。

「何を着ていくのだ」

「着物にするわ。貴方もその方がいいのでしよう。さあ、すぐに着るから、ちょっとあちらに行つてよ」

と、スリッパ、ブラジャーなどの縛り姿より、緋の長襦袢の襟元がはだけて、剥き出された乳房が細目の間に喘いでいるといった浮世絵的残酷美に興味を示す私の気持を承知の

上で、挑発してくる。

「着物を着ていくのなら、例の長襦袢を持ッて行けよ」

「そうね。サァ、どこへしまったかしら？」

と、押入れの中をゴトゴト探した。

結婚当初から持っていた絹物の、大柄模様のついた長襦袢だが、最近ではころびたり破れたり、着ずにいたものだが、どこかに突込んでいたらしい。

私には近頃の白地のものより、柔い絹ざわりと共に赤い艶やかな色彩にひかれてよく縛りに使ったもので、とくに、ほころびたりしだしてより、痛めつけられた哀歎がそこに沁みだすので一層愛用していた。

国道ぞいにあるモーターに、白中、堂々と車乗りつけるのは少し気がひけたが、偶然にも前に使用した部屋にまた案内された。

前に来た時は帰りの車の中で、

「浴衣も使ってないのに、紐だけがしわになり、それに口紅までついてるので変に思われないかしら」

と心配していた妻も案外、平気な顔をしてローブや、カメラの入ったカバンをさげて私の後についてくる。

八畳程の部屋一杯に真赤な絨緞が敷かれ、

その中央に一組の
応接セットが置か
れている。部屋の
入口にカラーテレ
ビ、クーラ、冷蔵
庫が並び、正面の
大きな硝子戸の外
が例の庭につなが
っている。左の壁
には組込まれたよ
うにベッドが取付
けられ、紐のカー
テンと普通のカー
テンの二重で仕切
られている。右にはバス、トイレがあり、風
呂は部屋から、硝子戸越しに見えるように造
られ、矢張り二重のカーテンで仕切られてい
る。



相憎天気は晴れたり曇ったりで、太陽が雲
にかくれると急に室内が薄暗くなってくる。
大きなシャンデリヤが部屋の中央にぶら下っ
ているが、どこかで電源を切っているのかス
イッチを入れても灯がつかない。
広い硝子戸と室内灯があれば、三脚に固定
したカメラの照明には充分と考えてフラッシ

ュを持ってこなかったが、これではどうも照明不足のようである。

風呂に湯を入れたり、カメラの位置を定めたりして、さて縛りにかかろうと、椅子に坐っている妻の脊後に廻ったが、どのように縛り、どのように責めるか、全然心に計画されていない自分を発見して自分自身が驚いた恰好である。

まあどうにでもなれとばかり、髪を掴んでぐいと、椅子の脊に首を仰向かせ、目の前にきた胸元から、責めの第一歩を開始した。

「あッ、ああ……」

と顔をしかめて痛がる妻を、そのまま窓辺まで引張っていき、最初は着物姿のまま後手縛りにし、胸の上下に二筋ずつまわして引止め、絨緞の上に突き転がす。

だんだん手荒くなってくる私の行動に、「マァ少しは、やさしく扱って下さいね」

と、荒々しいサジスチックな行動の中に、女らしいムードを求める妻である。

可憐な白足袋の足元にひかれて、着物の裾を押し開けてやる。

「イヤ、止めて」

と白足袋の両足をばたつかせる。

そのままの姿にしておいてカメラに向ったが、猿轡の手拭を持ってきてないことに、気がついた。特に今日は、顔をかくす意味もあり、何時も使っている日本手拭を、と思っていたのに忘れてしまっていた。

浴場からタオルを持って来て、口と鼻とを一緒にして強く縛る。

「息苦しいから、鼻だけは出しておいてネ、おねがい」

私の気持も知らずに、気の弱い事をいう。縄をといてやっても、最初の縛りで茫然となっているのか、口のタオルをその俣にして、ポカンと横坐りになっている妻に、着物を脱ぐようにと催促する。

あらそう、とばかりに長襦袢一枚になり、襟元を押えて、

「これでいい？」

媚を含んだ流し目を送ってくる。足袋はそのままにして撮ったらと急に思いついたが、すでに脱いでいるので、

「こちらに着替えろよ」

とロープと一緒に包んできた、例の長襦袢を投げてやる。相変らずね、といった様に、ニコッと微笑むと、スルリッと裸になる。

薄桃色のレース

のついた、腰の物一枚になった妻はすでに乳房の張りも失い、引締った若さというものは見られないが、色白の肉感的な体は私の嗜虐の責苦に堪え、あぐくのはては、悦びの呻きをもらす唯一人の奴隷であり、またいとおしい妻であるのだ。この妻以外の誰が、私のこんな性情を理解し、縄を受けて満足させてくれるものか。

伊達巻をした胸元に両手を重ね、観念して坐っている妻の後ろに廻り、その手を後ろにねじ上げる。

手首にまといつく袖口をはね上げながら、縄を廻すとき、いつも新しいプレイの悦びが湧いてくる。先程の要領で縛り上げ、まだ少しロープが余ったので、首に廻して、後ろで止める。

「首にかけるの、いやよ」

と何時ものように首縄を嫌うが、そのまま



窓辺に引据え、胸元を大きくはだける。

髪を掴んで振り廻し、そのまま、床に転がして、はだけた胸や、腹を踏みつけたり、足の甲で無茶苦茶に、こねまわしたりすると、

「ウウ……ああ」

形ばかりの猿轡の下で呻きながら、私の足から逃れようとする。

そのまま庭に連れだし、塀に中腰でもたれさせて一枚撮り、まだ充分には揃っていない芝生の上に突倒すと、勢よく仰向けに倒れ、体の下になった腕が、体の重みと白砂に痛みつけられたのか、
「ヒューッ」

と一段と大きな悲鳴を上げる。部屋の中はある程度防音されているだろうが、戸外で大きな声を出されると、周囲に気がひける。写真を撮るだけで早々に室内に引入れる。

そのまま寝台の上に転がし、胸



を更に押しひろげ上下の縄目の間から乳房をまるだしにし、腰の辺まで裾をまくって、まだ穿いていたパンティーを脱がせる。白い双丘をまるだしにしたまま横たわる妻をみると思い切り鞭打ちしてみたい欲望が、むらむらと湧いてくる。

脱ぎ捨てていたズボンから、バンドを外してくると、

「イヤッ、止めて、打たないで。それだけはいやよ」

と、来る時に鞭打ちをあらかじめ予想していたとはいえ、ベルトを見ると、現実の痛みを思いだしたのか、寝台の奥に身をずらせ必死になって哀願する。

かまわずに、まくれた太腿部に思い切り強く振り下ろすと、パシ―と大きな音と共に、桃色の鞭痕が肌にサツと浮かび上がる。

「痛いイ、よしてエ。もう、いや」

右に、左に転げまわ

り、どうかして鞭先から逃がれようとする腰に、太腿に、特には乳房に鞭を飛ばす。

「止めて……ああ、許してエ。ヒーイッ」

鞭打ち毎に、悲鳴をあげ、身悶えしていたが、十回位もするとうつむけになり、尻を鞭打ちにまかせながら身をよじって、短く呻くだけとなってきた。髪を掴んで顔をあげさせると、涙を浮かべて猿轡の下で泣き声をくぐらせている。

猿轡を外し涙を口で吸ってやり、そのまま頬を愛撫して唇を合せると、感極まったように自由を奪われた身をもどかしがりながらも舌だけが生き生きとするのである。

被虐の陶醉に、酔いしれる程の、マゾ心理にはなり切れず、鞭打ちの痛さには、本当の苦痛による涙を流す妻であるが、苦痛の後にみせる赤裸々な狂態は、一体どこからほとばしって来るのであろうか。

手首の縄はそのままにして、胸の縄をほどき応接椅子に坐らせ、脊もたれにぐるぐる巻にして固定する。揃えて横坐りに投げだしている足を開いて、巾広い椅子の肘かけに無理にあげさせて腰紐で開股縛りとする。

腰巻は無残に乱れ、どうする事も出来ない羞恥責めである。長襦袢も肩からずり落ち、

かろうじて肘のところ
で体にまといついてい
るというだけで、むき
だしの乳房は縄目に喘
いでいる。

仰向きに、首をそら
せ、まるでしになって
いる喉に、首筋に、そ
して乳房に、脇腹に、
女に対しての、私の好
みであるところの悦虐
プレイを開始する。

「ああもうやめて……」

乱れた髪を左右に打
ち振りながらも、椅子
に固定されている身。

肘かけから先の足首の

みが空を切り、足指が苦しみに伸びちぢみし
ていたが、やがて一際高く、

「やめてエー やめて」

絶叫し、そして法悦の深淵に落ちこんでい
くのである。

首を脊もたせにもたせてぐったりしている
妻の太腿部に、数発の鞭を飛ばして悲鳴をあ
げさせた後、縄をとく。だが休ませずに、応



接台を縦にして、その上に寝かせ
る。余り丈夫な造りでないので無
理をすれば脚が壊れそうである。
腕を下に廻させ、脚に固定しよう
とするが、体より台の中が広いの
で、腕が充分下に回り切らない。
「もっと、上にずりあがってみろ
よ」

「だめよ。台がこわれそうで」
体をずり上らせてみるが、胸位
いまで台よりはみ出して体をうん
と反さなければ、腕は脚にとどか
ない。

台を横にし、脊中のみ台にのせ
逆海老のような形で、両手両足を
それぞれの脚に固定する。頭が下
に垂れ下って血がのぼるのか、苦

しそうである。

低く呻く胸元に、一振り鞭を入れる。

「止めて！ 台がこわれるから……」

成程これで身悶えられたら、脚がつぶれそ
うである。残念ながら、手早く写真を撮るだ
けにする。

縛りを開始して一時間半位経ったろうか。
「少し休もうか」

ぐったり椅子に寄りかかる妻に、冷蔵庫からジュースを運んでやる。サデイスト変じてボーイとなるのを妻は当然のようにな、飲んでゐる。

それまで、曇ったり晴れたりしていた天氣が、急にくずれて、大粒の雨が降り

だした。みるみる庭の芝生や庭石を濡らしていく。何も言わず庭の雨足を眺めていると、冷たい空氣と共に寂漠とした氣持になる。

「長襦袢も脱げよ」

寒くなったのか、長襦袢の襟元を合せているのを脱がせて、腰巻一枚にする。窓辺にあぐら坐りにさせ、ロープの中段で後手首を縛り、両端をそのまま首の両側を通し、組ませた足に通して引締める。

「体を前にするのはいいけど、後ろにさらさないでね。腰の骨が痛い」

以前から尾骶骨が痛むと言って、映画館の椅子あたりには長時間坐るのも嫌がつていた妻は不安そうに言う。



「前の方はいいのだな」

この注文に、わざとさかしてきたような口の利きかたをして、余計強く前に引きつけ海老責の形にする。

ロープが、少し余ったので、「徳川女刑罰史」の映画に出てきたように両膝を縛り、口には腰紐を、二つ折りにして噛ませる。今回は、タオルにしる、紐にしる、口中に何もつめ込まないで、味つけ程度の装飾に終ってしまった。

妻の訴えを無視して、そのまま後ろに押し倒すと、

「あッ、痛い、痛いッ。止めて！」

と絶叫するので、偉そうに責手に任じているものの、慌てて抱き起こすと、

「腕がおされて痛かったの。たまらないわ」と申訳けなさそうに言う。腰骨が痛いのかと思つたが、そうではなかったらしい。

痛がつてあばれたので、両膝を縛っていた縄がスッポリ脱けてしまつていた。

写真をとるために雨に濡れた庭石におり、窓を開いて構えようと、

「寒いわ、窓閉めて……」

長時間の縛りに体が冷え切っており、それに雨上りの冷やかな空氣が寒いらしい。

後手から延びた紐を首の前で交叉させ、そのまま乳房の下を通して縛り、いろいろな形にかえさせて写真を撮る。

最後に腰巻をとり、寝台の上に投げ出して浴衣の紐で両足首も縛る。家で常に行なう、くすぐり責めの開始である。家では周囲の氣がねもあって、思い切り責められない不満をこの孤立したモーターに、求めてきたのである。

仮借なき魔の手に、はたして妻はどこまでもちこたえられるであろうか。それを験すのも今日の目的の一つである。両親指で両脇腹をグリグリとこねると、一段と大きな悲鳴と共に、体を飛び上らせて身悶える。本当のくすぐり責めは一般的なくすぐりより、グリグリとこねまわす方が効果があると思うが、妻にはそれを脇腹にするのが、一番こたえるようである。

「止めて……。アア……。お願い、止めて。許して。ア……」

体を右に左にずらせて必死に逃がれようとするのを押えつけ、休みなく追いつける。

高い絶叫は、先程の鞭音にもまして、室内に阿鼻叫喚の音を響かせ、さすがに気がひける程である。

黒髪は、乱れに乱れて、顔を蔽い、体全体に汗が光っている。腰紐で割られた口元が絶息の一步手前で悶え呻くさまは、被虐の陶醉の中に溺れこんだマゾの姿そのままのようである。

女体の責めに全てを

かけてもよい程の私のサジズムに対し、妻は単なる夫婦愛の前戯として受入れているようである。したがって責めに対する被虐の悦びより、この行動に夢中になり、加虐の中に生甲斐を見出している私の姿に、妻としての愛の形を見出し、ある種の満足感と女としての喜びを持っているようである。

したがって、悶える妻の姿の中にマゾヒズムの悦びがあるとは思われないが、両手の自由を奪われた体を悶えさせながら、



「貴方、抱いて。強く抱いて」

エクスタシーの一步手前に狂うのは、妻は妻なりのMの気持も幾分芽生えてきているのかも知れない。

夫婦プレイの行きつく所は、誰でも同じだろうと思うのだが、加虐と被虐の性の火花が燃えさかる頂点において、昇華するものである。

全てが終れば全身を急に襲う疲れと共に、今までの行動も虚しく感じられ、浴場の中で妻の手首や、二の腕の縄目の跡をまさぐりながら、ぐったりとなってしまう。

縛りの途中では、浴場内で湯に濡れて犇々と裸身にからみつく縄目の姿を思っていたが、全てが大儀に感じられ、風呂から出て着付けしている妻の姿をただボンヤリと眺めているだけである。

結婚して十年余。その間何も知らなかった妻を、おそろおそろ寝巻の紐で後手に縛ってより、だんだん発展し、今ではいろいろの道

具を使った本格的の縛りに、そして鞭打に、堪らない執念を燃やすようになった自分。そしてあげくの果は、自分だけの狭い殻から脱け出ようと、このようなルポを発表しようとする。この行きつくところを知らないような私のサジズムの狂執には、自分ながら末恐ろしさを感じてくるのである。

しかし、半面にはまた、これが自分たち夫婦の間にのみ限られ、妻が私の縄を夫婦愛の変形として受けてくれ、また私自身が、その心根を何よりも愛おしく感謝しているのであるから、これ以上の暴走はないのではあるまいかという気もするのである。

互いに愛し愛されている者同志のたわいのない遊びだ、なれ合いの茶番劇だといってしまうえばそれまでのこと。だが、その茶番で夫婦がより強く結びつけば、それはそれでまた価値があるのではないだろうか。

帰りの車中で、先程までの責苦はもう忘れただかのように、ケロリとした顔付きで、何かと話しかけてくる、妻の疲れを知らない態度に、一しおの情愛を感じながら車を走らせている私である。

(完)



雑
感

妊婦嗜好

あれこれ

羽鳥水江

約一年ばかり、すっかり休んでいました。

思いついたときに時たま、気ままに投稿すること——これが、私の最近の習性になってしまったようです。

この数カ月の、奇クの目まぐるしい発展には、ついて行けそうにもありませんが、例によって妊婦のことを少し書いてみようかと思っています。

十月号のSMカメラ・ハント木戸悦子の巻——妊娠九カ月の妊婦を縛る——「胎児の喘ぐとき」は、辻村隆さんのテンポの早い、グングン引っぱって行く名文、はじめて誌上になんか堂々と展開された十葉近くの妊婦裸体写真によって、目を見張る思いでした。以前双胎で

臨月まで行った増田みゆきさんの妊婦裸体写真入りの妊婦カメラ・ハントとくらべて、誌上で見るかぎり、ぐんと迫力があります。被写体としては増田さんの方が格段にすぐれている——お腹の大きさが抜群である、という点で最高であるにもかかわらず、木戸さんの場合は辻村さんと一対一のプレイ、いわば真剣勝負であるという感じがします。本文の中の何気ない対話だとか、

「……車から降りる木戸悦子の方に視線を送った女事務員は、彼女の腹部の膨らみに、オヤッという不審の表情をよぎらせた。……臨月に近い腹を抱えた、女性のあらわれたことは、確かに奇異だったに違いない……」

などという、さりげない情景描写も、読む者の気をそらずにはいません。関心の深い私の空想力を、そそのめるのです。瀬沼四郎さんに、

「妊娠したお腹をみせてあげてもいい」

「一度是非妊娠中の、出来れば臨月に会いたい」

と言われ、辻村さんにも、

「本当は出産間近の、最大級のおナカとって欲しいと思いますわ」

とせがまれたのが、どうやら実現しなかつ

たらしいのは残念です。

十一月号、十二月号の、この「胎児の喘ぐとき」に対する反響を見ると、やはり多くの人をアツと言わせた意表外の作品であると言つてよいでしょう。

しかし他方、十二月号奇クサロン、岩田浩二郎さんの「奇クに望む」の中に、

「十月号には妊娠九カ月の女の全裸写真が載っていたが、私はどうしてもあれにはついて行けない気がした」

という意見もあり、逆にまた、世間の常識にない妊婦路線などという変わったものの特異性をあらためて思うわけです。

そこで、少し気になることがあります。

東映映画「徳川女刑罪史」以来、私たちの辻村さんが緊縛指導で出られることになり、それはそれでいいのですが、奇クをめぐる世界が、社会の表面に大きくクローズ・アップされそうな危険があることです。△危険▽と言ふのは言い過ぎだ、と言われるかも知れませんが、大映画会社の宣伝力で、私たちの内輪な内密の楽しい世界が、いきなり明るみに引きずり出されて、世の非難を浴びるようにならねばよいが、という心配です。すでによみうりテレビにも出られたとのこと、私はよ

う見ませんでした。私たちの小さい楽しい世界が、力の強い人たちにもぎ取られはしないか、と思うのです。マス・コミが高度に発達した今日、それも仕方ないことかも知れませんが、社会の陽のあたる場所に出るのは、やはり憚られる気持がするのを、どうしようもありません。岩田さんが「妊娠九カ月の女の全裸写真……にはついて行けない」と言われるのはともかく、同じ奇クサロンの牧十郎さんの「『へんたい』雑感」の中に、

「辻村氏のような個人はともかく、奇譚クラブはまかりまちがってもマスコミの俎上に乗せられぬように、くれぐれもご注意あれ。やはり細く長く、ある時は深く静かに潜航することです」

とあるのは、私も全く同感です。

けれども、奇クの読者好みの思い切った映画が、大映画会社の作品として、堂々と上映されるということは、私たちも心の中では、大いに歓迎せざるを得ないのは当然です。とまどいながらも、それが自然の情だと思えます。つづいて、「元禄女刑罰史」、「伊藤晴雨の生涯」が予定されていることで、両者とも△孕み女▽が、題材に入っていますから、そこをどう扱うか、が大いに興味の的で

す。十二月号の「サロン楽我記」によると、

「元禄女刑罰史」の第二話は、

「関白秀次に似た暴君の殿様が、臨月の孕み女の、胎児を切裂いて掴み出す話」

とあります。△元禄▽ですから関白秀次に似た殿様となったのでしようし、

「……胎児を切裂いて掴み出す……」

は、正確に言えば、

「……臨月の孕み女の、腹を切裂いて、胎児を掴み出す……」

ということでしょうが、映画の中で本物の妊婦——それも臨月の妊婦が、実際に全裸に剥かれて、グロテスクに盛り上がった白い腹をマナイタの上に見せるかどうか、興味あるところです。本当に妊娠して臨月にまでなっているスタンド・イン女優も、弱小のピンク・プロならともかく、東映ともなれば、求めれば得られないことはないでしょう。スタンド・インでなく、はじめから本物の臨月妊婦をスターとして登用できたら、さらによいわけです。今の世の中では、そういうことも十分可能であると思うのです。△ハレンチ▽ということが、最高であるように言われているのですから。

さて、奇クの論評はこれ位にして、次に進

むことにいたしました。

二

ところで、瀬沼四郎さんとか高野原美さんをはじめ、妊娠中の女体に対して特別の嗜好を示す、ある種の男性が存在することは、奇クの読者にとってはすでに周知の事実です。

広く言えば、辻村隆さんなどもこの種の男性の中に入るでしょう。しかし一般の週刊誌などで、この事実が語られることは余り多くないように思います。私は、最近見た一二の資料をこれから紹介してみたいと思います。このようになったのも、あるいは、ここ数年来奇ク誌上で△妊婦もの▽が次第に取扱われるようになって来た影響がたしかにあると、私は思うのです。

週刊誌「アサヒ芸能」昭和43年7月28日号を読むと、戸川昌子の連載小説「蒼い蛇」に妊婦を見ると、とたんに犯したくなる男性があらわれて来ます。戸川昌子と言えば、女流ながら、かなり変わった題材を取り上げる異色作家として、知られています。物語の筋は、タイプストだった外喜子という女性が、高校の先輩、宮子に、紹介されたアルバイト——マンションの密室で、三重苦の青年に身

をゆだねるという——を契機に波乱に満ちた生涯を送る、というもので、宮子とのドライブの最中、大事故が起こり、外喜子は失明し三重苦の女になるのです。黙々と動物的に生きながらえる外喜子を、宮子は涙ながらに世話をします。やがて二人は、それぞれ男性に犯され、体の異常——妊娠——を知るのですが、宮子は、自分の子は流産させても、外喜子の子は生ませてやりたいと願います。この前の号で、すでに流産していた宮子が、腹上死した老人の死体と戯れる場面があり、そのために、ホテルの清掃夫を買収する必要がある、妊娠中の外喜子をあてがうところがあります。

「このとき、外喜子は妊娠五カ月だったが、他目にはっきりわかるほどには、お腹が大きくなっているはいなかった。裸になると、やや目立つ程度である」

「裸になると、外喜子の腹部は、もうそれとわかるほど、目立っている」

などとあります。

さて7月28日号では、

「ホテルで、外喜子の体を与えられた清掃夫の中年の男は、宮子に感謝の眼差しを向け、拝むようにして帰って行った」

三重苦の妊婦を相手にして、です。そしてこの小説は、妊婦に欲情を覚える男と、偽装妊婦とのやりとりを描き、

「北田はもう一度だけ、相手をしてくれるようにと頼んでいたが、宮子が子供を生んだと言うと、それ以上は迫らなかつた」

それから、体がもとどおりになったら、マンションの秘密クラブに出演してくれと頼まれ、その、外喜子と宮子のレスビアン・ショーで、警察の手入れにあう、という筋書になります。お読みになった方も沢山おられるでしょう。

私は、偽装妊婦である宮子が、北田から体の交渉を迫られたとき、なぜ事情を打ちあけて、本当に妊娠している外喜子を提供しなかったのか、疑問に思います。そうすれば、実に分娩一週間前の臨月の妊婦を、全裸にしても犯すことが出来たわけで、北田がすっかり満足したであろうことは勿論、この場面の情景描写も、大いに変わっていただろうと思うのです。また、秘密ショーにしても、片方が臨月の妊婦である女同志のレスビアン・ショーなんてものが、あってもよさそうに思うのですが……。小説の中では、あくまで、北田にも、こどもを産んだのは宮子の方である、

と思わせておかねければならなかった、という設定なのでしょう。

この同じ週刊誌の同じ号に、「事件特集」第二話「不義の子を生んだあとに人多情でウソつきが悲劇の発端」——という実話がついています。たまたまついでもうから紹介しておきましょう。天津市の旅館の助仲居をしていた森元高子という二十三歳の女が、6月13日出産した男児を、夫以外の男が生ませた子だったため、処置に困り、絞め殺して、7月6日につかまった事件です。

この女性は十七歳のときに結婚し、十九歳で最初の子どもを産んでいます。性来の多情でウソつきな性癖のため、亭主は耐えきれずに逃げてしまい、子どもを実家にあずけて料亭につとめるうち、妻子ある男性とできてしまい、別の店にかわりますが、子どもの父親はその男でもない、という乱脈ぶりです。ところが、この妻子ある男性が、自分が孕ませたのではない高子と、実に出産する前の晩まで愛情を交換していた、というのです。この男が高子と知りあったときは、すでに他の男のタネを孕んでいたというわけでしょうか。

もう一つはやはり週刊誌「土曜漫画」11月22日号です。ドヤ街で妊娠中の女に売春をさせるという話です。

これは、東大路公仲「ドヤ街の禿鷹」というストーリー漫画（この雑誌ではハドキュメント漫画）ですが、ハまえがきによる「ここに登場するのは実存の人物であるが、ドヤ街の名称は伏せておくし、取材協力者のプロフィールも希望により伏せておく」とあり、フィクションではなく、事実であるように書かれています。

主人公の竜というヤクザのような男が、次々にあくどいやり方で貧乏人を相手に金儲をする手口を紹介するという形で、ドヤ街の生熊が描かれています。その最後に、ハラミ女の売春あっせん——というより、どのようにして、ハラミ女が売春せざるを得ないように悪辣な手段で追いつめるか——が出てくるのです。

最後に、ごていねいにも、筆者注として、「ちょっと普通世間では考えられないような事がこのようにして行なわれているのだ」とあり、この男の悪徳ぶりを、強く非難して、その追放を、叫んでいます。中に出てくる、

「腹ボテの女がいたらいい値になるから世話してくれ」

というようなことがあるのかどうか知りませんが、あり得ないことではなさそうな気がします。フィクションだとしても興味のあることです。さて、ここから先は、水江の創作です。

以前、私は三、四年前（40年8月号）に、「バー『ぼて』の妊婦たち」という短い文を寄稿したことがあります。同じような趣向のものですが、そのときは全く空想的なこととして書きました。今度のは、必ずしも空想でない、あり得ることとして書きます。赤線廃止後いたるところに簇生していると云われるアイマイ小料理屋（飲み屋）などに、勿論私は実際行ったこともありませんし、いわゆる俗悪週刊誌などを通じて想像してみる外は、実情は何も知らないのですが。

××の女将をハおかみ、竹のカミさんの店での名前をハハラメ（孕女）というのにしましょう。

××で働くようになってから二、三日も経つと、ハラメは、そこがどういう店であるかが、だんだん分って来た。夕方に店を開くの

だが、飲み食いしている客はまばらで、客の数の割に女が多い。女は住みこみが大部分だが、少し飲み食いするとお客は女を連れて二階の女の部屋にあがってしまう。温泉マークが近いところに並んでいるので、そちらの方に行くこともある。あがったり、降りたり、出たり、入ったり、忙しい。客種は、かなりの暮しをしていると思われる中年男が多いのである。氣にいる女がいないと、酒を飲んでジッと待っている。開店時間すぐにはお客が来ないので、女たちは賑やかに雑談しながら時を過ごしている。数日後――

開店間もない時間に身なりの悪くない一人の中年の男が入って来た。たむろしていた女たちがそのまわりにあつまると、しばらくガヤガヤと飲みながら、何かおちつかない様子である。女たちは、少しジリジリして来たようだ。その男が手洗いに立つと、おかみが寄って来て目だたぬように合図した。

男 ハラミ女が手に入っただって？

――今、出しますわ。でも、まだ口説いてないんですよ。大丈夫だと思うけど……。

男がトイレから出て来ると、おかみに言われたのか、妊娠七、八カ月位の、腹が大きい女が、少し離れたところに坐っている。男は

さり気ない調子で女たちの顔を見て、

男 今日は新顔がいるようだな。

女たちは顔を見合わせる。男はさらに、

男 そら、あそこにいる子、あれは駄目なのかい。キミたちもいいけど、今夜はあれにしようかな……。

――あらいやだ。あの人、普通の体じゃないのよ。（女たちは事情を知らされていないので、そうだとばかり、うなずきながら笑う）

男 普通の体じゃなかったら、なおさらプロポーズしたいな。（と言ひ張る）

おかみを呼んで、女たちの前で、

男 あの子は駄目かね。頼むよ。

女たちは、なおも面白がって、

――いやあね、Ｙさんったら本気なのね。あんな腹ボテの女とさ……（とさわぐ）

おかみは、その女のところへ行く。

――ハラメちゃん、あのお客さんのお相手をしてくれない？

ドギマギするハラメ。

――あんだって、話が分らないわけじゃないでしょ。わたしや何も人助けのつもりであんたを置いてあるわけじゃないのよ。ああいとお客もあるんで、竜さんに頼んでお

いたの。腹ボテの女が欲しいって言うんだよ。あんたが、竹さんの酒代とひきかえに竜さんにその体を委したことも、聞いてるのよ。あんたにも儲けさせてあげようというんじゃないの。お金、要るんですよ。

温泉マークでフロからあがったハラメに、客 いや、そのまま、そのまま……。その大きなボンボンをよく見せてくれよ。すばらしい。前に妊娠四カ月の女がいたが、五カ月になったらおろしちゃってね……。これによく膨れたのははじめてだ……。それで今、何カ月？

ハ 八カ月のはじめかしら。でも……。変わってますのね。こんなボテレン腹で恥ずかしいわ。どうしたらいいんですの？

客 産れるまで相手してくれるかね？

ハ それはいいですけど……。でも、ホントに変わってますわ。こんなのがいいなんて。

こうして臨月になると、予定日も過ぎ、突然に産気づいて動けず、已むを得ずに二階で大ぜいの男女ににぎやかに見守られながら産み落とすことになる。女たちも全部集って――すごいね。

などと言ひ合うだろう。

監 禁 室

レイ子は、ブツ通し三十時間もアラビア海の海水に漬けられていた。エンジンをとめたネプチューン号は、油を流したような海面に三千七百五十トンの巨体をドッシリとうかべて、静かに漂泊していたのである。カッターも本艦に繋留されたままだったし、更にそのカッターから伸びたロープが、レイ子を際にして浮輪に達し、彼女の下を潜って結びつけられていた。そして、波の動きにつれてロープが伸びたり縮んだりする度毎に、レイ



第六回

子はそのあふりを受けて苦しまなければならなかったのである。

しかし今となつては、もう喚き叫ぶ力も失せてしまったらしく、グッタリと死んだように頭を垂れて、機械的な浮沈運動を見せているに過ぎない。

鯨のような、おそろしい肉食魚が近づかなかったのは幸運だった。しかし脐から下の半身は、水にフヤけてブクブクにふくれ上っていたし、冷えきった内臓はアレルギーを起こして、激しい下痢症状を呈していた。

反対に上半身はというと、前述のように強烈な陽光に焼かれて真黒にはれ上り、ところ

どころエミ割れが出来ていた。飲まず喰わずの喉はカラカラに乾いて、空腹感すら、もうどうでもいい状態となつてしまった。ともすれば、もうろうとする意識の中で、絶えず死を身近に感じていた。

一人の見張り員はブリッジに残っていたけれども、スタッフは全員、司令室に戻っていた。ミセス・ウィリーも高橋副長も、今はレイ子のことなど構ってはいられなかったのである。

刻々入電する暗号情報はエミー司令、つまり星恵美子の失踪を裏づけていた。新津謙介

をマークするのに急であつたジャン・シュレツサーが、星恵美子をガードするという本来の任務に失敗してしまったことがわかつた。

このことはネプチューン経由で有明のところへも報告され、直ちに有明の指令で彼のシンジゲートに属する工作員達が、続々テヘランに送り込まれることになった。彼等は表向きはレッキとした商社員であつたり、石油技術者であつたり、医師であつたりしたから、堂々と国内を歩き廻つても少しも怪しまれない筈である。そして、ジャンのところに残された幽かな手掛りの糸をたぐつて、星恵美子つまりエミー司令を救出しようとする。

大勢の女囚達を収容したセル（房）の中は四六時中、明るかつた。彼女たちは、僅か百六十センチの長さしかない棺桶のような空間に身をちぢめて、寝転んでいなければならぬ。テレビは、依然として波間に浮かんでいて、望月レイ子の無惨な姿に焦点を合わせていた。

彼女たちは、その画面を注目していなければならなかつた。もし目をそらすとするとテレビ受像機を通して絶えず監視しているウォッチから警告を受ける。そして何回かの警

告を無視すれば、手きびしい懲罰がおそいかかつてくる。房を水びたしにしたり、房内の温度を極端に熱くしたり冷めたくしたり、時には電撃を通したり、房の中で遠隔的に責める方法はいくらもあつた。ほとんど誰もが、その懲罰を体験して、恐れ戦いていたのである。だから、命令は完全に行われていた。行われぬのでは済まされなかつた。

誰にもレイ子が次第に疲労困憊して行く経過が目に見えてわかつていた。逃亡者に対する報復がどんなものであるか、彼女たちは、今こそ身にしてみても悟らされたのである。その『見せしめ』効果こそ、高橋淑恵のねらいだつた。長い航海の間、囚人たちを従順に、しかも健康に管理することは、無上の強権をもつてしても至難のわざなのである。高橋等にしたところで、誰もが一度はこのような体験をしているのだから、このような女囚の心理は手にとるように理解しきつていた。

セルの管理は殆んどすべてオートメーションである。食事も圧縮口糧が定時にヴァキュームパイプで送り込まれるし、排泄物は一旦中央の小穴にたまり、検査の必要がなければプレッシャーで排出してしまう。朝晩、水流

が渦巻いて身体をセルの室内と一緒に洗滌する。運動不足を補うために、せまいセルの中でもできる体操が考えられていて、テレビの指令に従つて強制的にやらされる。必要に応じて、これまたテレビを利用してシンジケートについての情報教育なども行われる。健康管理のために太陽灯、殺菌灯なども設備されており、原則的にセル内の環境は最も理想的な状態に保たれている。女囚たちにはないものといつては、これが彼女たちにとって最大のもののだが『自由』そのものだけだったかも知れない。

イギリス、ブリテイッシュ映画のマスケットなどともてはやされて、幾度もスターダムをねらうチャンスに恵まれながら、何故かスクリプター以外をやるうとしなかつたジュリー・シェリバンも、御多聞に洩れず真裸に剥がれてセルの一つにおし込められていた。

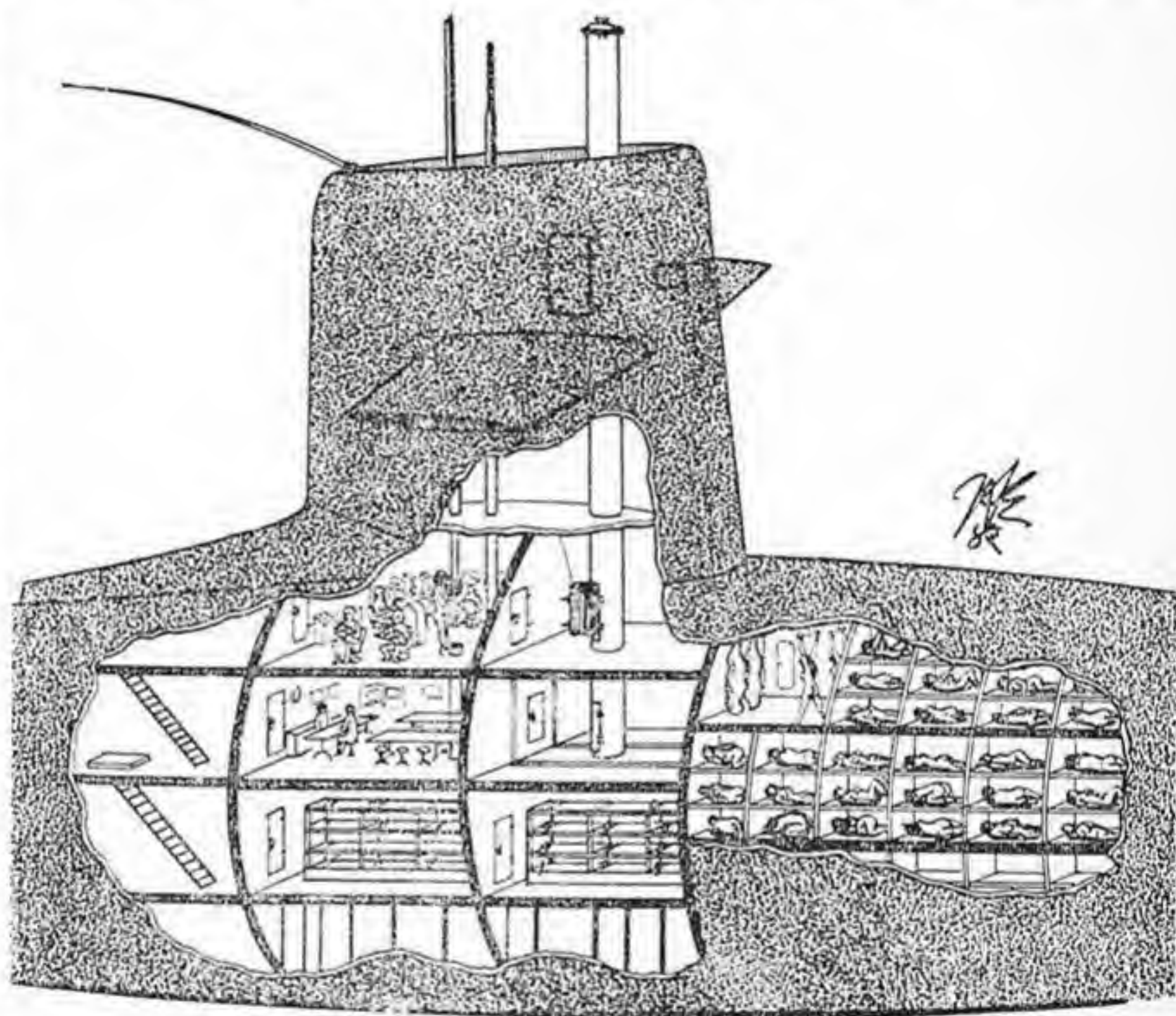
何が何やらわからないうちに、ミセス・ウイリーの楽しいヨット・パーティーが一夜のうちに世にもおそろしい地獄、いや海獄と交つてしまつたのである。

それ以来、二週間余りをセルの中で暮してきた。時々、例のエレベーターを通じて司令塔に昇らされ、大鯨の鰭のようなあの巨大な

水平舵の上で屈辱的な日光浴をさせられるから、自分の囚えられている場所が潜水艦の内部だということがわかっていたけれども、何故、何のためにこのように巨大な組織が、可弱い婦女子を多数捕えて、こんな屈辱的な目にあわせて監禁せねばならないのか、どう考えてもわからなかった。

ただ禁固されていただけなら、ノイローゼになってしまったであろうが、彼女たちにはノイローゼになる閑さえ与えられなかった。各セルに備えつけられたテレビの受送像機が睡眠時間を除いて、絶えず何かを要求していたからである。

その要求はきわめて多岐に亘っていた。あるときは彼女に知っている限りのスコットランド歌謡を大声で唱わせた、あるときはシェイクスピアの一節を暗記させられたりした。そして、どのセルでも共



通で行われたことは、前述の体操と日本語会話のレッスンだった。望月レイ子のような日本女性には、逆に英会話のレッスンが与えられた。

とに角、嫌でも応でも命令には絶対に従わなければならなかった。さもないと忽ち例の刑罰を受けることになる。その点では正確に懲賞必罰だったし、要求自体が彼女たちの貞操を危くする内容でなかっただけに、比較的に受け容れ易かった故もあって、女囚たちはむしろ熱心にトレーニングに参加するようであった。実は、こうして徐々に新しい環境に適応させてゆこうというのが、高橋副長の方針なのである。

ジュリーはレイ子と同じ二十三才だったので、カンヌでは何回も一緒になって、よく話し合った仲間だった。

それで、今テレビ画面に映し出されているレイ子の受難劇は他人ごとのように思えなかったものであった。それにしても、この二週間の間に日光浴の時など何回か一緒になったとき眺めたレイ子の裸身は、女のジュリーが見ても素晴らしいと思ったものである。

ヨーロッパ人には、やたらとバストやヒップが大きい女が多くて、ジュリーにはそんなプロポーションがむしろグロテスクにさえ感じられたのだけれど、レイ子のそれは、たとえ如何に日本人ばなれのしたヴォリュームだ

ったとしても、ジュリーの眼からは固くしまった洋桃のように、みずみずしく思われた。その上、あの絹のような肌合いのキメの細かさはどうだろう。

ジュリーの肉体にはブロンドのうぶ毛が密生していて、遠くからでは気にならないが、近くで見るとそれがモジャモジャと見えてわれながら嫌らしいと思うのに、レイ子のうぶ毛がもし、ジュリーのそれまで発達していたら、さぞ見苦しかったろうと想像する位なのに、実際のレイ子は、うぶ毛なんか生えているのかどうかかわらないほどなめらかで美しい皮膚に恵まれていた。

ジュリーは、そんなレイ子の肉体を自分の手でさわって見たいと思った。よくしまった乳房や、お腹の凹みにソツと接吻したいと願望した。ジュリーの心奥に深くかくされていたレスポスが思いがけない機会に、どす黒い油のように表面に浮かび出て来たのかも知れない。

王明齡は禁足を受けているのは同じだけれども、客船の一等船客のような待遇を受けていた。潜水艦の内部としては勿体ない程のスペースである六畳敷程の一室を与えられて、

彼女の身の回りを世話するために福建語に堪能な女兵が一人つききりになっていた。レイ子やジュリーが直面している状態とは、天と地ほどもちがうと言わなければならぬ。

実際、明齡は、はれものにさわるように行き届いた待遇を受けていた。彼女の持ち物は全部運び込まれてあったし、何か必要になると間に合うだけのものは、ことごとくあたえられた。食事も艦のコックが腕をふるって作ったものだし、専用のシャワー室では、いつでも真水を、使うことを許されていた。しかし、どんなに破格の待遇を受けたとしても、虜囚には違いなかった。

彼女は毎日を快々として送った。時々、日光浴のために司令塔に連れて行かれたが、いつも彼女一人だった。他の二等囚とは隔離されるようになっていたからである。孤独感も一種の精神的な拷問であった。彼女の神経のバランスは破れ、何度か、発作的に嘆き狂って、係りの女兵を困らせたり、品物をこわしたりしたこともある。

そんな場合、いつも高橋副長がやってきて美齡をなだめるのが常であった。勿論、付添いの女兵の通訳によってであるが。というのは、美齡は英語がほとんど話せなかったから

福建語（台湾語）と北京官話でなければ意思を通じる術がなかったからである。

高橋副長と美齡は、それでも不思議とウマがあった。さしもの嵩じた美齡のヒステリーも、高橋淑恵が来て坐っただけで一遍でよくなってしまう。別段むずかしいことを言うわけでもないのに、シンミリと身の上話などを語るような雰囲気なのだった。それは、高橋淑恵の持っている、人を惹きつけるパーソナリティの故だったのかも知れない。

司令室では、再び入りはじめた作務員たちからの報告と有明からの指令の中継でゴタ返していた。自動暗号解読機から、テレックスをカタカタいわせて翻訳文が出てくると、幹部達は一様にむづかしい顔を寄せ合うのだった。事実、エミー司令の消息はブツリと断ち切れてしまったままだった。

ネプチューン号は有明の決断で、危険を承知の上で、ソーナー網の完備したホルムズ海峡を通り、ペルシャ湾に潜入することになった。

そのような次第で、望月レイ子はやっこのことで、海中からひきあげて貰うことが出来た。上半身は日に焼けただれ、下半身は水に

ふやけて、見る影もなくなってしまったレイ子は、死んだように床に倒れ伏していた。これでは、とてもセルに戻ることが出来ないで、病室に移して暫く治療させることになった。

とやかくするうちにも、ネプチューン号はカッターを収容し、必要な処置を終えて潜航を開始した。向うところは、エミール司令が消息を断ったイランのペルシャ湾沿岸である。

競 売

一番、二番、三番と、三人のペルシャ娘はそれぞれ五百、六百五十、七百三十パーレビ（百パーレビは約三十五万円）で落札された。

娘たちは直ちに後手に縛られ、その縄尻を夫々の新しい主人の手に曳かれ、悲しげに或いは嘆き、或いは、唇を噛んで引き立てられて行った。規則で一度落札した者は、それ以上、競売に参加できないのである。

あとに残ったのはイギリス娘と星恵美子の二人だけである。急に周囲が熱っぽくなって

くるのがよくわかった。皆がこの異国の女を自分のものにしようと手ぐすねをひいていたのである。貪婪な男たちの欲望が競売という射倖心をそそるゲームにせき立てられて一層はげしく燃えあがってきたのであろう。こうした気配が見えない火花となって、一層二人の不安感をつのらせることになった。

そんなわけで、小男のカシムに手をとられて立ち上らせられたときに、イギリス娘は顔面蒼白な唇を慄わせるばかりであった。

「さあ、さあ、お待ちかねのイギリス娘だ。

思い切って買っておくんなせえ」

カシム自身も相当にのぼせ上ってきたのか顔中に玉のような汗をふき出しながら、やや上ずった声で叫んでいた。

「名前はアン・ブラウン。チャキチャキのロンドンっ子だよ。芳紀正に二十二才。職業はといえば、これが又面白い。何とキリスト教の尼さんだよ。異教徒いじめにはもってこいの玉（ぎょく）だ。修道院の奥深く、それも頭巾でかくされていたお宝を、へエ、あっしらが骨折ってかつぎ出したんでさあ」

殿下が苦笑をうかべたのか、覆面の間に光る驚のような眼を細めて、

「もういい、もういい。カシム、長広舌はい

いかげんに切りあげたまえ。お客様がお待ちかねだぞ」

と、たしなめる。カシムも頭に手をやって「オット、失礼をば致しやした。つい、嬉しさの余り、舌の滑りがよくなったんで。へいそれでは誰方かお声をかけておくんなせえ」カシムの声につられたかのように二、三人が一度に指を出した。目ざとく指のあらわす符節を読みとったカシムが嬉しそうに大声をあげた。

「これはこれは、一回の指し値で千パーレビが出ました。ハイ、もっとお買いなさる方はいらっしゃいませんか」

「千と百だ」

誰かが太い声で怒鳴った。

「へい、千パーレビ。おあとは、どなたかいらっしゃいませんか」

「千五百パーレビで買いたしましょう」

女のように細い声が言った。

「ヒューッ、千五百！」

吹き出してくる汗を帯でグイッと拭いて、カシムが繰り返した。

「千六百！」

聞きさっきの太い声が競りつづけた。これではもう敵うものはあるまいと誰しもが思ったの

に、再び細い声がキツパリと
いった。

「千七百まで出します」

ザワザワと人が動いた。ヒ
ソヒソと、ささやき合う者も
ある。

「千八百だッ」

太い声が響いた。間髪を入
れず、

「二千」

細い声が切り返す。

「チェッ」

太い声の男が、誰にもわか
るように大きな舌うちをした。これは、彼が
もう競売について行けなくなったことを白状
したことになる。

カシムが、手を打って

「落ちました。二千パーレビーとは、大した
商いだ。あっしの手数料だけでも、百パーレ
ビーになるとは」

「そんなに驚くことはないよ」

嗤いをおし殺したような声で殿下が言う。

「たかだかキャデラック一台の値段じゃない
か」

アンは立ちすくんでいた。あまりの恥辱に



死んでしまいたい位だった。思わず熱い泪
が頬を伝った。深窓に生れて何不自由なく育
った身が、心柄とはいえ、こんな異国の山奥
で、品物のように身を売買されているとは。

いつの間にか両手が後に回されていた。カ
シムの手がギュッギュッと縄をさばいて、素
早く縛りあげると、ボンと艶やかな臀部をは
じいて、

「さあ、お連れなすって」

不意に殿下が立ち上っていった。

「暫くお待ち下さい」

カシムからアンを縛った縄尻を受けとった

覆面の男が、何ですかというようにふり向い
た。なで肩の細そりした、女のようなシルエ
ットを持った男だった。

「失礼ですが」

と前置きして、殿下は鄭重に話しかける。

「あなたは、われわれのシンジゲートで奴隷
をお買いになって日も浅いようですから、念
のため申し添えておきたいと存じます。あな
たがお買いになったのですから、こいつめを
あなたの自由に扱ってよろしい。生かそうと
殺そうと思し召すままです。もっとも、折角
大枚の銭をかけて落札するのですから、殺そ
うと考える人は、先ずありませんがね。しか
し、二つだけ条件があります。第一は、何人
といえども、ここで買った奴隷をこの館の外
へ連れ出すことは許されません。第二に、こ
の館で共通の目的のために何か催しなどをす
る場合には、無条件で全奴隷を提供していた
だきます。その代りといっては何ですが、こ
の館では、あなた方の奴隷達を善良な管理者
の立場で飼育いたします。訓練せよとおっし
やられれば訓練もいたします。懲罰を与えよ
とおっしゃれば、あなたに代って罰して差上
げることも出来ます。そういうことで、よろ
しゅうございますね」

細い声の男は、よく光る目をキラキラさせながら、返事のかわりにサーラムを送ると、途方にくれてベソをかいているアンの背中を押すようにして出て行ってしまった。

男たちの餓えた獣のような視線は、今も星恵美子一人に集中していた。さすがの彼女も、その視線を痛いように感じて、身の縮むような思いがしていた。それでも、最後まで希望を捨てまいと自分に言いきかせ、そのチャンスが到来するまでは、どんな恥辱であっても甘んじて耐えることによって、意思と体力を温存して行くしかあるまいと決心していたのである。

そんなわけで、カシムの脂ぎった手が彼女の腕に触れる前に、スツと立ちあがると、悪びれもせず男たちの前にツカツカと進んで、その希有な裸身を惜しみなく、優雅に大胆にさらけ出したのであった。

星の態度に男たちの方がかえって気を吞まれてしまったらしく、一瞬シーンと静まりかえった気配の中で、カシムが口をあいたままポカンと棒立ちになっているのが、何やら滑稽でさえあった。

それを打ちやぶったのが例の殿下の声であ

る。

「らちもないセリ上りに時間を空費したくないと思います。この際、わたしは最低価格を提案しよう。如何ですか、わたし自身でこの女を五千パーレビーで買いたいと考えているのですが」

形は提案だが習慣上、この館の主人である殿下の絶対的な意示をあらわしていたので、あえて対抗する者は一人もなかった。

カシムが急に勢いづいて叫ぶ。

「ハイ、五千パーレビー、どなたかお買いなさるお方はありませんか。——ない。それではこの女は殿下に落札いたします」

その間わずか一分あまり。あっけなく星恵美子は、殿下と呼ばれた男の持ち物にされてしまった。

息づまるような一刻が去ると、男たちはホツとしたように三々五々立ち去って行く。あとには後手に縛りあげられた星をはさんで、殿下とカシムが残っただけである。

長い縄尻を巻いて殿下に渡そうとするカシムに、

「カシム、ご苦労だったな。今日の売上は八千八百八十パーレビーになる。その手数料四百四十四パーレビーはおまえの口座に振込ん

でおくよ」

「へへーッ。毎度、お有難うさんでございませう。それではこれで、ハイ」

回教徒風に額に手をあて、うやうやしく殿下に敬礼したカシムが、さてという風に星の方を向くと、

「お嬢さん、あんたは不思議な人だ。あっしは長年こんな商売をやってきたが、あんたみたいに胆の太い女に会ったのははじめてだ。ま、とにかく殿下のおいづけをよく守って俸せにお暮しなすって下せえ」

妙にシンミリと語ってから部屋を出て行ってしまった。

「いい身体をしている。名は何というか」
無造作に星の肌をなでまわしながら、殿下が聞いた。

「星——と申します」

身をひねって、執拗な掌の攻撃を避けながら彼女が答えると、

「なに、ハシシ？ 麻薬のことか」

恬然と笑って覆面をとる。年の頃は髪の色で、はっきりしないけれども、四十前後かも知れない彫りの深い端正な顔だった。

「ハシ（星のこと）がハシシ（麻薬）に酔う

とは面白いシャレだ。だが薬の効目がよいように、しばらく運動をさせてやろう」

アッと思う間に縄が股間をくぐって前へ持ちあげられる。そして、細腰をまわして一か上げすると、ギョツと引いた。縄は縄をしめたようになった。

「痛う！」

思わず顔をしかめるのにかまわず、強い力で引かれるので嫌でも歩かなければならぬ。

再びいくつかの部屋をぬけて戸外へひき出される。夜はとっぷりと暮れて、高い空に孤独な星の輝きがあった。地上の星には、それを眺める余裕すら許されなかった。彫像のように動かない運転手をのせて、黒々と夜露に濡れたジープに、星を縛った縄の先端が結びつけられる。

殿下が後部座席に腰を落ちつけるや否や、ジープはゆっくりと、しかし否をいわせぬ力で星を引っぱりはじめた。カッン、カッンとギヤが入れかえられるたびに、星は馳け足にならざるを得ない。排気ガスの臭いが鼻をついてくる。顔をしかめる瞬間、パッと眼前があかるくなった。ギラギラする光輝で、かえってめくらになってしまったようだ。殿下がジープの後部に装置したスポットライトを点

灯したのである。これで殿下からみれば、星の苦渋にゆがんだ顔や、跳躍する肉体がありありと楽しめるのに、星からは何も見えないで、ただ胴を激しくひかれるままに転倒せぬように走るのが、やっこのことになってしまったのである。

普通の女ではない。鍛えぬかれた星の筋肉は、見事な持続力を示した。しかし、それとも限界がある。ほとんど二千メートルほど、こうした強制的マラソンをさせられてみると、さすがにコントロールが乱れて、それと一緒に足がもつれてきた。下腹部を激痛が走る。

後手に縛られているのだから、ここで転倒したら大変なことになると知っていても、かじんの身体がいうことを聞かなくなってしまった。大きくのめって、大地に叩きつけられる。さすがに、柔道の受け業で肩から滑らかに落ちた。

ギギーツ、とブレーキが踏まれて、ジープが急停車する。

息がはずんで、しばらくは立ち上ることも出来ないのに、車から降りてきた殿下が、非情にも剥き出しの乳房を踏んだ。すぐ立てという命令なのである。止むなく立ち上ると、

又もやジープが走り出すではないか。

寒む寒むと冷えるイランの高原である。しかし、星の肉体は全身、汗を吹いた。休む間もなくジープにひかれて、馳けに馳けた。どこまで連れて行かれるのか、しかし、今の星はそんなことを考えるどころではなかった。ひたすらに、この責め苦が早く終ることをねがって馳ける。

犬のように舌をのぞかせ、呼吸の苦しさにあえぎながら、限界を越えた肉体を必死に動かしている星の姿が、スポットライトにありありと照らし出されていた。それを、目を細めて眺めている殿下の様子はわからない。

ジープは、岡を過ぎ、灌木の小藪を突切つて、やがて海のように広い砂漠に出た。星の裸足は無惨に傷つき血潮で真赤に彩られてしまった。しかも尚、ジープは止まる気配もなく、サンドバギーのように砂煙りを立てて砂漠を突進した。今度は砂塵を真向から浴びなければならぬ。やがて淋漓と濡れた肌に、砂がまぶしたようにへばりついた。ポコポコと踝まで這入ってしまいそうな砂道は一層、走りにくく、それだけ苦痛は、更に加わって行く。馳けながら星は、はじめて声を放って哭いた。

(未完)



懸賞入選作品

妖

よう

童

どう

記

き

(上)

秤

蕩

也

ウラマチ

少年の本名なんて、だれも知らない。

ただ、一週間ほど前から、だれが呼称^よび始めたともなく、シロ、と名付けられている。

どうやらそれも、この少年が希^{まれ}にみる色白であったことから、率直に、そう名付けられただけのことではかなろう。

もちろん、この界限の人間たちにとっては少年の素性や本名なんか、どうでもよい——というより、関係のない話である。彼が何処から来て、何をしようとしているのか、そんな

なくだらな詮索をするモノ好きは、ここにはだれひとりとしていない。いや、いる筈がない。

自分に損得関係のあるもの以外は、すべて対岸の石ころみたいなおものである。また、その日その日の、自分だけのことで精いっぱいだったともいえよう。

少年が此の裏街をうろつき始めたのは、半月ばかり前からである。

最初は新聞配達をやった。が、三日後には主人が確めた身許調べで、その出鱈目ぶりがばれてチョン。次は、BARの裏口などでビール瓶を担いでヨタヨタ出入りしている姿が

見受けられたが、これも一週間後には消滅。

ここまでは、マア職業といえようが、次からは、一体なにをしているのかサッパリ不明である。路上でママゴト遊びしている女の児に混ってキャアキャア騒いでいたかと思うと翌朝未明には、ポロ旅館の植込みから「だれだ！」の叫声に追いかけて、眼をパチクリさせながら飛び出してきたり、その午後にはもう、廢品回収業のオッサンのあとから、のどかな大あくびをやらかしながら、その荷車の尻を押して歩いている、といった有様である。ところで——なかでも少し不審な点は通行中の恰幅の好い紳士の姿さえ見かければ

すぐに走り寄っていき、後には馴れ馴れしく——心細げに話しかけることであつた。

この点だけは確実に、その時なにをしようが、とたんに放ったらかして実行するのだった。

彼は、色白であるばかりか、全体が何となくナヨナヨしていた。紳士に話しかける時には、これが百パーセント、無意識のうちにか自覚した上でのことか解らないが活かされているようであつた。

「なんでえ、あのガキは。変にヒラヒラしやがってよ。あれじゃア、下水に流されているモヤシじゃねえかよ」

「ほんまでんなア。歌舞伎の女形にでもなつたら、さぞや、よくうつることやろな——といたいところやけど、あきまへんわ。あのオンボロの恰好やで、てんで話になりまへんわな」

この裏街の住人は、一応その心根は善良だといわれている。そのかわり口の汚いことは特許みたいなものである。少年を笑い話のネタにした奴らもまた然り。

自分たちも、その下水の一部分であることは充分に認めている上での、辛辣な少年「批評」であつた。

ともかく、こうして——

全国からの種々雑多な人たちを呑みこみ、絶えず肩で息をしているようなこの裏街は、この少年をも、いつしか自然的な成行きで……そう、まるで春風に、吹き寄せられてくる塵芥^{ちりあか}同様に受け入れて、やがて街の色の中へと溶けこませていたのだった。

——だが。

その誰からも相手にされないと思つていたオンボロ少年に話しかけられるや、凝視のうちに、ここに陽炎^{かげろう}にも似た歓喜で胸をふるわせていった人間が、ついに？ 半月めにしてあらわれたのである。

彼は、少年にとって「何人目」かの、恰幅の良い紳士であつた。

むろん、この街の住人ではない。

住人ではないのだが、何の目的であつてか数カ月前からよくこの街へやって来ては——いつのまにやら、人々から親しげに、

「先生」

と呼ばれるようになっていた人物だった。

少年と同じように、どこに自宅があるのやら、なぜ、こんな街に出入りすることが楽しいのやら、だれも詳しくは知らない。

いつも葉巻を啜えて、別になんにも面白く

なくってもニコニコしていて、こんな紳士は住人たちから見れば何となく異質の人種でしかないのだが、先生、先生といって彼を取り巻くことごとくのが、会うと愛想笑いのひとつともツイしてしまうのは、この紳士の至つて気取りのない態度や、だれに対しても人なつっこいその話しぶりの故^{せい}でもあり、また何よりもその金ばなれのよい故でもあつた。

もちろん、敵ではないばかりか、来るたびに「豪勢」に自分たちに奢ってくれる相手となると、一も二もなく大手をひろげて迎え入れてしまうというのも、この裏街人種の特許的習性であつた。

狭い通りにゴテゴテと巢を張っている飲食店の中の一軒、壁の色も褪せて実に安っぽく表看板のドロ絵具が時代おくれもいらいケバケバしいという、BAR? 「テレコ」

ここが紳士の、行きつけの店である。

——街のはずれで乗用車をすてて、通りをテクテクやって来る彼の姿をみると、

「よオ先生！ ご機嫌さん——」

男たちは異句同音によびかけるのだった。「また今夜も、この間の話のつづきをやりましょうぜ」

「先生よオ、テレコのロケット姿アがよ、今

夜もきつと先生が来てくれるって、ベタベタに口紅を塗りたくって、待ち構えていましたぜ！」

「オレ達もあとからすぐに吹っとなで行くからよ……」

いつものような、紳士の大盤振舞を見越しての景気の良い「挨拶」だ。

すると紳士のほうも、その一人々々に例のニコニコ顔で、

「よしよし、それでは先に行って待っているからな。そのかわり今夜はヒゲ剃って、爪の垢とって来るんだぞ」

と応えて、騒々しい生活のひびきに揺れる夕闇のなかを、悠然とした足どりで歩み去って行くのだった。

さて。

こんな紳士と、こんな少年が、初めて顔を合わせた日というのが、世間では飛び石ながら、今日から連休がはじまったという——四月末の、夜のことであった。

BAR「テレコ」で、彼らが、いつもの通り一向にまとまりも締まりもないのだが、その、至って面白い話に打ち興じていた最中、^{さなか}ドアを押して、まるで忍びこむかのような恰

好でソロリと店へはいって来たのが、この少年であった。

いかにも、こんな場所へは初めて来たのだとでも言いたげな、ぎこちなく、頼りない身ぶりであった。

なぜか先客たちの方を、ひどく気にしている風な、視線であった。

「あの、ウイスキー……」

ちょうど、ビールを持って、お尻を振りながら前を通りかかったマダムに、少年は蚊の鳴くような声でいった。

音もなく突っ立っていた少年にウツカリと気がつかなかったマダムは、ロケット婆^{あだな}あという悪^{あだな}名^{あだな}の通り、そのヤケに長い顔をふりむけて、いまにも発進しそうな動作でびっくりの表情をした。

少年は自分から呼びとめたくせに、その毒気にあてられて、すぐに叱られたように俯向いてしまった。

「あら、あんた——」

マダムは、じろりと少年の身装^なりを見て、

「まだ子供じゃないの」

お化けみたいに塗った臉をびくつかせた。

「残念ながら、うちは子供相手のお店じゃないのよ」

臉のついでに、マグロの切り身みたいな唇をもひん曲げてみせて、いった。

すると、少年は顔を上げて、世にも情ない表情を浮かべると、

「ぼく——子供じゃない。あの、ハタチ」

もじもじしながらいった。

「駄目。嘘だったって駄目よ。あたしには到底ハタチなんかには見えないわよ。それに、第一あんた、ここで飲めるものったら、ラムネなんかと違ってんのよ。わかってる？」

「それは……」

「ソラごらん、お酒なんて飲めはしないンでしよ。——いったい、どうしたってのよ、飲めもしないくせに、こんな処へ来るなんて」
訊かれて少年は、ますます情ない顔つきになった。

「さあ、お帰り。帰りなさいよ」

その時だった。

エロ話に——いや、人生の裏話に熱中していた先客たちの中から、

「こらあマダム、注文の補給物資はどうなった。早よう、とどけろやい」

と大声があった。そして、その男のごきげんな眼がフト少年の姿をとらえた。

「——あれ、シロじゃねえか？」

瞬間、ギクリとした少年は、まるで悪いところを見つけられでもしたかのように、不意に背を向けて立ち去りかけた。

「おい、待てよ。見つけられたからって、逃げ出すことアねえじゃねえかア」

酔っぱらい独特の濁み声が、その背中に被ぶさってきた。

「あら、この人たちと知り合いだったの？」

そんなことはどうでもいいくせに、マダムは素頓狂な声をあげてみせた。

「そうなんだよ、マダム。そいつもオレ達に仲間入りして、この先生に、お目見得したくって、ここへ来たんだよ」

どうせ、出まかせだ。

だのに、そのとき足を止めた少年は、ズバリその言葉で的を射られたかのように、頬を掻きさせるや、みるみる紅潮していったのである。

——男の冗談につられて、ゆっくりと少年の方をふりむき、その薄暗いなかにも際立って浮きたつ白い横顔に眼がとまると、なぜかやがて、するどく、刺すような光りを宿していたのが、この紳士であった。

とたんに少年の方も、自分に注がれているこの視線に気がつき、ふりむくと、迷いも

なく、その注視者を正面から見つめ返した。

喧噪と、アルコールと煙草のけむりのために、爛れ激みきった空気のなかで、二人の光る眼は異様にからんで、もつれた。

フト、先に眼を反らしたのは、少年のほうであった。

固くなっていた身体のちからを、肩から落とすと、そのままションボリと、また背を向けた。

「あ、きみ！——ここだ、ここだよ」

この後姿に、ひかれるように立ち上ったのは紳士であった。

片手をあげて、よく通る太い声で少年に呼びかけていた。

びっくりしたのは同席の他の連中である。一様にポカンと口をあけて、紳士の顔を見上げた。

そして、少年の方はと見ると、まるでこの呼び掛けを予知していたように、声と殆んど同時に、パッと顔を輝かせて、向き直っていた。

「マダム、そうだよ。この男がいった通り、そのシロって子は、この私が招待していたのだよ。さあ、ここへ連れて来てくれ」

紳士は、少年を凝つと見つめながら、宙間

で遊泳しつ放しのように、ボヤーと突っ立っているマダムに言った。

命令された彼女は、また先生ったら出鱈目いって、という風にかかる紳士をにらみつけたが、何はともあれ、この特上客の言葉なのだから仕方がない。急に打って交った調子になっていた。

「あれあれ、この子は先生のお声掛かりだったの。そうならそうと早く……」

ちょっと妙な炎をその眼に燃えたたせたがすぐに、何気ない微笑で、ドロ臭いしなで、それを隠していた。

「本当ですかい、先生」

「あんな生っ白いガキなんか、ちっとも面白くありませんぜ」

「おい、要らんことをいうな。先生があのように言ってるんだから、それはそれで、いいじゃねえか！」

「そ、それもそうだな——」

連中もなんとなく、くぐもった素振りをしている。

「そういえばあんた、こうしてゆっくり見直してみると、仲々の美男子ね。先生とお知り合いになれるだけあって、どこかの若様みたいなところがあるわよ。さ、あっちへ行きま

しょう！」

勝手なことをいって、マダムは少年の手をとっていた。

こうして。

この少年と、この紳士の、妖しいものがたりの糸口は成ったのである。さて、紳士の眼が少年をとらえたときに、なぜ鋭く刺すように光ったのか。

左様——

彼にとつては、この少年こそまさしく、ながい月日をかけて飽きることなく深し求めつづけていた、彼なりの『美』の所有者だったからだ。

いくら薄よぐれ、みだれてはいても、そんなことでは、とてもこの少年の美を害い得るものではない。

磨けば、きつときつと少女のそれのように白くかがやくであろう容貌、肢体……。

それは黒瞳がちに、くつきりと鈴を張ったような眼であり、濡れて、紅く弾けたような唇であり、微笑むたびに、その唇のあいだにチラリとのぞく貝がらのような歯であり——

そして、やわらかく描かれたような眉でもあり、加えて、やや小柄ではあったが、彼のよ

うな男の心を、締めつけ震わせていく、そのスナナリと……コリコリとした姿態や肌触りであった。

紳士は、ついに渴望してやまなかったものを、この少年に発見し得たよろこびで、忽ち何かこう、激しく突き上ってくる、怖しいまでの興奮をハッキリと覚えていったことであつた。

とまれ——

この夜を限りとして、紳士の、この裏街への訪れはなくなつた。

同時に

少年、シロの姿も、消えた……

キマツタ

中岸健太郎の『城』は、閑散な郊外の一角に在^あつた。

瀟洒な門をくぐり、白河石を敷きつめた近代調の庭園から玄関に達すると、

「さっきも言った通り、私はひとり暮らしなんだ。気兼ねなんかする者はいないから、楽にして上ってくれ」

健太郎に招じ入れられて、早速、泉則夫はその部屋々々を案内された。

ひとり暮らしといってもこれだけの邸のことだから、お手伝いさんの一人ぐらいは、とも思ったが、一向にその様子もないところをみると、これは事実上の「ひとり住まい」であつたらしい。

しかし、案内されたその部屋々々は、しつとりと落着きをみせていたかと思えば、隣りの間は打って変って綺麗びやかに装飾されていたり、どれも両極をいったような作り構えだったが、それぞれに配られた調度の品はチリひとつかぶらず、また、このあるじの生活ぶりを物語るかのごとく、すべてが高価で含蓄あるものに思えてならなかった。

いちばん最後に案内された部屋には、昨夜までの泉則夫の身の上からみると、まるで夢のような、素晴らしく豪華なダブル・ベッドがデーンと据えつけられてあつた。

ただ、このベッドのある部屋の回りを覆っているカーテンだけが、他の部屋のムードに比べて、なにかこう、寝室というよりも、わざとした特定のものをつくろうとしているかのような色彩だった。それは、強烈な紫の地に、光沢を放つ黄色も鮮かな小菊花の模様を散らして……。

「わア、すごいお部屋——」

とにかく則夫は、部屋ごとへひとつ覚えみ
たいな感嘆詞をくりかえして、眼をまるくし
てみせたことであつた。

「オイオイ、いつまでもそんな処に突つたっ
ていないで——」

洋間のソファにゆったりともたれて、葉巻
をくゆらしはじめた健太郎が、飽きもしない
で？ 部屋を見廻している則夫に、苦笑まじ
りで言った。

「あ、すみません……先生」

あわてて此方をふり返つた則夫は、先刻か
らの自分のおしつけさに改めて気がつく、と
とたんに可愛い羞恥の揺らぎをみせて、白い
頬へポウツと朱を刷いた。

「ハッハハ、べつに、あやまることはないん
だよ。——あ、そうだな、まずシャワーでも
浴びて、その服を着換えなきゃ」

「はい」

今更のように、わが身装^なりへ視線をおとし
ながら、則夫は小さく頷いた。

「その前に、きみも疲れたろうから、まアこ
こへでも坐っていっぶくしろよ」

健太郎はソファの横を示して微笑んだ。

「——はい」

則夫は素直に頷き、そつと寄つて腰をおろ

した。どう見ても、必要以上にもじもじして
いる様子だ。そして、その様子を紫煙の向う
から、凝つと見つめていたらしい健太郎に気
がつくと、いっそう顔をあからめて、俯むい
てしまった。

伏せた、ながい睫毛が微妙にふるえて、そ
の姿は、じつにナヨナヨしい。

これでも一人前の身体をした男の子だろう
かと疑いたくなってくる位だが、もしもここ
で、彼を女の子みたいだといったら、現代の
女の子はサゾその白ちゃけた唇をゆがめて怒
ることであろう、あたしはそんなナヨナヨ型
じゃないわよ！——と。

だが、いいではないか。このナヨナヨは、
明らかに女の子のそれではないのだから。

それは見る者にとって、極端な嫌悪感の対
象ともなりえたであろうし、なかにはこの健
太郎のように、極上な讃美感の対象ともなり
得る、妖美な、湿潤な態様であつた。

健太郎の如きは、こうして凝つと則夫を見
つめていると、渴を覚えてくるほどに、胸が
口中が熱くなってくるのだった。

「——どうだね、決心したかね」

やがて、健太郎はかすれた声で、ポツリと
いった。

決心、とは、この邸へ帰ってくる途中で、
くりかえし自分の本心を語つたことに対する
返事の、最終的な意味での、要求であつた。

穴のあくほど全身を見つめられて、もう息
をするのも乱れがちであつた則夫は、やつの
ことで話しかけて貰つて、はずむように、
その顔をあげた。

「どうだね、私の、ねがいを聞き入れてくれ
るか？」

健太郎は、眩しそうな表情をしていた。

「聞き入れる、だなんて……」

則夫は口ごもつたが、すぐに、チラツと視
線をからませてくると、

「——ええ！」

ハッキリと、うなずいてみせたのだつた。

「ああ良かった。ほんとうに、良かったよ。

——じつはね、ここまで来てきみが、もしも
イヤだといったら、私はいったいどうしたら
いいのだろうか、そればかりを心配してい
たのだよ」

「——」

「ありがとう」

礼をいつてから、突然健太郎は破顔一笑し
た。それは昨夜来、則夫に初めて見せた彼の
本心からの笑顔であり、心底からの喜びの笑

い声でもあった。

「よし決まった。では今からここが、きみの住居だ。いや、私たち二人の住居だ！」

満面に活気をみなぎらせて、健太郎は元氣よく立ち上った。そして後の洋酒だなへ手をおぼす。

「まず乾杯としよう。私と、きみの新しい出発の日のために——」

「い、いえ、ぼくは……」

「いやいや、きみが飲めないことは先刻、充分承知の上だ。しかしね、私がこのような目的で巷を彷徨していたということを、伝え聞きに聞いて、あの酒場までわざわざ訪ねて来てくれたきみではないか。私ときみは、知り合うべくして知ったのだ。そして、いまこうしてきみは私と伴ってこの家へ来て、この私の願いに嬉しい、快諾を与えてくれた。こんな楽しいことってあるものか、ね、そうだろう？ そのための乾杯なんだよ。さ、唇をつけるだけでもいい！」

「……………」

「駄目かな」

「——あの、では、すこし……」

「オーケー！」

やがて健太郎は、大仰な手つきでグラスを

あげると、ふるえがちの則夫のグラスへカチリとあてて、一気に呻った。

則夫は、隠すようにして、ちょっと唇を触れさせただけである。

「あ、そうだ、きみ、先にシャワーを浴びて来なさい」

機嫌のよい声が命じた。

「いえ、先にだなんて」

則夫は、指でそっと唇を押さえながら、ゆるく首をふった。

「そんな遠慮は、しちゃいけない。今のきみは、まだ——その、私の……お客様になっていてもいいのだよ。そうだ、今はお客だ。さあ、早く浴びて来たまえ」

健太郎は、自分の妙な言い廻しに、ふと微かな狼狽の色を見せながら、シャワー室のある方を指差すのだった。

何となくグズグズしていた則夫は、やがて立ち上ると、ペコリと頭を下げて言った。

「あの、それじゃ——」

「ああいいとも、行ってきたまえ」

健太郎は二杯目をグラスにつぎながら、大様にうなずいてみせた。

この数カ月は、殆どこの部屋でウイスキーを楽しむといったことはなかった。だが、な

んと今日は、久しぶりにおいしいことか。

その理由を、そのよろこびを、全身で飲み乾そうとするかのように、彼の瞳は活き活きとかがやいているのだった。

——気がつく。

行ってしまったことだろうと思っていた則夫が、ドアのところで、凝っと立っている。

「あれ、どうしたの」

彼は小首をかしげて訊いた。

「ああそうか、着換えの服のことだろうか？

それなら私がチャンと用意しておくから、心配は要らないよ」

そのとき後向きの肩先がピクリと動いて、

「ちがうんです、先生」

やっと聞きとれるぐらいの、小さな声がかえってきた。

「違うって？ では、どうしたの」

「——」

「言ってごらん、きみ」

重ねて訊かれた則夫は、このとき両手の指をからませると、またもその横顔を、次第に紅く染めていったのである。

「ぼく……」

「うん、何かね」

「あの、ぼく——」

それから不意に、なにかに急かれたように口ごもって言った。

「う、嬉しくって、うれしくって、もうたまらないんです！……」

そしてそれが、今まで咽喉^{のど}もにつかえていたのだが、やっとのことで言葉にして吐き出せた、という風に、その胸を小さくあえがせた。

「ほんとうに、本当にぼくは、今日から先生のお傍にいてもいいのですね！」

「——」

「ずっと、ずっといつまでも、ここにいてもいいのですね！」

則夫は、あえぎながらも、一句々々自分の言葉を噛みしめるようにして、くり返した。

それに強く応えて、

「もちろん、そうだよ」

健太郎は大声で言って、深くうなずいてみせるのだった。

則夫の、この確めの言葉は、幾分突拍手もない感じではあったけれど、言葉の内に秘められている、ある熱情みたいなものは、すぐに健太郎の心に通じていたのだ。

「ぼく、先生のおっしやることなら、何でも聞きます。先生が、命令されることなら、な

んでもします」

「思っていたとおり、いや、始めから私が見こんでいた通り、実にきみは可愛い！」

「本当に、そう思ってくれるのですか」

「ほんとうだとも！」

ふり返った則夫は、まっすぐに健太郎をみつめた。黒瞳^めがちな、鈴を張ったような眼が瞬きもしなかった。そして、

「ぼく、先生に逢えて……」

嬉しい、と言おうとしたときになって一度に激情の堰が、やぶれてしまったのだろうか

——彼の「可憐」な顔は、真赤に燃えて、苦痛にも似た声でさけんでいた。

「先生っ、いつまでも、いつまでもお傍に置いてくださいねっ。そして、——あの、昨夜^{ゆうべ}先生がおっしやったように、このぼくを、このぼくを」

「うん！」

「先生の、ど……奴隷として……」

「うん！」

「か、可愛いがって、くださいね——」

則夫は、そこで瞳を閉じ、唇をかみしめ、天井を仰いだ。その姿は、健太郎からみればふるえる蝶であり、息づく花でしかない。

「——！」

健太郎は、こみ上がってくるものに、たまらず彼のほうへかけ寄ろうとした。

その瞬間、則夫は、しなやかな身のこなしでシャワー室へと飛びこんで行った。

妖しいはじらいが、身のこなしと同時に、透明の花粉となって部屋中に散りばめられたようであった。

突如、健太郎の内部で、荒々しくたぎってくるものがあつた。しかも、痛烈であつた。

彼は、グラスを叩きつけるようにして置くと、両掌を強くにぎりしめた。

——見境もなく、攪乱^{かんらん}していかうとする脳裡に、僅かの制御力をともなった思考が、何かを急するかのような形で彼を化石然とさせてくれたのは、しばらく経ってからだった。

（——ばか！ なぜ、そんなに急ごうとしたのだ）

彼は倒れこむように、ソファ深く身を沈めた。

（あの蝶は、あの花は、自分のほうからとび込んでくれたのだ。私の希望をあれほどこまかに話しても、逃げ出すどころか、それを求めているではないか。なにをあわてることがあるのだ。急がなくても、明日からはあの蝶に鞭を、あの花に縄を打って、たっぷりと

奴隷としての、泪の露に濡らしてやる事ができるといふのに……)

抑制と、衝動の相反する心の葛藤——
やがて、彼は辛うじて、新しい葉巻に火を点け得た。

ユルシテ

カーテンをはねると、白い陽光が、痛いほどに眼を射てきた。

思わず顔をしかめながらも、反撥するかのよう、胸をひろげて、大きく伸びをしたときであった。

「おはようございます、ご主人さま」

健太郎の足許で声がした。

いつのまに來ていたのか、真紅のタイツに水色の可愛いエプロンを巻いた姿の、則夫だった。

「うむ」

小さく頷くと、健太郎はゆったりとした態度で、ベッドのところまで戻り、いま起き抜けたばかりで、乱れたままの夜具の上へ、無雑作に腰を降ろした。

やや寝不足らしい顔つきは隠しようもないが、膝のところへ手をつっぱって、口をへの

字に結んでいる姿は、イヤにふんぞり返っている、といった恰好である。

「——歯をみがく」

しばらくして、彼はポツリと言った。

彼の移動と同時に、音もなく、素早く床をにじってその膝下に跪いていた則夫は、この彼のひとりごとのような言葉に、間髪入れずスツと用具を差し出していた。狸毛の、柄の部分に美しい貝がら片を散りばめた、ぜいたくな歯ぶらしだ。

「はい、ご主人さま用意してございました、おふくみなさいまし」

則夫はニツコリと微笑むのだった。

歯刷牙を口の中へねじこんだ健太郎は、それを揺すりながら、則夫の手許をジロリとにらみつけた。

則夫の、その両手首には、巾五センチくらいの鉄輪がはめられてあって、間を四十センチ足らずの鎖が、垂るんで揺れていた。

クサリ、といっても重たくガチャガチャしたものではなく、小さく細やかな輪の、微動にもシャラシャラと軽やかな音のする、錫製の鎖だった。實用、というよりも観賞用みたいなもので、これもどうやら、この則夫に使用するには、うってつけのものであつ

たかも知れない。

——やがて健太郎は、動きをとめると、くぐもった声でいった。

「吐くぞ……」

それまでを、身をちぢめるようにして、ひっそりと控えていた則夫は、

「はい」とこたえて、少しばかり腰を浮かせると、その陶器のようにかがやく美しい顔を仰向かせた。

そうして、すぐに或る微妙なふるえを帯びてきた、菜^な豆^{まめ}のような唇を割ると、次第に大きく、開けていった。

(さ、お吐きなさいませ……)

健太郎はそれを見おろして尊大に頷いた。それから前かがみになると、その『容器』にふくらんだ口を寄せ、躊躇なく中のものを吐いた。

次にはもう待ちきれぬかのように、いそいで嗽い水を取り、口をゆすぐと、やたらと吐きつづけるのだった。

——これらが終ると、まもなくテーブルに向かって、食事である。

健太郎がフォークをとると、またも則夫は静かにその足許に跪いた。

真紅と水色のその姿が、磨きあげられたタ

イルの床に、つめたくクッキリ映っている。

それは置物のように動かず、ながい時間をかけての、健太郎の食事の済むあいだを、たた凝っと——ひっそりと待ちつづけるのであった。

時おり、野菜などの切れっ端が、犬にでもやるように彼の膝もとへ投げ与えられた。

そのたびに彼は、それを押し戴き、おいしそうに喰べるのだった。

これらのことには、なんら逡巡の気配もなく、いやそればかりか、彼のその神妙な表情の底には嬉々とした奥深い色さえが漂うているではないか。

天性か、普段の調教か、それはともかくとして、こうしてみると、彼は生れついた時から健太郎の奴隷だったかのようだ。

——やがて、静かなうちにも、旺盛な食欲を満たし終えた健太郎は、隣室のソファに移って、ゆったりと身をしずめた。

すると則夫は、かるい鎖の音を鳴らして立ちあがり、壁ぎわ中央に置かれた豪華なステレオの前へと急いだ。

臨場感のある、爽快なリズムがながれはじめると、則夫はそっと戻ってきて、卓上の筥から葉巻をとって健太郎に啜えてもらい、火

をつけた。

そして——

この平穩な一刻の間に則夫がしなければならぬことは、絶対に乱暴な音の立てぬように、食卓上のものを片付け、キッチンに引こんで、健太郎の喰べのこりで素ばやく自分の食事を済ませてしまうことであつた。

約三十分後。

ソファから立ち上った健太郎は、則夫を呼びつけた。

「でかける」

「はい、ご主人さま！」

仁王立ちとなつたまま、一切自分から動こうとしない健太郎に、すぐに則夫の活躍が始つた。まず——

並以上に濃い髻をあたり、髪を整える。

次に部屋着を脱がせる。そして、パンツからシャツから、肌着が済むとワイシャツ、ネクタイ、カウス・ボタンから靴下——

ちよつとした女性なんかより、もっともつと甲斐々々しく、こまごましく、素早く、ていねいに、そしてしなやかに、嬉しげに立ちあはたらくのであつた。

最後の背広上衣だけをのこして、ここまで

の身支度が整うと、則夫の動きは急に静かになつた。

「——」

健太郎の顔をチラリと仰ぎみて、二、三步はなれると、ゆっくり片膝をついて俯向くのがあつた。

いま動き廻つた頬の上氣に、また別の意味の紅味がさしている。

「あれを、持っておいで——」

妙な沈黙があつた後、健太郎がアゴをしゃくって、命じた。

「は、はい」

則夫は言葉の終らぬうちに立ちあがり、うつむいたまま奥の部屋へ姿を消した。

健太郎は、何を考えているのか解らない顔つきで、ぼんやりと天井をみつめている。

則夫が引き返してきたのは、それからすぐのことであつた。そしてまだ眼のあたりを染めたまま、それをソファの上に置くと、数歩退り、その場で健太郎へ後向きとなつて、エプロンをとり、背のジッパーを割ってタイツを脱ぎ始めた。

「——なにをしている。ぐずつくんじゃ、ない！」

するどい健太郎の叱咤がとんで間もなく、

この洋間の床上に、まっ白いピーンと張りつめて美しく光沢のある裸身が、遠慮ぶかく露呈された。

ガラスばりから部屋いっぱいにながれこむ明かるい陽差しを撥ねつけて、それは冷酷なまでにうるおしく息づいている。

（素晴らしい！ ますますすばらしくなっていくヤツだ、私の奴隷は——）

健太郎は、眼前に『く』の字にゆがんでいる裸像をにらみつけて、満足そうに眼を細めた。

「よし、これを着けろ！」

声と同時に、彼はコルセットとピンクのパンティを投げつけていた。

則夫は、自分の露わな姿態に、たぎるような羞恥を覚えながらも、しなやかな腕をのばしてパンティをとり、モゾモゾと穿いた。

クリクリした臀部がピンク色につつまれると、次にコルセットを取る。そして、このコルセットが、ピッチリと胴と腰の線を整え終ったとき、彼は後姿のまま床に片膝つき、そのなだらかな肩先を喘がせた。

このとき健太郎は、ソファに残っている革紐をわしづかみにした。

今までとは別人のように、荒々しく則夫に

近づくと、やにわにその手首をとらえてグイと背中へねじりあげる。

容赦のないちからが両手首を高く交叉させて、口に咥えた革紐の端がキュ！と音たてて締めつけられたとき、

「あ、——」

則夫は、語尾をながくひいて、顔をのけぞらせた。

やわらかく、蒼いまでに白い咽喉もとが、ピク！と痙攣する。

手首から胸回りを締めつけ、両肩から流れる革紐が絞をなしていったときには、

「ああ、ご主人さま……う！ ううっ！」

鋭く貼りついたような受縛感に彼は絶句していた。

こうして、たちまちのうちに、手首も高々と後手にくくりあげられた奇妙な恰好の、そしてまた異様に美しく可憐な姿の奴隷が出来あがった——

健太郎は、暫くのあいだ、この「自作品」に細い視線をなげていたが、急に太い眉をあげる、跳ねるようにして則夫の正面にあたる壁ぎわへ立った。

すると、

「あ、——そ、それだけは堪忍して！」

則夫が瞳をいっばいに見ひらいて、哀願した。

だが健太郎は構っていなかった。

勢よく、カーテンをはらいのけていた。

則夫は正面を見ないままに、眼を閉じ、不自由な身体をくねらせた。

——鏡であった。

こんな場所に、まさかと思われるほどの、巨大な鏡であった。

びっちりと縛り上げられて、今にもくずれ折れようとしている則夫の全身を真ん中にし、もう一つの部屋がそこにあるかのようにすべてを明確に映している。

（私が出掛けて、いない間、お前はあの鏡の中の、おのれのはずかしい姿をジッと見つめているのだ——）

健太郎は陰湿な笑みを浮かべ、ピチュ！と音をたてながら唇をなめた。

則夫の後手首から余って垂れている紐をとると、邪怪に引っ張り、ソファを倒してからその脚へ、間隙もなく嚴重にくくりつける。自然に則夫の身体はくず折れ、床に尻が落ちてしまう。

腕が不思議なほどに折れ曲ってしまつて、革紐は見る部分によっては完全に埋没してし

まっている。

「クエー……」

峻烈な痛苦に紅い唇は歪み、眉は吊りあがる。あきらめきった筈の肉体が、この試練にまたも逆らって必死にもだえる。

だが、この緊縛だけでは終らなかった。

健太郎は、次に則夫の脱ぎすてたばかりのタイツをひろってくると、それを丸めて、あえぐ唇の奥へ強引にねじこんだ。

「仕上げだから、おとなしくするんだ」

言いながら別の紐でしっかりと二巻き三巻き、タイツを押さえ縛ってしまふ。

そのときには、もう則夫は胸で喘ぐだけであつた。

「——では、出掛けてくる」

健太郎はネクタイを直しつつ、上衣をとって、昂然と言ひ放った。

「いや、見送りなどはしなくてもよい、おとなしく、ただそうやって私の帰りを待っているだけでいいのだからね」

皮肉な笑みを浮かべると、悠々と葉巻に火をつけ、やがて彼は、軽ろやかな足どりで部屋を出て行った……

いつ帰ってくるともない、健太郎の外出だ

つた。

それを思うと、この後手縛りも、いっそう身を切られるような、きつさであつた。

則夫は、悲しく瞳をうるませ、全身をよじらせつづけた。そうして、その表情も、苦痛絶望、放心——と、めまぐるしく変りつづけるのだった。

(ゆ、ゆるして……)

姿のない健太郎に、眼をあけるかぎりはいやでも映る正面の鏡の中の自分に、彼はそのねじれた肢態で、空虚な哀願をくりかえすのであつた。

ケイカク

うたがうまでもなく天性のマゾ泉則夫は、昼夜もわかつた健太郎から波状の調教をくり返されて、この奴隷としての生活のうちに、ますます美しく、磨かれていった。

調教するほうの健太郎とて、同じことであつたかも知れない。その都度に、たくましく妖しく美しくなっている則夫に今更のごとく酔い痴れて、すぐにでも、もうこの美を冒瀆し破壊して苛酷な被虐の淵へと追いつめていつてやりたいという、凄まじい一念に駆ら

れるのだった。そうして、時の経つのも忘れて、いつ果てるともない調教に、極度におのれを充実させていくのであつた——

このようにして。

そこに、二人だけの、王者と奴隷としての月日が、矢の如くながれていった。

そうしたある夜のこと。

ベッドの上であられもない胡坐縛りの責めが一段落ついたあと、紅白のロープを解き放たれながら則夫は、健太郎から「或る新しい調教計画」なるものを打ちあけられた。

そのとき則夫は、

「いえ、わたくしのような者がそのようなことと、——とても荷が勝ちすぎて、それはいずれ、きつとご主人さまの恥となります……」

健太郎の意を決したような熱っぽい口調とは逆に、大いに恐れ入れ、尻ごみをしたものだった。

突然に聞かされた計画で驚いてしまった、ということよりも、このご主人さまと私だけの生活が、不意に第三者の前へという意味の話に恐怖心すら湧いてしまったのである。

(ひょっとしたら、ご主人さまは、この計画をずっと以前から胸にお持ちになっていたかもしれない)

(まさか、——まさかこんな計画のためにわたしをこの家へ、お連れになったのではないだろう……)

(でも、イヤだ。ほかのことならともかくこれだけは、イヤだ)

が、こんな奴隷の願いや反対など、許してくれるようなご主人さまでないことは、わかりきっていた。

「私の命令がきけないような奴は、直ちに、追放だ!」

このひとことが、決定的だった。

則夫は、すべての想い、すべての怖れを断念して、計画に副うよりほかなかったのだった。

新たな調教が始まったのは次の日からだ。

身に着けるものは、全部女性用のものと決められ、まず、言葉の女性化に鞭があたりれた。

そうして、立居振舞から眼の動かしかた、指一本の動かしかたにいたるまで、縄と鞭と鎖を失敗の代償として、きびしく訓育されていた。

女らしさをめざして、いや、女そのものの完成? をめざして、今までにもない鋭い怒

号が、容赦なく飛び、平手打ちが見舞った。一度教えられたことをツイうっかりと忘れてりしようものならその夜は、明け方まで息も詰まるような緊縛が仕置として待ちかまえていた。

そしてまた、このようにして調教される則夫にしても、縛られ鞭うたれることには我慢できても自分以上に必死になっておられるご主人さまを見ているうち、やがて、受ける体罰の苦しみなんかより、不甲斐なくまたも失敗を重ねる自分の悲しさが、めりこむように心を責めていくのを覚えるのだった。

焦慮が、また懸命の努力となって、今までの調教とはまったく意味の違った『一体』調教となって、それはまるで、何者かに急ぎ立てられるかのように二人を熱中させていったのだった。

——初夏が去り、白い真夏が終って、秋となった。

すでに、健太郎の精練精根をこめた調教が始まって六カ月。

ここに、おどろくべき現象が生じていた。

それは、もしもこの中岸健太郎の邸を訪れた人があったとしたら、その人は、この邸の内でもまさにすばらしい美女を発見して、さぞ

息を呑みこんだであろう、ということであった。

左様、まさに美女、これ以外の形容の何者でもなかった。

ながい睫毛のかげで、その瞳は見る男の心を必ずやとろかせんばかりにうるみ、けづっている。形のよい鼻梁は、その誇りに満ちている。唇は、なにかを待つように紅く濡れてフト甘ったるい口臭を発散させる。

ゆるやかにうねる黒髪は相手の愛撫を誘うかのように息づく。そして、しなやかで、まろやかそうな身体にはドレッシーな服装。それは現今に流行の、軽快なデザインとあい俟(ま)って、言いもえぬ新鮮なお色気をにじませている。

かくて、その人はきっと、この世にハッキリと、まだ美女の存在していたことに新たな感動を覚え、その幸福に酔うてしまおうであろう。

同時に、中岸健太郎にいいえとして尽す家庭主婦? ぶりをも見せつけられて、羨望に堪えない思いを抱くかもしれない。

——まさに、まさに、すばらしい、『女らしさ』の誕生であった。

「則子、こちらへおいで」

健太郎は、部屋にいるかぎりでは、いつも手のとどくところに彼女？を待らせようとするのだ。いふなれば、半年目にして始めて浮かべる満足の笑みで、その白魚のような指の一本一本を入念に愛撫したり、艶々とした髪のををいつまでも嗅いだり、ときには可愛く熟れた唇を、いたずらっぽく、吸ってみたい。

「まあ、旦那さまったら……」

そんなときの「則子」は、くすぐったくて、うれしくって、たまらずうなじをくねらせるのだが、この所作だけではなく、もう口調、声質ともに歴とした『女』としか言いようがない。

「則子、そんなに家事のことばかりに精を出さなくってもいいのだよ」

「でも、あたし好きなの。こんなことをしていると楽しくって、気持ちがスーッとすくすくのよ」

「そりゃ私だって、則子のかわいいエプロン姿を見ていると楽しいが、疲れたりしないかい？」

「しないわ、ますます元気——」

「じゃ、好きなようにすればいいけど……則子」

「なあに」

「お前は、ほんとうに、可愛いよ」

「——」

「どうだ、お前のことを、今度私のところへ来た妹だとか、嫁だとか言って、いちど、ご近所へ挨拶廻りでもしてみるか」

「やあだ、旦那さまったら、またそんなご冗談をおっしゃったりして」

「冗談なものか、本気だよ」

「いやだわ、あたし」

「ハッハハ、——だが、もしそんなことをするとすると、困った事態が起こりうる可能性は充分あるな」

「——どういう意味かしら」

「考えてもみるよ、このあたりの住人ども謹厳居士って面構えじゃないよ。どいつもこいつも、どうみても助平面ってところだからねえ」

「イヤだ、つい真剣になって聞いちゃったのに！」

「え、ほんとに、イヤ？」

「旦那さまの、いじわるっ」

「あれ、怒ったのかい」

「——」

「これこれ、そんなにふくれ顔をするもんじ

やない、可愛い顔がだいなしだよ——」

「——」

「ねえ……」

「いや。そんな冗談をおっしゃる旦那さまなんかに、もう、キスさせてあげない」

——その月の半ば^{なか}。

準備を整え、いや、身装りを整えた健太郎と則子は、にこやかに腕を組み、微笑みながら真昼の街へと外出した。

ショッピング・センターに寄る。

繁華街でロード・ショウを観る。

一流レストランで食事を済ませる。

さて、そうして目的の、今夜招待を受けている邸宅へと、向かった。

絶えず浮かんでいる微笑。いかにも温厚そのものとみえるニコニコ顔の紳士に、優しくいたわられながら寄り添う『美女』のカップルを、眼にとめた道行く人々はどういう見方をしたであろうか。

……国道線上はるか彼方に、まるで、血ぶくろのような太陽が沈もうとしている、夕刻のことであった。

約

(やくそく)

束



◆◆◆◆◆ストッキングブーツのレミ◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆美眉野芳◆◆◆◆◆

A

レースの天蓋で覆われたベッドに寝ているレミは一糸もまとっていない。俯伏せに寝る癖があつて、柔らかなミルクを混ぜたような薔薇色のお尻が、行儀悪く持ち上つた。

電話がなつて、半分眠つたままレミは受話器をとつた。

「女王様」

とうれしそうな、今にも泣きだしそうな声がした。

「お約束の時間を一時間も過ぎました」

「ああ、お前かい」

レミは忘れていた約束を思い出した。

「待つのはあたりまえだろう」

気持良く寝ていたのを起こされて、レミは一寸不機嫌になつたが、

「待っておいで、御馳走を持って行ってやるから」

と電話を切つた。

ベッドからマホガニイの床にとびおりて、レミはシャワーを全身に浴びた。青い透明なカーテンから忍び込む日射しは、朝から昼になろうとしていた。

蟻のようにきゅっとくびれたウエストをか

くすような長い髪を梳り、ひよいと手をおろして陽炎のような朧ろな翳を、宝石を散りばめた櫛で丁寧にととのえた。

裸のまま、西洋の美術館にでもありそうなアイボリーの古風な鏡の前に坐り、緑色の睫をし、鋭い爪に黒いマニキュアをする。眉毛は剃って薄く新月のように細い。上唇は小さく、下唇はぼつてりと厚くいつでも濡れ濡れと濡れている。

オムレットナチュウルと蜂蜜入りの紅茶がレミの朝食で、用意をする間も裸だし、食卓についてもレミは裸だった。

どこかのビルの屋上から、双眼鏡で誰かが覗いているかもしれないが、そんなことにはかまわない。

熟して割れた柘榴のまっ赤な種子を舌でもてあそび、すっぱい肉皮が、口中にひろがって、やっとレミは眼がさめたようであった。

トイレに立とうとしたが、男の電話に気がついて、ジタンに火をつけた。洋モクはフランスタバコしか吸わないというキザッペからぶんどったものだが、新生のほうが、よほどうまいようだ。

「どうも男のことを忘れてしまうのは、その男にあまり興味が無いかららしい。といって

スッポカスわけにもいかない理由があった。レミがちよっとばかり、いい男だなあと思っているジュノからたのまれたからである。

約束の時間から、すでに二時間はたっていた。怒って、男は帰ったかもしれない。帰れば帰ったでよし。女王様のおこしを待てないような奴隷などに用はない。

男は、いつもレミがジュノとデートするホテルで待っているはずだった。ホテルに行つて男が帰ってしまったら馬鹿々々しい。

レミはホテルに電話した。お客様、お待ちかねですよ。お部屋におつぎしましうか。いいわ、すぐ行くから。酒も飲めない男だから、冷えたお茶を前にして、立ったり坐ったり、いらいらしているのに違いはない。

ジタンの火を消し、レミはやっと藤椅子から立ち上った。豪華な衣裳箆筒からストッキングブーツをとりだした。衣裳箆筒はハイヒールやロングブーツの宝庫であった。

伸縮自在の繊維を使ったストッキングブーツは、レミの足のつけ根まですっぽりと美しい足を包んだ。完全武装の快感に、レミはしばらく等身大の鏡の前からはなれなかった。

レミのアパルトマンからホテルまでそう遠くない。男に電話は教えたが、プライベート

なアパルトマンまでは教えていない。愛人のジュノだけが知っているだけである。

レミは素肌に華麗なミンクのコートを羽織ると、勢よく部屋を飛び出した。ホテルまで車で行くこともない。

振られたと思い、それでもホテルを出る勇気もなく、男は不貞寝をしていたが、女中に案内されてレミが部屋のドアをあけるなり、ベッドから転がりおりて土下座した。

「早く用意をおし」

「――」

「お前はレミのをのみたいんだらう」

「は、はい」

「ついでに、たべさせてやるよ」

「有難う御座居ます」

床に平伏した男の顔を、レミはストッキングブーツで蹴飛ばした。

「何をボヤボヤしているんだい。このウスノロ！」

「すみません」

男はあわてて背広を脱ぎ、トイレのドアを開けて、こちらです、といった。

洋式ではなく、男女兼用のトイレだから段がある。

「便器を枕にして寝てごらん」

トイレと向い合っている浴室に男の足がのびたが、男は両肘で上体を支え、胸をそらせて、かなり苦しうに首を屈曲させた。

足のつけ根まですっぽり包んだストッキングブーツのままで、レミは白い便器にまたがり、男の顔を見下した。

ジュノがこの男から三十万も借りていなければ、たのみをことわっただろうにと思ったが、一回十万の約束は痛快でもあった。

捨ててしまう排泄物に十万もの値をつける男も男だが、男がレミに夢中にならなければそんなとてつもない値段をつけてこなかったのに違いない。

これでジュノの借金が消えれば、ジュノにレミが貸をつくったことにもなる。女上位のキラいなジュノを、女上位で責めてやることだって出来るかもしれない。

ミンクのコートをたくしあげたが、小さな個室はミンクで一杯になって、男の顔が暗く翳った。

「そんなにしゃがまないからね」

しゃがもうにも、ミンクのコートとストッキングブーツがじゃまになる。

「ホラ開けて」

あらためて男がこわごわ開けた口を見下す

と、あまりにも標的が小さくて、標準が定まらない。

あまりがまんしていたので腹痛が走る。レミは、かまわずがまんを解いた。

必死で口でとらえようとする男の努力とうらはらに、レミの激流は男の目といわず鼻といわず、顔一面に拡がり、胸までかかってワイシャツを濡らした。

ようやく標準が定まった。

息をする間もなく、息も絶え絶えに、男の口は金魚のようだった。

「そのまま」

標準が定まれば、爆撃しても命中するに違いない。その気になったが、そう簡単にできるわけがない。しばらく小休止が続いて、男は口を開けたり閉じたり、眼を開けてレミの白桃のような水々しいお尻をうかがったり、急に眼を閉じて深い嘆息をついたりした。

「あっ」

と男が小さく叫んだ。

ボルドオふうの茸料理、蒸し魚入りドイツサラダ、舌平目の洋酒クリーム煮、それから海鼠とおろしの酢の物と、鶏こまと白髪葱の赤味噌仕立てをたべたんだっけと、レミは昨夜の食事を思い出していた。

まったくジュノと一緒にいると、何をたべさせられるかわかったものじゃない。和洋混合もいいところで、酒もウイスキーになったり清酒になったり、レストランではシャトーマルゴーやシャトーイケムを平気で注文するから、金を払うレミはつい勘定を心配してしまう。

ジュノが主催したパーティのとき、テーブルにならべられた料理は、ミツバチの幼虫のあめ煮とか、赤アリ入りチョコレート、イナゴのくん製、ニワトリのトサカの油づけ、ゲジゲジのから揚げ、スズメのくん製、食用ガエル足のくん製といったゲテモノばかりだった。

ジュノは贅沢貧乏なのである。借金だらけで、レミがいつもシリ拭きしているのだが、借金は天文学的にふえる一方である。元伯爵家の落胤で、定職はない。

ジュノと食事したその滓を、この男がまたたべているのである。おかしい癖を持った男がいるものだと、レミは必死に残り滓をほうばろうとしている男を、奇妙な動物でも見ているような気持で見下していた。

同じことのつもりでも、やはり、いつもの一人で密室にいるのとはなんとなく違うので

ある。便秘ぐせがあるのは、ヤングレディにとって共通の悩みだから、レミはさほど心配はしていない。浣腸をしてもらうほどではないが、毎日苦勞することには、間違いなかった。

「疲れたわ」

小指ほどのレミの秘塊に、男は、口を手で覆って嘔吐をこらえているようであった。

レミにむかって、あんなにほしがった男なのに、いざとなると意外にだらしない。

疲れたが、この際がなんぼでもう二度とんな注文をする氣を失うほど責めてやろうとレミは考えた。あと二回、こんな男と付き合う氣はしなかった。

「夢と現実が違うわね」

と男の顔を見下したまま、レミは輕蔑したようにいった。

「やめようか」

「やめないで下さい。お願いです」

男はストッキングブーツの爪先を握って哀願した。

「きたならしい。さわらないで」

レミは邪険に男の手を振りはらい、ストッキングブーツの底で、男の顔をいやというほど踏んづけたのである。

蝦蟇を踏みつぶしたような男の悲鳴に、レミは思わず吹きだした。

「なんだ、それでマゾヒストかよ」

自分の齒で唇を切ったらしく、男の口から血がにじみでていた。

レミはストッキングブーツの先で男の口をこじあげ、

「舐めろ」

と細いブーツの先を男の口に押し込んだ。男の両手がブーツを下から支え、男は舌を口腔の奥深く押し丸められて呻めいた。

ブーツの細い鋭いかかどが、男の喉を傷つけ、男はフェンシングの鋭利な剣を首先につきつけられたような恐怖にとらわれている様子であった。

再びレミが標準を定めたときは、小指というような上品なものではなかった。

男の顔が青ざめて、ひたいに油汗が浮かんでいるのに氣がついた。今にも窒息してしまいそうな危険な状態であった。

レミは男の顔面にとぐろを巻いた物を見下して、ふとサラミソーセージを思い出した。ウイスキーの肴は、かならずサラミを注文するのがジュノの習慣だったからである。

牛肉に豚肉や豚脂を稍荒目に挽いて、胡椒

等を利かしたもので、冬の乾燥期に作って自然に乾燥したものがサラミである。

男があわてて上体を起こし、浴室に飛び込んだ。嘔吐する男の背中に、レミは嘲笑を浴びせかけ、

「三度の約束だったけど、そんなザマじゃ、とても無理ね。約束はこれきりよ」

といいすてホテルを飛びだした。やたらにジュノに会いたくなった。こんないやらしいことをさせるジュノなのに、レミは少しもジュノが嫌いにならないのが不思議だった。

B

ミンクの半コートだが、ミニスカートにあわせてあるので、かなり短かった。ナイロンメッシュのパンティストッキングが、レミの細くしなやかな足を包んでいる。

男がビジネスに使っているホテルにでむいたのは、ジュノからまたたのまれたからであった。三回の約束だが、もう一度だけいいからレミに会わせてくれと、男に泣きこまれたというのである。

ジュノのことだから、三十万の借金は棒引きにした上、また多額の金を男から引き出し

たのに違いない。これでは、レミはジュノに売られているのと同じで、高級娼婦と少しも変わらない。ジュノはレミのヒモになるわけである。

そう憤激はするものの、レミはジュノのいなり男が待つホテルに来てしまうのだから、どんなことをされてもレミはジュノに弱いのだ。女心はよくわからない。

ロビーのソファで足を組むと、ミニスカート奥まで見えそうで、ホテルの客の視線がレミに集中した。

用件を終えたらしい男が、あたふたとエレベーターから下りてきたが、男があまりにも貧相なのでレミは失望した。

会うのはこれで三度目だが、気にもしていなかったのだ。男の容姿など見ていなかったのだ。ジュノとレストランで食事をしていたときに、たまたま会ったのが初対面で、その時、男はレミに一目惚れしたらしかった。

ジュノが男を紹介したが、あとは二人でレミから離れてひそひそ話をしていたので、レミは男をよく見ていなかった。この時、男がレミを売れと、借金を盾にとってジュノを恐喝したのに違いない。そう思いたいが、本当はジュノが男の悪癖を利用して、レミを借金

のカタに置いたのかもしれない。

二度目は便器にしたときで、排泄のことばかり気になって、男のことなどは眼中になかったから、男の容貌などレミの知ったことではなかった。

しかし、こうあらためてホテルのロビーでデートすると、高級紳士服も借着のようで野暮ったいし、左の中指にはめたダイヤの指輪もなんとなくけばけかしい。ジュノの話だとこの小男が予想外の金持ちだというから、世間はわからない。

ジュノと小男の結びつきは、男のためにジュノが女を世話しているのではないかと、この時になってレミは疑った。

男が愛想よく挨拶しても、レミは大胆に足を組んだまま、緑色の瞳の下から射るように男を見つめ、噛んでいたガムをホテルの厚い絨氈にべっと吐いた。

男は一瞬驚いたようにレミを見たが、手のぼしてガムを拾い、何事もなかったように灰皿に捨てた。

「たべればいいのに」

男は苦笑した。

「こんなところで、そういじめつけないで下さい」

と小声で言いレミを促してホテルをでた。ビジネス用のホテルでは遊ぶ気もなかったのだろう。

ハイヤーの中で、男はしきりにジュノのことを褒め、親友とまでいったのが、レミにはおかしかった。金もうけの天才と、働くことの大嫌いな、なまけ者の共通点をさがしてもレミには、てんでわからない。

スケコマシのジュノが、この男はうらやましいのかもしれないと、その程度にしか理解しなかった。

男が案内した温泉マークは、円型ベッドの風変わりな洋室で、天井と壁が総て鏡張りであり、レミに責められているところを、男は四方八方から眺めていたいらしかった。コールガールにでも教えてもらったものだろう。

ベッドの下、スポンジを張りつめた斜面は、そのままベッドから転がれば、浴槽になっているという凝りようであった。

ミンクの半コートを脱ぐと、ネオロマンチジスムの女らしい花やいだ美しさをみせて、白いオーガンジーのちよつとつっぱった半透明の中に、若いしなやかなレミのからだが含まれていた。

胸いっぱいフリルも愛らしく、白薔薇の

花びらのように、しつとりと気品高く男には思えたのに違いない。レミにしては白いブラウスというオーソドックスなものだったが、白という色は、いつも着る人とおかれた場所で表情を変えていくものなのである。

白を主題にした絵を描く画家は、天才か狂人かのいずれかであろう。白は生半可で描けるものではない。

黒の太いベルト、黒のミニスカートの続いて、黒のナイロンメッシュのパンティストッキングが、この二つの色の値打ちを一層発揮しているようであった。

男はこのホテルと顔なじみらしく、帳場にあげてあったスーツケースを部屋に持って来た。

男はレミの前でそのスーツケースをひろげたが、レミは男がかなり病膏盲やまいこうもうなのにあきれた。

中味は、手錠足枷首輪、細い鎖に太い鎖、極細の皮を網んだ鞭、乗馬用のぴんと張った鞭、荒縄、ナイロン製のロープ、白の綿のロープと、色とりどりの責具だったのである。

その中に交って、コルトだかワルサーだか知らないが、玩具のピストルが一丁入っていたのでレミは思わず吹きだした。縛られて、

そのピストルでおどかさされる芝居でもしようというのだろうか。

「早く裸におなり」

レミは、いらいらして叫んだ。この変態野郎を早くかたづけて、ジュノと遊んでいたほうが、よほどましであった。

背広では貧相な男としか見えなかったが、裸になると中年肥りの徴候がみえ、腹が突き出ているのがレミには不愉快であった。いや男の何もかもレミは大嫌いであった。こんな男が、自分のものを、捨てるべきものとはいえ、喜々として飲み、たべたことが許せなかった。

レミは裸の男に手錠と足枷をはめ、だらしなく萎えているのを、さもきたならしそうに眺めた。

ピンクに輝いた、すばらしいジュノの芸術品と較べて、なんとまたいやらしいだらしのない肉塊なのだろうか。

レミは、男をベッドに突き倒し、不安定だったが、ハイヒールのまま円型ベッドに上がり、鏡に手について身体を支えると、更に斜面にむかって男を足蹴にした。

ハイヒールの細い鋭いかかとは凶器になるのである。顔を責められて、男はいやおうな

しに斜面に向かって逃げ、スポンジをころげて浴槽に飛び込んだ。

手錠と足枷で自由を失っている男は、かろうじて顔を湯面から持ち上げて息をつき、「助けて下さい」

とあわれな声をだした。本音だろう。

「遊ぶ気がしないから帰るわ」

と湯の中であっぴあっぴしている男にレミはいった。

「そんな……」

「いくらジュノと約束したからといって、お前がレミを買ったと思いきんでいるのが気に入らないわ」

レミはハイヒールの底で男の顔を踏みつけて、湯の中に男の顔を押し込んだ。

浴槽はそう深くはなく、全身をのばせば男の顔は浴槽の外にでてしまう。湯責めにしてもおぼれることはあるまい。

したたか湯をのんだ男は、レミがハイヒールをはなすと、浮上して口から湯を吐きだした。

「買ったなんてとんでもない」

男はレミが本気で怒っていると信じたらしかった。プレイは遊びである。遊びの要素のないSMプレイは、いくらM男と自称してい

る男でも要求はしない。

男は浴槽のふちで頭を支え、呼吸を乱して顔をゆがめた。そう熱い湯でもないが、胸までどっぷりつかっていれば、長びけば湯あたりでのぼせてくる。

「ジュノにたのまれなければ、なんでお前のところになんか来てやるものか」

レミは男の頭の先に立ち、メッシュのパンティストッキングを少しずらし、中腰になると、

「約束は約束だから、お前のほしいものを頭から浴びせてやるよ」

中腰のままで標準を定めたのはすでに経験済みであった。しかし、今度は別に丁寧にしてやることもないと思った。そんなサービスをしてやる必要はない。

こんな男のために、この前のように我慢する苦しみは味わいたくないのである。

「眼にしないで下さい」

湯あたりをしつつあるくせに、男はまだ気を失っていないようであった。

「どうしてさ」

「眼がはれてしまう」

「はれたっていいじゃない。そんなちっこい眼。たれ眼になっても流行だからかえって感

謝するんだね」

馬鹿にしている、とレミは思った。淋菌が眼に入れば失明するかもしれないが、レミは病氣になどなったことは一度もない。

「待って下さい」

「待てるものか」

頭の上から、レミは男の顔一面にどっと浴びせた。男が眼を閉じたのはほとんど同時であった。皮肉なことに、男が一番心配した眼のあたりに、レミの滝のような落下が集中してしまったのである。

男の口は動いたが、レミの激流は男の鼻をわけて頬から浴槽へ、大半が流れ込んだ。

レミは帳場へ電話して女中を二人呼ぶと、浴槽の中で失神寸前になっている男を床にひきあげるように、男の財布から多額のチップを払ってたのんだのである。

常連である男の遊びを、うすうすは感じていた二人の女中も、あからさまに見せつけられて、まあ、といったきり言葉がでず、二人して、こわごわ男を床に引きずりあげた。

「この男、いろんな女と、ここでこんな遊びをしていたわけね」

とレミは女中にいった。女中は返事のしようもなく、チップの礼をレミに言って、薄気

味悪そうにぐったりと床に転がっている、手錠と足枷の裸の男を見つめていた。

「こういうのを変態というのでしょうかね」

と一人の若い女中が、蛆虫でもつまんだような気色の悪い表情をみせてレミにいった。

その時、男の体に変化がおこって、三人の女をあわてさせたのである。

「いやらしい」

若い女中が、吐きだすようにいうのと同時に、レミは男のスーツケースの中から、編んだ皮の鞭を手にとると、水ぶくれの、男のふくらんだ腹に思い切りたたきつけた。

「ぎゃあ」

と芝居でない男の悲鳴があがり、二人の女中はびっくりしてレミを見たが、続けて鞭を振り下ろすレミの剣幕に驚いて、とめようともしなかった。

半分失神していた男が、皮鞭のあまりの激痛に眼をむき、手錠と足枷をぎしぎしいわせて悶えたが、顔に青筋を立てて激怒したレミは、なかなか男を許そうとしなかった。

黒い皮鞭に、男の赤い血がついた。

(終)



あぶ・らぶす・こんと

水 沢

登

秋も立つとホットな感情もいつしか冷えて感傷とロマンチズムが台頭してくる。朝の散歩の途上、どこからかチャイコフスキーの「白鳥の湖」のメロディーが、流れてくる。

ピアノを弾奏しているのは、どこやらのお嬢さんらしいが、まだ練習不足と見えて「あひるの湖」ほどである。その夜、偶然にもNHKテレビで「白鳥の湖」が放映された。秋の夜長にただ独り、応接間のソファで、照明をブルーに落して聞き入っていると、いつしか一昔も時間は溯って、学生時代初めて真剣に恋した、その女に想いを馳せていた。

「枯葉」「詩人の魂」「ラ・メール」などのシヤンソンが風靡していた頃だったろうか。

改築前の帝国劇場で貝谷バレエ団のバレエ「白鳥の湖」を鑑賞した後、暮れかかる秋の日を惜しんで、若かった私達は醒めやらぬ興

奮と華麗な曲に酔い痴れて、公園の枯葉を踏みしめていた。

幼友達ではあったが、多くのライバルと争わねばならなかった程の美しい容貌、抜けるように白い肌故に燃え立つような唇、細面で細い項の持主であった。現代の若者には信じてもらえないかも知れないプラトニックな愛を私達は交していたのである。そんな私に突如、勇気を与えたものは秋の冷氣であったか踏みしめる枯葉の音だったかは知らない。既に暮れた、人っ子一人いない公園で私は、その乙女を初めて抱いたのだった。女のエンジのスーツの胸は、突然の衝撃に大きく波打っていた。不器用にくちづけした私の唇はカラカラに乾いていた。彼女は抱きつく術も知らず両の手は垂れ下ったまま、全身をわなわなと震わせて、合わせた唇の中で彼女の齒は触

れ合ってカチカチと鳴った。閉じられた眼から一条の涙が流れて私の頬を濡らした。

唇が離れた時、私は囁いた「ごめんね。君は、とっても美しかったんだ」と。

彼女は顔を軽く横に振ると、うつむいた。「抱き上げていいね」私はもう一度、彼女を抱くと言った。そして初めて両の腕に抱き上げると、そのまま唇を吸った。やはり唇は、わなわなと震えていた。どこちなく抱いた姿勢に無理があったのだろう、彼女の体は私の腕をすべり抜けた。もう一度抱き上げた時、偶然のいたずらか、私の手はスカートの下の素肌を感じたのだった。ストッキングの上方と下着の間の、はち切れそうに充実した、すべすべした肌。故意には侵入し得なかった温さをもった若い肌だったのだ。彼女は僅かに身もだえた。伝わる体温は、私の掌をわなな

かせた。更に奥深くまでを望む衝動に駆られ欲望は急激にふくれ上った。だが彼女の悶えも急に激しくなった。そして次の瞬間バランスが崩れ、彼女は地上に降り立っていた。「やめて、お願い」彼女の顔は涙で、ぐしゃぐしゃになっていた。

欲望はエスカレートする機会を失って消滅せねばならなかった。そしてこの衝動は、これが私達の間の最初で最後のものとなったのである。

その後、彼女は病を得て乙女のまま身罷^{みまか}った。当時は未だ結核は、死の猛威を振える力をもっていたのである。

彼女が愛されていると知って散らした顔の恥かしそうな紅葉。僅か一日の間に、私の数理統計学の資料を得るために、一人で二千回もサイをふって、出た目を記録してくれた優しさ。

その面影は永遠に二十の若さを秘めて、老いもせず今猶、私の心の中に生き続けているのである。

この乙女を愛して、短くも生き生きとした人生を味わった貴重な瞬間々々。それを思い返すこの瞬間、この時だけは、不思議にも私の感覚からS的なもの、M的なものは姿を消

すのである。当時、私は彼女をプレイの対象にと考えたこともなかった。否、考え得なかったのである。S的行為は自己のエゴが自己のみを主張し、相手のエゴを圧倒する時に果し得る。私がこの娘を思慕した時、私のエゴは衰退したのであろうか。

この夏の初頭、改築新装なった帝国劇場に一人の乙女を伴ってオリバーを見た。何回かのデートの後、彼女は私のSの世界に引きずりこまれるかも知れない。そうしたい欲望がうずくのではあるが、もしかすると、私はこの娘にロープや猿轡の洗礼は与え得ないかも知れない。それは彼女が若く美しく可憐で、しつけ厳しい家庭の子女であるからかも知れないが、それにも増して、彼女の肌はすき通るように白く、唇は燃えるようであり、細面の細い項の持ち主である故かも知れないのである。そして私は長く忘却していた恋を、この娘に感じているからである。

☆寝 た 子☆

その気ありげな態度をみせつけられて、子供が居るので諦らめていたミスター・エロチスト。鍵のかかっているのを知って、俄然勇気を取り戻してチン入すると、二DKは密室同様。

暑いこととて若奥さん、ショートパンツとブラだけのスタイル。側で坊やがぐっすり眠っている。坊やに起きられては大変と、やにわに口を塞ぎ後手に縛り上げる。女は、それほど驚いた様子もない。口のハンカチを取ってやると「眠っている子を起すようなことはしないで」とニンマリ。

男、「寝ている子を起したのはホレ、あんなですよ。奥さん」

☆超 能 力☆

「君は、素晴しく目先の利く、手廻しのいい女性とつき合ってるそうじゃないか。どんなか教えてくれよ」と、よだれを垂らさんばかりの友人に、

「それ程でもないが、うちの会社のO・Lでね。僕が一言もしゃべらないうちに、責具を持って来て手を後に廻すんだよ」

☆自明の理☆

獵奇クラブの一室。全裸で吊され、強烈な鞭打ちに失神してぐったりしている女を前にして、

新会員「やはりプロの女は違うね。女房や娘っ子の手ごたえとは全然なものな」

旧会員「あたり前だよ。御指名は淑女や小姐とは比べものにはならないよ」

☆意見一致☆

S友同士の会話

「この間のO・L、大いにハッスルしたぜ。責めがいがあったよ」

「あの娘より、例の高校生がよかったぜ。失神しちゃったりしてさ」

「あの女医さんもよかったなあ。何でも心得てるんでね」

「偶然、知り合った学校の先生。若くて大胆さ。つぼをちゃんと、押えて教えてくれたもの。彼女の方が上等さ」

「うちの会社の重役の二号さん。なんとも言えないねえ。スリル満点だったもの」

「何言ってるんだい。うちの課長の奥さんと比べりゃ、どうってことないさ。なんせ隣同士なんだからな」

「いろいろ経験したけど、やっぱり女房がいな。昼は淑女、夜は娼婦。こっちの希望はなんでも飲みこんでくれるものなあ」

「うん。まったくだ。君の言う通りだよ。あなたの奥さん程、素晴らしいM女性は珍しいかな」

☆トイレにて☆

歯には歯を、目には目を、唇には唇を、乳房には……。ああ彼女に逢いたい。

☆特ダネ☆

トップ屋のデスクの電話

「何、トップスターの谷典子が人質。詳しく話してくれ。……えっ、読み違えた？ 人質じゃなくて入質だって。馬鹿野郎。トップ屋がそんなざまで勤まるか。しっかりしろ。……うん。まあ仕方がねえ。入質でも記事にならあ」

☆隠しピストル☆

映画監督「群集の中の脅迫。男はピストルを女の後から押しつける。人ごみだから、もつとくつついて」

女優「あなた。へんな処にピストルつきつけないでよ。脇腹か何かもっと上にして」

男優「まだやっちゃいけないよ。俺のピストルはホルスターに入ってたまなんだぜ」

☆許して☆

警官が路上で若い女を裸にしているという通報を受けて、不審ながらも現場に急行した

パトカー。見ると、正しく車の中の娘はパンティだけの裸。

驚いて同僚の警官「君。真昼間から何してるんだ。免職ものだぜ」と詰問すると、

「いや、このお嬢さんをスピード違反で止めてねー免許証はーと尋ねると、ウインクしてブラジャーをとろうとするじゃないか。ーそんなことじゃだまされないよーと言うと、こんなになっちゃったんだよ」

☆蛙の子は蛙☆

「お前も好きだな。女を縛ったり虐めたり。そうかと思えば急に奴隷みたいになって女の足を舐めたりさ。あんな真面目な親ごさんから、どうしてお前みたいな者が生れたのか不思議だよ」

「俺もそう思ってたんだ。こんな趣味、誰が遺伝させたんだろうってね」

☆統計は語る☆

U・S・オリザーチ・センターの統計によれば、通勤電車内の痴漢の数は、意外なほど少数であるという結果がでた。尚、追跡調査によると、相手を痴漢とみなさない女性が多数であることが判明した。



女武者決斗シリーズ

女

熊

谷

川上栄子

(一)

元亀二年春四月のことである。豊前と筑前にまたがる西国第一の大山、彦山にある城をめぐる、豊前の大友宗麟の兵と、これに反逆する秋月種実の兵とが烈しい争奪戦を繰り広げていた。彦山には宗麟幕下の驍将立花道雪の臣である堀川右近亮が城将として立籠り、秋月勢の強襲をいくたびか退けて頑張っていたのである。攻めあぐんだ秋月勢は、やや

後退して次の攻撃準備を整えていたが、その先陣の一翼である筑紫彈正是俊の陣に、近習麻生左近に伴なわれて入って来た眉目美しい十五、六の乙女があった。およそ荒々しい陣中には不似合の乙女の出現に、幕外の将士達も訝しげに、その姿を見送る。

「ほう、これはこれは。そなたが推挙すると申すのは、この娘か」

彼女を引見した筑紫彈正も、この飛び切りの美女に目を瞠った。

「さよう。わたくしの縁筋に当ります娘、若月香与と申します。お見知りおき下さい。

香与殿、こちらが筑紫彈正様じゃ」

「フーム、家中にも稀な器量じゃ。して、この娘が、あの高島蘭丸の許婚とな」

「親同士、言い交したる仲と聞きまする」

「香与とやら、それはまことか？ 蘭丸とは親しき仲であったのか？」

「はい。いずれ近く興入れることになっておりました。蘭丸さまとは二人だけにてお会い

したことはござりませぬが、わが夫とお慕い申して居りました」

鶯の鳴くような清い声音だが、物に隠せぬ凛とした響きがあった。

「さりとは、またふびんな。蘭丸も惜しい死に方をさせたな。それで仇の美弥の方、憎しというのか」

「仰せの通り。この出陣の前々から、彦山を攻めるなら是非伴えと、烈しく迫られました。が、何分にもか弱い女おめかけの身、親御の思惑もあり、さしとめおりましたが……。彦山攻略にこのように手間取って居りましたは、お家の大事。ことにあの美弥の方の豪勇が預って力あるとならば、ここは一計を案じねばならぬ時と、呼び寄せてござりまする」

「この香与を戦の場に呼んで、どうしようというのだ」

「望み通り、この娘に美弥の方を討たしてやりたく……」

「今巴の、女熊谷のと、噂には聞いておったが、聞きしにまさるあの働き振り。香与の細腕で何とする」

「もとより、尋常の手段ではなりませぬ。しかし女熊谷の名の高きを幸い、その弱点を利用して香与に討たせる考え。美弥の方さえ亡

き者にすれば、彦山の城を落すのも容易なところ」

「それはそうじゃ。さればこそ、次々と勇士を繰り出して、かの女に挑ませたが、いけません、いずれもあえない最期。しかし、ここまで来ては一刻も猶予はならぬ。そなたの策を聞くと致そう」

「さらば香与をも交えまして、とくと談じます」

話中にあらわれた美弥の方は、すなわち彦山の城将堀川右近亮の妻で、女盛りの二十七才、水も滴る国色無双の美貌の上、女熊谷と名も高い勇婦で、寄手の秋月勢は彼女の武勇の前に散々の敗北を喫したのである。

もともと娘時代から「今巴よ」と大友の家中から騒がれていた美弥の方は、二年前の永禄十二年の秋、耳納山における大友、秋月の合戦の折に、負傷して従軍出来なかった右近亮に代って出陣し、秋月方の高島蘭丸という美少年と槍を合わせ、彼を組み敷いたもののその若武者振りに、敦盛を押さえた熊谷の気になって、名や年を聞いた末、女を知らないで討死するのを不憫に思って、男女の道を知らせた上、改めて蘭丸の首を掻き、その女武者らしい風情で評判になった。

立花道雪も、その武勇とともに併せ賞め、

妻の功で右近亮は彦山の城主となったのである。しかし蘭丸の遺族の恨みはいうまでもなく、一度は斗志をなくした秋月勢に、再戦の刺戟を与えたことは否めなかったのである。麻生左近は、蘭丸の家とも縁続きであっただけに、お美弥の方のやり方や評判を憎々しく思っていたわけだが、今、美貌の乙女香与を使って、如何なる謀略を廻らそうというのであろうか。

(一)

元龜二年四月十五日の夕方。彦山の城のすぐ近在にある黒岩岳の砦から急使が馳せて来た。その使いが持ち来った書の内容には、
『本日の秋月勢の攻撃を見るに、刻々と人数が増して、軍勢頓に強くなり、味方は苦戦している。探らせて見ると、どうやら敵は彦山の城を攻めあぐみ、その方の人数を減らしてこちらに差し向けて来た様子。このままでは戦況不安の故、至急救援の手勢を向けられただし。出来得る限り美弥の方に御出馬いただければ、味方の士気は上り、敵はまた恐れて退きましよう』

とある。ありそうなことではあるし、黒岩岳は、彦山の出城にもひとしい重要な砦であ

る。その危急とあらば、うち捨てて置くわけにはゆかない。美弥の方は、かえって勇み立ち、

「今夜、闇に紛れて、黒岩岳に急行し、明日は秋月勢に目に物見せてくれましょう」

と準備にかかる

「ひよっとすると、彦山を手薄にしようとする敵の策謀かもしれぬ。そなたでなくともよかるう。誰か他の者を遣わしたらどうじゃ。

そなたが出ていったあとに、万一此所を急攻されては大事じゃ」

と右近亮は心配げに引き止めたが、

「ここ数日、散々痛めつけられた敵方が、そのような積極的な策を弄するゆとりは、まずありませぬ。おそらく重点を変えて、黒岩岳を落とそうとしているに違いありません。そうと知って妾が救援に向うとは、敵もまだ気付かぬでありましょうし、折角名指しで来た故、妾が行かねば、あちらの城の者も落胆しましょう。あそこまでは通いなれたる間道に、もし万が一、敵に策あって、彦山を攻めに来たとして、引き返してまいって蹴散らすに雑作はありませぬ。妾にとっては、むしろ敵が戦いを挑んで来ぬ方がもどかしい。明日こそは、手ひどく叩いて撃退する好機と思

まする」

と自信に満ち輝いた顔で答えられては、返す言葉もない。

その過信が、とり返しもつかぬ結果を産もうとは神ならぬ身の知るよしもなく、美弥の方は、その夜二百余名の部下を率いて、勇氣凛々と城を出ていったのである。

満月は早くも東の山にかかって、辺りは案外に明るかった。間道を通って一行が、もう黒岩岳の砦を望める峠の頂上に、達しようとした時である。

突如、左手の崖の上から、耳をつんざく銃声が起こって、美弥の方の直ぐ後にいた武士の二、三人が馬下に落ちたと思うと、次には雨のような矢が降って来た。

「敵だ！」

「引け！」

「馬を降りて、伏せろ！」

堀川方の怒号。さしもの美弥の方も、最初は度肝を抜かれて、しばし馬上に伏せていたが、一しきり矢を放った敵が、今度は刀槍をかざして押し寄せて来たのを見ると、たちまちいつもの落ちつきをとり戻し、部下をふり返って叱咤激励した。

「小癩な敵の伏勢は少数とみゆる。ひるむで

ないぞ。おつつんで一人余さず討ちとれ」

甲高い声を挙げて、自ら馬を躍らせて敵中に割って入る。その声と勇姿に、堀川勢も急に元気づいて、隊形を整えて迎え撃つ。狭い峠を走り合い、斬り合い、突き合い、押し合って烈しい斗争が続いたが、やはり伏勢は少数であったのか、一人、二人と背を見せ始め遂には一斉に雑木林へと敗走し始めた。それと見て、勢い込んで追う堀川勢。

その先頭に美弥の方は立っていた。彼女はいまだに、黒岩城から来た使いが、贋の使者で、彼女を城外におびき出す策略であったことに思い及ばなかったのである。たまたま大友領内に入り込んだ秋月勢と遭遇したのだと考え、この勢力を残存させておけば、また領外の秋月勢と連絡して、如何なる後方攪乱を画さないとも限らないと、その方を恐れたのである。これは秋月勢を指揮する麻生左近にとっては思う壺であった。彼の部下は命ぜられた通り、かつ戦い、かつ走り、巧みに美弥の方を林の奥深く誘い込んでくる。

「時機到来。よいか香丸、わしが美弥の方を目かけて矢を射かける。かの女は必ずこちらへ馳せてくる。そなたがその時、一騎打ちを挑むのじゃ。あとはわしが授けた策の通りに

せよ。わしは最後まで見届けて居る故、落着いて事を果せ。あせるとかえって見破られて仕損ずる」

「心得て居ります。わたしとて死を決しておりまするものを」

うなずいた少年武者は何と、お香与。その美しい、顔立ちは変らぬが、前髪の凛々しい粉装は、どう見ても女とは思えない。

「よう申した。その意気じゃ。行け！」

左近の声を背に、羚羊のように敏捷なその身体は、もう彼方の熊笹の中を、ザザッと駆け降りていた。

(三)

美弥の方は真先に馬を躍らせ、部下の弓をとり上げて、逃げ散る秋月の兵士に追ひ射ちを掛けつつあった。その時である。ビューンと一きわ鋭い羽音とともに、一筋の矢が彼女の真向目がけてとんで来た。

「しゃっ！」

さすがに戦馴れした美弥の方。とっさに身を沈めつつ、おのれの弓を挙げて飛来する矢を叩き落したからよかったが、そうでなかったら、その白い咽喉笛を射通されていたかもしれなかった。

(小癪な奴！)

キッと見上げるその目に、チラと木蔭にかくれた左近の姿が映った。

(逃がすものか。返礼の妾の弓勢の程、思い知らしてくれん)

馬首をその方へ向けて、一鞭当てようとした時、その左手からサッと槍を繰り出して来た武者一人。

「美弥の方と見受けたり、見参！」

その涼しい声音に、美弥の方が目を据えてよく見ると、これはまた女と紛うばかりの美目秀麗な少年武士。その意外な若さと突然の出現に驚きながら、一方ではまた好奇心に駆られて、わざと、

「いかにも妾は、堀川右近亮の妻美弥。それと知って挑むは健気じゃが、そち如き少年にはちと荷の重い相手ぞ。怪我をせぬうちに退りや」

と嘲ける。だが若武者はひるまず、

「わ、われは秋月種実が家臣、築紫香丸。美弥の方の首、申し受けたし」

言いつつ繰り出す槍先はなかなか鋭い。

「ホホホ。妾の首がほしいとはけなげなれども、姿に似合わぬ広言。さらば相手になつてとらそう」

婉然と笑った美弥の方は、弓を投げ捨てる、ヒラリと馬から飛び降りる。槍を相手に馬上の戦は危険と見たわけで、二尺四寸、自慢の備前則光の大太刀をキラリと抜いて振りかぶる。

「エイ」「ヤッ」と、足場のわるい雑草の中で、槍と太刀との、人まぜもせず烈しく渡り合う気合が起った。香与も乙女ながらに蘭丸の仇を討ちたい一心で、槍の稽古を専心にしただけあって、勝敗はそう簡単にきまらなかった。五合、六合とわたり合う。

「とうー」

真向から斬り込む烈しい美弥の方の太刀をガッキと柄でうけとめ、ジリジリと二人の身体が相寄る。折から葉蔭を洩れる月光が、大理石に刻んだような端正で美しい美弥の方の横顔を照し出した。そして余裕をもって綻びる丹花の唇、それに艶麗な瞳。大概の男子はこの眸で射られると、たちまち妖しい魅力に魅入られて、ズルズルと戦斗力を失ってしまうのだが、香丸は幸いに女、むしろ烈しい嫉妬を感じて力一杯、突き放す。その意外な力に美弥の方は驚いた風だったが、手応えがある程、美弥の方の女体も燃え上る。しかし何といっても、腕の相違はどうにもならぬ。懸

命に突き出した槍の千段巻をぐっと掴まれ、
「うぬっ」

と引きとろうとしたが、ピタリと抑えた力の強いこと。

「ええい、離せ！」

「ホホホ。離せ、とはまた異なことを聞くものよな。戦場はそうのように悠長なところではない。覚悟！」

グイと引かれたその臂力の強さに、思わずタタッと前のめりになりながら、美弥の方の右手の大刀が振り上げられたのを見て、

(殺られる！)

本能的に香丸は、槍の柄を放して、敵の身体に武者振りついていった。

「アッ」

不意を打たれて、さしもの美弥の方も腰の砕けかかったところへ、さっと手許にとび込まれては身をかわす隙がなかった。どっと草むらに打ち倒れる。たまたまそこが斜面になっていて、二人の身体は組み合ったままごろごろと、窪地へ転落した。

「小癪なっ！」

今は太刀も投げ捨てた美弥の方は、一旦上になった香丸の身体を、難なくはね返してこれを組みしきにかかった。香丸の香与も特に

組み打ちに自信があったわけではないから、組み打ちでいまだ一度も負けたことのないこの勇婦に勝てようはずはない。美弥の方が、香丸の赤い革具足の胴の上にどっかと馬乗りになって、その利き手を膝の下に敷いてしまふのには、そう時間はかからなかった。

「無念！」

仇に組みしかれた口惜しさと、死への恐怖から、香与も満身の力を出してもがいて見たが、さすがに今巴とうたわれた美弥の方は、びくともしない。むしろ獲物の抗いを楽しむかの如く、美少年の足掻きを見下ろしていたが、やがて力つきたのを見ると、

「ホホホ。香丸とやら、これでも妾の首をとると広言しやるか。なるほど女武者の首を初陣に取るのは縁起が良いと聞いて、この首はしうなったのであろうが、そう易々とは参らぬようじゃな。みだりに人の首をほしがるものは、みずからの首を失うのじゃ。健気に戦うたほうびに、痛くないよう首刎ねてくれませう。美弥の方ほどの者に討たれるのを、名誉と思って成仏しや」

と若やいだ声で言いつつ、腰刀に手を掛ける。蘭丸をもこうして討ったのかと思うと、香与は身内にたぎるものを感じたが、ここが

大事と、気をおししずめ、わざと全身の力を抜いて、ぐったりした様を見せ、

「女に負けたは無念ながら、これも武運の尽きならん。はや、この首、打て」

と目をつぶる。美弥の方は頷いて

「よい覚悟じゃ。散らすに惜しいほどの美貌じゃが、最期じゃ。改めて名乗りや」

「筑紫香丸、十七才」

「ほう、筑紫の一族か。……十七才のう」

彼女は何かを思い出すようにしばし、うつろな目をした。その隙に香与の香丸は、

「いまわの際に一言、訊きたい。女熊谷といわれるそこもとの武勇は名高いが、かつて高島蘭丸という少年を討った際、交歓を許したというのはまことか？」

「どうしてそれを……」

「蘭丸はわしの親友。その仇を討ちたいと思つて挑んだが、この有様とはなった。しかし御方程の美女に情を受けたがまことならば、蘭丸の果報がうらやましい。わしも出来れば今生の納めに……」

いいさして、ポツと頬を染める。

(こわっぱ、うまいことを……)

思ったが美弥の方は、まだ計られていると悟らない。女とも見紛うほどの香丸の初々し

い美貌に、彼女の心の方が、うずき出した。まして女は年つもる程、年下の者から美しいと云われるのは嬉しい。それに都合のよいことに場所は人目につかない窪地である。

「仇と言われても、今の妾は大事な身。討たれてやるわけにはいかぬが、女を知らぬままに散りゆくのもふびん。この大友領に潜入してきた勇気を賞でて、そなたの願い聞き届けよう」

と、うけあってしまった。

美弥の方は、香丸を組み敷いたままで、おのれの鎧の紐を解くと、わざと肌をおしひろげて見せ、そして今度は身をずらして、香丸をだき起こすと、手ずからその具足を外しに

かかった。香丸はもはや丸腰だし、戦意を失っていると思っているから、そのしぐさは隙だらけである。それこそ左近と香与が考え抜いた、美弥の方、刺殺の唯一の策であったのだが、それとは気付かぬ美弥の方は、勝者のゆとりと与える者の優越を持ったしぐさで、美少年の下着の胸をぐいと開いた。

「ア、アッ……」

そこにあらわれたのは、若武者の女を知らぬ新膚と思いの外、ムッチリと固い腕を伏せたような乳房の慄える白い胸であったからである。

「そ、そなたは、お、女……」

終りまで言わせも果てず、香与は具足の下

に隠しておいた抜身の鎧通しを把るや否や、おのれごと身体をぶつつけるように、あらわになった美弥の方の胸元目がけて、柄も通れとばかり突き込んだのである。

「ウッ、ウッ……」

何で、たまろう。みぞおちの辺りを深々と刺されて、さしも勇婦の美弥の方も悲鳴を挙げ、美しい顔を苦痛にひきつらせた。

そして、

「ひ、ひ、卑怯なっ！」

と、それでも、たおやかな香与の身体を締めつけようとしたが、その胸に顔を埋めた香与が、もたれるように押し倒したはずみに、刃は上下に動いて、腸でも切り裂いたか、

「く、くるしい。む、無念っ！」

と、あわれにのたうつばかり。香与とても人を刺したは勿論はじめてのこと。夢中で、

「菊丸さまの仇、思い知れよっ！」

ぐいと一抉りしたからたまらない。白い咽喉をのけぞらせて大地に倒れた美弥の方は、もう七顛八倒する力もなく、ピクピクと五体を顫わせるばかり。

「討った、討ったのだ。あの鬼神の化身とうたわれた勇婦、美弥の方を……」

思いの外にうまくいった死から生への逆転

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。
○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。
○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

劇であつたが、さすがに興奮を抑えかねて、香与はしばし呆然と、目の前に倒れている、女将の姿を眺めていた。やがて我に返ると、美弥の方の身体に刺さっている鎧通しをグイと引き抜き、それをまだこと切れていない美弥の方の目の前にちらつかせ、

「美弥の方、よう聞きや。わたしは筑紫香丸と名乗ったは真赤ないつわり、実は高島蘭丸が許婚香与。夫の首を刎ねたばかりか、ようもみだらな振舞いをもって、夫の無垢な身体を汚しましたな。女熊谷などとの、そなたの名声が上るにひきかえ、この身が如何に恥ずかしめられたことか。今こそ、その恨み、この手ではらしくれまする」

と、ありたけの怨み言を浴せかける。今や豊艷な美弥の方の女体も香与の思うまま。その目が鋭く走り、美弥の方の下肢にそそがれたと思うと、グイと直垂をはだけ、下穿の白綸子を剥ぐ。女武者のたしなみとして腿化粧をほどこした、抜けるほど白く豊満な内腿がそこにあらわれる。

美弥の方は本能的に両膝を締めようとしたが、その力もなかった。

（ああ妾ともあろうものが、このような小娘に騙されて討死せねばならぬとは……。そ、

そんな馬鹿なことが……）

その刹那、香与の手に持たれた鎧通しが、突き降ろされた。夫と定めた蘭丸を、一瞬といえど惑わしたに違いない憎い女。わが身さえ未だ知らぬ夫の膚を奪った憎い女。香与の手に恨みの力がこもった。今巴とうたわれた美弥の方もブルブルと五体をふるわせて息絶える。

存分に恨みを晴らした香与は、今度は逆手に持ち変えた刃を、その長い頸すじにあてると、難なく美弥の方の首級を挙げた。

その重い生首を提げて、窪地から這い上った香与は、よろける足を踏みしめて、あらん限りの声を振りしぼった。

「敵も味方もよく聞け。堀川右近亮の妻お美弥の方を、秋月方の小姓筑紫香丸が討ち取った」

声高々と響く名乗りを聞いて、斬り結ぶ刃が止った。

「げえっ、お方さまが……」

「ま、まさか、あの美弥の方が……」

大友勢にとっては、それは正しく青天の霹靂であつた。疑ってみたこともないだけに、紛れもないその美しい死首をさし示されてはたちまちに力を失い、勝戦であつたはずの彼

等が総くずれになつてしまった。得たりと追撃に移つて斬りまくる秋月勢。

麻生左近は、すかさず狼火^{のろし}を挙げて、事成功を知らせる。まちなかへいた筑紫彈正の一隊は、それとばかり真先かけて彦山城へ攻めかかり、後陣の秋月勢もこれに続いた。

美弥の方、討死の噂が城中に伝わつては、堀川勢の士気は半減した。

「やはり、計られたか……」

右近亮は臍を噛んだが後の祭り。右近亮は再起を計つて城を脱出したが、彦山城はその夜のうちに落ちた。

その後も彦山は両者争奪の的となり、美弥の方と筑紫香丸の一騎打も華やかに喧伝された。右近亮はじめ堀川方は、必死に仇の香丸を求めたが、ようとしてその所在を知り得なかった。それもそのはず香与はあくまで「筑紫香丸」を名乗り、その後は、もとの少女に戻っていたことを、秋月方は、たくみに秘匿していたからである。

美弥の方の亡骸は大友方に收容されたのでその最期の尋常でなかったことは、いろいろと想像され、香丸との斗いの最期のことが、さまざまな形で、まことしやかに伝えられ、女熊谷の艷名は更に高くなつたのである。

——はじめて奇クを読んで——

罪悪感と人間性

——梶山鴻一郎——

古書店でたまたま見つけて、はじめて奇ク（十月号）を購入したのが十二月の初旬のある日でした。その夜はかつてない感興を覚えながら深夜まで読み続けました。そして、その翌々日、当時発売中だった奇ク一月号を購入。その後二冊の奇クで終日、頭を占領される数日を過ごしました。自分の知らなかったまったく新しい世界を知った興奮の気分で今筆を執ります。これから長く続くであろう私と奇クの結びつきの、記念すべき第一報ともいえるでしょう。

東京の大学へ入ってまもない頃、「専門」書店ではじめて奇クを知ったのですが、その時は緊縛のグラビア写真に驚いて店を飛び出してしまいました。それももう既に四、五年前のことです。二年前に大学を出た私は、未だに職業をもつことなく、相変らぬ読書生活をしていますが、スランプに陥って久しく、悶々たる毎日を送っておりました。未だ未経験の私にとって、牀の内からの欲求をじっと押止めておくことは至難で、実践できない悲しさから誌上に求めたのです。

正直のところ、奇クをはじめて買う時には「きまり悪さ」から額には汗さえ出していたものです。それは私がセックスには寛大な態度

度を取りながらも、SMまでには寛大さが及んでいなかったからなのでしょう。残念ながら私も世間並に罪悪感をもってSMを見ていたのです。

ところが読み進むにつれて、私は考えを変えざるを得なくなりました。もともと人の性は自然が或は神が我々を創造するに際して与えたもので、それをことさら忌むなどのときは大自然の摂理に反抗することで、最終的には人間破滅となりましょう。ところでSやMはそうした性の一ヴァリエーションと考えられましょうから、それを否定することこそむしろ異常な事、と言わなければなりません。表て向、又は社会的にはセックスもSMもかなりの制約を受けており、それらを悪徳呼ばわりしていますが、そう言う人達だって少なくとも健康な成人なら、犯したい、犯されたい、凌辱したい、されたい、縛りたい、縛られたい等々の感情は、内心持っているのですから、これはまったく矛盾です。

一体、生来人間に備っているものが社会的に制約を受け、悪徳でもあるかのような扱いを受けるということはどうしたことでしょう。創造者（自然や神）に誤りがない以上、「社会」が言っているところの反道徳の、道

徳的基準に誤りがないか、吟味してみなければならなくなります。これまでプレイを楽しんでこられた方々の中に、ふと後めたい気持ちで心の疼きを感じた人が、案外多いのではないのでしょうか？ もしそれが無用の心配だったら馬鹿を見たことになります。社会の偏見にとらわれることなく、真の人間の姿を見誤らないよう、偽善的な「社会通念」にまどわされないよう、自分自身の判断を持つ必要があるように思います。人間讃美即性の讃美、そして性の讃美は即SM讃美、と一つの鎖で結ばれるべきものだと思うのです。

奇ク誌上では私は多くの愛好者や夫婦を知り、SMがこれほど日常的なものだったのかと感嘆すると共に、夫婦プレイには特に、健康さとお二人の愛情を感じ、ほほ笑みを禁じえませんでした。自分の未来に明るい灯が点ったと思います。若輩、無知の身で少々駄弁を弄した感じですが、次にもう少々、読後感などを記したいと思います。

私はS、それも純粋な苦痛責めでなく、むしろ、羞恥責めの方にひかれるため、「花と蛇」や「SMカメラ・ハント」などの傾向に多大の共感と興味を持ちました。特に前者は十月・一月号共、痛く感じ入りました。

そこで私が深く考えさせられたのは、岩下久光氏の「SM談義」（一月号）の意見についてであります。わりと長い文の氏の主張を要約すると、SMは「ヌードやセックスなどということとは直接関係ない」に尽きるかと思っています。「直接関係ない」とは間接的には関係あるのかどうか、述べていないので不明ですが、氏は、多分にエロチックな奇クをSMの邪道として批判したのです。そして後半で氏の言われるSMのヒロインの具体的な理想像をあげています。

何の實踐すらない私がもの言うの資格は、問題になるかもしれませんが、人間の深奥の加虐性、被虐性からセックスをすっかり脱色してしまうことが可能だとは、自分の想像力からは思えないのです。フロイトを持出すまでもなく、既に書きましたように、SMは性的な一表現ではないでしょうか？ 換言すれば、氏の言われる「美や精神的な味わい」をもっていて「性的刺戟」を求めない「純粋なSM文学」は実はSM文学の一端に過ぎないのではないのでしょうか？ つまり、もう一方の端には氏の否定された全裸、鞭打ち責めのSM文学が現存しているというわけです。即ちSM文学と氏の言われるものは、性文学の

中の一局面だと思うのです。

氏は最初の方で「SMというものは、元来は決して背徳的なものでも不潔なものでもないのです」と言う。私も同感です。氏は性的刺戟を目的とし、「誌上ショー」と化するのは邪道だと言う。私には文学かショーか、の文学的評価は下せませんが、ただ次の点で、氏の考えと私の考えとは違うことを書いておきたいと思います。

それは、氏が「奇クは責めという直ぐ全裸、鞭打ち、浣腸などに持ってきますが、これらは皆およそ嫌悪感や、不潔感をもよおすばかりです。どうか徒らに性的刺戟ばかり追わないで、真のSMを目ざして貰いたいと思います」と言われているように、氏は全裸、鞭打ち、浣腸など、いわゆる羞恥責めを、不潔で、恥すべきもので、もしかしたら悪徳とまで考えているのです。広範の読者諸氏も、「それはあたり前のことじゃないか」と思われるかもしれませんが。しかし私はこの考え方に挑戦したいのです。

一般的に、男性は加虐性を、女性は被虐性をおのれの性向として持っております。（人の背丈に大小があるように、例外としてS女性・M男性があっても自然）氏の言う純粋な

SMの他に、性の又は羞恥的な要素を含みもった広義の両性向(SとM)は健康な成人なら誰でも持っているものです。現実にはMに応じようとしないう女性が圧倒的に多いのですが、これはそれらの行為が忌むべき、恥ずべき行為だと思い込んでいるあまり、自分の内深くに潜んでいるMへの願望が押殺されてしまっているためなのです。人間の心の奥深くに普遍的に宿っているこの「不潔」な願望をも私はあえて背徳とは考えないのです。この点で氏と違うわけです。疑がうべくもない背徳、と一般に思われていることが、実は

何故に背徳なのか誰も知らない、ということにお気づき下さい。

ここまでくるともう価値観の相違という壁に突当るだけなのでこれ以上は申しません。ただ、たとえ不快な忌避すべきものであっても、それが実際に人間の内部にある限り、それを徹底的に引きずり出し、追求することこそ、真の文学、真の人間性に迫ることであって、臭いものにフタをしたところでどうにもならないでしょう。

最後に念のため申し添えておきますが、縄はいいいけど浣腸は嫌、といった嗜好の相異は

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム(筆名)を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに對しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返ししお返事差し上げます。

出てきましよう。食物に好き嫌いがあるように、人によって個別的な用具上の好みが一致しないのは、あってしかるべきことなのでから。

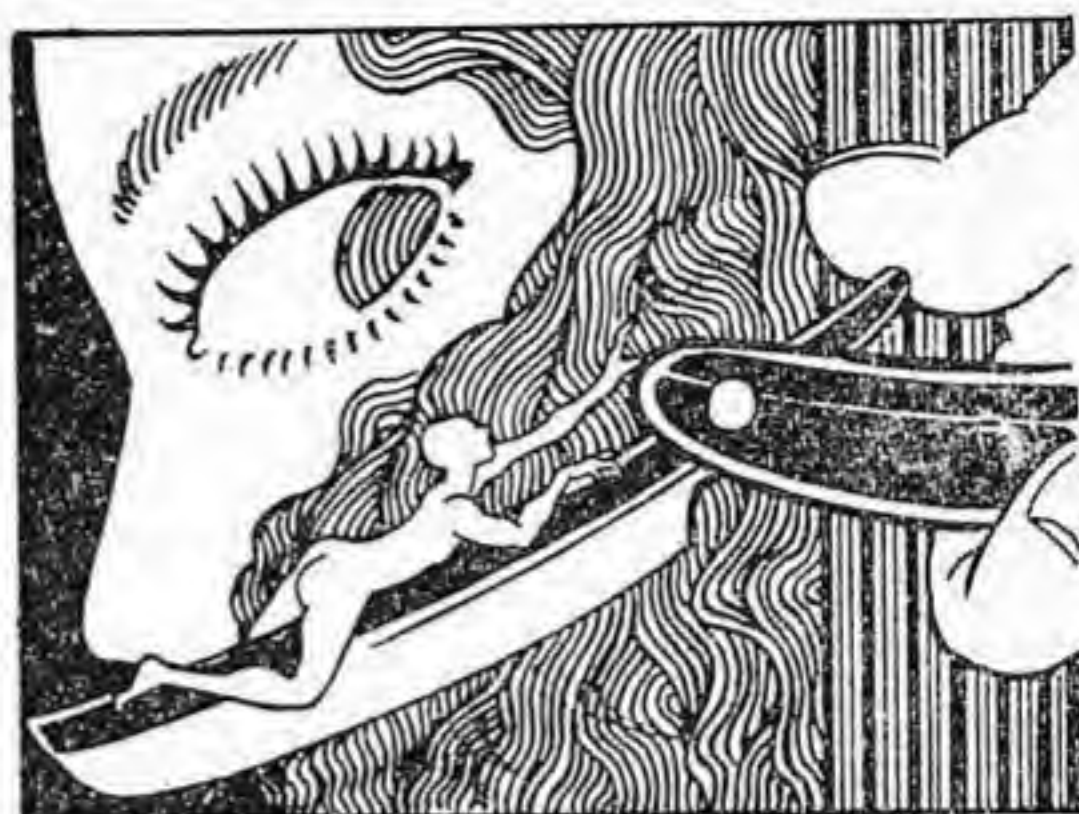
思いもかけず、ひち面倒臭い議論になってしまいました。次にその他の感想をかいつまんで記しておきます。

一月号「珍書探訪」は他の記事とは違った意味で興味深く読みました。これから、この種の記事を続けて掲載されるよう、願っています。

奇ク自体も、書誌的に見て相当なものである。というのは、東京のあるこの方面の専門書店では、数年前の奇クが早くも千円という値がついているから。そのころのはグラビア写真入りだったから、これから先、さらに値は上るであろう。

そこで顧みて残念至極なのはグラビアの廃止。せめて、今ある写真をより鮮明な印刷にしてくれ、というのが本音。

とまれ、縛られ、凌辱を受け、悦んで泣いてくれるナイーブな考えをもった女性が、なんとか見つからないかな、というのが偽わらざる気持。



衝突

「何を言っやがんだいつけあがりがつて」

栄子はヒステリックに、どなりつけた。

「半年前に上げたばかりじゃないか。三食つけて四万円といやあ、うちとしてはもうギリギリなんだよ」

「だがねえ、いい若い者が、こんないなか床屋でくすぶってたんじゃ、うだつが上らないんですよ」

友市は店の大鏡に顔をくっつけるようにし

かつて本誌上に、M人士をして熱狂せしめる数々の名作を発表した筆者が、想を新たしての書き下し。十年の沈黙を破って放つ、新連載M小説第一回。

ピエロ床屋

(1)

鬼山 絢 策

て、剃刀でもみあげを剃りながら、ひとり言のように答える。

「とにかく、もう一ぱいだよ。ねえ、とうさん」

主人の政吉は、むずかしい顔をして新生をふかしていた。

栄子は政吉がとりあわないとみると、「どうしてもイヤだって言うんなら、出てっ

てもらうよりしかたがない」「エッ? いま何て言った」

友市は鏡の中から栄子を見た。

「やめてもらうより、しょうがないよ」

「やめてもいいの?」

友市は、いたずらっぽく笑いを浮かべて、

栄子を振りかえった。

「だって、そんな高い給料は、うちじゃ払えないもの。ねえ、とうさん」

「……そうだな……」

政吉は笑いがこみあげてくるのを噛みしめながら、ここで笑ったらいへんだと、つとめて苦虫をかみつぶしたような顔をしていたが、その重苦しい空気から逃がれ出るように箒を持つと床を掃除しはじめた。

「そんなこと、友さんにさせりゃいいじゃない」

いか」

「ごめんだな。俺はもうクビになったんだからな」

友市は政吉など、てんで眼中になかった。「クビにしくたって、掃除はいつも俺がやってんだよ」

政吉は急に元気がでてきた。手まめに箒を動かし、次には雑巾バケツを持ち出した。

「クビになったんだから、俺はもう仕事しねえからな。遊びに出かけるよ久し振りにな。まあ、二人でよく相談して今日中に決めてもらうんだな」

友市は剃刀を拭きもせずにおっぼり出すとサツと店をとび出して行った。

「畜生ッ、ばかにしやがって！」

栄子は掃き清められたばかりの床に、ひげ剃りカップを力まかせに叩きつけて粉々に割った。

政吉は文句も言わずに黙々と、せともののかけらを箒でかき集めていた。

「若いときの俺にも、あんな時代があったっけな」

尻敷かれ亭主

若い頃の政吉は、渡り職人として、関西の床屋を渡り歩いてきた。

給金は全部、女とばくちと酒に費し、借金を重ねて、不義理が多くなると、とび出して別の床屋へ移った。

二十六のときに、名古屋から東京へとやってきた政吉は、相も変らず飲む打つ買うの三道楽を続けていたが、神田の店で知り合った清太郎とは、性格が全然違うのに妙にウマが合って、兄弟同様の仲となった。

清太郎は政吉より二つ年上だったが、ばくちは一切やらず、女遊びさえつき合いで行く以外は慎んでいた。当時は玉の井とか亀井戸へ行けば、宵のうちは一円五十銭、十二時すぎなら五十銭玉ひとつで遊べた時代だった。

或る夜、政吉は清太郎を無理に誘って玉の井に遊びに行った。清太郎を自分の馴染みのよし江という女に預けて「男にしてやってくれ」と頼んで、政吉は別の家にあがった。

こういうところへくると、年は下でも政吉の方が兄貴分として、はばをきかせていた。

翌日、政吉は、よし江のところへ行行って、「昨夜の男はどうだった」と聞いた。

「あのひと金持ってたのねえ。千五百円も貯金してんのよ。定期預金だけどさ。これは

自分の金だけど自分の金じゃないんだって。いまにお店、買うんだってさ。えらいわねえあんたと違ってさ」

政吉も清太郎がそんなに貯金してるのかとびっくりしたが、それから間もなく清太郎は結婚して、大塚に店を持って独立した。

政吉は戦争中は徴用で軍需工場に働いていたが、終戦になるとまた元の床屋の職人として、諸所を渡り歩いた。野放図な生活を送っていた政吉だったが、四十の声をきいてからは、さすがに女遊びもばくちもほどほどにして、店を持って世帯をかためる気になり、貯金をしだした。

政吉が栄子を知ったのは、中野のバーへ飲みに行ったときだった。

栄子は美人というタイプではなかったが、ポチャポチャとした丸顔で、大きな眼にちょっとケンがあったが、それが却って美しく見えた。五十六キロというグラマーも、政吉の好みにあった。

しかも彼女の経歴が、僅か半年ではあるが理容師の経験をしていることで、その後サラリーマンと結婚して失敗し、別れてからいろいろの職業を経て、いまのバーにたどりついた、というのである。

年は三十二で、その時に四十八才だった政吉とは、かなり年令の差はあったが、当時の政吉は肉体的にもまだ若かったし、女盛りの栄子を十分満足させるだけの自信があった。

二人の交際は約一年続いて、実を結んだ。

だが東京で店を持つには資金が足りない。

それに競争の激しい東京でやるより、いなかの方がのんきでいいと思い、栄子の故郷が栃木県なので、大田原市に店を持った。政吉は七十万ぐらい貯金があったが、それに栄子が五十万出し、清太郎から五十万借りて、やっと店内の設備も備えることができたのだ。

清太郎は既に東京に理髪店を三軒も持つほどに成功していた。

大田原市も、その後、大工場が次々とできて人口が急速に増えてきたので、夫婦二人では間に合わなくなってきた。

そこで椅子を一台増やして、若い職人を置くことにした。

だが、これには政吉は反対だった。しかし工場の若い人の頭は、政吉がやると、古臭くて気にいらなかった。

「いまの若い人の『アイビーカット』だの、『コンチネンタル』なんてのは、やっぱり若

い職人でなくちゃダメなのよ。東京の新しいスタイルを知ってる職人にきてもらって、あんたも覚えなさいよ」

栄子に説き伏せられて、東京の清太郎に頼んで廻してもらったのが小沢友市だった。

友市は若い頃の政吉そっくりなタイプで、腕はたしかだが、店にくると早速バーの女とトラブルをおこしたり、ばくちに負けて栄子に前借りしたりした。

二十八才の独身で、顔はジェリー藤尾みたいな額の狭い、どんぐりまなこの動物的な感じのする男だが、女の扱いは馴れていると見えて、女でいりは始終だった。

政吉と栄子是一緒になって、五年経っていた。

三十七の女盛りの栄子を、五十を三つもすぎた政吉は、ここ一、二年、急に体力の衰えをきたして、もてあますようになった。そこへ現れた若い友市の肉体に惹かれるのは、しかたのないことだった。

政吉が職人を置くことに反対したのも、その恐れがあったからだ。

だが、友市が来てからは、若い工員の客も増えだし、収入は倍ぐらいになっていた。

栄子は自分の容貌に自信をもっていた。

いなかでは、ちょっと目立つくらい色っぽい魅力にあふれる女ではあった。

栄子が友市を誘惑したのは、若い肉体がほしかったのであるが、栄子自身は、ともすれば給料が安い、いなかはやだなどと言う友市を引きとめておくための、手段だと思っていた。

政吉はそれを知ったとき、狂わしくなるほど嫉妬し、悩んだ。政吉がそれと気づいたのは、友市の休みの日、友市が出かけると間もなく、盛装した栄子が、親せきの家へ行ってくると出かけたが、おかしいと思った政吉が親せきの家に電話してみると、果して栄子は行っていなかった。

その後は店を終わってから、政吉が町の寄り合いに行ったときとか、友達の家へ将棋をさしに行った留守に、関係しているらしいことが、二人の気配で察せられた。

だが政吉は、知らぬ振りをすることに心を決めた。

店をもつてからの政吉は、生まれ変わったように実直に、よく働いた。そして栄子を溺愛した。

朝は五時半に起きて店の掃除をした。というのは開店は九時からだが、工場へ行く人が

店が閉ってるうちから、六時頃にやってくる客があるからだ。栄子は八時頃に起きて飯の支度をし、食事を済ませて九時に店を開ける。夜は七時にしまったが、あとの掃除も政吉がやった。友達は「ずい分、尻に敷かれてるな」とひやかしたが「何てったって年が違ふからねえ」と政吉はニヤニヤしながら、尻に敷かれ亭主を自認して、むしろ得意気だった。

それが友市が来てからは、掃除は友市にさせていたが、ひと月たつと「朝早く起きるのがつらい」と言い出したので朝の掃除はまた政吉がやるようになり、夜は友市がやった。

そこへいくと栄子は全く気づい気ままに振舞っていた。機嫌のいいときは食事の支度もするが、見たい映画のあるときは、夜の食事もつくらずに映画に行ってしまうし、何か腹を立てるとお昼頃まで寝ていて、店の仕事もせずに、どこかへ遊びに行ってしまうのだった。

客のたて混んでいるときは一人でも手が欲しいし、お客からは「おかみさん、どうしたんだい」と聞かれ「ちょっと用事があって」と、ごまかさねばならず、栄子の分まで働かされる友市は、皮肉な笑いを含んで政吉を見

る。

そんなときに限って客達の間に栄子の噂がでる。「美人だ」と、ほめる者もあれば「政吉さん、あんた、あますぎるよ」と真顔で忠告めいたことを言う客もある。

「女房のこしまきまで洗ってるんじゃないのかい」

「こしまきぐらいなら、まだいいんですけどね。フフフ」

友市は平気で、政吉のいる前で客とワイセツな話を、はじめるのである。

秘密のたのしみ

だが栄子と友市の仲が、決してうまく行っているわけではなかった。

遊び好きの友市は、いつもピイピイしていた。給料をあげてくれと口癖のように言い、最初来た時には二万五千円だったのを、五千円宛、三回上げて、いまでは四万円払っている。しかし、この地方で三食つけて四万円というのは、かなり高い方だった。

家計は栄子を取り仕切っていて、栄子としては友市の五千円値上げの要求も、それは出して出せないことはないのだが、この頃、友

市が栄子よりも好きな女のできたことに嫉妬を感じたことが、今朝の喧嘩の原因だった。

それは政吉も、ちゃんと知っていた。

だから二人が喧嘩をはじめた時に、おかしさがこみあげてきてしうがなかったのだ。

もちろん栄子は政吉に、友市をクビにするかどうかなんてことは相談もしなかった。

だがその夜遅く友市が酔っぱらって帰ってきて、また栄子と喧嘩をはじめ、とうとう話は決裂して、友市は出て行ってしまった。

夫婦二人きりになれた事を政吉は喜んだ。

“あの楽しみが、誰に気兼ねすることもなくできる。そして栄子は、また俺だけのものになった”

政吉の家の隣が風呂屋の徳五郎で、政吉とは将棋の友達だった。

政吉や栄子が風呂へ入るときは、お互いの裏口から裏口へ下着一枚で手拭いぶらさげて毎晩ドボンとつかりに行った。

夏などは、栄子はパンティひとつでタオルで乳房をかくしながら、入りに行くことさえあった。

友市が出て行った日の夜、政吉は今夜あたり、栄子と例の楽しみが再現できる頃だと期

待していた。

案の定、栄子は風呂から上ってくると、パ
ンティも脱ぎすてて、まっ裸のまま、店の椅
子へ腰かけた。

政吉は、そうくるだろうと思っていたから
早くから店に鏡をおろし、カーテンをひいて
剃刀を皮バンドで研いで待っていた。

「しばらく剃らねえから、ずいぶんと生えた
なあ」

栄子は生まれつき毛深い方なので、腕や脛
に、なまな男顔負けの毛が生えていた。

夫婦になって店を持った頃から、この毛は
政吉が剃るようになった。

「ほんとにイヤんなっちゃうよ、剃っても剃
っても生えてきやがって。東京へ行くと、電
気で一本一本、抜いてくれる病院があるんだ
ってね。抜いてもらおうかしら」

「いいじゃねえか、俺が剃ってやるよ」

「フフ、あんたのたのしみがなくなるから、
抜くという大反対だね」

湯上りのしつとりと汗ばんだ肌に、石鹸も
つけずに、政吉は腕から腋の下まで剃るのだ
った。

栄子が片腕を高くもちあげると、プーンと
女の匂いが快く政吉の鼻をうった。

政吉はペロリと腋の下を舐めた。

「ウフ、くすぐったい！」

「お前のここんとは、何とも言えねえ味が
するんだ」

政吉は腋の下に鼻と口を埋めて、思いきり
臭いを嗅ぎ、うすいわきがの臭いをむさぼる
ようにペロペロ舐めた。

「ウフフ、くすぐったいよ。いつまで舐めて
やがるんだよッ」

栄子は上げた腕を下して、政吉の首をギョ
ッと締める。政吉はジーンと脳天に突ん抜け
るような快感を感じるのだった。

続いて脛の毛を剃りはじめる。

栄子は大胆なポーズをとって、片脚をひじ
かけへかけて、剃らせる。

脛の本剃りを終えると、
「今夜は、ばかに念が入ってるじゃないか」

栄子はからかうように、裸の足で政吉の額
をポンと小突くように蹴ってやる。

「エヘヘヘ」

たわいもなく、政吉は頭を蹴られて、痴呆
のように喜んでいる。

「フン、友公がいなくなって喜んでるんだろ
う！」

両方の脚を剃り終ると、栄子は椅子をグル

リと廻して、両脚をひろげた。

政吉はその脚の間へ身体をこごめて入ると
おなかを剃りはじめた。

毛深いたちの栄子の身体は、手入れをせず
におくと黒い炎のように、お臍の辺までも生
えつらなってしまうのだ。

その「炎」の先を剃ってやるのも政吉の役
目であり、最上のたのしみなのだった。

「だけど明日からどうするの？ 私達二人き
りじゃ、とてもこなせないし、やっぱりあと
がまに誰か職人を置かなくちゃなんないね」

「まあ、いいじゃねえか。当分は俺達二人で
やってみようよ」

「だめだよ。あんたに若い人の頭はまかせら
れないよ」

平然として剃らせながら、栄子は椅子の上
にふんぞりかえって煙草をすっていた。

「イヤ、俺も友公のやるのを見て、だいぶ覚
えたぜ」

「フン、何言ってるのさ。あんたのなんか、
てんでなっちゃいないよ」

栄子は、からかうように煙草の灰を、人さ
し指でトントンと叩いて、政吉の頭へおとし
た。

「おい、よせよ」

「また若いのを置くんだ」

「イ、イヤだ。俺はイヤだ！」

顔を栄子の皮膚に近づけて、いとおしむように、少しずつ丹念に剃っていた政吉は、グツと首を上げて、栄子を見た。

突然、栄子の豊かな両の太腿がグラリと動いたかと思うと、政吉の肩の上にデンとのせられた。

「フフ、あんたがイヤだって言うのは、やきもちだけの上から出てるんだろう」

両肩にズッシリと重く乗せられた太腿は、政吉にとって栄子という驕慢な、若く美しい女房の負担を、身をもって感じさせられた。「それもある……」

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

政吉は、すべすべとした肌目のこまかい太腿の重さを受けとめながら、

「だがなあ、栄子。それだけじゃないんだ。お前の幸福も考えて言ってるんだよ」

「体裁のいいこと言ってる！」

太腿の内側が政吉の頬を締めてきた。

「そうじゃない、ほんとうだ。現にお前は友市を置いて失敗してるじゃないか」

「それは、あんたのせいだよ。ほんとのこと言ったらね、友市には五万円六万円を出したって、あいつを置いといた方が家のためだったんだよ。あいつは、多い月には十五万も二十万も稼いだんだからね」

「なら何故、追い出したんだ」

「あんたが悪いのよ」

すべすべした、やわらかい脂ののった両の太腿が、政吉の首をピタリと、はさんだ。

「世間じゃ相場ってものがある。家の経済をあずかる妾の口から、そうそうあいつの言いなりになるわけに行かないじゃないの。だから妾が断る、そこをあんたがとりなして、まあ上げてやってくれと言え、妾はあんたの顔を立てて、ヤツの言い分を通してやるつもりだったんだよ」

「フン、この太い足にはさまれた俺の顔を、

この女房は立ててくれるというのか……と政吉は自嘲した。

「それをさ、奴が出て行くことを、あんた自身が望んでるんだから、どうしようもない。あんたが、ぶっこわしてしまっただよ」

「そんならそうと、俺に言ってくれりゃよかったのに……」

「それ位のこと、私の気持ちを察してくれたら分かりそうなんじゃないか。馴れ合いで芝居したって、すぐヤツに気どられてしまうよ。あんたが真からその気になって、とりなすんでなくちゃ通じないよ。あいつがいなくなれば、若い衆は皆、来なくなるよ」

「でもなあ、栄子、俺達夫婦二人っきりの暮らしなら、仲よく稼げば十分じゃないか」

「イヤだよッ！」

口をゆがめ、吐きすてるように言うと、栄子の太腿にグツと力が入り、ぎゅうっと政吉の顔を締めあげた。

「だめよ、そんなの。あんた、いくつなのさもう五十三だろう。もうすぐ働けなくなるんだよ。そうになったら、どうして暮すのさ。いまのうちにうんと稼いで、清太郎さんほどには行かなくても楽隠居でやって行けるようにお金をためて基礎をつくっておかなくちゃな

らないじゃないか」

栄子は一応もつともらしいことを言っているが、そのくせ東京美術会とかいう呉服のセールスマンの口車にのって、毎月六、七万もする着物や帯などをポンポンと気前よく買うし、ぜいたくの仕放題をして貯金などする気はサラサラないのである。

だが、この愛しきっている女房の、あたたかい肉の首かせをはめられた政吉には、そう言い返す勇気が出なかった。

「この女はまだ友市に未練があったのだ」

政吉は悲し気に栄子を見上げた。

「イヤそうじゃない。必ずしも友市でなくてもいいのだ。若い男の肉体が欲しいのだ」

栄子は政吉が黙ってしまうのをみると、勝ち誇ったように、うす笑いを浮かべたが、「わかったかい。わかったら、また清太郎さんとこへ行って頼んできな！」

グイッと腿で首を締めあげ、命令するように上から政吉を睨みすえて言われると、政吉には反抗する言葉が出てこなかった。

「ウウ、苦しい。わかったよ、わかったよ」肉の枷は少し弛んだ。

「私だってこの家のことを考え、あんたのことを考えるからこそ言ってるんだよ。それを

いい年をして、やきもちを、やいてるんだから。この爺いはい……」

栄子の顔は笑っていたが、その下にはめらめらとサジスチックな慇懃がもえ、再び肉の枷を締めて、苦しむ政吉の顔をたのしそうに見下ろしていた。

政吉はこれ以上、清太郎に迷惑をかけたくなかった。いまは若い職人はひっぱりだこで東京に行ったって、いくら顔の広い清太郎でも、オイソレというはずがないのだ。もともと兄貴分同様の清太郎に泣きつくのは政吉にとってはずらいことだった。

だが、いまは――

ここで女房の御機嫌を損じては、あとのたのしみがなくなってしまう。

「わかった。俺、行って頼んでくるよ」

「いつ行く？ イヤ一日のばせば、それだけ家の損なんだから、あした行つといで。いいかい」

「一応電話で頼んでみたら」

「バカ！ 電話なんかで話が足りると思うのかい、この人手不足の時に」

「よしよし、明日、行くよ」

「じゃ明日は、お休みにしよう。妾もこのところ働きすぎて疲れたから温泉にでも行って

くるわ。ちゃんと話をつけてくるんだよ」

「ウン、よしよし」

その夜、久し振りに政吉は夫らしい気分を味わった。

翌朝早く、政吉は東京に発って行った。

だがこのとき、期せずして政吉と栄子の気持ちは、先の見通しが一致していた。

政吉は、頼みにくいことだが一応清太郎に話して見よう。だが、とても大田原なんかへやってくる職人は、若い者ではまずないだろう。家族持ちでは、なおないだろう。恐らくはだめだ。だが、それでいいんだ。その方が俺達夫婦のしあわせなんだ。

と考えていた。

一方、栄子の方も、まるでひとごとのようにイヤイヤながら出て行った政吉が、そう簡単に話をまとめるはずはないとふんでいた。

「だが、そのときは……」

栄子の胸のうちには、次の計画がすでに練られていた。

そしてその計画には絶対の自信をもっていた。

(続く)



浣腸、オシメ、六尺褌などに、秘かに心ひかれる人は多くいるようだが、私のように、『マスク』というごく一般的な、一見何でもないようなものに、妖しい魅力を感じる人が他にもいるのだろうか。

若く美しき女性の顔をいっばいに覆う、白い大きなマスクのかもしれない魅力。これが、マスクに感じる私の妖美である。

私は女性のマスク姿に心ひかれる。

今考えてみると、私は幼ない頃から、なぜかマスクをかけた女性に、いやマスクに覆われたその美しい顔に、何ともいえない魅力を

告

白

白い誘惑

マスクの妖美

文及びカット

暗 闇 太 郎

感じていたのを覚えている。同級の女生徒がマスクをかけてきた時、私は授業中でも休み時間中でも、その女生徒のマスク姿にちらちら目をやって、秘かな感激を覚え、街などでもマスクをかけたBGにでも会おうものなら夢中でそれに見入っては、何とも言えない満足感を覚えたものだ。なぜだか分らないが何か不思議な魅力にひきつけられてしまったマスクに何か異様なあこがれを持つようになってしまった。

もないはずの、マスクをかけるということがひどく恥ずかしいことをするように思われて人の面前で自分がマスクをかけたことは一度もない程だ。

私はマスクを買った

しかし冬のある一日。毎日のように白いマスクで顔を覆われた女性を見かけるたびに、女性の顔を覆うマスクの妖しい魅力にとりつかれてしまい、ついに私は、半ば夢中で薬屋へ入ってしまった。

なかなか云いだせない言葉だった。「マスク、下さい」

私は思い切って、おののく胸を押えて、後向きに棚の物を整理していた店員に言ったが驚いたことに、振り返ったその店員は、マスクをかけた若い女店員だったのだ。

マスク姿の女性を間近かに、あまりにもはっきりと見てしまったので、恥ずかしさと喜びが入りまじってぞくぞくしてしまい、思わず下を向いてしまった。本当はじっと、その女店員のマスク姿を見続けていたかったのだが、顔がカッカとするようで、とても正視できなかった。

「はい、おまちどうさま」

女店員は事もなげに、包んだマスクを私の手に渡してくれたが、私は恥ずかしくて顔を上げられず、受けとるやいなや逃げるように店を出たのだが、おそらくその時の私の顔は真赤だったと思う。

外へ出てからも、マスクにこもった女店員の声は実に麗しく感じられ、しばらく耳の中に残っていたが、せっかくマスク姿の女性と、思いもかけずに向い合うことが出来たのに、充分に観賞できなかったのが、ひどく残念だった。

しかし、ともかくマスクを手に入れた私は一人きりになった時、押し入れに入ってマス

クをかけてみた。何かどきどきして手が震えてしまったが、ふわふわした柔かい感触と、ほのかな暖かみがあったいい気持ちだった。

それからというものは、一人隠れては心をときめかせて、こっそりとマスクをかけて悦にいった。「女性の顔を覆うあの妖美に、今自分は包まれているのだ」と思うと、ひどくぞくぞくした気持ちになれたのだった。

やがて、マスクをかける時に、その日に会った女の人（勿論マスクをかけた若き美女）の顔を思いうかべて、このマスクはあの人にかけていたものだ。と、自分で自分に暗示をかけて、そういう気持ちに浸ることを始めた。こうすると、本当にあの人にかけていたマスクを今自分がしているように思われて、何か異様な興奮を感じられたのだが、そのうちに私は、本当にそういう機会を得ることができた。

OLの忘れたマスクをかける

ある日、仕事で家にきたOLが、玄関に入ってきた時には確かにかけていたマスクを、帰り際に忘れていってしまったのである。それを発見した私は、とび立つ思いでそのマスクを手にとると、知らぬ間に部屋へかけ上がっていた。

いつもの夢が、空想が、本当になった……。私の胸は興奮して止まらなかった。今、自分が持っているマスクは、今の今までの女性にかけていたものだと思うと、信じられないほど、心がぶるぶる震えた。

私は恐る恐るそのマスクをかけてみた。そして深く一呼吸してみた。頭に血がのぼったようにカッとした。今までのように想像だけではない。本当にこれは唯のマスクではないのだ。薄いピンクの口紅がついているガーゼがそれを証明してくれる。このマスクは、あの女性の甘美な香りと、感触を秘めているのだ。

買ったばかりらしく真白なナイロンマスクで、厚く折りたたんだガーゼを内側にあてがってある。そのガーゼについている薄桃色の口紅は夢ではないのだ。

私はゆっくりと、何回も何回も、深く味わいながら息をした。その度に甘美な感激と異様な興奮が、マスクを通じて私の頬にじわじわと伝わってきた。頭が熱く燃えて、何が何かわからなかった。私は彼女の香りに陶醉してしまい、夜もそのマスクをかけたまま寝てしまった。

私は奇クを知った

しかし古本屋の一角で初めて奇クを手にした時、縄による女体緊縛を知った時、私のマスクに対する妖しい魅力の謎がとけた思いだった。私の、若く美しき女性の顔を覆うマスクに対する、あこがれは、この緊縛だったのだ。マスクに代ってなお強く私をひきつける「猿轡」を知った時、私は新たな興奮に打たれた。猿轡のあの強烈な緊縛感に、私はたちまち、とりことなってしまうた。

しかし、実際には猿轡をはめられた緊縛女性を目にするなど、又自分の手で緊縛女体に猿轡をかませるなどということは、今の私にとっては所詮「夢」でしかない。猿轡を知っても、いや、知ったからこそ、いよいよマスクは私にとって忘れることのできないものになってしまったのだ。

マスクと猿轡

マスクは美女の唇を、頬を、そして鼻孔をも完全に覆いつくして、そこにみごとな猿轡の魅力を再現してくれる。帰りの電車の中でマスクをかけた女性をみつけた私は、向かい側の席があくやいなや、胸をときめかせて坐りこんでしまった。マスク姿の女性を又捕えたのだという気持で、私の心は喜びと興奮にふくれ上がった。

真紅のコートに身を包んだその女性は、マスクをかけていることに軽い羞恥を覚えているらしく、顔をほてらせてじっとうつむいている。大きめのマスクが実にピッタリとかけられていて、マスク姿の似あう女性だ。時々髪に手をやるが、じっと閉じた目はうつむいたままである。この姿、表情を見た時、私の脳裡は明らかに緊縛されて猿轡をかまされた彼女の姿を思い浮かべていた。そしてその表情は、緊縛に観念しきってじっと羞恥に耐えている、そんな姿に思われた。

この時、私はマスクの美しさに改めて満足感を感じた。マスクはこの穏かな緊縛表情を巧みに見せてくれる。しかし残念ながら猿轡の息苦しさ、縄の緊縛にあえぐ、苦痛の表情は見せてくれない。とは言ってもやはり素晴らしい。あのマスクにこもった麗しい声と羞らしいの瞳の魅力は。

世のM女性に望む

世の若き女性は、殆んどが顔にあったマスクをかけていてくれるが、ここで私の理想のマスク姿を述べたい。

マスクには、ガーゼマスクとナイロンマスクがあるが、是非ナイロンマスクにしてもらいたい。そして大きいマスクを選んでもらい

たいものだ。ナイロンマスクは純白度が高くガーゼのように不必要なしわが入らない。小さなガーゼマスクをかけるとマスクは偏平に伸び、しわばかりで美しさも何もあったものではない。それに、マスクは大きければ大きい程、その魅力を増す。

又、口にあてるガーゼだが、これはたっぷり使って、厚くしてもらいたい。薄くてひらのマスクでは緊縛感が出ない。ガーゼを厚くしてマスクをかけると、顔にピッタリとはまって、ここに初めてマスクの緊縛が表現されるからだ。

猿轡―特に詰物を好む女性なら、外出する時でもあなたのブラジャーなりパンティなりを詰めて、その上から大きなマスクをかけて出かければいかが？ 大衆の中でも、ひそやかに猿轡の妙味が味わえるだろう。

世のM女性に望む。緊縛を、猿轡を好むなら、白い大きなマスクをかけて街を歩いてはくれまいか。そして猿轡の緊縛表情をみせてはくれまいか。

ああ、わが心を捉え慄わせるもの。白く麗しきマスクの妖美よ！



お長受縛譜

風流極道軒

1、次郎長宅・湯殿

お長、ひとりで、湯につかっている。

夏の十三夜の月が、雲ひとつない空に、皎々とかかっている。

静かである。

次郎長始め子分達が、三州西尾の浪人で、あこぎな賭場を開き、堅気の衆を苦しめていた和田島富五郎を斬り殺し、草鞋をはいてから、十日たつ。

お長「親分……いまごろ、どこに……」

お長は、両腕で、乳房を抱きしめる。

ゆたかな、まるで、大きな水蜜桃の皮を剥いだような、すべすべした乳房である。

十日も、男気がない。

ひとり、留守を守りながら、お長は、淋しさ、怖しさを、耐え忍んでいる。

怖しさとは……大場の久六。

伊豆一円から、興津、江尻へかけての大親分。しかも駿河町奉行所与力西林馬之助とは、極めて昵懇。その上、お長に、ぞっこ

んときている。

お長「もしも……万一……」

お長は、ここ十日ばかり、いつ、久六が踏み込んでくるかと、そればかり気にしていたのである。

お長「もう……大丈夫だわ……いくら何で

も、何の罪もない妾までも……」

ザアーツと、水音をたててお長が、湯舟からでる。まるで、一滴の水も、うけ入れぬというように、肩から、胸から、凝脂のよ

くのった腰から、湯水が、はじきとばされる。

糠袋を手にして、丹念に洗い始めるお長。

野犬が、遠くで吠えた。

数人の足おと。

ハッと、身をかたくするお長。

久六「探しだせ。お長は、必ず、どこかにいる筈だ！」

(合点でえ、親分)と、答えたのは、一の子分の赤鬼の金平。

と、湯殿の格子から、ニュッと、なかをのぞき込んだのは、小猿の伝兵衛。

小猿「おおい！ 居た居た。お長姐御が湯に入ってるぜ！」

脱兎のように、湯殿を出て、あがり場にてたお長。東三の晒もめん、上半分に真紅の小浜縮緬をあしらった湯文字を、くるくると腰にまとうと、肌襦袢、つづいて紹友禪の長襦袢に左手をとおす。

板戸があいて、顔を出す久六。

久六「ヘッヘッヘッ……お長さん！」

途端、

お長「バカ！」

お長の口から啖呵がとぶ。

お長「亭主の留守中、何のことわりもなしに入ってくるとは、立派な親分衆のなさることではございませんでしょうよ、大場の親分さん」

お長、本紋りんずの腰ひもを、きりりっと胴のくびれにまきつける。

洗い髪……何とも言えない若年増の色気が、漂ってくる。

赤鬼「たまらねえ恰好でやすな、親分」

久六「待て、待て。女を、口説くにゃあ、手間ひまかけにゃあならねえ。それに、この阿魔、名うてのじゃじゃ馬。一筋縄じゃあ、いくまいて……」

小猿「一筋縄でダメなら二筋縄。それで、ダメなら、女縄。それでダメなら、ガンジガラメ縄」

久六「ちゃちゃを入れるねえ！ さあ、お長出かけようぜ」

久六の声とともに、赤鬼、お長の左手をグイととる。

お長「さわるでないよ！」

びくつとする赤鬼。

お長「親分、どこへ連れて行こうというのかい。妾は、次郎長の女房。ここから一歩も動きませんからねえ」

きっぱりと、てこでも動かぬ気合を示すお長を、ニヤリと眺めた久六。小猿の方に、

顎をしゃくる。

久六「お前が、そう言うだろうと思ってよ、ほれ、これを見な」

小猿が、持ってきた風呂敷包みをとき始める。

竜胆染めの伊勢崎銘仙の長着に朱珍の帯。さらに、伊達まき、帯枕、帯揚げと、小物類が現われる。

お長「何ですかい、これは、親分」

久六「見おぼえはないのか、お長」

お長の顔、次第に真剣になる。

くちなし色に、なでしこの花をあしらった朱珍の帯、錦紗の帯揚げ……

小猿「これでもかい……」

小猿が、一本の腰ひもを示す。

お長「これは……まさか、お園さんが、お園さんが、つかまっているのでは」

久六「あたりきよ。お園は、すでにこっちのもの」

小猿「みりゃあ判るでしょうね。お長姐御、お園さんが、今、どんなに恥ずかしがっていることか……ヘッヘッヘッ……長

襦袢いちまいでよ」

お長、じいっと、唇をかみ、久六の顔をみつめる。

お長「親分さん、あこぎな真似をなさいますわねえ……りっぱな男のやることじ

やあない……」

久六「なあーにね。お園といやあ、東海道随一の美女。小松村の七五郎なんかの女房にしとくのは、もったいねえ。七五郎の野郎が、次郎長といっしょに、罪を犯したのが、悪いのよ」

お長に近寄った久六。

久六「どうするんでい、お長。くるのか、来ねえのかよ」

苦渋にゆがむ、お長の顔。

久六「どうする！」

お長「……お園さんがつかまっていちゃあ、逃げるわけには参りますまいよねえ、親分。妾は、これでも、次郎長の女房。亭主の留守中、子分の家族の面倒をみるのは、つとめというものでござんしょ」

ため息をひとつ。

お長「じゃあ、着物くらい、着させて貰いますよ。これじゃあ、あんまり」

赤鬼の金平、部屋に入ろうとするお長の前にたちふさがる。

赤鬼「おっととと。お長姐御、そのまま、そのまま。その上、着物をぞろりと着られたんじゃあ、折角のお色気が台なしっでもんで」

小猿、お長の右手をとる。

久六「話はきまった。じゃあ、ちよいと縛らせて貰うぜ」

お長「親分さん、女一匹裸同然。その上、縄までかけなさるとは、臆病ともなんとも言えませんか」

(どうせ、有名な好色漢である久六。着物など、つけさせてはくれまい)と覚悟をきめてはみたものの、まさか縛られるとは思

っていない。

久六「小猿、縄をかけてあげな。一筋縄じゃあダメなら二筋縄」

久六の腰から、捕縄が、投げられる。

捕縄、あがり場の床に、とぐるを巻く。

小猿「さあ、坐ったり、坐ったり。反抗しても、子分は一人もいねえ上に、お園さんの身の上に、どんな難儀がふりかからねえとも」

久六、赤鬼、小猿と、三人の顔を、次々に見廻すお長。きいっと顎をひくと、美しい眉をひそめて、目を閉ざす。

小猿「坐ってくださいえ、両手を後に廻して」

お長、静かに床の上に坐る。

赤鬼「手は、うしろ！」

お長、あきらめたように両手を後に廻す。長襦袢のそでから、はみでた二の腕がなまめかしい。

小猿「もちっと、上へ」

お長の背後で、交叉された両手首が、上へあがる。

捕縄をひとしごきしごいた小猿、両手首に二巻き。左の二の腕へ。つづいて、背中に片膝かけて、ぐいーと、お長におおいかぶさるように、乳房の下へ、縄を廻す。目もあやな丹後縮緬の半襟から右乳房が、むき出しになる。

生唾を呑み込んだ久六、(ヘッヘッヘッ)

といやしく笑って近寄ると、骨太い人さし指で、はじく。

お長「おやめなさいよ、親分。煮て喰おうと焼いて喰おうと、どうなとされてあげようど決心してる女の前で、こらえ性もなく、何てことですよ」

小猿が、背後にもどった縄を、今度は乳房の上へかけ、再び、両手首でとどめ縄をすると、ぐいーと細腰へ。胴体のくびれた所を、力一杯、しめ上げる。

お長「クック……クッ。……馬鹿力だねえ、小猿さん……」

小猿「御託をならべられるのも今のうち。何とでも言いやがれ！」

(たつんだ)とばかり、縄尻を急にひきあげる。お長、思わず後に転がる。桃色ぼかしの紹友禅の裾が割れて、両足が宙に舞いその爪先が、前にいた久六のながい顎を蹴りあげる。

久六「な……なにをしやがる、お長」

転倒したお長を、おおいかぶさるように締め上げる。ばたつくお長の両脚。

小猿「親分、いい加減にしなせえ」

久六、肩で息をしながらたち上ると、お長の頬を一発、ぶんなぐり、つづいて、おおきく縄目からとび出してた両乳房を、驚づかみに捻じ上げる。

久六「お、おぼえてやがれ、お長」

お長も負けてはいない。

お長「おぼえてますとも、親分。どうぞ、なかせてくださいましな。はばかりながらこのお長姐さん、どんなことがあるうと、音^ねなどあげはしませんから」

廊下から表戸をくぐって、外へ。待たせてあった駕籠におし込まれるお長。

2、駕籠のなか

お長、唇をかみしめている。

(どこへつれていくのか……久六の家か。ひよっとすると、西林か。どちらにしてもお園さんだけは救い出さねば、女の意地がたたない。第一、あれほど子分思いで、どんなことがあっても子分衆の家族には、とばかりを受けさせちゃあならねえ、と言っていたあの人にすまない……)

3、久六宅・座敷牢

長襦袢一枚のお園、後手に縛られて坐っている。

お長をひきたてて、どやどやと久六達入ってくる。

久六「よく見るんだな、お長」

お長「……お園さん！」

お園「お長姐さん！」

牢格子にかけよるお長の縄尻を赤鬼が、

(どっこい!)とばかり、ひきもどす。

お長「お園さん、もう大丈夫だよ。妾がきた以上、あんたには、指一本触れさしやあ

しないからね」

お園、頷く。が……お長も、長襦袢一枚のあられもない姿できびしく縛りあげられているのに気がつく。

お園「お長姐さん……あたしのことなどかまわないで！」

お長「何言ってるのよ。おまえさんに、もしものことでもあったら、七五郎さんに合わせる顔がないからね」

お長、きつとなると久六に向う。

お長「久六親分。親分もやくざなら、妾の願い、ひとつだけきいてくれてもよいでしょうね」

久六「……何だ、何だ。ここで弱音^{よわね}を吐こうってのかい」

お長「弱音じゃあござんせん。やくざにはやくざの作法というものがござんしょう。そこでひとつ、今後のなりゆきを、盆の上できめてはと、思うのですがね」

久六「盆の上で……」

お長「そうですよ。親分と妾とさしで二番。妾が勝てば、お園さんは自由にしてもらいます」

久六「こっちが勝ちゃあ、どうなるんでい」

お長、唇を噛む。

お長「妾が、親分の思いのままになりましたよ。うよ」

久六「よかろう……もう一番は」

お長「最初、妾が勝てば、お園さんはここから出して、無事、家までおくりとどけた

上、今後一切手出しはしない。つづいての一番、妾が勝てば、妾も自由」

久六「なるほどねえ。で、もし二番つづけてこちらが勝てばどうする。お園もこちらの自由にさせるってのかい」

お長「それは……」

久六「それはもうそもねえよ。賭代^{かけしろ}がなくて盆莫座に坐れるけえ」

お長、考え込む。胸のなかには煮えかえる思いである。反抗すればお園の身が危いと思ひ、つい、ここまで黙って縛られてやってきたものの、このあとをどうするか。

お長、何事かを思い定めた様子。

お長「親分、そのときは……」

久六「そのときは、どうする」

お長「(きっぱりと)妾が、慰みものになりましょう。一番は、親分の自由、二番つづけて負ければ、妾が、大場一家の子分衆の慰みものとなりましょう」

赤鬼「こいつは、面白え！」

お園「お長姐さん、いけない。そんなことをしてはいけないことよ」

久六「……待ちねえ、すると、このお園はどちらにせよ、自由にしろと言うわけだな、お長」

お長「そこよ、親分。親分もやくざ。子分の

女房の操を守ろうとするこの妾の気持、わからぬはずはないでしょう。だから、お願い。妾が、何とでもなるから、お園さんは、すぐ、家に帰してやって腕をくんで考えている久六。やがて、ニヤリと、笑う。

久六「お長、わかったぜ。おめえの心意気に感じて、承知した」

お長「親分、有難うござんした。では、お園さんの縄をといて、着物を返して、すぐこの家から出してやってください」

お長、大きく、肩で息をする。

お長「親分、もうひとつ」

久六「まだあるのか」

お長「まさか嘘は、つかないでしょうね。妾の体を張ったこの勝負、もし約束を破ったときは、ただではおきませんよ。……きっと次郎長が……」

お長、とっておきの啖呵である。

(ながくはない。必ず、次郎長が救いにきてくれる。二日か、三日か。……ともかくお園さんの身を守り、できれば……妾の身もまもる。……けれど、救い出されたときその時、あの人はどう言うかしら。よくやったと、ほめてくれるか、それとも……)

お長は全身が、栗立つ思いである。

久六「次郎長が、どうするってえのだ」

お長「嘘をついたら、やくざ仲間の掟を破っ

た破落戸として、結構、処分してくれるでしょうよ、次郎長さんが……」

久六「ハッハッ。そうともよ、お長さん。この大場の久六も男だ。こと盆の上でのしきたりに嘘はねえ。よし、この勝負、二番とももりましょうぜ」

4、久六宅・表通り

赤鬼と子分四、五人に、おくり出されているお園。

夜も更けている。

赤鬼「じゃあお園さん、お達者で……七さんによろしう」

お園、後じさり、五歩、六歩。あとは勢いよく走り出す。

お園「たすけなくっちゃあ。お長姐さんをこのままにしておいちゃあいけない。何とかして早く、一刻も早く……」

お園の耳に、お長の声がひびく。

(お園さん、政五郎が、由比にいる。たしかにいる。道のりは、三里……伝えてください)。賭場に行く前に、お長がこっそりと耳打ちした言葉である。

お園「政五郎さんと言え、あの大政さん。

あの人、由比にいるなんて知らなかった。お長さん、すみません。私のために……私のために……」

お園、なきじやくりながら、夜の道に消えてゆく。

5、久六宅・賭場

三間盆の中央に、お長と久六、対座している。中盆をつとめるのは岩田の文悦。

文悦「よござんすか」

お長、骨子さいをあらためる。七分骨子(丁か半、いずれかのみが必ずできるように細工されたもの)や、粉入り骨子(内部を空洞にして水銀を入れ、随意の目のできるようにしたもの)ではなかった。つづいて、壺策こに毛返し(髪の毛をしかけてある)のないのを確かめる。

お長「よござんしょう」

文悦、ニヤリとすると、さっと骨子を壺策に入れる。

お長「半!」

久六「……丁」

文悦、(よござんすね)と確認したあと壺策をひらく。

どよめき。半であった。

お長「これで親分さん、お園さんは、間違いなく妾のもの」

久六「もう一番!」

文悦、緊張した面持ちで、壺を振る。

お長「……半!」

久六「丁!」

水をうったような静寂。

文悦、壺策を、無言であける。

久六「丁。丁だ! 丁だぜ、お長姐御」

賽目は、二四の丁である。

お長の全身を悪寒が走る。

立てていた左膝をもとにもどし、正座したお長を、十数人の子分たちが、美しい獲物を狙うように見つめる。

久六「お長、立つんだな。そして、子分たちの言うとおりになるんだな」

唇をかみしめるお長。

小猿「お長さん。では、素裸になっていただきやしょう」

たち上ったお長。静かに、本紋りんずの腰ひもに手をかける。

と、見せかけて一転。久六に体当りを喰わせると、素早くその脇差を、さやごとぬきとり、片隅へ。

ぬきはなたれた脇差。

お長「一歩でも、ちかよると、ただじゃあおかないよ」

お園を無事にこの家から逃がした以上、もう、誰はばかることはない——と言う気持である。

子分たちもその意気込みに押されて、たじたじとする。

ぬう——と、入ってきた一人の浪人。

子分たち「先生！」「先生！」

腕組みをしながら突立ったままの背黒権之介、プツと妻楊子を吐き捨てる。

背黒「この女を、どうするんでい」

久六「先生、つかまえるんで。殺しちゃあい

けねえ！ 生かしたままで、そっくり、

傷ひとつ負わせねえで……」

（判った！）とばかり背黒、太刀をぬくと刃を反らして、みねうちの構え。

二合、三合……五合。

お長の息使いが激しくなり、たちまち小手をしたたか打たれて、脇差をポロリと取りおとす。

（それっ！）とばかり、わらわらと寄りたかつて行く子分たち。

そのかげに、かくれてしまうお長。

6、久六宅・廊下

よろよると、糞尻を小猿にとられ、歩いてゆくお長。

7、同・中庭

敷石を踏むお長の白い素足。腰から胸へ、さらにはうなじへと、キャメラ移動する。きりりつとむすばれた唇。もうこうなっている逃げもかくれもできぬと、観念したお長の横顔。

8、同・中庭

広い庭の片隅にぽつんと立っている土蔵。その扉が、ギィーと開いて、お長のかたちのよい小さな足が、ためらいながら、その中へ入っていく。

9、土蔵の中（階下）

突きとばされるお長。

たちふさがる久六。

久六「お長、ただじゃあすまされねえぜ。やぐざの作法を破ったおめえさんだ。その骨身にしてみても、掟やぶりの責任をつぐなうて貰うぜ」

久六、あごをしゃくる。

小猿と、岩田の文悦が、お長のからだに飛びかかると縄をといていく。

小猿「先生、刀を構えてくださいえよ。この

阿魔、何をしやがるか判らねえんで！」

背黒、言われるままに太刀を抜いて、お長の横に立つ。

小猿の手が腰ひもにかかる。そのふるえる手。文悦が半襟に両手をかけると、べりっべりっといっぱがす。

つづいて小猿が、純白の晒もめんの肌襦袢の紐をぶつんとひきちぎると、さあっ、さあっと、協力する文悦といっしょになってひきちぎるようにして脱がせていく。ぷりーんと、あらわれ出た双つの乳房。

久六「縛りあげい、小猿！」

小猿「合点ですぜ、親分！」

文悦からわたされた麻縄で、ぐいぐいと両手首を引上げて、くるくる、くると、三巻き四巻、力一杯に馬鹿力でしめあげる。お長、歯を喰いしばって痛さを、屈辱を、必死で耐えている。

久六「あぐらにしな。この姐さん、男のよう

に気が強え。男坐りにさせねえと面白く
ねえじゃねえか」

小猿「へっへっへ……」

小猿、中央の柱までお長をひきずっていく
と、そのままぐいぐいと縛りつけ、ばたつ
かせる両足を、弥六や音三たちも手伝って
面白そうにあぐらにくませる。

はちきれそうな太ももが、湯文字からこぼ
れでる。その両足首へ、くるくると三巻き
した小猿の伝兵衛、縄尻をかたちのよい脛
の下を締め上げている縄にとめて、立ち上
る。

10、お長の裸身

カメラ——お長の足の指を撮影する。

足首、縄目……。ふくらはぎ、膝がしらへ
とうごき、一転して、黒ずんだ柱と対照的
に白い背中。前面に回って、東三の湯文字
の乱れ、その上半分の真紅の小浜縮緬、そ
れを辛うじてつなぎとめている紐……と、
脛、腰のくびれ……四筋かった縄目の間
から、とび出した乳房、喘ぐ咽喉もと、両
肩へとカメラが移る。濡れた唇、かたち
のよい鼻……しっかりと閉ざされた眼……

お長「キャアッ……」

あぐら縛りの正面に、中腰になった久六が
弓の折れのさきで、お長の湯文字をはね退
けたのである。

11、土蔵の中(階下)

久六、恍惚としたように、弓の折れを蠢か
せている。

小猿「親分！」

文悦「一体、これから、どうなさるんで」

久六、やっと弓の折れを捨てる。

久六「すっ裸にせい！」

待ってましたとばかり、お長の湯文字の紐
に手をかける小猿。正絹の紐はきつく結ば
れていて、なかなか解けない。恰も、お長
の身を守る最後の砦をあけわたすまいとす
るかのように。

久六「何をもたしてやがるんでい」

小猿「へエ。それが、いい匂いがしますん
で」

久六「何だって……」

小猿「このいい匂い……親分、この女はてえ
した阿魔ですぜ」

久六がちかより、小猿と一しよになって、
前後左右を嗅ぎまわる。

小猿「ねえ、親分。ほんとでしょう」

久六、答えもしないでヒクヒクと鼻をうご
めかしている。

小猿「やっと、とけやしたぜ。それ！」

小猿の手が勝ちほこったように大きく振ら
れ、お長の身をまもる最後の布が、悲しく
も空中に舞った。

お長「ア……アッ……アウ！」

声にならぬ喘ぎとも呻きともつかぬ声をあ

げて、激しく身悶える。

久六「こりゃあ、たしかにいい匂いだ。肌か

らか汗からか、不思議な女よ」

(どれどれ……)と背黒権之介、久六とそ
の位置を入れ代る。

背黒「まさしくこれは稀代の逸品」

次々と、子分たちも鼻をうごめかして感嘆
する。屈辱に、全身の血が、逆流する思い
のお長。たまらず、叫ぶ。

お長「な、何んだってんだい、一体。かよわ
い女をこんな恰好にして、手も足もだせ
ないで、ただ、ぼんやりと眺めてるなん
て、立派な親分衆のなさることですかい
！ 妾は、もう覚悟をきめてるんだい。

早く、どうなと、するがいいよ」

淫らな視線に耐えきれなくなったの啖呵だ
ということ久六以下が、気づかない筈は
ない。

久六「そうかい、そうかい。では、ぼつぼつ

料理にとりかかせて貰いましょう」

久六の目くばせをうけた小猿が、片隅から
梯子を持ち出す。梯子と云っても、普通の
ものとは違って、幅が広く、長さも一間半
ばかりのもの。

文悦が、お長を柱に縛っている縄をとくと
三下奴の音三と弥吉が、左右から抱くよう
にして、お長をたたせ、ななめに立てかけ
られた梯子の前へ。

お長「なにするんだい！」

お長が、抵抗するのも構わず、文悦がお長の右足首を梯子の一端に縛りつけ、いよいよ身悶えするのを、小猿が左足首を掴んで他の一端に縛りつける。と、ニヤリと笑った背黒、お長の上半身を緊縛していた縄を解くと、左手を。文悦が、前のめりになるうとするお長を、おっとどっこいとばかり支えて、右手をとり梯子に縛りつける。

12、お長の緊縛された裸身

キメラは、のびたり反らされたりするお長の右足の五本の指をうつし出す。かたちのよい白い足首、麻縄、すんなりとのびたふくらはぎ。一転して、右足、足首、膝。遠景でお長の大の字のはりつけ姿を撮影。キメラ、近づき、苦痛にゆがむ、美しい顔、ひろげられた右肩から右肘、白魚のように蠢めく右手の指。一転して、左手、緊縛されている手首、二の腕、肩、そして、縄一本かかっている両乳房の喘ぎへと移動していく。

再び遠景。梯子を背に大の字のお長の全身キメラ近づき、手垢でよごれた梯子と、ぬけるような純白肌をクローズ・アップする。次に、お長の顔。鼻さきから噴き出た汗が唇へ。額の汗が頬からうなじへ。

13、土蔵の中(階下)

久六、淫らに顔をほころばせて、お長に近

寄る。

久六「お長さん、気分は、どうかい」

お長、閉じていた目をほっそりと開く。

久六「約束を破ってすまないがねえ、お園をつれてきても構わないかい」

お長、きつと目を開く。

お長「ま、まさか親分、お園さんを……」

久六「そうともよ。誰があんな美しい女を、ただで逃がしたりするものかね。第一、

お前さんより、ずうっと若い」

土蔵の戸が開かれる。

赤鬼金平、お園をひたてて現われる。

赤鬼「万事は、芝居の筋がきどおり。小半刻も自由にさせて……」

久六、ニヤリと笑う。

久六「役者はそろった。なあ、お長。俺は初

手からお前をべてんにかけていたのさ。

ただすんなりと二人を裸にしたのでは面白くねえ。次郎長の女房が、自分の女房

をたすけるために、どんなさまあ見せるかと楽しませて貰ったってことよ。面白

かったぜ、お長」

お長「ち、畜生！ よくもよくも。……一生

涯、うらみは、忘れっこないよ！」

全身の力で、縄をちぎろうとするお長。

お園「お長姐さん」

かけようとするのを、赤鬼が、（おっと

と……）と抱きすくめる。

久六「もう遠慮はいらねえ。とっとと、その

女も、あか裸に剥いちまいな！」

赤鬼、小猿、文悦、弥吉に音三達、脱兎の

ようにむらがり寄ると、ものの数呼吸もす

る間に、お園の裸身をかくすものは、うず

ら縮緬もいろの湯文字一枚。

両手で乳房をおおい、片膝ついてうずくま

るお園。その美しく輝くような、きらめく

ばかりの背なか。

一人の子分、かけ込んでくる。

子分「親分。大変です、黒駒の大親分が」

久六「黒駒の……」

（チエッ！）と舌打ちした久六、

久六「赤鬼、料理はあとでえ！ 二人とも牢

にたたっ込んでおけい！ 決して手を出

すんじゃあねえぜ！」

久六、背黒たちとともにでてゆく。

14、22 省 略

黒駒の勝蔵は、大場の久六の叔父御にあた

る。叔父御とは、先代親分が五分五分でつ

きあっていた兄弟分のことである。

ついでに、叔父貴とは、先代親分の弟をよ

び、叔父様とは、先々代親分の兄弟分を指

す。久六の先代大場の吉兵衛と、勝蔵は兄

弟分であった。従って久六は、勝蔵には頭

が上らない。

その黒駒が、手土産代りにさし出したのが

大政であった。お長がお園に耳打ちしたと

おり由比にいた大政は、黒駒と運悪く街道でばったり出逢い、脇差でわたりあったものの多勢に一人。到々、搦めとられてしまった。罪名は、次郎長と同じく和田島富五郎殺害の下手人としてである。

「大政なら次郎長の行先を知っているに違いないえ」と、黒駒がいい、久六も頷く。次郎長の行方をさき出し、これを与力西林馬之助に知らせてやれば、西林がどれだけ喜ぶことか。

「奴に、吐かせるのは、大変だぜ」という黒駒に、久六が、ニヤリと、自信あり気に笑って見せる。

23、久六宅・土蔵の中（階上）

今まで責められていた階下と異なり、階上の半分は格子の入った牢になっている。その格子に、手足を大の字に緊縛されているお長。その足もとに蹲まり、泣きじゃくっているお園。お園もまた半裸の身を、自分の錦紗の帯揚げと朱珍のだてじめで縛りあげられている。

お長が、久六の家に駕籠で、運び込まれたのが今朝。もう陽は西に傾きかけている。土蔵の戸が開く（何、何しやがるんではない。一思いに殺せ、殺しやがれい！）という声がする。階段を上ってきたのは久六であった。

久六「お長姐御、また一人、ふえましたぜ。

これから、ひとつ、三人責めといきやっしょうか」

赤鬼と小猿が、お長を格子にしばらくつけた縄をといてゆく。不必要にお長の肌を撫ぜながら、背黒、その間もお園に拔身をさしつけている。

小猿「さあ、綺麗なおてをうしろに。そんな恨めしそうな顔をしないこと。さあ早く。さっきから、下では客人がお待ちかねなんですぜ」

お長、しかたなく両腕を背後に廻す。肉づきのよいお長の上半身に、汚れた麻縄が気持よいほどぐいぐいと喰い込んでいく。

小猿「たちねえ！」

縄尻で、お長の尻をうつ。

階段をおりる一同。

24、土蔵の中（階段）

キヤメラ、お長の足元から膝をうつす。久六の足が蹴る。縄尻を持つ小猿の得意気な顔。目をつむり、諦めきった表情でよろよろとおりていくお長。つづいてお園のよるける足、乱れる湯文字。背黒のもっさりした顔。最後に赤鬼金平。

四人の男にかこまれた、ただひとり全裸のお長のあわれな美しさと、湯文字一枚で羞恥をかみしめるお園。

25、土蔵の中（階下）

お長の足が、ハッととまる。突如、

お長「政……政五郎……！」

大政「姐……姐さん！」

お長「（激しく）見、見ないで、政五郎！」

大政「合点！ 姐御。どんなことがあってもこの目は、そちらを向いて開きやあいたしませんぜ！」

一瞬で事情を察した大政、両眼をしっかりと閉じる。

黒駒「ハッハッハ……。これはこれは、久六の。この大政にどんな方法で吐かせるかと思ったら、これはまた……」

と言いながら、ゴクンと生唾をのみ込み思わぬ全裸のお長の姿に見とれる。

黒駒「これはお長姐御。長らく御無沙汰して

おりましたが、思わぬ所、思わぬお姿で

お逢いしましたな」

黒駒は、三度ばかり次郎長の家で草鞋をぬいだ事があった。

屈辱で身も心もおおる思いを、辛うじて押えたお長。

お長「これは、黒駒の親分さんで。次郎長女房お長、ちょっと仔細がございまして、

あさましい姿でお目にかかります」

黒駒「なんのなんの。いつぞや御厄介になりましたおり、こんな弁天さまのような女子さんとせめて一刻……と、思っておりやした。それが今こうして……」

お長「おことば、いたみいます」

心のそこで、齒がみしながら、お長。弱身を、少しでも見せまい、こちらが羞かしがれば、それだけ相手の思う壺、と気づいてわざと、かがめていた腰をたてて、胸をはる。

豊かな乳房にひきよせられるようにお長に近寄った黒駒。

黒駒「フッフ。目に毒なこと。ごめんなすって」

ちよっとお長の肌に触れる。

お長「こ、これは、また、ひどい御挨拶」

黒駒「なにに、ちよっとした手土産代り」

今度は、ぐいっ！と乳房をわしづかみ。大きく骨ばった黒駒の両手がピクピクと慄えている。

黒駒「お長さん……」

黒駒の口が近よって、お長の唇にふれようとした、途端、

お長「大親分さん。こんな所を次郎長が見たら、ただではすみませんよ。おやめになつて下さいまし」

黒駒「その次郎長だが、どこにいる？」

と、云ってしまった黒駒、

黒駒「久六。お手並みを拝見しよう。この

男の口を割らせて見なされ」

お長「なんですって……次郎長の行方を、大

政に……」

久六「さよう、お前さんを餌にしてな」

お長、途端、片足をあげて、黒駒の脾腹を蹴り上げる。

お長「畜生！」

黒駒「こいつが！ よくも蹴りやがったな」ニヤリと笑った久六、小猿に、押しすえられたお長の肩に手をおき、

久六「前口上はそこまで、お長姐さん。愈々

本番といきやっしょうか」

久六と小猿、お長を真中の柱——最初にあぐらしばりにされた柱のところまでひきずっていくと、黴色の荒縄で、ぐるぐると、

細腰をしぼりつける。

26、お長の裸身

キメラ、遠景でお長の全身をとらえる。

高手小手、細腰にかかる黴色の荒縄四筋。

不安定な上半身。両足を前に伸べ、膝頭を

合せようと、けなげな努力を続けるお長。

その横顔、長い睫毛、懸命な、まなざし。

しかし、中腰である。つい、離れ勝ちな膝

頭……。ハッとしてふみ締め直す両足。静

寂……。片隅に投げ捨てられたようにつま

かさなっている各種各様の縄……。 (アー

アッ！) 呻きともつかない、お長の唇か

ら洩れるひびき。両膝を合せようとするが

中腰の悲しさで足の疲れが激しいのだ。

ついに疲れ切ったお長は、がっくりと黒髪

をたらし、全身の力を抜く。

久六がニヤリとする。

27、土蔵の中(階下)

久六「お長さん、どうしたい。自分でそんな恰好をするとは、お前さん、よほど飢えていなさるな」

久六の目くばせをうけた小猿、ニヤリと階上にあがっていき、赤鬼が、壁ぎわの柱に緊縛されている大政に近づく。

赤鬼「大政さん、出番ですぜ」

弥吉と音三と三人がかりで、大政のしっかりと閉じた両眼をひらかせ、その瞼の上下に、絆創膏をはりつける。

赤鬼「大政の。見えるでしような、姐御が」

大政「……」

大政の目に、お長の無惨な姿態が映る。途端、ありとあらゆる罵詈雑言を久六たちに浴びせる大政。

恰も、それを肴にでもするように、三下奴

の手で、次々とはこびこまれてくる酒肴。

お長のまわりを、そして、これまた天井か

らおりた鎖に立ちしぼりされ、猿ぐつわを

はめられてものひとつ言えないお園のまわ

りで、酒をくみ交す十数人の博徒たち。

小半刻もたつて階上からおりてきた小猿の

手に、奇妙なものがあつた。

物干ばさみが十幾つ。それぞれ、握る方に

強靱な長さ二丈もあろう糸が、一筋ずつ。

ニヤリと笑った小猿。大政に近寄ると、

小猿「吐きなよ、次郎長のありかを。吐かね

えと、こういうことになるぜ」

パチンと、物干ばさみを音させた小猿、大政の鼻の先きに、それをはさむ。

大政「な、なにを、なにをしやがる！」

小猿「これと同じことを、お長姐御にしてさし上げようと云う寸法よ。ただし、はさむ場所はちよつとばかり違うけどな」

小猿、大政の上唇に、パチンとひとつ、もうひとつを下唇にはさむと、夫々の糸を、坐つて酒をのんでいる弥吉や音三たちに持たせる。

小猿「ひっぱって見な、糸は、きれねえよ」

弥吉や音三が、糸をひっぱるたびに、大政の唇が、まくれあがり、奇妙な形にゆがみ伸び、ちぢむ。

久六「小猿、じゃ、それを、お長姐御に」

小猿「姐御のどこにですかい、親分」

久六、ニヤリと笑つて、

久六「先ずは、おっぱいといけ」

(合点!)と、小猿が、無惨な姿態のお長に近寄ると、ぐいっと大きく物干ばさみを開き、左右の乳首を、はさむ。

お長「い……。 (痛ッ!)」

ピクツと、釣り上げられた真鯛のように全身がけいれんする。

小猿「姐御、乳首でさえその痛さ。本番となりゃあ、どれほどいたむやら……。やい、大政、白状しちまいな。さもない

とお前の姐御が、地獄の苦しみに、のた打たなくっちゃあならなくなるぜ」

小猿が、左乳首の糸を久六に、右を黒駒にそれぞれ手渡す。

黒駒「こいつは、面白え釣りだな、大場の」

黒駒が、ぐいーと糸をひく。右乳首がとび出すようにふくれ、乳房が伸び、プツンと音をたてて、物干ばさみがとぶ。

哄笑が、湧く。

赤鬼「黒駒の大親分、大きい獲物を釣りにがしやしたな」

久六「大政、白状しちまいな！」

物干ばさみで、上下の唇を、はさまれた大政、何か、わめきつづける。が、それは、肯定のひびきではなかった。

久六「しかたがねえ。じゃ、叔父貴、お長の阿魔を、堪能するほど痛めつけてやっておくんなせえ」

黒駒、ニヤリと笑うと皆の拍手喝采のなかを、千鳥足でたち上り、お長の前に、よたよたと近づく。席をたつて、回りを取囲む一同。

黒駒「よい匂いしてるじゃあねえか、この阿魔……」

久六「やっとお気付きで」

久六から、さし出された物干ばさみを手にした黒駒の勝蔵が、ニヤニヤしながら目標を定めた。

お長「キ……。キヤツ。ヒイツ！」

久六「もう一本」

黒駒、酔いに似合わず物干ばさみを器甲あつかつてゆく。

お長「キヤツ。や、やめ、やめ……。て。やめてくださいってば……」

三本が、四本となった。

四本の糸が、黒駒、久六、小猿、背黒の手にとにひかれていく。糸のながさは二丈余り……。背黒はそれを左小指にからませて酒盃をあげる。背黒が、酒盃を上下するたびに、お長の、すすりなくような呻きが、洩れる。

大政「や、やめてくれ。云う。云うから、やめてくれ！」

大政の絶叫。と、打ち返すように

お長「政……。五郎。いけないわ。ここまで、これまで辛抱してるのですもの、言わないで、金輪際、言わないで……」

大政「だって……お長姐御！」

お長「云わないで……。決して、けっして言わないで……。妾はもう、どうなってもいいのよ」

トタンに久六が、糸をキュッ! とひきしぼったものだから、お長の口から、悲鳴があがる。が、次の瞬間、

お長「妾は、八つ裂きにされてもいいの。だから、あの人の居場所だけは、言わな

いで……政五……郎……」

久六「しぶとい阿魔だぜ、全く。この地獄責

めにも、参らねえとは！」

お長の身体から、出る糸が、やがて、六本にふえる。

お長、齒をかみ合せ、全身を掻き寄せながら、耐えている。

小猿「お長さん、ほらさ」

小猿が、お長の口をあけさせ、茶碗の水をながし込む。

ゴクゴクと、のどを鳴らして、のみ込むお長。やっと、ひといきついて、

お長「親分がたは、ずいぶんと、あてぎなことをなさるご趣味がござんすのねえ」

背黒の指がうごく。

お長「ヒイ……こんな、こんなことをして

あとで、どうなるか、判ってるの。ヒッ

！ヒイ！……や、やめて、止めて、く

だ、さい！」

お長の肌の匂い、汗の匂いが、土蔵のなかに、あふれる。

黒駒「やめねえぜ、お長さん。明日もあさっ

ても、俺は、こうしていてえんだ」

たち上り、尚もお長の前に坐り込む黒駒の勝蔵。そのまわりを、黒山のように取り囲む子分たち。

その輪のなかで、

(ヒイ！ ヒイ！)と叫びつづけるお長。

茫然と、見つめるほかはない大政の顔。

28 34 省 略

黒駒の勝蔵と、大場の久六、与力西林馬之助の屋敷を訪れて、事の次第を告げる。

西林「して、いかに責めても、白状せぬと申すのか」

西林の蒼白くむくんだ顔がニヤリと笑う。

35、深夜の街道

駕籠が五つ。——一番前は黒駒。次にお長つづいてお園、四番目は、猿ぐつわをはめられた大政。最後は、大場の久六。

前後を囲む十数人の子分たち。

久六の家のある吉原宿から、田子の浦、由比、清水と、深夜の街道を一散にかけぬけて駿府。

清水外れから、あとを追う二つの影。七五郎と、豚松である。

36 42 省 略

和田島富五郎をたたき斬り草鞋をはいて二日。遠州は、天竜村、天竜小三郎のもとに泊っている次郎長のもとへ、松助と云う百姓が、お長の危機を知らせにくる。松助は、かつて、次郎長が、生命を救ってやった男である。急ぎ、清水へかけもどる次郎長たちの前へ、たちはだかる駿府町奉行配下の捕手たち。

突破した七五郎と豚松が、清水の町外れで西へとぶ五つの駕籠を発見。あとを追う。

43、駿府町奉行西林馬之助屋敷・中庭

七五郎と豚松が忍び込む。竹林にかこまれた離れ屋敷。雨戸のすき間から、のぞき込む七五郎……思わず逆上して雨戸を蹴破り、乱入していく。

44、同・離れ屋敷

乱闘——

見守るお長と、お園。

45、お長の裸身

右足首に絡まる鎖。けいれんするその小指屋から、縄目のあとがくっきりと残っている太腿。……大きく両手両足を開かれきたお長の遠景。

西林「おもしろくなったようじゃな」

たち上ると、小猿のさし出した梯子の端を背後からお長の尻にあて、グウィッと、前に押させて、梯子を固定する。

弓なりに、反らされたお長の唇をかみしめて、苦痛と屈辱に耐える横顔。

46、西林屋敷・離れ座敷

大政と豚松は、壁に緊縛されている。

久六「七五郎。おめえさんの女房を、今からたっぷり可愛がってやるぜ」

小猿に、つきとばされて縛まるお園。

七五郎「お園！」

お園「あんた！」

かけ寄ろうとする七五郎を、弥六や、音三

が、縄尻をひいて、とめる。

黒駒「東海道随一の仲のいい夫婦だときいていたが、まさしく、仲のおよろしいこつて。……かまやあしねえ！ ひんむいっちやえ！」

文悦「合点でい、親分。おい、小猿、そのガタガタ言うのに、猿ぐつわをかましてしまいな」

小猿、暴れ狂う七五郎に、猿ぐつわをかまして、正面の柱に、縛りつける。

西林「さあ、お園。お前の番だぜ」

背黒権之介が、大刀を抜くと、七五郎の咽喉もとにつきつける。

久六「お園さんよ、自分で裸になるかい。それとも、子分たちにひんむいて貰いてえかい……」

静寂——。

お園「ゆる……して。妾が……妾が、何でもするから」

黒駒たち、ニヤリと笑う。お長と違って瘦せ気味の、それだけに、ひきしまったお園の身体。

文悦が、お園を縛った縄をとく。自由な身になったお園、次の屈辱を思いうかべて、蒼白になり、やがて、美しい頬に、紅がさす。

西林「早く、脱ぐことだな」

声とともに、お園の白い手が、水色ぼかし紹友禅の長襦袢の襟元でためらい、薄桃色

の正絹の腰紐にいく。

お園「ほんとに、妾が、は、はだかになればあの人の生命は、たすかる。……ほんとに、本当に救ってくれますの……」

黒駒「西林の旦那は武士。武士に二言はなからうよ」

大きく頷く西林。

お園の白魚のような手が、思い切ったように腰紐をといてゆく。

紹友禅の前が割れる。

じいっ——と、西林たちの顔を眺め、お長の惨めな姿態に、目をやったお園。

お園「ほんとうに、許して……」

さっと、右、左と、長襦袢の袖をぬぎ、つづいて稀頭晒もめんの肌襦袢をぬぎ捨て、上半身を剥きだして、黒駒の勝蔵の前に二歩進みでる。

お園「親分さん。さあ、この身体、どうにでも、して下さいまし」

かたずを呑む勝蔵。

西林「まだ、残っているな、お園」

お園「……はい」

お園、さすがに、ためらう。

上部に真紅の浜縮緬の腰布をあしらった純白の湯文字。それを、こんな男たちの前で取らねば、ならないとは。

お園、じいっと、目を閉じている。

二呼吸、三呼吸……。

お園の手が湯文字の紐に触れ、

お園「ほんとうにですよ、親分さん」

黒駒、大きく頷く。

震える手が、紐をとく。

ゴクンと生唾をのみ込む文悦。

音もなく、お園の足もとにおちる湯文字。

背黒が、その後立立つ。

背黒「手を廻しな、お園さん」

お園、静かに両手を背後に。

きりきりと、二巻き。正面、床柱までつれていき、余った縄で、縛りつけると、腰の下に、床几をひとつ。

黒駒「ボチボチ楽しませてやるぞ、お園」

お園、激しく全身で抵抗する。

猿ぐつわのなかで、七五郎、何か、大声で叫びつづけている。

（やめろ！ やめろ！）と叫びつづける大政と、豚松にも猿ぐつわが、はめられる。

狂騒の数刻……。

お園、必死の力で、文悦、小猿たちの魔手を拒みつづけ、叫ぶ。と、ぐったりとしていたお長が、

お長「黒駒の親分さん、いやがるものにするよりも、妾に……妾をかわりになさってはどうかしらねえ」

黒駒「ほほう、姐さん、お園がうらやましいとでもいいなさるんで」

お長「そうともさ。関八州に名のうれた勝蔵

男性虐待快樂術 (第二話)



魔子さま御尊像

馬族保

(A) 水着を買う女

北川泰介は、午後四時すぎ映画館を出た。真夏の太陽はまだ高くカンカン照りに照りつけていて、冷房装置の守備範囲から脱け出た泰介を熱湯のような暑気が、どっと押しつづんだ。

北川泰介は、今日はもう集金をやめようと思った。あと一口、十万円が残っている。取引の堅い得意先であった。泰介はその集金を明日に回すことにした。レストラン・フランスの前の電話を使って相手に、その意を伝えた。送話器を置いて首筋の汗を拭くと、泰介は昼食をぬいたことに気がついた。食欲が出て来た証拠であった。

北川泰介がレストランに這入りかけたときである。

一台の自動車が、音もなく滑りながら停った。運転台の助手席から、ハンティングのずんぐりした男が降りた。

泰介が、ふと異様な予感がしたのは、その男の行儀正しい挙動であった。高貴の人の前に出るときのような姿勢を取って車のうしろのドアをひらき、浅くではあったが、上体を

前に折ったまま車の主の降りるのを待っているのである。

ロングヘヤーの若い女が、背を低くしながら、外に降り立った。

サンガラスの顔がツンと空を見るようにうそぶく。颯爽としたグラマーだった。黄いろの地に濃紺と黒のゴムの葉をあしらったワンピースを着ている。腿の両側が支那服のように割れ、襟と裾に黒と銀系のふち取りが縫いつけてある。靴は、うすい紫いろのエナメルハイヒール。

泰介は食欲を忘れた。

この女こそ、永年探し求めた理想の女性であるような気がした。

男は、蝶ネクタイをピンと立てて随いてゆく。正に待従であった。女はふり返る通行人の視線を一身に浴びるのも意に介さないように、カツカツと舗道に小気味よい音を立てながら歩き、微塵も姿勢を崩さない。泰介も蝶ネクタイの男に続く。

間もなく「ひまわり」という洋装店の前まで来ると、ふたりはその店に這入った。泰介は左側の舗道に方角を変え、そこから観察することにした。

買物はどうやら水着らしく、店内に飾られ

た水着の傍に近づき蝶ネクタイが女にあれこれ伺いをたてている様子であった。女は、おうようにうなずいていたが、決まったとみえて、蝶ネクタイにハンドバッグを渡した。黄と緑の大柄のデザインの水着であった。店員が包装袋に入れて差し出すと、引き換えに蝶ネクタイが代金を手渡した。

二人は店を出た。

女が何か合図すると蝶ネクタイは手を挙げてタクシーを呼んだ。

ふたりを乗せた車は駛り出した。泰介も、あとからついてゆく。

大甲橋を渡り切り、左に少し、それから右へ曲ると「ホテル・りんどう」の前の車寄せにつく。北川泰介は車を捨てた。三十メートルぐらいの距離を置いている。蝶ネクタイが助手席を降り、後部ドアの把手を引いて最敬礼すると、貴婦人のような冷たい澄まし顔でゆっくり地上に靴をつけた。

ふたりの姿はホテルの玄関の中に吸い込まれるように消えた。

北川泰介はホテルの前を時間をかけて往復した。

彼の脳裡が早いテンポで回転しはじめる。

女と蝶ネクタイの関係は何だろう。まだ午後

五時をちょっと回った時刻であった。夏の午後五時は昼間の明るさだ、だいいち、水着を買った女の意味は単に海水浴のための準備であろうか。待従のように鞠躬如としている蝶ネクタイの男と、世にも驕慢らしい美女との配合は何なのか。泰介は自己流に勝手な想像をめぐらせた。ホテルの一室で、何が始まるうとしていくのか。

永い、永い時間に思われた。

もう十本余りも、ハイライトを喫っては捨てた。ようやく夜の幕が降りはじめ、ネオンの輝やきが眼に浸みて来た。その間、十組ほどのアベックがホテルの中に吸い込まれたが、出て来たのは僅かに一組だけであった。

泰介は腕時計をネオンに照して時刻を確認した。七時三十分を廻っていた。

車が一台、ホテルの車寄せに停まった。

ホテルを出て来たのは、紛れもなく蝶ネクタイの男と女だった。泰介は緊張した。急いで大通りに走り出、空車に合図した。ホテルの前にいる車のあとを追うように命じ、彼は前の助手席に坐った。

来る時に渡った大甲橋を引き返し、三叉路まで走ったところでシグナルは注意信号から赤にかわった。

「チエッ、ついてねえ」

泰介は舌打ちした。運転手が怪訝な眼つきで彼を見た。

「仕方がない。レストラン・フランスまでやってくれ給え」

「承知しました」

泰介はレストラン・フランスの前で下車した。夕食を摂るつもりであった。

「あっ」

泰介は眼を凝らした。黒のハンチングに見える覚えがあった。あの蝶ネクタイの男が右側から寄って来て、泰介をすうっと追い越し一足お先にフランスに這入ってゆくのである。女の姿は見当らない。

北川泰介は、意を決したようにその男のあとに続いた。

(B) クラブ・カルダン

レストランの奥まったテーブルに男は座を占めた。泰介は、つかつかと男のテーブルに近づいた。

「失礼ですが——」

ていねいに頭を下げる泰介をみて、男——室伏包重は、見知らぬ相手に眼を瞠った。

「私は、こういう者ですが……」

泰介は名刺を出した。室伏はしばらく名刺を眺めていたが、

「あ、協和印刷さんですか」

「そうです」

「あなたが社長さん？」

「はい」

「で、僕に何か？」

「お邪魔しても構いませんか？」

「どうぞ、どうぞ」

丈が低く、肥っているの、何となくだぶだぶした感じの男であるが、眼が細く、如何にも善良そうな風貌だ。

「実はぶしつけながら、あなたにお近づきになりたくて」

バツの悪そうな表情になるのを意識しながら、泰介は腰を下ろした。

「何でっしょろ」

「ま、お近づきのしるしに一ぱい」

ウェイトレスが運んで来たビールを契め、彼自身も一気にグツと飲み乾し、

「妙なことをお訊ねしてお気を悪くなさらないで頂きたいのです。実は五時半すぎ、あなたと御一緒だった、御婦人ですが、あの方はあなたの奥さまですか？」

「——」

室伏には、この初対面の男の質問は衝撃だったらしく、飲みかけたビールを途中でとめて軽く咳き込んだ。

「いや、違います」

「そうですか。無様なことをお願いするようですが、よろしかったら私にも、あの方を御紹介して欲しいのですが——」

「紹介する？ いいですよ。しかし……」

警戒しているな、そう泰介は直感した。話題の受取り方をやわらげるために彼は生ビールの追加とエビフライのほかに二、三、料理を注文した。

「さっきの話ですが、どうでしょう。御紹介下さいますか？」

「いいですとも、容易い御用です。本当は、あなたの近くにいます人ですよ。いや、近いよう、遠い人かも知れませんか」

「……？」

「今に分りますよ。じゃ、遠慮なくグツと戴きますか。乾杯！」

二人の男はなんとなく乾杯した。それからいい合したようにすぐ外に出た。室伏包重はタクシーを呼んだ。三百メートルも走ると車は停まった。

クラブ・カルダンのネオンサイン。

室伏は先に立った。地下に向かって階段がついていて、泰介も無言のまま続く。透明硝子の入口に店の制服を着たドア・ボーイが屹立していたが、恭々しく把手を引いた。

「魔子さん」

と室伏が指名した。

「はい。畏まりました。魔子さん」

円い店内の、右寄りのボックスに案内された。クラシックの音楽が流れ、店内の暗い水いろの海底の色彩感覚の中から、夜目にも新鮮な人魚が生き生きと浮かび上り、颯爽と近づいてくる。

「いらっしゃい」

津島魔子は、文字通り、あでやかに商業スマイルを頬にうかべ、泰介に対して軽く会釈した。

「こちら、北川泰介さん」

「わたくし、魔子。よろしく」

ビールとつき出しが運ばれると、室伏は魔子のクッションに席を移し、彼女の耳もとに顔を寄せてしきりに耳打ちした。昼間のロングヘヤーをうしろで束ねている魔子の顔は違った感じを与えた。時々うなずき、切れ長の眼をじろりと泰介に向ける。

二つのコップにビールを注ぎながら、魔子は、

「わたくしを何処でごらんになったの？」

「ひまわり洋装店です」

「そう」

「私はこの年令になるまで貴女のような魅力あふれる女性を見たことがありません。私は奢り驕^{たか}ぶった美女が好きです。貴女を見ていたら、跪きたくなりました」

「なぜ？」

「わかりません。とにかく圧倒されてしまったのです」

「この室伏と同じ心理ね。わたしの奴隷になりたくなるのでしょうか？」

「はい」

「ほ、ほ、ほ。魔子の命令なら、どんなことでも聞くの？」

「はい。そりゃ、もう——」

「ほんとう？」

「本当です」

「わたしの足の指を、一本一本しゃぶらせるわよ」

「綺麗に洗って下さるなら」

「ばっか。お前が洗うんだよ」

魔子の言葉使いは、しだいにぞんざいにな

った。

「はい」

「わたしの体中にキスするかい？」

「はい、御命令なら、よろこんで」

「ふん、すぐ夢中になるくせに。わたしは魔子の国の女王さまだよ。いいかい、お忘れでないよ。魔子女王さまに仕える家来は、女王さまのために税金を納める義務があるんだ。お前も、魔子女王さまに、勿論、税金を納めるだろうね」

「額は幾らぐらいでしょうか？」

「毎月三万円。お前は協和印刷の社長だそうだね。わたしののような絶世の美女に侍づく光栄に浴するのに、たったの三万円では、安すぎると思わないかい？」

「——」

「室伏、ビール」

魔子の差出すコップにビールを注ぐと、彼女は立てつづけに二、三杯、飲み乾した。

「北川泰介、わたしの飲んだビール、飲ませてあげようか？」

泰介の表情を読むように、切れ長の眸がじっと睥睨する。

女はこういうとき、男をなぶって愉しむものだ。初め、泰介にはその意味がよくわから

なかった。

「わかんないのかい？ いいわね、よくお聞きよ。いま、わたしの飲んだビールを、もう一回出してお前に飲ませたげようか、とってんのよ」

果して効き目は、てきめんであった。北川泰介の頬が熟柿のように火照った。鼓動が高まり、おもわず呼吸が弾んだ。

津島魔子は、透き徹る声をあげて、さも愉快そうに笑った。

(C) 女王蜂

画図湖畔南口、人家もまばらな畑地に、五十平方メートルばかりの小さな、山小屋風の、いかにも凝った赤い屋根の家が建ったのは、それから間もなくのことであった。

周囲には、一軒の農家があるだけで、覗かれる気遣いもないのに、ブロック塀を七段の高さに積みあげ、鉄扉には特に頑丈な錠前が掛かっている。

人造大理石の門札には『津島寓』という表示が嵌め込まれていた。

十一月初旬の某日、なま温い夜であった。十二時近く、一台の自動車がひらかれた表門

を這入り、警笛を鳴らしながら、とまった。

出て来たのは室伏包重だ。

「お帰りなさいまし」

車の主に向って一揖した。毛糸のショールを片卷きした姿で、運転席からスラリと降り立ったのは、津島魔子だった。

「室伏、今日はお客様だよ」

魔子はアゴをしゃくって、カールームのクッションを差し示した。

「地下室に放り込んでおけ」

「はい。畏まりました」

室伏は、車室にだらしなく眠りこけている若い男を車庫まで搬び、その車庫の横の地下室に通ずる四角いくぐり戸をひらき、自動車から男の軀を、かけ声ともなり声ともつかぬ声をあげながら引きずり出し、地下室に押しこんだ。

小さな声でうわ言のように何かを呟く男の顔が、すうーっと地下室に向かって暗転し、鈍く重い音を発して落ちた。

「魔子さま、新入りですか？」

浴室でシャワーを使っている魔子へ、硝子越しに室伏がきく。

「あいつ、しぶといたらないわ。仕方ないから睡眠剤を吞ませてやった。うんとしごいて

みたいの。なあに、いくらしぶといたって、わたしにかかったら、三日ともたないだろうよ。暖房、通しといておくれ」

「はい。女王さま」

「魔子女王さまッ」

「はい。魔子女王さま」

「室伏、出るわよ」

「はい。女王さま！」

室伏は心得たもので、タイル張りの床に両膝を揃えて坐し、バスタオルを目の高さに捧げ持って待つ。上体をのばして膝で立ち、魔子のピンクに上氣した軀を、胸の隆起から拭きはじめる。

魔子は男の膝に片足を乗せ、その眩しいまでに輝く裸身をあずけたままである。肉厚く発達した腰部の谷間の分水嶺をたんねんにバスタオルで吸い取らせる。

魔子は唇を傲慢に尖らせていう。

「奴隷、すぐに奉仕に来るんだよ。シャワーで体を洗い、汗の匂いを落しておいで。魔子女王さまに失礼のないようにな。わかったかい？」

魔子の白い手首が弓なりにしなって、室伏の頬にパンパンと小気味よい音をたてながら往復ビンタを浴びせた。

「ボヤボヤおしでないよ」

魔子は部屋履なしで、自分の居間に引き揚げた。

「室伏の燃えていたうずきが昂りを増した。

底知れぬ魅力をもちつづける魔子の素晴らしさに、しびれた。

体を洗っていると、もう魔子の性急な声せつかちが筒ぬけて来た。

「おい室伏、わたしの部屋履」

「はい。唯今」

ふうふういいながら室伏は鉢の水滴を拭き取り、パンツをつけて、ドアの前に立つ。コソコソとノックする。

「這入れ」

把手を回し、顔を覗かせる。

「四つ這いになり、わたしの上履を口に啣えて持っただい」

緋色の絨緞の上を、いわれたとおり四つ這いになって、魔子の上履の一つを手を持ち、片方のもう一つを啣えて伺候すると、声の主は虎の毛皮の上に安楽椅子を置き、頭を椅子の背に凭せかけ、ゆっくり煙草をくゆらしていた。

風呂から上ったなりの姿だ。

「穿かせて」

片方ずつ額の上に捧げ持って穿かせる。すると魔子の足が彼の頭を強く押えつけた。額が割れるように痛い。

「室伏、お前は燃えているわね。わたしも燃えているわ。さあ、魔子女王さまをうやうやしく拝むのだ。わたしが、もうよし、というまで拝むのだ。それから、脚に百宛キスするのだ。聞いているのかい？」

魔子は苛立たしそうに眉を寄せ、室伏の頬を蹴った。

「は、はい、聞いておりますとも。魔子女王さま」

「脚キスが終ったら、本番だよ。あらゆる奉仕をつくすのだ。いいか奴隷、魔子女王さまをカッカと燃えあがらせるんだよ。舌を尖がらせ、強く柔かく、お前の唇を、鯉が水を飲むようにパクパク動かす作業に精魂こめるのだ。舌を火のように熱くしろ。いいか。そのときは熱湯でうがいし、温めることを忘れるな。さあ、その奴隷、わらわの快樂の道具となって奉仕しや。こころをこめて、最高のテクニクを編み出すのじゃ」

「はーっ」

室伏は、裸の女神の脚もとに平伏した。魔子の常用する香水の匂いがプンと鼻孔を刺し

た。

室伏は身ぶるいした。

岩男誠は眼を覚ました。例の地下室の部屋である。

「おれは、どうしたのだろうか？　ここはどこなんだ？」

朝なのか夜なのかそれも分らない。キャバレー・青い塔で、特別製の女と出会い、意気投合した記憶がはっきり残っている。女を抱いて踊ったのも覚えいる。甘いカクテルを二人で飲んだことも覚えてる。そのうち、何の話題であったか記憶にないが、女と口論し彼女を殴りとばしたように思う。幸いに、モケットを張った長椅子の上に倒れたので、怪我はなかったような気がするが、豹のように精悍な感じのする女であった。しなやかな軀に弾力があつた。

「彼女、たしかに咬みつきやがったな」

記憶の線をたぐってみて、手の甲の痛みに気がついた。

歯型が残っている。気付いてみるとズキズキと痛むのである。その後のことはさっぱり憶えていない。

岩男誠は、しきりに空腹を覚えた。昨夜、

三軒ばかり梯子して廻ったらしいが、食物といえは、わずかにチーズを少し口にしただけである。

「それにしても、此所はどこだろう？」

彼は起き上った。着た切り雀の背広姿で寝込んでいたらしいこともわかった。それにしても、この格子のプラスチックの井桁の棧は何だろう。部屋の隅に水洗便所が設けられていて、出入口一つない。まるで座敷牢ではないか。

その格子の外側に人の気配がした。

「あつ、貴女は？」

たしかに昨夜の女だ、むらさき色のピカピカ光るガウンを着ている。白い毛の上履を穿いている。素足が岩男の眼に灼きつく。

「おめざめ？」

「ここはどこなんですか？」

「わたしの家よ」

「帰して下さい。こんなところに僕を閉じ込めたりして。無礼な」

「ほ、ほ、ほ、もう出られないわよ」

「何ですって？」

「もう出られないというんだよ。ばか。お前は、わたしの捕虜。ねえ、わたしの家来になつて、わたしに仕えない？」

「芝居じみた、悪ふざけをいうな。家来だつて？ ばかばかしい」

津島魔子は、突然、勝ち誇ったように高らかに笑い出した。

「ほ、ほ、ほ。吠える犬には捨扶持がないわよ。二、三日そうやって、瘦我慢しているがいいわ。あしを踏まれた犬のようにヒイヒイいわせながら、すぐにわたしの足下に跪かしてみせるから」

魔子の姿は階段に消えた。なまめかしい香水の香を残しながら。

岩男誠は妻の弥生のことを想うと気が遠くなるほど気掛りになった。心痛しているに違いない。

しかし、この咽喉の渴きと空腹は堪えられなかった。

長い時間が経った。彼は、そろそろ女に対する反抗の気力を失いかけていたが、まだ内蔵する憤りまで霧消したわけではなかった。足音がした。

岩男誠は、山猫のような激しい眼つきで、むっくり首を上げ、その方をにらみつけた。「わたしの可愛い恋人さん。いい加減、意地を捨てては如何」

「――」

「咽喉が渴いたでしよ。お飲みなさい」

棧の間から、小さなコップを口につけ、ゴクゴク水を飲んだ。

「おいしい？」

魔子は含み笑いをしながら、男をなぶるような眼をしてきく。

「――」

「ね、それ、わたしのオシッコだったら、どうする？」

「――」

岩男誠の眼に殺気が走った。

「おお、こわ」

魔子はオーバーな身振りをして、とび退いた。

「ふ、ふ、ふ。もう、だめ、お前はわたしの奴隷だよ。そこに額をこすりつけて、わたしを三拝九拝するがいい」

魔子はガウンの前をはだけた。水着姿である。脚を大きくひらき、

「下郎、頭が^ず高い。さがりおろう」

そこへ北川泰介が陶器の皿に肉饅頭を盛ったのを手にして現われた。魔子に室伏が命ぜられたものを、訪ねて来た泰介が中継したのである。

「今日は、魔子女王さま」

と、いきなり魔子の平手打ちがとぶ、肉饅頭は皿ぐるみ床の板張りに落ちて転がった。

「下郎、さがれ！」

「はーっ」

泰介は洋服のまま床に跪き平伏する。魔子は上履の下に泰介の頭をふみ敷き、ニッコリ笑って岩男誠を見た。

「どう？ わたしの魔力がこれでもわからな
いというのかい？ わたしを殴っておきなが
ら、なぜ謝ろうしないの。腕力では敵わない
から、わたしは、わたしの知恵と魅力で勝つ
までだよ。泰介、包子をその分らず屋に投げ
てお遣り」

岩男誠の目の前に肉饅頭が放り込まれた。
岩男は、格子越しに魔子を見た。泰介が正面
に向き直って正座している。その首を跨いで
魔子は泰介の肩に騎乗し、裸の脚を五十度に
ひらき、人間椅子の膝までのばしている。泰
介の頭髪をグッとつかみ、騎乗の均衡を保つ
ている。

「岩男誠！ その肉饅頭をお食べ。食べたら
わたしの奴隷。わたしに忠誠を誓うのだ。お
前はお腹が空っぽだろう。さあ、お食べ。食
べたら、そこに匍いつくばってわたしを礼拝
するがよい。美しい魔子さまの御尊像を拝み

奉つるがよい。お前は人間の皮をかぶった豚
ではないか。もう強がりには、およし。豚は豚
並みに、楯つくことをやめ、わたしの豚にお
なりっ！」

井桁の棧を隔てて、美しい魔女とイワオ薬
局の若い店主との眼が、青い火花を散らして
睨み合った。

(D) 魔子讃歌

うす絹の 雪のはだえに

目もくらむなり 膺たけき女神像

われら民くさ 尊きをおがみまつり

大いなる欲びに うち伏す

偉大かな女王 魔子さま

のぞみのすべて 女王魔子さま

津島魔子の、作詩作曲になる『魔子女王讃
歌』の第一節である。

魔子の家には彼女を祭る礼拝堂があった。

魔子にこの家を贈りものする際、北川泰介が
彼女の意見を聞いた上、設計させたもので、
白木の祭壇を設け、上段と下段とに区別し、
上段を『御神体』と呼び、下段を『情熱の女
神』と称した。

十二月十五日の夜、魔子の家の礼拝堂に、
『魔子女王讃歌』がゆるやかに流れ、白木造
りの祭壇に君臨した魔子の御尊像を、この国
の従臣たちが拝跪する式典は、おごそかに執
り行なわれていた。

五月十五日は魔子祭りの祭日であった。こ
の日は、だいたい午後七時半には魔子礼拝の
儀式を終り、情熱の女神の前のテーブルにと
とのえた酒肴に舌づつみをうち、徹宵痛飲す
るのが恒例しきたりになっている。

いうまでもなく、魔子の国は専制王国だ。
彼女の一顰一笑がこの小さな国の法律となり
政治ともなるのである。

魔子の精力絶倫の情熱は、放埒に発展する
のが常で、面くいである彼女の稚児漁りぐせ
は仲々おとろえなかった。魔子はいちばい
体格もいいし健啖家でもあった。彼女の孤闘
は三日ともたなかったから、従臣たちは、入
り替り立ち替り、その奉仕に伺候して御機嫌
を取り結んだ。

礼拝堂に三台の電気ストーブが赤々と燃え
ていた。

白木造りの祭壇に、水着を着た魔子が、な
がい髪を両肩に垂し、女王の王冠をあたまに
戴き、銀の靴を穿いて、端然と椅子に腰を下

している。皮の鞭をまさぐりながら、時々、威嚇するようにその鞭を空にパチッと鳴らすのである。

『魔子女王讃歌』が終ると、魔子は『情熱の女神』に座を移した。そこは、彼女の相手をえらぶ『聖なる場所』であった。

点呼がはじまる。

——室伏包重。

——安岡進吾。

——島谷達也。

——北川泰介。

呼ばれた者は、一人ずつ魔子の足下に平伏して彼女の銀の靴に接吻するのが、この国の礼儀であった。

さて、今夜の生贄は、
いけにえ

——岩男誠。

「はい」

岩男誠は、本当に小さくなって魔子の足下にぬかずく。

『情熱の女神』の前のテーブルには、酒肴が盛られていたが、忠誠の接吻を終った者は、もう料理を頬張りビールをあおっていた。

魔子は空腹を覚えた。

ゆっくり料理を食べ、ウイスキーを舐めながら、さてこの新入りを、どうやって、今夜

は一睡もさせないで、いたぶってやろうか。猫がネズミを弄ぶように、長い時間をかけてどうやって、料理してやろうか。

——魔子は残忍な虐待計画をめぐらせ、眼を細める。

「安岡、この男に靴酒を飲ましておやり」

「はい」

安岡は魔子の穿いている銀の靴を脱ぎ取りその中にビールを注いで、岩男に渡した。

「岩男、お飲み。これから一晩中、わたしに奉仕するのだから、とにかく、スタミナをつけましょう」

——乾杯。

——乾杯。

——魔子女王さま、万歳！

——岩男誠、万歳！

と誰かが叫んだ。それが合図のように激励の聲が堰を切った。

——負けるな、岩男！

——頑張れ、岩男！

——記録を破れ、岩男！

——チャンピオン、岩男！

北川泰介が、とどめを刺すように岩男誠の肩を叩き、いたわるのだ。

「いいか岩男、いままでに出した記録は三日

だ。おれなんか一週間も寝込んだ。お前が二日で起きれたら、奢らして貰うよ。とにかく首の骨が動かなくなること請合だ」

二十八才の島谷達也が羨望を交えてつけ足した。

——決死隊、岩男誠の壮行を祝し、乾杯。

エイッ、エイッ、オーッ。

一斉に盃とコップが目の高さに差出されて音をたて、その喚声は魔子の耳朶を快くくすぐった。

津島魔子はそのさまを見詰めたが、ころの中でつぶやくのだ。

「男の新鮮度は三回までだ。あとは、いないよりはマシの程度。この次は、奴隷第六号。

それにしても今夜の岩男誠は、どんな息使いをして苦しみ、どんな顔して挑みかかるのかしら。ああ、うれしい！」

彼女はひとり北叟笑みをもらし、しだいに速くなる鼓動を押え切れないうちに、隣りの岩男誠の腕をねじあげ、魔子自身はじっと胸を張りながら、引立てるように寝室へ連れ去ったのである。

〔第二話おわり〕

カット・春川ナミオ画

花 ぞ マ く 咲 く 舞 台

被 虐 の 旅



尾 澄 田 夜 葉

1

天井から下がっている太い綱に逆さにつな
がれた女体がゆれていて。その胸元に男の鞭
が襲いかかった。

「ギャーッ！」

悲鳴が場内の空気をつんざいた。

男は長い髪を乱して、たて続けに鞭を飛ば
した。心が昂ぶってきたのか、たくましい男

の筋肉が別の生きもののように踊った。

「もっと、もっと打って！」

打撃で大きくゆれだした女の口から、ほと
ばしる絶叫に観客は吸いつけられた。

やがて百打にもなろうというほどの鞭打ち
を加えてから、男がいった。

「どうだ。まだ、鞭が欲しいか」

「もっと、もっと打って！ 私のからだは粉
々になるほど強く、力いっぱい打って！」

答える女の声は、連打のせいか、逆づりの
せいか、かすれて、ふるえていた。

「ようし打ってやる。打って打って打ちのめ
してやる！ お望み通りにな」

男はそういって、細めの鞭にとり変えた。

先刻の太めの鞭に比べ、この細鞭は皮膚を破
る威力をもっていた。

男は二、三度素振りをくれてから、大きく
振って、一打を女の背に叩きつけた。

女のからだはがぶるツと掻き立った。男は先刻

のように鞭を乱打しはじめた。止まるところ
を知らぬげな勢いであった。

「ギャーッ！」絶叫とともに、女は大きく
からだをくねらせ、だらりと力を抜いた。

一日四回公演の今日が十五日目。最後の舞
台であった。

女・サリー岸川は、フランスにも渡った実
績を持つ、正に被虐ショウの女王である。

定住地を定めず、全国を股にかけて「特異
な「ショウ」を打って歩くこのサリーを、土
地土地の好事家は厚くもてなした。

縄をはずされたサリーはなすすべもなく、
舞台に横たわった。背から胸はいうに及ばず
太ももから、すねに至るまで、殆んどくまな
く鞭の条痕がしるされていた。古いどす黒く
なった条痕の上に新しい赤い痕が幾重にも重
って……。

男は鞭を舞台の袖に片づけてから、

「サリー、立て！」

と、命じて、一つかみの羽をもってきた。

先には五ミリほどの針がついている。

サリーは緩慢な動作で立ちあがると、舞台
正面に、背を向けて立った。脚を開いてふん
ばり、両手を左右に伸ばした。

羽針がその背へ飛んだ。針は背肌刺さり

ぶらりと羽がたれさがった。何時、精氣をと
りもどしたのかと疑いたくなるように、サリ
ーの五体はぴんとみなぎり、次々と打ち込ま
れる羽針に悲鳴一つあげなかった。やがて背
肌を数十本の羽が彩ったとき、

「こっちを向け！」

と男が命じた、サリーは素直に正面を向い
て、背すじをのばし、両手をひろげて、誇ら
し気に立ちはだかった。

第一投は右の乳房に命中した。

「うっ！」とこらえて、目をしかめたサリ
ーの顔にまた、ありありと被虐に陶醉する彼女
の独得の表情がただよいはじめた。羽針が次
々と腹、太もも、胸と打ち込まれていく。

「ツーツー！」痛みを小さな叫びに代えて、じ
っと耐えているサリーのゆがんだ顔に汗がほ
とばしつた。男の手に羽針が、なくなったと
き、男はつかつかとサリーに近づき、いきな
りゆたかな髪をつかんで、引き倒した。いま
で両手を開いて構えていたサリーはたまたま
たたらを踏んで、床に投げ出された。

「ぎゃあーッ！」聞く人をさえ責めるような
苦痛の叫び。投げ出された勢いで、からだ中
に刺っている針が肉を改めてかきむしったの
だ。

何とか針の痛さから逃げようともかくサリ
ーを、男は髪をつかんでひきずりまわした。
「ツーツー。もう、もう許して！」

サリーがはじめて許しを乞うた。

しかし、チラッと目を走らせただけの男は
耳を貸さず、舞台の端から端へと髪をつかん
だだけで、尚も容赦なく、引きずって回わっ
た。サリーは髪に手をやり、胸に手をやって
足をバタつかせた。舞台中央にもどって、男
は、やっとサリーの髪から手を放した。サリ
ーは手早くわが身に刺されている羽針を抜い
た。男も背の針を抜き集めた。針痕から、細
い血がすうっと数条流れた。

好事家は、興行中に幾度も観た者でも、楽
の日の舞台に詰めかけるのを常とした。平常
はここまでで幕となるのだが、最終日はもう
一つ壮絶なプレーを見せるせいであった。

あとの半月はサリーの休養に当てられ、上
越のひなびた温泉で、舞台を離れた穏やかな
日日が送られるスケジュールである。その間
に、いたんだサリーのからだだが、元の美しい
肉体によりがえるのであった。

照明が青から自然色に変わった。

場内が急にざわめいた。自然の螢光色に照
らされたサリーのからだは正に地獄から這い

出して来たごとくに、火傷痕、鞭の条痕、切
り傷にさいなまれ、うずめつくされていた。

サリーは五日興業で方々の小屋を回わってい
るので、最終日のスペッシャル・ショウも今
月は今日が三度目なのであった。

男が三宝をもって来て、舞台中央にすわっ
ているサリーの前に置いて引っ込んだ。

サリーはきちんと坐り直して、深く頭をた
れてから観客に挨拶をした。

「私は生れついで、ご覧の通りのマゾヒス
トでございます。責められることによるこび
を感じる女でございます。私の被虐の生いた
ちは、自分を自分で傷つけることに始まりま
した。すでにその始まりにつきましてはお目
もじの事でございます。そこで本日はちよう
ど十年前、十六才のときの自虐のプレーをお
目にかきたいと存じます。どうか、最後まで
ごゆるりと、ご鑑賞ください」

サリーは低頭してから、三宝に手をのばし
て針をとりあげた。それをにこやかに客に
示してから、きつとにぎりなおした。

「えいッ！」気合いと共に真向から振り降し
た。針先が張りきった右の太ももに沈んだ。
二センチは刺さっていた。

サリーはぐつと歯を喰いしばって、次の針

をとった。右ももの針の刺し傷から血が流れだして床にしたたり落ちた。

「えいッ！」左ももの針が立った。

早くもサリーの額に汗が浮び出していた。

自虐には恐怖がともなう。ためらいもある。

それに耐えるだけでも大変なのだ。その上、

今は観客を前にしているのだ。ためらい、う

ろたえては、被虐の女王・サリー岸川の名

がすたる。サリーには被虐者特有のというよ

り、舞台人としてのプライドがあった。

サリーは三本目の針をとりあげた。

「えいッ！」下腹にかなり深くささった。

サリーは思わず前かがみになって、痛みに

耐えた。それも一瞬のこと、上体をたてな

おすと、四本目をとった。

左手で右の乳房をつかみ、あごを引いて針

をたてた。よほどの苦痛らしく、歯をかみ、

眉をしかめて、一息に右手をついた。針は乳

首を貫通して、左へ抜けた。

休む間もなく五本目を左の乳首に通した。

そこで顔をあげると、サリーはニッコリと

してみせた。顔から汗がポトポト落ちた。

自虐の苦痛に耐えている様子が破顔の中に

ありありと浮かびあがって、観客を一層昂奮

させ、陶醉させていった。

「これより、鼻隔膜に針を刺し通してお目に

かけます。世の中には鼻隔膜に孔をあけてい

る人もあるそうですが、私はまだあけており

ません。それで、多少取り乱すかもしれませんが、どうかお許しください」

サリーは口上を述べて、針をとり直した。

左手で鼻の頭を上にあげ、幾分あお向き加減

に構えて、鼻隔膜に針先をあてた。

「えいッ！」ぐっと目をつむり、思いきって

針を刺しつらぬいた。

目から、ぼろぼろと涙がこぼれた。

サリーはなおもこらえて、針の一番太いと

ころまで、しごいた。

そのまま暫く痛みに耐えている風情が、見

る者を感動させた。やがて、まだ涙のあふれ

ている目を開いて、顔を正面に向けた。鼻か

らポタリと血の滴が落ちた。

「私はこうして十六才頃、時々自分をいじめ

て暮しておりました。最後は、私がよく好ん

で行ないました線香消しでございますが、あ

の頃は火のついたお線香を肌に押し当てるの

さえ、こわくてぶるぶるふるえたのですが

現在の私は煙草の火さえこの肌で消すことが

できます。いえ、明日という日さえ、なけれ

ば、生きながら火に焼かれるのもいいませ

ん。今日は煙草の火を消してお目にかけてましよう。どなたか喫いかけの煙草を私に投げ与えてくださいませんか」

サリーのことばがおわらぬうちに、火をつ

けた煙草がとんできて、腹に当たって、ひざに

落ちた。サリーがそれをひろいあげた。

左腕をあげて、腋の下に、その煙草を擬し

た。紫煙が立ちのぼった。右手が動いた。

「ぐえーッ！」サリーはなおも煙草を腋にこ

すりつけた。眉が上下して苦痛を表現した。

煙が消えた。サリーは身を乗り出して、前列

の客に消えた煙草を手渡した。

「熱かったろう」

三十過ぎの、その客が尋ねた。

「ええ、とても。からだの中に何かが突き通

つたみたいです」

「そのヤケド、どうするの」

「いい薬があるんです。じきに治ります」

サリーは答えて、からだを戻すと、

「長らくおつき合いました。半月のお別れです」

とうございました。半月のお別れです」

といって、下手から男を招いた。男がとん

で出て来て、サリーに手を貸した。サリーは

立ちあがって、男と共に深々と頭を下げた。

万雷の拍手が暫く鳴りやまず、二人を舞台に

釘づけにした。

2

また、初日がやって来た。

サリーの被虐慾は絶頂に達していた。毎月のことだが、晦日が近づくと、サリーは責め苛なまれない慾求のとりこになってしまう。山のひなびた温泉宿は平和過ぎた。

「ねえ、あなた、少しでいいから、わたしを鞭で打って」

夫の岸川小太郎は頑として受けつけない。

「だめだ。俺たちには目的があるではないかあと二百万で二千万円になる。そうしたら京都の郊外に『紫の館』を建てて、そこをSMのパラダイスにするのだ。俺たちのように人様の前で公然とSでござい、Mでございといえる人が何人いると思う。俺たちは人にもいえず、悶々と苦しんでいる人達のための楽園をつくるのではないか。もうひと頑張りだ。

もし、サリーがからだをこわして、この目的が挫折したらどうする？ 今の俺たちは舞台人だ。舞台でなら何をしてもいい。それが仕事だし、お客様がよろこんでくれるからだ。だが、二人だけのプレーはもう少し我慢するのだ。いいな、わかったな、サリー」

サリーは子供のように、うなずくのであった。

第一回目の出番は午後三時であった。

場内マイクの紹介に乗って、サリーが見事な裸身を見せると、満員の館が沸いた。

サリーはまず、GOGOの強烈なダンスを観せた。七色のライトに照らされたサリーの肢体は若いダンサーも圧倒せんばかりに躍動していた。そこへ黒いバスク一枚の岸川小太郎が現われた。無言のまま天井からたれていく二本の綱へ、サリーの腕を片方ずつ高々とつた。綱がしぼられ、露出した腋の火傷の痕が無残に、ライトに反射していた。

他にも、この種の「サディズムショウ」はあったが、それらは全て、いやがる女を責めるといふ筋書きで、しかも、実際に女が傷つき真実の涙を流すほどの思いきった加虐を加えるなどというのはなかった。

サリーの「被虐ショウ」は、そういう点で他とかなり趣きを異にしていた。第一、女・サリーが自ら進んで激痛のともなう虐待を望むこと。第二は実際に鞭を当て、針を刺し、肌をさき、血さえ流す惨憺なショウであること。これらが一部には非難されながらも、人氣を高めていた。

「本日は、サリーの希望により、サディストと自認されるお客様にご登場願ひ、サリーとサド・マゾ競争を行ないたいと存じます。どなたか、サドと自認される方、こちらへおあがりください」

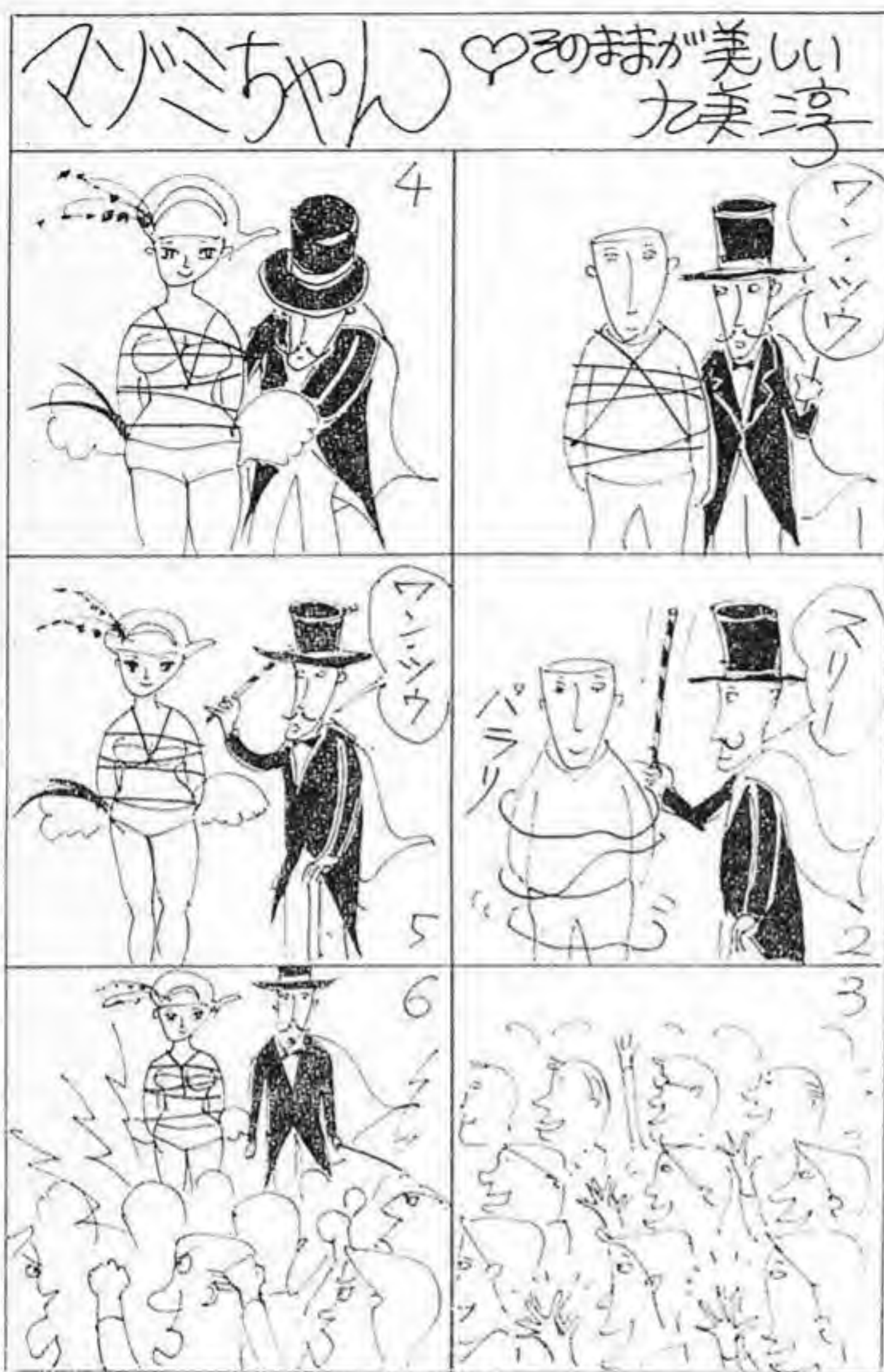
客席がざわめいた。と、三十がらみの、くずれた感じの男が、立ちあがった。

「では、これより直ちにサド・マゾ競争を行います。ルールは、お客様にサリーを百回鞭打ちをしていただきます。その間にもし、サリーが声を立てましたら、マゾヒスト・サリーの負けで賞金一万円を差しあげます。もし、サリーが声一つ立てず、百回の鞭打ちに耐えましたらサリーの勝ちで、お客様には手ぶらでお引き取り願うという段取りでございます。では、これより、競争を開始いたします」

小太郎は口上を述べ、男に鞭をわたして、「どうぞ、手加減をなさらず、お好きなように鞭打ってやってください」

といった。男はちよっとてれたように鞭に素振りをくれて、うなずいた。

やや頬を紅潮させ、身構えると、第一打を太ももに当てた。強烈な打撃であった。サリーは首をふり、齒をかねで耐えていた。男は



正にサディストであった。鞭打ちの急所を心得ていた。いかなマゾヒストも、太もも、尻胸等のやわらかい個所は徐々に鞭打ちの強度を高めていかないと耐えがたいものである。第二打は胸を襲った。サリーは両腕に力を入れて身をよじるようにして忍んでいる。第三打は案の定、尻に飛んだ。サリーは口をあき目をかたくつぶり、身をよじって痛みに耐え

た。たれた舌から一すじつばが胸に這った。男の鞭打つ速度が増した。乱打に近い打ち方に移っていった。その一打一打にサリーは反応し、千変万化の被虐図を展開し始めた。その内、サリーの全身に力がみなぎってきた。足を踏んばり、つられた腕に力が入った。七十打の標示が出た頃、サリーはしっかりと正面を向き、カッと目を見開いて、鞭をはね返

えす勢いで仁王立ちに立ちはだかった。その顔に紅がさし、被虐感のほこらがめらめらと立ちはじめたことが、観るものに感動を与えずにはおかなかった。

男のあせりが見えはじめた。サディスト特有の自尊心が首をもたげていたに違いない。もうプレーではなくなっていた。男は渾身の力を振りしぼって、胸をねらって鞭を打ちつけた。サリーは身ゆるぎもしない。

やがて……。小太郎がいった。「お客様、百打が終わりました。サリーの勝でございます」

男はわれに返って、無理につくり笑いをし、鞭を小太郎に返した。

小太郎はサリーの腕の縄を解いた。軽いステップでサリーは二、三步前に進み出て、笑顔で客席に会釈した。拍手が湧きおこった。サリーはからだをゆっくり一回転させて、誇らし気に条々たる鞭の痕を見せた。

3

この趣向は受けに受け、連日満員で最終日を迎えた。午後八時のサリーのスペシャル・ショウを観ようとする客で、小屋がふくれあがっていた。

例によって照明は自然色に変わった。サリーのからだには、縦横無尽に鞭痕が走っていた。その割に傷はなかった。強い鞭ではいかなサリーでもからだがもたない。軽く、なめした皮鞭は痛感も弱く、肌を傷つけるほどの強烈さも蔵していなかった。

この五日間の客による鞭打ちショウはサリーにはふっきれない、いらいらとうっせきする物足りなさがあった。といって、通常の人がもしこの鞭を十打もあびれば、ひとたまりもなく悲鳴をあげて逃げだす程度の威力は備えていた。お客は充分満足していた。

生来のマゾヒスト・サリー岸川だからこそ不満であった。

サリーが舞台中央に進み出た。

「私は生れついで、ご覧の通りのマゾヒストでございます。……」

と例の口上ではじまる挨拶をした。

「……そこで本日は前回の自虐のプレーに引き続き行なった鞭打ちプレーをご覧に入りたいと存じます」

岸川小太郎が白い布と、細くよくしなう竹の鞭をもってきた。釣竿の穂先のようなしなやかな竹鞭であった。

サリーは白布を受け取ると、くるりと客席

に背を向け、最後の小布を脱ぎすてた。白布は褌であった。サリーはあざやかな手つきで六尺をまたたく間に締め込んだ。

客席に向き直ったサリーの裸姿に、客席から

「ふううーっ」と嘆声がもれた。勇姿ということばがびったりするさわやかな清潔さがただよっていた。鞭痕のしみ込んだ白い肌に白褌が冴えた。

サリーは足を踏んばると左手を高くあげ、右手の竹鞭を脇腹にふりおろした。続けさまに十発ほど自ら鞭打ってから、サリーはちょっとうろたえて、舞台袖の、小太郎に合図した。小太郎がとんで出て来た。

「打って。自分で打ってもきかないの」

合図というよりむしろ嘆願という方が当たっているささやき声であった。

小太郎はうなずいて、竹鞭を受け取った。

サリーは両腕を高くあげ、身構えた。

一打は胸を襲った。「きえーッ！」尾を引く悲鳴に、客もびっくりした。

弱い鞭ではてったサリーのからだは、久し振りに小太郎の、骨にまでしみ込むような強打に燃えあがった。

二打、三打……。サリーのからだは次々と

襲ってくる強打に、みみず腫れを印しながらゆれはじめた。

五十打も打たれた頃、サリーはたまらず、「ぎゃあーッ！」とけものじみた声を発して床に伏せた。小太郎の鞭がひるんだ。

「もっと、もっと、びしびし打って！ お願いい！ お客様にサリーののたうち、苦しむ姿を見ていただくのよ。早く打って。力いっぱい打って！」

そのことばは客を感動させた。

「よし、打ちまくってやるぞ！」

小太郎は、そう怒鳴って、竹鞭を振りあげた。小さなバスク一つの小太郎の浅黒い、筋肉のもりあがったからだも演技ではない変化を見せて仁王のように猛々しく映った。

この真実をさらけ出したSMのショウに、客達はもう身動き一つできず、息さえつめてすい込まれていた。

小太郎はサリーの首根っこを力いっぱい踏みつけて、竹鞭をびしびしと振りおろした。

「ウウウウッ……」サリーは口をあき、くるしそうにうめきながら、床をかきむしって痛打に耐えた。だが、やがて、一筋の糸に似たよだれをたらし、四肢をけいれんさせたかと思うとがっくりと力つきた。



失神したのだ。サリーは舞台ではじめて苦痛のために失神したのであった。背が赤くぶつくり腫れあがって、内出血した血が幾条かにじみ出ていた。

小太郎はゆつくり鞭を納めて、カツを入れた。このショウをはじめてからは自らに禁じていたが、以前はよくサリーを失神させたのだった。否、サリーが失神するまで虐めてく

れと、せがんだからであった。小太郎は蘇生したサリーをかばって立ち上らせた。さすがにサリーの足元がふらついていていた。

二人は揃って観客に深々と頭をたれた。

4

冬が過ぎ、春が訪れた。

サリーのからだにはいくつもいくつも消え

ることのない火傷、鞭痕が刻まれていたが、プロポーションは、幾分肌に脂がのった感じでいっそう引き立っていた。

岸川夫妻にとって一つの念願であった『紫の館』の建設が始まっていた。場所は京都郊外の保津川の近くであった。

サリーの最後の舞台のときが来た。

後手にきつくくらわれ、縦縄のあざやかなサリーは、小太郎に全てをまかせきったように、静かに目をつむっていた。

小太郎はサリーの長い髪をまとめ、天井からたれ下った綱にゆわえつけていた。やがて楽屋へ合図を送ると、綱がピンとはり、引きあげられていった。

サリーの目がつりあがり、早くも毛根に痛みを感じるのか、ぐっと歯をかみしめた。爪先立ちになり、足が床を離れた瞬間、サリーの顔が完全に苦悶の表情にかわった。綱はどんどん上がっていった。

サリーのからだは髪の毛だけで、一メートル程もつり上げられた。

サリーは少しでもからだを動かさぬよう、全身に力を入れていた。腹筋のピクピク痙攣するのが客席からもよく見てとれた。

髪の毛吊りの痛みはなかなかサリーの被虐

感に火を点じなかった。ただただ痛みを耐えるだけであった。この半月、サリーはいわゆる拷問の苦しさを味わっていた。

鞭打ちが加わったときの、被虐の快樂が大きくなかったら、サリーはこの責めを止めていたかもしれない。パリッと髪が抜けてしまふような恐怖感が去らなかった。

小太郎が細鞭を見事に扱ってみせた。

第一打が見舞われた。背に激痛を覚えて、サリーは思わず身をよじった。毛根に一層いたみが加わって、

「ツウッ！」と口走ってしまった。

鞭打ちは皮膚が痛みで癢痺して来たときから快樂が始まる。どんなマゾヒストも第一打から痛感に酔うものではない。いかに痛覚を肌が癢痺するまで耐えるかがマゾの度合いを決める。サリーは続けて打って欲しかった。

「早く！ もっと！」

それだけいって、サリーは頭の痛みで齒を噛んだ。小太郎の、容赦のない鞭の連打が開始された。鞭痕がそろそろ重なり出した。サリーはからだの芯から湧出して来る被虐の快感が広がるのを感じた。

悲鳴をあげると、それだけ被虐感がかき消される。じっと声をかみ殺して耐えている方

が感覚は増大する。だが、サリーはショウをしているのだ。精々、苦痛を苦痛として、客に売らなければならなかった。

悲鳴がとどろいた。

サリーは小さな陶醉を噛みしめていた。すでに毛根の痛みもどうでもいいような被虐感に包まれていた。このまま毛が全部抜けて、からだは床に、叩きつけられてもいい、と思った。鞭の痛みなど、問題ではなくなっていた。そして、サリーは忘我の境に陥っていた。

——鞭が止み、綱がおろされた。

今日が本当に最後のスペツシャル・ショウの日であった。新聞には「サリーの切腹ショウ」と広告されていた。

真実、サリーは死ぬときには切腹でと心に決めていた。サリーはそのあこがれの切腹を最後の舞台上演してみたかった。

小太郎はなかなか許諾しなかったが、結局サリーの熱意に動かされて認めた。

形式は一文字腹、深さは三〇五ミリメートルと定め、小太郎が短刀を用意してくれた。舞台中央にむしろが敷かれ、サリーが再登場した。白の一重をまとっていた。

「ご来場のみなさま。マゾ女の私如き者に永

らくご声援を賜わり、本当にありがとうございます」

と深々を低頭し、つづけた。

「この舞台をもちまして、私はショウの世界から去ることになりました。本日は、私の命がけのショウ、切腹をおめにかけます」

小太郎が三宝に用意をしている間、サリーは口上を述べ続けていた。

やがて——。

白禪の裸身が白衣から現われた。

三宝には、五ミリのところで刃止めをした短刀がおいてあった。

サリーは、にわか仕込みの礼式にのっとり、短刀をさや走り、身構えた。

「えいッ！」

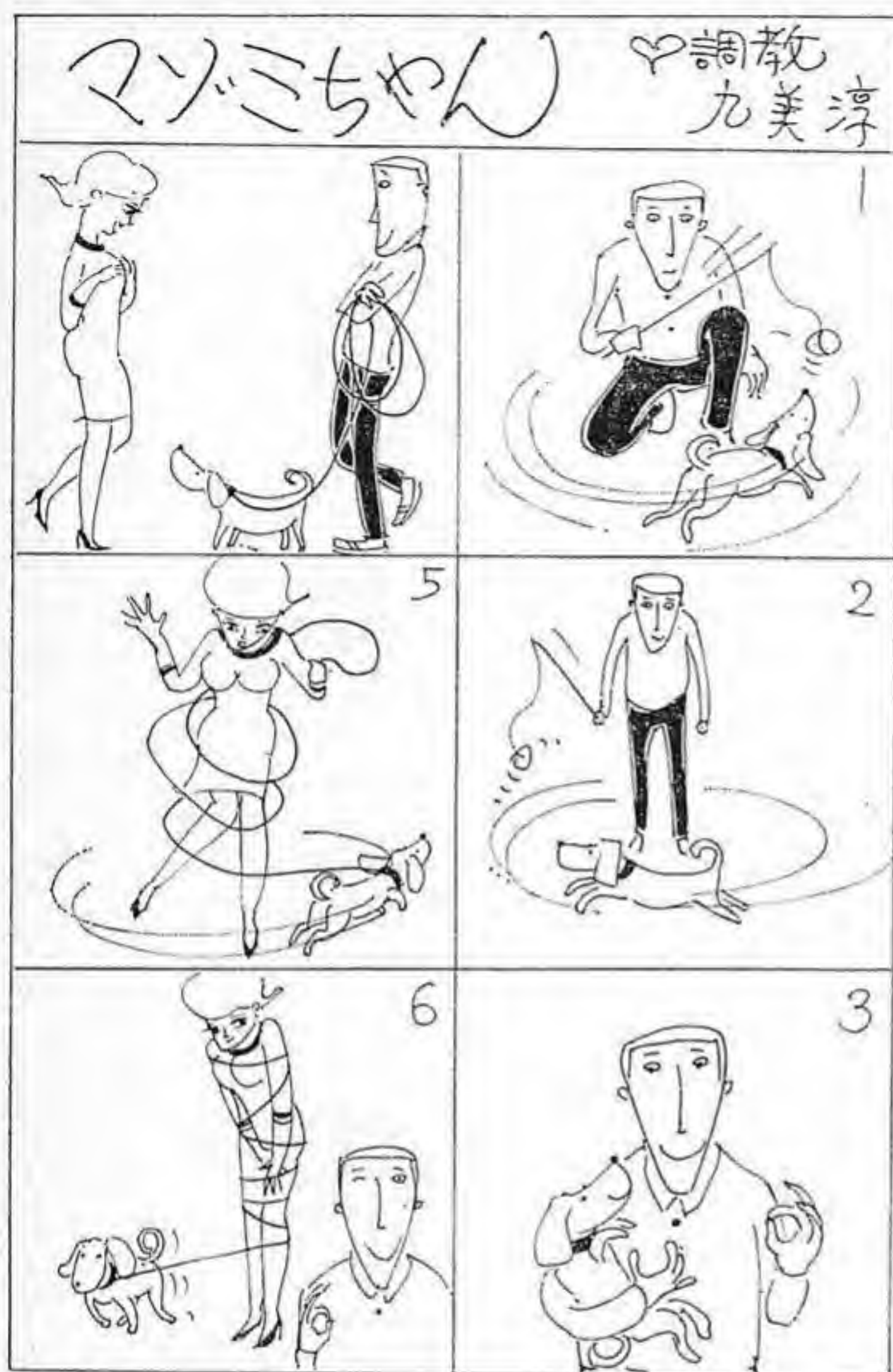
短刀を左脇腹に叩きつけた。刀の沈む手応えが痛みとともに無気味に伝わった。サリーはこのショウのために、ある女性の切腹経験者を訪ね、要領を教わってあった。

「むッ！」

痛みは意外に少なかった。

サリーはかがんで短刀の様子を見た。刃止め用の糸のところまで、刃は確かにささっていた。

サリーは右手に力を込め、左手で脇腹を引



くようにして、短刀を引いた。とたんに、どうやらえたらいいのかわからぬ激痛に襲われて呻いてしまった。

とたんに、力が抜けていくように感じて不安が体をつき抜けた。

サリーは自分にいいきかせた。

『最後の舞台をそんなことでどうするのだ。』

お前の今までの名声が、この切腹シヨウの成

否で一度に地に落ちてしまいかも知れないのよ』

それは悪魔のささやきにも似て、サリーをふるいたたせた。

『ええッ、どうともなれ!』

とヤケ気味に右手をどんどん引いた。

被虐感が、ヤケを起したとたんに頭をもたげ、チリチリと肌を裂く、初めて味わう痛感

に順応しはじめていた。

快感らしきものが増大していた。五センチ八センチ……と左から右に引きまわすのに五分近くの時間を要した。

目の前が暗くなり、閃光が走った。

『これが私の最後の舞台です。マゾ女の苦痛を求める姿がどんなものか、よく見定めておいて下さいませ……』

そう云おうとしたが、声が出せなかった。

サリーが短刀を抜いて三宝に戻したとたんに、血がさつとふき出た。

それでも客席は、しいーんと静まりかえったままであった。

幕が降りた。

サリーは幕が床につくのを見て、はじめて激痛に身をよじり、小太郎に助けられながらその場で、待機していた医師に縫合してもらったのであった。麻酔なしで。

マゾヒスト・サリー岸川のプライドがそこにあった。縫合の痛みに、サリーは声一つ立てずに耐えたのであった。

期待して望む声も多かったが、サリーの名が再び小屋の看板に、書かれることはなかった。

連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十一回)

白鳥大蔵

唐辛子粉

岩松の言ったことは、嘘でもおどかしでもなかった。

岩松の命令通りに、子分の定と政は、いまはもう無言になって、目をぎらぎらと光らせながら、タンポ槍のさきに、唐辛子の粉をまぶしたのである。

ただまぶしただけでは、すぐに落ちると思つたのか、はじめにタンポ槍の先端を口にふくんで、ペろりとなめて濡らしておいてから皿小鉢の上にぶちまけた唐辛子の赤い粉の中

に、そのタンポ槍の先を入れて、念入りにこねくりまわしたのである。

「どうだ。これで、おれの言ったことが、ただの脅しでねえことがわかったろう」

巨大な赤鼻をひくつかせながら、ヤレツケの岩松がいった。

岩松の濁った視線は、大津屋の内儀お静、その娘のお雪、そして、立花屋久六のめかけのお仙の順に、ゆっくりと這いまわった。

黒光りした三本の太い柱に、それぞれ固い縄目で、うしろ手に縛りつけられている三人の女だった。

しかも、その女たちの両足には、紅白だん

だらの布を巻いた竹の棒がくくりつけられているのだ。そのために、女たちは足をとじ合わせるができない。

岩松と、その子分の定と政の視線は、三人の女の、それぞれの羞恥の極限のあえぎに吸い寄せられたように、息をのみ、寸時のあいだ、沈黙がつづいた。

下品な見世物を並べることが業としている三人の男たちにとっても、これは、めったに見ることのできない、新鮮な光景にちがいなかった。

女たちは、この羞恥と屈辱のきわみに、歯をくいしばり、両眼をかたくとじ合わせてい

た。いくら気丈な女でも、こんな姿勢を強制されたままで、目をひらき、男どもをにらみ返すことなんて、とてもできない。

壁際にかかっている数個の金網行燈のあかりが、女たちの肌のまるみや起伏を、淡く照らしだしている。その光りの淡さが、女たちの素肌の白さをいっそうなまめかしく、凄艶に浮かびあがらせている。

六人の男女の沈黙がつづく、この湿った土蔵の中に、一種凄愴の気配が、じわじわと充満してくる。

岩松の声が、その沈黙を破った。

「そろそろ仕度もできたらしいな。なあ、お静よ。いつまで強情を張っていねえで、いいかげんに観念して、吐いちゃったほうが、おめえのためだと思うがなあ……」

のどの奥から、ねばりつきながら出てくるような、濁った、いやらしい声音だった。その声をきくだけで、お静は総毛だつ。

「吐くって、な、なにを……」

あえぎながら、きれぎれの声で、お静はこたえた。こんな、岩松なんていう卑しい男に負けまいとする気力が、まだお静には残っている。

「とぼけるんじゃない。なんと言わせれば気が

がすむんだ。おめえの亭主の秘密だよ。日本橋伊勢町の廻米問屋、大津屋彦兵衛の抜け荷の秘密だ。……女房のおめえが、知らねえはずはねえ」

「そ、そんなこと、あ、あたしや知らない」

お静は、唇をつよく噛んだ。

それだけは言えない。

殺されても言えない。どんなにひどい目にあわされても、口にださない自信はある。

あたしは殺されてもかまわないが、しかしとなりの柱に縛りつけられているお雪が責められたら、どうしよう。

お静にとって、お雪はたいせつな義理の娘である。彦兵衛にとっては、かけがえのない実の娘である。

あたしやこのまま責め殺されてもかまわないが、彦兵衛の心中を思うと、お雪を見殺しにすることは、絶対にできない。

お静は混乱し、苦悩した。

「そうか。知らねえのか」

赤黒い唇が、冷酷なゆがみ方をみせて、にたりと笑った。岩松は、手ごろな木箱の上にゆうゆうと腰をおろして、わざとらしく前こごみになり、むっちりとしたお静の肉づきをやだれの垂れそうな表情でのぞきこむのだ。

「あ、あ、あ、くくッ……」

お静は、必死になって、からだを閉じようとした。が、縛られている身は、どこにどう力をいれても、無駄だった。乳房の下にとくにつよく噛みこんでいる縄が、ぎしぎしと噛むだけだった。

「親分、かまわねえ。やっちまいました」
タンポ槍をしごく真似をしながら、定がいった。

「せっかく用意したんだ。早いとこ、やりましょうぜ、親分」

政は、もう一度タンポ槍のさきに唐辛子の粉をまぶしながら、赤く上気した顔を岩松にむけていった。

定も政も、まだ三十前の若さだ。タンポ槍を持つ手が、はやり猛って、こきざみにふるえるのも、無理ではなかった。腹のへった犬の鼻さきに、肉のかたまりを置いて、なかなか食わせない状態に似ている。定も政も、じれて目の色が変わっていた。

|| 肉 の 的 ||

「そうだな、そろそろ始めるか」

もう一度、にたりと笑って岩松はいった。

どの女から先にやってやろうかと、じつはさっきから腹の中で考えている。そして、もうきまっている。やっぱり、お静が一番先だった。

お雪を先に責めた場合、母親であるお静が娘の悲惨な姿を目の前にしてたまりかね、屈服してしまうことは、容易にあり得る。

いちど屈服した女を、改めて責めてみたところで、さほどの感興は湧かない。

一番強情で手ごわい女を、最初に責めるのだ。吐けば吐いたで、ことは成功だし、いつまでも強情を張って吐かなければ、それだけ楽しみが増える。いつかは口を割らせる自信が、岩松にはある。

「定、お静からやれ」

岩松が、顎をしゃくっていった。

待ってましたとばかり、定はタンポ槍を大げさにしごきながら、お静の正面へまわる。

岩松は、定の仕事やり易いように、腰をおろしていた木箱ごと、二、三步後退した。

「たっぷり、楽しませてやるからな」

と、中腰になって、定がいった。

「ち、ちくしょう」

お静は目をあけて、自分の前に突きだした定の顔をにらみつけた。

しかし、上気した定は、もうお静の目なんか見てはいない。定が凝視しているのは、これからタンポ槍で突こうとする魅惑的なだけだった。そこよりほかに、目も心もなかった。定は鼻の穴をひろげ、ごくりと生唾をのみこんだ。

「おい、政。口三味線でいい、囃せ」

岩松が、同じようにそこへ目をやりながら政に命令した。

「へい」

政は、いきりたつタンポ槍を握ったまま、不服そうに、ちょっと口をとがらせた。だが兄貴分の定が一番槍をつけるのに、いつまで不満の顔でいることはできない。

「お前には、二番槍を突かせてやる。景氣よく囃せ」

やや強い声をだして、岩松がいった。

「へい」

ぺこりと頭をさげると、政はもう陽気な顔になり、口三味線と太鼓の声色を使って、器用に囃しだした。

「……スチャラカチャン、スチャラカチャン

……上見て下見て十六文じゃ安い。上突いて下突いて十六文じゃ安い、そら突けドンドン

……そら突けドンドン」

その歌に合わせて、定のタンポ槍が、生きているもののように踊りだした。

槍の動きもさることながら、槍と共に踊る定の身ぶり手ぶりは、さすがに手慣れた軽妙なものだ。客寄せのために、毎日見世物小屋の前でやっている定であった。

「下突いて十六文じゃ安い……」

歌の切れ目がくると、定の槍は、ひょいとひいて、正確に的を突いた。

「ひえッ……」

お静ののどから、痛烈な悲鳴がふきあがった。全身の筋肉がかたくこわばり、上半身がぎくん、とのけぞった。

しかし、のけぞる自由もわずかなものだった。うしろ手にされて、柱に嚴重に縛られている裸身だった。乳房の上にも下にも、かたい縄が肉を裂くようにくいこんでいる。縄にがりがりとしめつけられて、白い豊満な乳房が、いっそうむくむくと盛りあがり、悲鳴と同時にゆれ動いた。

うまく槍の先を避ける芸を持たないお静は、つづいて二突き目も、正確に的の中央を射られてのけぞった。

「おもしれえ」

と、岩松が思わず声をあげた。

岩松にとって、これは思いもよらぬ新鮮な見世物だった。

自分でヤレツケの見世物を考案し、多くの客の前に供することによって、銭儲けをしてきた岩松だった。当然、自分の小屋でやっているヤレツケを見ても、いまでは、なんの感興も湧かなくなっている。気になるのは、客の入り具合だけである。

それというのも、女たちの演技が、すっかり鼻についてしまったからだ。岩松の立ち場とすれば、これは当然のことである。

しかし、いま、この土蔵のなかで、黒光りする柱に縛りつけられている三人の女はちがう。芸人の垢や汚れを、一片も身につけていない。肌のすみずみまでが、新鮮だった。お仙にしたところで、その悲鳴やもだえ方に芸や約束事でない真実味と、新鮮さがあつた。それが、いまさらのように新しく、岩松の目をよろこばせるのだ。

「こいつはおもしろえ。たまらねえや」

三度目の突きのとき、岩松は思わず手を打った。

定のくりだすタンポ槍が、絶妙の動き方をしたのだ。

お静は、声をだすまいとして噛みしめた齒

のあいだから、ついに耐えかねて、黄色い声をふきあげた。そして、そのあたりから、唐辛子の粉が、苛酷なききめをあらわしてきたのだった。

「あ、あ、あ……つ、つ、つう……」

お静は、うす暗い土蔵の天井にむけて、顎をのけぞらした。

疼痛が連続した。天井にむいた白い咽喉首から、あぶら汗がふきだしてきた。

タンポ槍は、まさしく生き物のようにうごめいた。金網行燈のろうそくのにぶい光りに映えて、ぬめりと燃えた。なまぐさいにおいが、蔵のなかに充満した。

火で焼かれるような苦痛が、お静を襲いはじめた。火照り、腰が浮いた。

定の額からも、汗がにじみでている。じりじりと焼かれて、お静はうめき、泣き、ときには絶叫した。身もだえるたびに、上半身に巻かれた縄が、強く締めまり、胸のやわらかい部分にくいこんだ。

「スチャラカチャン、スチャラカチャン、もひとつおまけにスチャラカチャン」

政が口で囃しつづける。

タンポ槍の先端が、新しい唐辛子の粉で赤く染まった。お静の口から、よだれが流れは

じめた。うめき声とともに、よだれは顎をぬらし、胸もとまでしたたり流れた。なめくじの這ったあとのような、にぶい銀色の筋が、お静の素肌に残って光った。

お静の泣き声の、あまりの悲痛さに、たまりかねてお雪が目をはらいた。

「おっかさん！」

お雪は、ひと目みるなり、全身をカッとはてらせた。

目の前におきている現実が信じられなくて表情がゆがんだ。あわてて目をとじたが、またひらいた。母親の無残な光景をもう一度はつきりと見たとき、お雪の全身にも疼痛が走った。

「お願いです、おっかさんを、おっかさんをゆるしてやって！」

お雪は身を揉み、泣きながらさげんだ。

「見ないで、お雪ちゃん、見ないで、こっちを見ないで！」

お雪の声を耳にいったお静は、激しく首を横にふってうめいた。

「おっかさんをゆるしてやって！」

お雪は顔じゅうを涙でぬらし、むせび泣いた。

「お雪ちゃん、だめ、だめ、おっかさんを見

「ちゃだめ、こっちを見ちゃだめよ！」
お静もまた、羞恥のために、咽喉をふるわせてむせび泣いた。

|| 牝のにおい ||

「さすがだな、お静。そんな目にあわされても、亭主の事を思って口を割らねえとはな……ヤレツケの岩松、お前さんに惚れなおしたぜ」

岩松が、感心していった。

「あっしも感心しましたぜ。ですけどね、親分、このタンポ槍の使い方は、まだまだ、いくらでもありやすぜ。この先を、こうやってこねくりまわすと……」

定がタンポ槍をひねって実際にやって見せるのを、岩松は手をあげて制止した。

そんなやり方をされたら、お静は失神してしまう。気絶させたら、おもしろくない。

「こんどは、あっしの番ですぜ、親分」

政が横合いから、すっとんきょうな声をあげた。

「そうだな、こんどは、お仙のほうを、ひと責めするか」

岩松は、うなずいた。お静のほうは、ひと

まず休ませてやろう。あとでまた、たっぷり泣かせてやる。

自分の名を呼ばれて、お仙は、ぎくりと顔をあげた。

「そんな年増よりも、あっしは、こっちの娘のほうをやりてえんですがね」

政が、お雪を見おろして、不満そうな顔した。

「娘は一番あとだ。こんどは、お仙をやるんだ。てめえ、おれのいうことに文句があるのか」

岩松が、やや凄みのこもった声でいった。

政は、しぶしぶお雪の前から離れて、お仙の前へあゆみ寄った。

「なんだい、なんだい、あたしをどうしようっていうんだい！」

お仙は、けたたましい悲鳴をあげた。

となりの柱でお静が責められているようすを、目をまるくして眺めていたお仙だった。

なるほど、こんな手もあるのか、ひどいことを考えつくもんだ、と思いながら見ていた

のだが、いざ自分の番となると、お仙はあわてた。

「じよ、じょうだんじゃない。あたしゃいやだよ、そんなこと。やめておくれ、やめてお

くれよ！」

お仙は、なおも悲鳴をあげてあばれたが、縄目も柱も、両足をくくりつけた竹の棒も、ビクともしない。

「うるせえ。ぎゃあぎゃあ騒ぐな。あんまりわめくと、さるぐつわを噛ませるぞ」

岩松がどなりつけた。

どなりつけたが、目は笑っている。この女ざかりのむっちりと肥えた白い肉塊が、唐辛子の粉をまぶしたタンポ槍に突かれて、どんな声をあげて泣くかと思うと、それだけで、もうむずむずしてくる岩松だった。

懷中から手拭いを取りだし、ふとくて醜い猪首を、ねじるように、二、三度まわして汗をぬぐってから、

「やれ」と、岩松は命令した。こんどは、定が口三味線をいれて囃す番だった。

「スチャラカチャン、スチャラカチャン、上見て下見て十六文じゃ安い、上突いて下突いて十六文じゃ安い」

槍がくりだされ、たちまち、ひいッという派手な声があがった。

待ちこがれていただけに、政のタンポ槍の扱い方は手荒かった。がむしゃらだった。

タンポ槍の先端が火のようになった。

ぎくん、ぎくんとお仙は顎をあげ、左右の乳房をはねあげるようにしてのけぞった。

「あつ、あつ、ちくしょう。ばか、ばか、なにをしゃがるんだい。鬼、外道！」

いくら口汚なくのしつても、お仙には、そのタンポ槍を避ける自由はなかった。

顔を左右にふり、歯をむきだし、唾をとばすことだけが、お仙の抵抗だった。

「あッ、あッ、熱い、熱いじゃないか。ち、ちくしょう。熱い、ばか、熱いよう！」

お仙のからだには、唐辛子の粉が、早くもそのききめをあらわしていた。

溶解しはじめた唐辛子のために、お仙は猛烈に身をよじりはじめた。まっ白いからだを腰からねじるように前後左右にくねらせ、犬のように吠えだした。

めす犬のように泣き、ときにはうなりながら、吠えるのだった。

タンポ槍だけだったら、お仙には我慢できたかもしれない。だが、その先端に唐辛子の粉がまぶしてあって、それが炎のような攻撃を加えてきては、さすがのお仙も、どうにもならなかったのだ。

「ごめん、ごめんよう。あッ、熱ッ、わかったよう。ああ、岩松さん、あんたには参った

よう！」

お仙は、子供のようにながら哀願した。尻が三寸ほども床から宙に浮いて、水を浴びたような汗が、顔から、肩から胸からふきだしていた。

へんに熱っぽい、女くさいにおいが、この土蔵のなかに充満しているのは、お仙のおびただしい汗のためだった。人間の女というよりも、なにか白いぶよぶよした牝のけだもののかたまりが縄にくくられて泣き声をあげ柱の前でうごめいているような感じだった。

|| 抜け荷の秘密 ||

「ふん、久六を手玉にとったお仙姐御も、からきし意気地がねえんだな」

岩松は、自分の足もとに完全に屈服したお仙を傲然とみおろし、赤黒い鼻をひくつかせながら嘲笑した。

「あたしの知ってることは、なんでもしゃべるから、もう、もう、かんにんしておくれよう。そ、そんなに責めないでくれよう！」

ぽろぽろと涙をこぼしながら、お仙は哀願しつづけるのだ。その涙の粒が、縄にくびれあがった大きな乳房の上にあとからあとから

したたり落ちる。

「なんだと、あたしの知っていること？」

岩松の目の奥が、ぎょろりと光った。

「おめえ、なにか知っているのか？」

と、岩松は腰をおとし、顔をお仙の前に近づけて、かさねてきいた。

「歌留多だよ、オランダ歌留多の半きれさ。」

あッ、ああッ！」

また鋭く槍を突かれて、ぐうツとのけぞりながら、お仙はいった。

「歌留多？」

その一言を、はつきりとききとがめて、岩松は夢中になってこねくりまわしている政のタンポ槍を制した。

「おい、お仙、おめえ、なにを知っているんだ？」

槍がようやく離れて、お仙は、ふうっと肩で息をついた。

「あたしゃね、立花屋久六のめかけだよ。朝から晩まで、いや違った、晩から朝まで、久六のそばにくっついてるんだ。あのごうつくばりの久六が、なんのために大津屋の娘をさらい、女房をさらって痛めつけていたのかも、たいていは見当がついているのさ。あたしだって、それほどバカじゃないやね」

唇をひんまげたかすれ声で、それだけを一気にしゃべると、お仙はまた、ふうッと全身で大きな息をついた。

「言え、お仙、さっさと言え。オランダ歌留多の半きれというのは、一体なんだ。ぐずぐずしていやがると、またその槍でこねさせるぞ」

岩松は、政にふりかえって顎をしゃくり、お仙の乳房のさきを、指でちゃんと弾いた。へいッとはかりに、政がまたタンポ槍をかまえた。

お仙はおびえ、恐怖の色をあらわにして、「抜け荷の割り符だよ」

ぺろりと、しゃべりはじめたのだ。

「なんだと、抜け荷の割り符？」

岩松は、膝をのりだした。

「そうさ。うちの久六の身内の、お京という女掏摸が、大津屋彦兵衛のふところから掏りとった財布のなかに、そのオランダ歌留多が入っていたのさ。つまり、その歌留多ってえのが、大津屋が抜け荷をやっているという大事件な証拠の品で、ゆすりのネタとしたら、何千両にもなる値打ちものなのさ」

「なるほど。で、歌留多が、いまどこにあるのか、お仙、おめえ知っているのか？」

「知ってるよ。だけどね、この縄を解いて、あたしを助けてくれなけりゃ、あたしや絶対にしゃべらないよ。こればかりは、死んでもしゃべらないからね」

前へのりだしてきた岩松の顔をうかがいながら、お仙はいった。

お仙も必死だった。助かるか、助からないかの瀬戸際なのだ。

「さあ、早く縄を解いておくれよ。抜け荷の割り符だよ。何千両にもなるうっていうしろものだ。こんなにひどく縛られていちゃ、しゃべりたくとも、しゃべることなんかできないじゃないか」

カサにかかって、お仙はいった。

そのお仙の顔を、寸時うたぐりぶかい目つきでみていたが、

「よし、おい、定。お仙の縄を解いてやれ」あっさりと、岩松はいった。

もし、お仙のいうことが嘘だったら、またつかまえて縛りあげればいい。

お仙は、ようやく縄を解かれ、生きかえたように、改めて大きく肩と胸で息をした。

息をつくたびに、巨大な乳房がゆさゆさとゆれて、女のおいがたちのぼる。

白い肌に、縄のあとがくつきるときざみつ

いて、むごたらしい模様をつくっている。

「なにか着せておくれよ。こんな裸のままじゃ、生きていく気持ちがしないよ。あたしやこれでも、女なんだからね」

二の腕にしみついた紫色の縄のあとを撫でさすりながら、お仙はいった。

「よし、政、さっきまでお仙が着ていた着物を持ってきてやれ」

「へい」

また損な役目をいつかって、政は仏頂面をしながら、土蔵の外へ出ていった。

その政が、すぐに襦袢やら帯やら着物やらを両手にかかえて持ってきた。

お仙は、それを手早く着終えると、色っぽい目をつくって、岩松の顔をみあげた。

「ねえ、岩松親分、そのオランダ歌留多があんたの手に入って、うまく大津屋をゆすることができたなら、あたしに、なんのご褒美をくれる？」

「褒美だど？」

岩松は、不機嫌に唇をゆがめた。

いのちを助けてやるのが、てめえにやる褒美だと突っぱなしたところだが、いまはまだ、そうは言えない。

「褒美には、金をやろう。そのオランダ歌留

多とやらを使って、儲けた金の一割……じゃ
どうだ」

「いやだよ、岩松さん、あたしゃ、そんな、
お金なんかいららないよ」

お仙の目が、ますます色っぽくなって、こ
んどは全身で岩松の膝にしなだれかかった。

「金がいねえと言うのなら、ほかに、なに
が欲しい？」

「ねえ、親分、あたしゃ、お金なんかいらな
いから、お前さんの、女にしてもらいたいの

さあ」

お仙は、自分のからだの重みを、岩松の膝
の上に、どさりと預けながら、精いっぱいの
技巧を凝らしていった。

定と政が、たがいに顔を見合わせ、笑いと
も嘲けりともつかない妙な表情をして、肩を
すくめた。

「ふふふ……久六はもう、片手と片目をやら
れて、動くこともできねえ片輪者だ。そこで
牛を馬にのりかえようってわけか。まあ、そ

れも、悪くねえだろうなあ……」

むっちりしたお仙の肩に手をおきながら、
岩松は、このアマ、なにを考えていやがるん
だ、とその腹のなかをさぐっている。

「これからのち、親分があたしの面倒をみて
くれると約束してくれたら、あたしゃ、歌留
多の隠し場所を、きれいに吐いてしまおうん
だねえ……」

「よし、わかった。お仙、もったいぶるんじ
やねえ。その歌留多のきれっぱしが隠してあ
る場所というのは、一体、どこだ？」

岩松の眼光が、するどい刃物のような光り
を発して、お仙をにらんだ。

「歌留多の隠し場所はねえ……」

お仙は、柱に縛りつけられているお静とお
雪の顔に、ちらりと目を走らせると、ふいに
冷酷な唇の形になっていった。

「一番、かんたんな所さ。立花屋久六の腹に
巻いてある胴巻きの中なんだよ。ただし、久
六もいまは必死だから、息の根をとめない限
りは、あいつも歌留多を渡さないだろうねえ
……」

新発足 懸賞へ告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここ
に新しく、「告白、手記、体験」の原稿を
広く懸賞募集いたします。
一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな
告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字
塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告
白をもって誌面を飾る考えであります。
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表
したいという熱意のこもった原稿を求めま
す。どうか奮って御応募下さい。
一、文章の巧みさとか、表現や描写のうま
さは求めませんから、実際に体験されたも
の、事実の裏付のあるものが大切だと思ひ
ます。従って必ず自作の未発表のものに限
ります。
一、枚数に制限はありませんが、一回の掲
載分としては、三十枚乃至五十枚が適当で
す。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さ
い。締切日は毎月十日。翌月号に発表。
一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送り
いたします。応募原稿は読者原稿と区別す
るため「告白懸賞」とお書き下さい。

× × × × ×

(つづく)

S
M
カメラ・ハントⅡ 志摩 桜子の 卷

牝豹のたわむれ

辻
村
隆

たのである。

大阪駅で奥さんが待っておられるとかで、珍らしく時間を気にしてソワソワし、そのネガの女性に関して、精しくきき出すいとまもなく預かったのであるが、久し振りだから一杯やりましょうという私の誘いも固辞すると、慌ただしく京都駅の八条口の乗降口で降りてしまった。大阪まで一緒にいきますよというのに、いやここで結構電車の方が早いからと、時計ばかりを眺めていた。

話は旧聞に属するが、団鬼六氏が『徳川女刑罰史』の、緊縛指導の一件で、私を東映の京都撮影所、企画の天尾氏に紹介すべく来京された時、私の車に同乗しての帰り道、少々照れ乍ら、一本のネガの現像を私に依頼され

奥さん同伴の関西旅行で、待たすのも悪い

という愛妻精神の発露から、かくなったのかと、私のために忙がしい時間を割いていただいたことに、誠に恐縮していたのである。

——が、何ぞ知らん、これが奥さんとは真赤なイツワリ、実は彼女との人目を忍ぶ秘かな旅行であったことを「鬼六談議」「秋の風」(昭和四十三年十一月号)を読むに到って真相をしり、だからこそあんなにもソワソワしさよならもそこそこに駆け出していったわけで、そんなことなら親切ごかしに大阪まで送っていったって、その女性の顔を一眼拝んでおくのだったのに悔んだがあの祭り。いうなれば彼もお人がワルい、この私をマンマと一杯

くわせていたのである。そのくせ隠しおおせずに『鬼六談義』にヌケヌケと書くところがまた彼の面白いところでもあった。

映画の仕事の件などで、依頼された現像の方は大分遅れ遅れになったが、刑罰史のネガと一緒に現像し、一通りプロマイドに焼きつけた。どんな素性の娘かは知らないが、フोटで見た点では、若鮎のように、ピチピチした、可愛いグラマーであった。夏焼けの名残りがバストとヒップを白抜きにして、全身小麦色によく灼けているのが印象的である。

最近漸やくカメラに凝り出した鬼六氏であるが、未だ自家DPEまではゆかない。勿論街のカメラ屋へは出せないオール露出の逸品で、彼の腕前もかなり上った証拠にピントも正確である。なればこそ関西旅行のいい折と私に依頼したのでもあろうか。

私のカンでは、ピンク女優さん、でもなさそうである。というのは、そのポーズといい、羞恥の表情といい、どこことなくぎこちなく

て、しかも初々しかった。ズベ公でもなさそうである。或いは良家の子女を口説き落したか、もしくは女子大生のアルバイト？ そんなところが私の想像であった。

東映紹介のお礼状と共に、フोटを一括して同封し、冗談まじりに『花と蛇』もいい加減にきり上げてカメラハントの方に転向されたら如何ですか？ こんないい娘を撮られるのだったら、私のハントの方もそろそろタネぎれで、喜んで譲りますよと書いて送ったが忙がしい彼のことだから返事はなかった。関東・関西のSMハントくらべなんて企画は、二本立てで面白かろうと真実思っても見たの



だが、正直いってピンク映画のシナリオを書きまくり、数多くのピンクスターとお顔なじみの彼が、本気でハントに本腰を入れたら、確かに私の方が旗色が悪いに違いない。幸か不幸か、彼にはそんな気もなく、いつしかその記憶は薄れていったのである。DPEの折一枚宛、焼き増しして、わがコレクションの一部に加えたことは勿論である。

× × ×

11PMをテレビで見るともなしに見乍ら、女房相手に遅い晩酌をやっていると、夜のしじまを破って電話のベルが鳴る。今頃誰だろう、不躰な、と思って受話器をとると、聞き覚えのある賀山社長の声――。

「辻村さん？ あたし――。今、六本木のバーから電話してるんですよ。明日急に関西へ出張するんですが、おみやげを連れてゆこうと思ってね。体あいていませんか」

「また、突然ですね。是が非でもという用事はありませんが、遊んでもいませんよ。でもコトと次第によっちゃ、体をあけますよ」

「ハハ、そのコトと次第によるんですよ。横でおみやげが笑っているんですが、聞こえるでしょうホラ――。明日、関西へ出張するんだけど行かないかって誘ったら、ついてゆく

っていうんですヨ。ええ、勿論プレイを覚悟していますよ」

「その人、ホステス？」

「と思うでしょう、が、そうじゃない。学生ですよ。ハプニングガールでね」

「学生って、じゃあ女子大生なんですか。学校の方いいんですかね」

「角棒振り廻して、会長退陣なんてこと叫んでいる学校へいったって仕方ないんですってさ。人生勉強の方がいいなんて、可愛いことを言っていますよ」

「まるで棚からボタ餅で、張り切らざるを得ませんね。どうしてハントしたの？」

「まあまあ、それはお目にかかってから話しましょうや。じゃあ、兎も角、明日京都駅の新幹線の出口で正午、お会いしましょう」ということになった。

『元禄女系図』の映画も十二日にクランクアップし、溜っている仕事の方を片付けようと考えていた矢先であったが、どうもこの道には弱い。一匹狼的な仕事の私にとって、一日遅れたからって、どうってこともない。

明日の約束っていえば、京都会館へ、立川談志司会の「笑点」の舞台があるので、梨花悠紀子の頼みで、一緒に楽屋へ談志を訪問す

ることになっていた。午後六時半開演なのでどっちみち京都へは行くことになっているので、むしろ好都合でもあった。

かねて一目会いたいと言っている賀山社長に、いい折だから梨花悠紀子を紹介してもいい。しかし彼もアベックだから、却って間誤つくかも知れないと、気を使ってもみたり、談志に急速に熱をあげてゆく梨花悠紀子のことが気になったりで、一杯のんだ酒がヘンに頭の回転を鈍らせて、そのくせ奇妙に頭だけは冴えて、未だ見ぬ社長のおミヤゲをさまざまに想像して、午前二時を廻ってもなかなか眠れなかった。ハントというとうも神経が昂ぶってくるのが、自分ながら情ない。

十二月十八日、正午——。京都駅八条口の新幹線出口の駐車場に、やっと車を押し込んで、私は二人の到着を待っていた。

少し冬らしい寒さになったが、このところ続いている暖冬異変の影響か、構内を右往左往する人々に、オーバー姿は少なかった。

車にのる人が多くなったのも一因であろうが、かくいう私も勿論背広の着流しである。

列車の滑り込んだ轟音。やがて階段を下ってくる人々に混って、巨軀の賀山社長の姿が

現われ、彼に寄添う若い娘——。その娘に視線を走らせた時、私はオヤツと思った。何処かで見掛けた顔である。あれこれ思いをめぐらせるが、咄嗟には思い出せない。

何処で？ 何時？ その娘の名は？——しかし、どうしても私の記憶に、そのどれもが浮かんでこなかった。

娘の映像がクローズアップされてくる。私をみつめて、手を振る賀山氏。その刹那、私の脳裡に鮮かにひらめいたのは、鬼六氏より依頼された、あのネガのフォトの娘の、羞恥のかげらいであった。

奇しくも、ネガを依頼されて、鬼六氏と、この八条口の駅前で分れ、今、この同じ駅前で、ナマの彼女の姿をこの眼でじかに見ようとは、思いもかけぬ出来事であった。

この娘のナマナましい赤裸々の姿——。緊縛とはいえぬにしても、鬼六氏好みのソフトな縛りに、羞恥に身をくねらせているポーズを、今こうして待ちうけている、関西の未知の中年男が、すべて知りつくしていることを恐らく夢にも知らぬであろうこの娘は、エンジのストラックスにセミ・コートのいで立ちで聖女のようなあどけないスマイルを泛かべて私の前に立っていた。



鬼六——女子大生——賀山社長。このルー
トは一体どうなっているのだろう。彼の口吻
から察して、私が鬼六氏から彼女のネガを依
頼されたことは、全然気付いていない様子で
あった。

狐と狸ほどの悪気はないにしても、ここは
ひとつ、何も知らぬ振りをして、彼のハント
振りを聞いてみようという気になっていた。
「いいおミヤゲでしょう。この人、サクラち
ゃん」

「桜子です。お噂はお伺いしておりました。
映画のお仕事、なさっているんですね」
東京育ちだけにハキハキしていて、初対面

かった。

「兎も角、食事でもしながらさきましよう。

辻村さんもしよいよ本格的ですね」

と、興味津々の顔になって、構内の食堂へ
足早に歩を運んでゆく。

彼自身の事より私への興味の方が大きかつ
たのか、しきりに聞きたがった。手早く一部
始終を語る。(俄かスター出演の記参照)一段
落ついたところで今度は私の質問する番だ。

「ところで社長、サクラちゃんとのなれそめ
を喋って下さいよ」

「そうだ、肝心な話を忘れていましたね。彼
女を前に置いて、少々ハレンチで喋りにくい

ですが、まあいいでしょう」

と前置きして、彼は意味ありげに彼女に視
線を送ってニヤリと笑う。どうも何かしめし
合せた気配が濃厚である。そうと知っていれ
ば、鬼六氏のあのフオトを持ってくるのだっ
た。驚かしてやるのには、恰好の材料なんだ
がね——。

「サクラちゃん、嫌だったら、耳に栓をして
いてもいいぜ。記憶が悪いから、日をすっか
り忘れちゃったが、某日某夜ってことにして
おきましょう。頃は十月末つかた。ご招待を
うけた会社の二次会で、若い社員に引っ張ら
れて、ひとつは彼等の遊びをエンジョイして
やる気で、新宿のバーを二、三軒梯子して辿
りついたのは、あたしたち年輩の者にはいさ
さか縁の遠いあなぐらスナックバーです。接
待費で会計をオトす気だから、奴さん等気前
がいい。数米はなれたところに、若い男女の
グループが騒いでいるだけで、客はこの二組
だけなんです。時間も午前二時を廻っていま
したからね。流石に少なかった。かなりグロ
ッキー気味のあたしは、もう呑むのが苦痛に
なっちゃって、おトイレにそっと立った。出
来れば金を払ってやって、ここを逃げ出した
かったですね。気持よくシャアシャアやりは



がら、壁面一杯に書かれた落書きを読んでいましたね。扉を押して出ようとすると、出会いがしらに若い娘とぶつかりそうになった。何を隠そう、このサクラちゃんなんです。あつ、御免つといって、行きかけようとしたらオジサマお願いっていうんですね。いきなり初対面をお願いなんていわれりゃ、シラフの私なら一応警戒するでしょうがね。そこはアルコールが入っているから調子がいい。"お、何だい?"とじつと顔をみてやると"何かいいアルバイトない? お世話して"といきなり単刀直入なんです。みずしらずの女の子にアルバイト世話してやるほどの酔興もあ

りませんが、酒の酔いがそうさせたのでしょうか。"ああ、いいよ。いつでも訪ねておいで"と気易く名刺をくれちゃった。名刺なんてものはね、悪用されるかも知れないと、こんなところじゃ滅多に出さないんですが、フラフラッとやっちゃったのは、彼女が余りにも、天真爛漫だったからでしょうね。ひとつには、アルバイト料やってハント出来ないかなあって心も動いたことは確かなんです。身分もところも、名前も知らないその娘は、チラリと、名刺をみると"有難うオジサン"といって握りしめた唇、さっさとトイレに消えちゃった。席に戻ってトイレの方を窺っていたら、間もなく出てきて、若い男女のグループの方へとけこんでしまった。もう私の方など、振りむきもしない、憎さなんです。ところが三日許り経って、いきなり電話もなしに、私の会社を訪れてきましたね。秘書が吃驚して、ジェラシーめいた眼で私をみつめましたよ。ね、そうだろう、サクラちゃん"

手振り身振りに、社長の仕方話は、微に入り細に亘っている。

「これが本当のクサイ仲ですね」

「というと思った。古いシャレ」

「それで?.....」

「これが正真正銘の女子大生で、学内は唯今紛争の真最中であります。会社じゃハナシも出来ないし、まあメシを喰いながらと先に出させて、あとから教えておいたレストランへいきましたね。会社では固いマジメ人間になっていきますからね、ヘンに秘書や社員が気を廻してもいけません。まさかやってくるとは思わなかったが、近頃の娘は、大胆なんです。いきなり見ず知らずのあたしにコネをつけるなど見上げたもんですよ。可愛い子だし、スラリとした背丈の案外グラマーちゃんでしょう。そこは男、アルバイトにことよせて、モデルに口説いたら、あっさりO・Kなんです。無論、緊縛のことや、SMのプレイのことなんか、オクビにも出しませんでしたね。まあ、彼女にすればヌードモデルが精一杯といったところでしょうか」

一度、二度はヌードでおとなしく納め、やっつと三度目ぐらいから、そろそろプレイを始め出し、彼にしては珍しく気長に飼育した、

というのである。その成果を見せたくて、かくは関西までつれてきたという次第——。

桜子は悪戯っぽい眼で、社長のやや、自慢たっぷりのハント話を、口を挟まず聞いていた。ここいらが汐どき、私のタネをバラしてやれば、二人とも果してどんな顔をするだろうか——。ここに到るまで、遂に鬼六氏の「オの字」も登場しなかったのである。

「へえ。何とまあ幸運なこと……。鴨が葱を背負って来たようなハナシですね。ところで、サクラちゃんと、鬼六氏とのつながりは？」

「えっ！」

キョトンとした賀山社長は絶句して、まじまじと私をみつめた。咄嗟の言葉に返事も出来なかったらしい。

「八月十五日に鬼六さんと京都であって、その節、サクラちゃんを撮ったネガのDPEを依頼されたのですよ」

「あーあ、参った、マイッタ。辻村さんはコワイ人ですね。ちゃんとご存知だったのですか。それにしても人が悪い。散々喋らせておいた挙句に仰有るなんて」

流石に社長の顔に、困惑と微かな怒気が走った。桜子の顔からは、さっとスマイルが消

える。これは、まずいことになった。社長のハント譚として、欺かれて聞いているべきであつたと、咄嗟に悔恨にかられる。

真実はどうであろうとも、遥々京都まで彼女を連れ出して来た理由の一つには、自分の手でハントしたという他愛ない虚栄と、私に対する対抗的な自負心が、彼の心を支配していたに違いなかったのである。それを私は無惨にも打ち砕いてしまったのであつた。

気拙い沈黙が刹那、流れた。社長以上に桜子にとっては、既に自分の秘密を、この初対面の私に知られているといった、屈辱の羞恥が蔽いようもなく、彼女の眉を上げらせていた。いつか笑い話に言え

ばいいものを、余りにも直截に過ぎたきらいがあつた。

反省めいた口調で、

「多分、偶然の一致なんでしょう。それとも私の思い違いかも知れませんが。世の中にはよく似た人が多いですからね」

「そう言われるとつらいですな。いえね、本当のことを言うと、私と鬼六さんを

置き換えてもらえばいいんです。実の処、鬼六さんから彼女を紹介してもらって親しくなつてから、彼女に鬼六氏との出会いをいろいろと聞き出したのです。私のフィクションも幾分は含まれていますがね。恰度、辻村さんのカメラハントのように」

チクリと彼も皮肉をいう。

「黙って、信じていればよかったですね。どうも私の悪い癖で、すぐ暴露してしまふ」

「辻村さんの手前、偶には私だって少しいいカッコしたかったんですが、すぐに曝れちゃった。でも考えてみれば、鬼六さんとあんなは友達だし、いつかは分ることでしょうね。」



鬼六氏に別段口留めをお願いしたわけじゃなし、辻村さんが知っていて当然かも知れませんがね。でも、あんまりあっさりバレすぎてガッカリ……」

そこは同好者同志の有難さで、彼も分ったとなると、あとは大きく哄笑した。

「いやね、あの方——。あの時、人に見せないって約束していらしたのに」

桜子がポツと頬を染め、羞恥に身をくねらせるようにして、独り呟いた。それは団鬼六氏への、軽い批難というよりも、自分の羞恥をカバーする、若い娘の本能の響きを含んで私の耳に届いていた。

× × ×

意外なくらいに、賀山社長は京都の地理にくわしかった。私の操る軽自動車の、狭い助手席に、巨軀をかがめて乗り込み、うしろのシートに、横坐りに桜子をのせて、車は市を、社長の指示に従って、走っていた。社長の外車のベンツに較べて、月とスッポンの軽自動車では、桜子も流石に窮屈であった。儲かって仕方のない社長と、一匹狼で何とか喰う心配のない程度の私を同列に比べること自体、無理である。私の貧弱な車を軽蔑するような社長ではないことは熟知していても、

カッコよさを身上とする、東京娘が私をどう思っているかが、つい心に引っ掛かった。しかし、それは単に私のひがみであったかも知れない。

プレイのフォートを撮る場合、いつも利用する、岡崎公園、南禅寺境内、清水附近のアベックホテルを考えていたところ、社長は山科の方へ走ってくれという。

「最近製品の運搬状況を考慮しましてね、滋賀に製品の組立工場を設置しましたので、アジトをつくったのですよ。一カ月に数回出張するのですが、来る度毎にホテル住いじゃ不経済だし、それに第一不自由でしてね。夜おそくまで木屋町でのんだりすると、ホテル探しに一苦労でね。ついに東京並みに、こちらへもつくりました。山科御陵の近くなんです。コーポの一室ですがね、普段は滋賀の工場の人間に管理させてあるのですが、私がくる時は、チャンとあけるようになっています。鍵は持っていますから、いつでもO・Kなんです。三人連れじゃ、その方が気楽でしょうしね」

確かに彼の言う通り、アベックホテルへの三人連れは、多少とも気がひける。男二対女一のカップルは、やはり奇妙にうつるに違い

なかった。私や箕田氏など、今では案外平気であるが、矢張り社長はそうした点をいつも気にしていたのであろうか。

四階建の真新しいYコーポへの道順は、彼の言葉通り、右折左折して、唯言う俣に動くのみであった。

三階の一室。表札は多分、滋賀の某である。馴れた手付で彼は鍵をさし込むと、勝手知ったる部屋へさっさと入って行く。

続いて入ると冷めたい空気が頬を撫でた。ガスストーブに逸早く点火すると、洋風のしつらえの応接セットにどっかと坐る。

「部屋が暖まるまで話をしましょうや。何ならサクラちゃん、お風呂へ入る？　すぐ沸くんだよ」

「ええ有難と。じゃあ、入れていただくわ」

彼女は、ちっとも物怯じしない。

「まあ、沸くまでここへ坐れよ。辻村さんに何か聞きたいっていつていたんだらう」

「ええ、でも何だかへんだわ」

「何がへんなの」

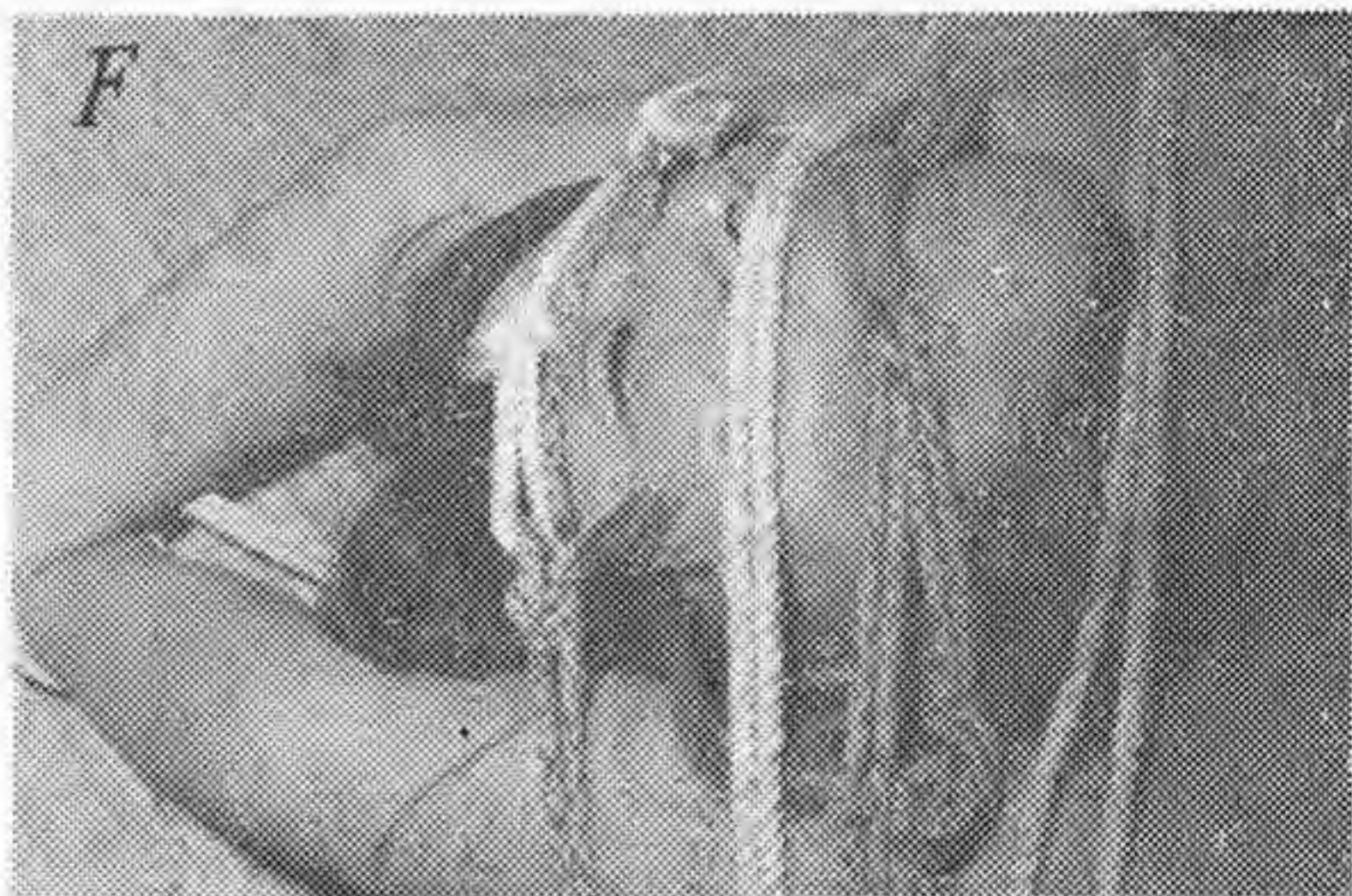
「いっちまおかな。あのネ、辻村さん。沢山今迄に撮っておられるからおききするのですけど、私ってガムシヤラに自分自身を虐めてみたくなる時と、そんな行為がむしろ嫌

悪される時と、それがスゴく極端なの。そんな女の人ってある？」

「さあ、どうでしょう。余り内面的な精神面まで聞いたこともないけど、生理の影響じゃないんですかね」

「多少はそんなこともいえますけど、そうでもない時でも、そんな気持ちになるんです。鬼六さんに、始めてラ・グラニジアという穴ぐらバーで声をかけられた時も、自虐的な気持ちの時でした。本当はアルバイトなんて必要ないんです。お金は多い方がいいにきまっていますけどアルバイトしてまでは、ほしくないんです。だのに、あの時、声をかけられフラフラッとしていていっちゃった。単なる行為だけでしたけど、彼の話や人柄がスゴく面白かったのよ。どんなに虐めるのかと思ってゾクゾクするような期待をかけていたのですけど、何もしなかったわ。その彼の呼び出しに二度もすっぱかしたくせに、自分から電話して呼び出したりするの。すっぱかした時は、そんなことが煩わしくて仕方ない時。電話する時は自分を見苦茶にして欲しい時。どうしてそうなるのか、自分でも分らない」

これは面白い子である。心理を心憎いまでに語っている。対象の男性の言う俚にはなり



たくない。プレイといい、セックスといい、自主的に、自分に忠実でありたいのだ。こうした、かなり高度の教育を受けた娘にあり勝ちの怜情が、男性に隷属化することを拒否し欲求の発露と共に、自分の意志によってすべて行動したいという希求に外ならなかった。

私はそうした心理を、いっばしの風俗研究

家のような口吻で、縷々と解明していった。理解出来たのか、出来ないのか、しかしサクラ子は時々、我が意を得た風に頷いてきいていた。

「それで分った。君があんなに強烈に虐められて歓喜の声を挙げているのに、その次連絡したら、平気ですっぱかすんだからね、頭にきちゃったんだよ。すべてはサクラちゃんの意志任せのプレイということなんだね」

賀山社長は、甘酸っぱい顔で、折ふしの振られたのを回想する。

「どんな時に自虐的になるの？」と私。

「何かひとつの思索から解放された時ね。私って凝り性なんです。ゴーゴーを踊っている時は、それに夢中になるし、遊んでいる合間を縫って、偶に勉強する時は、一心不乱に打込んでるのよ、そのことに。泳ぐのが好きで夏中、葉山で過ごしたけど、泳ぎに飽いちゃって、フト人生にむなしさを感じた時、連中とおそくまでのみ歩くわ。そんな時の私って何もかも投げ出したくなるの」

「今は？」

「社長さんについて来ているから、分るでしょう」

聞くだけ野暮だといわん許りである。

「鞭打ちなんかされたことある？」

「この怖い人は、やるわ。汚い足指を私の口の中へ押し込んだり、指先から上へ段々と舐めさせていったり、私の顔を雁字搦目にゆわえて踏みつけたり……」

「それに屈辱を感じる？」

「そうね、屈辱と羞恥にまみれて、こん畜生と思いがら、その癖、虐められることによって、女の持つ業の深さをひとつひとつ除去されてゆくみたい、果無い女心。別段どんな行為でもいいのよ。それが私という人間によって、相手に満足を与えるものなら、価値あると思うの」

己れの乱倫の行為を定義づける桜子の聡明さが、それを詠歌するように喋る時、一入精彩を放っていた。

「失神についてどう思う？ 近頃よく話題にあがるけど」

「応蘭芳とかいう女優のようにセックスの極致の状態を売りものにはしないわ。でも、最高の欲びの時、そうした状態に陥っても不自然じゃないわね。悲しいことに、その極限にまで私を燃え上らせるヒトには未だ出くわさないだけのことよ。辻村さんならどう？」

「とてもじゃない。でも緊縛や責めのプレイ

で失神する子だっているんだよ」

川口有里子の面影をフト思い浮べていうと「あるかも知れないでしょう。苦痛が快楽にかわる時、それは私にも少しは言えるかも知れなくてよ」

横から賀山社長が、ややあきれ気味に、

「おいおい、もう難かしい議論はよせよ。さあ早くバスへつかっておいで。沸いている頃だから」

と打ち切るように言った。百間は一見に如かずという論法で、理くつ抜きで、いつときも早く、プレイの実際に移りたかったに違いない。私も苦笑して煙草をとりあげる。パキパキと喋る桜子の論法に、つい身を入れ過ぎた自分が年甲斐もなくピエロに思えた。

「何しろ女子大生ですから、どうも理くつっぽくてね。早いとこ縛っちゃいましょうや。あんな娘相手に、まともに議論していると日が暮れちゃいますよ」

「そうでした。私も夕方からまた約束があるんです。じゃあ支度しますよ」

梨花悠紀子とのデートは言いそびれて、そくさとバッグを開きにかかった。

「縄なら幾分準備もしてありますからね。いつでもサアという時に間に合うように、ここ

へ備えつけてあるんです」

カーテン仕切りの隣室の、和室の押入れを開くと、錠前付きの鞆をとり出してくる。その折々に溜っていったのか、ロープ以外の打紐や手錠、クリップ、浣腸器、エネマ、嵌口具など、種々雑多にとり出す。

「ここでプレイしたことあるんですね」

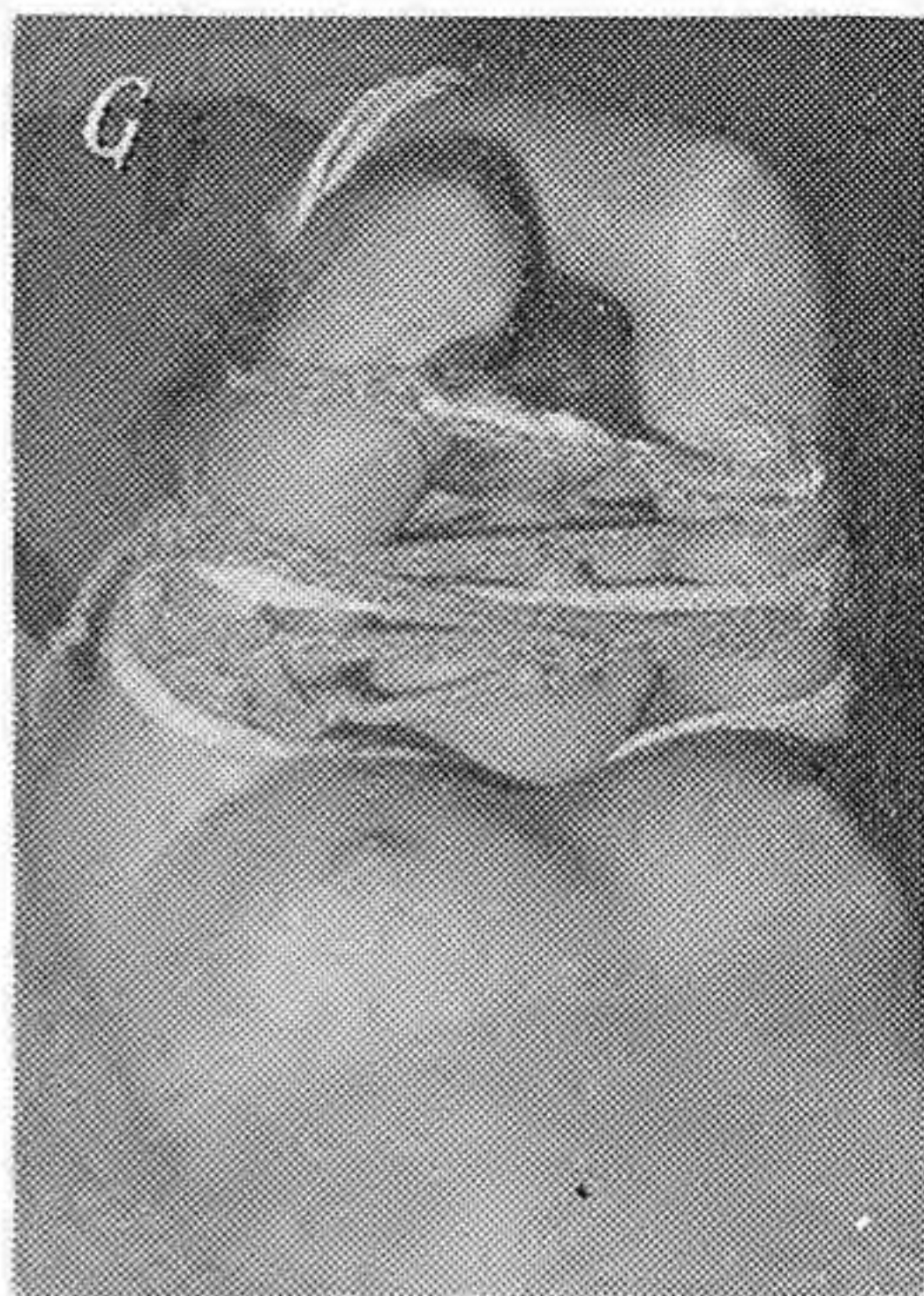
「ええ、彼女は今日が始めてだけど、三人ばかり連れ込んでやりました。宮川町の芸者に浣腸した時は面白かった」

「フオトある？」

「それがどうしても写真とらさないんです。シャシンとるのなら死んでもやらないっていうもんだから、プレイだけに終始しました」

「何が面白かったのです？」

「お茶屋で寝たけど、裸にするのも一つズンドウで、体がよくないんですね。それでお座敷姿の促連れこんで、真赤なしごきで着物の上から縛ったんです。四つ這いにさせて腰をあげさせ、裾をまくって、タップリと注入したんですが、便所に行かせない。ポリバケツに垂れ流させたところ、晴着姿で泣きながらプウプウと何発もおナラをするんですね。浣腸の最後の空気音ですが、まあ、あんな羞恥の肢態はチョット見られない。呼んでも二度



と来なくなりましたがね」

「またとない構図ですがね、惜しかったね。」

その外には？」

「ホステス——、これは何でもやりました。」

フォトも撮ってありますからお見せしましょう。しかし、金銭で割り切った感じで、もう

一つ感興が湧かないですね。また呼んでね、なんて洒々として帰られると、反ってもう遊ぶ気がしないものです」

「被虐的に狙れているということは、それだけ近頃、そんな要求をする客が多いという証拠でしょうね」

「もう一人は、東京からつれてきたピンクス

ターで、近頃余り出なくなっているクラブへ鞍替えしたK・S子です。でもこの娘はいやがった。

ほんの真似事みたいで終わりましたが、セックスのサービスは濃厚でしたよ」

「ウーン、これはプレイボーイだ。関東だけじゃあきたらず、遂にこちらまで魔手を延ばしてきたってコト。偶には呼んで下さいよ」

「飼育出来たら辻村さんと思うのですが、そこまで行かないんですね。そのホステスならいつでもO・Kだけど、クロウト女に興味ないんでしょう」

「そうでもないけど、ヒモ付きじゃない？」「分りませんね。あたしゃ構っちゃいないけど、あとが怖いんじゃないかな」

雑談の折ふし、湯の音がきこえていたが、どうやら上って来た気配である。

「この俣でいますの？」

声に振り向くと、桜子は、タオルを縦にして、胸から下を蔽って、肌を桃色に染めて立っていた。

「これでも纏っていないよ」

賀山氏が開いた押入から、ポイと一枚の服に似たものを投げる。

「なあに、これ？」

「あたしが考案したベッド着だよ」

「ヘンなもの。こんなのをいろんな女の人にさせて喜んでるのね」

白地に襟から腋に赤のふちどりで、一見してノースリーブのワンピースのようだが、よく考察すると、ファスナーで、真中から割れるようになってる。

一寸眉をよせたが、桜子はそれを素直に身につけた。鏡の前に立つと化粧を直す。顔は洗わなかったらしく、アイシャドウはその俣であった。背まである黒髪も濡れてはおらず前髪を揃えて切った髪形が、殊更に彼女をあどけなく可愛いく見せていた。

「今日はベテランの辻村さんが一緒だから、うんときつく縛るぞ。サクラ、観念しろよ」「いいわ、縛られてやる。さあ、どこからでもいらっしゃい」

女子大生はヴァンプのような笑みをこぼして、ソファに横坐りにすわると、スラリと形よい脚を組んだ。私はストロボを装填して、カメラの準備を手早く完了する。

「オッパイを見せてごらん」

賀山氏の命令で、桜子はぐっと胸をひろげる。豊かに実った汚れなき乳房が、お互いに押し合うようにして覗ける。鬼六氏の撮った時にくらべて、ブラジャーのあとはかなり薄くなっていたが、それでもはつきりと、胸と乳房の間に一線が劃されていた。微かに羞恥をただよわせた横顔に、小川知子に似たプロファイルが流れた。この容貌の娘はカマトトなのかしら——。処女を標榜した小川知子が非処女云々と叩かれ、告訴騒ぎもうやむやに納まったところを見ると、強く押せなかった真相もあったらしいが、私は今、この志摩桜子の、やや不敵ともとれる無心の横顔に、うちに潜む浣腸の血の流れを、直感でかきとった。しかし、その物憂げな眸は、男心をそそらずにはおかぬような、なまめいた情感を、そこはかとなく漂よわせていたのである。

薄く桃色に色づいた乳首の新鮮さは、サクラ子の名にふさわしい、桜桃の未熟の美しさに輝いていた。(A)

× × ×

「辻村さん、どうぞ始めて下さい」

「いや、最初はどうぞ。いずれ追々と……」

「どうもベテランに見られていると、縛りに

くいんですが——それじゃ」

プレイ開始の、このヘンなやりとりを、座敷の壁際で、桜子は全裸の儘きいていた。賀山氏の要請であると、素直にサラリと脱いだ彼女は、別段肉体の一部を蔽うでもなく、のびのびと均整のとれた長身を大股に運んで、部屋の片隅に黙って横ざまに坐ると、プレイの時を待っていたのである。前髪がかなり延びて、かたちよい両の眉をすっかり蔽いつくし、くつきりと未だに残る、ブラジャーとパンティの、肌を蔽ったあとの肉の白さが、妙になまなましく私の眼に眩しかった。水泳が好きであると彼女自身がいうその証拠が、ありありとその肉体に烙印されているようであった。(B)

「さあ、縛ってやるよ。今日はうんと虐めてやるからね、覚悟はいいね」

「いいわよ、そのつもりだもの」

娘の眼が小悪魔のように細く笑った。妖しい魅力が眸から燐光のように発散する。

縄を構えて賀山氏が女体によりそうと、桜子は神妙に両手をうしろに回して組んだ。私の方にチラッと眼をやった彼は、流石に私という人間の介在に一寸やりにくいのか、暫らく考えていたが、丸い縮ロープを簡単に彼女

の胸に二重に巻いて、背で結んで両手を縛っていた。巨軀を運んできて、別のんだら紐をとり上げると、横坐りの俣の彼女の足首を縛って手首に繋いだ。余り緊縛ともいえないが、まずは手始めといったところであろうか。若さのシンボルのような、円錐型に盛り上った乳房が、それだけまるで別のいきもののように、微かに息づいて震えている。ごく平凡なポーズに過ぎないとしても、そこには緊縛美の一つの典型が現出していた。うっすらと、半ば開いた唇から洩れる吐息は、既に被虐の縛しめをうけて、裸身をまざまざと曝す羞恥の象徴のように喘いでいた。(C)

私のシャッターが、数度カチカチとなり、その度に閃光が、瞬間に白く裸身に光ったあと、賀山氏は待ちかねたように近づくと、桜子の左膝をぐいっと、かなり力強く裂いた。

「あッ、イ、イタイ」

小さく叫んで、均衡を失った上半身が、うしろに、倒れかけようとした。素早く首筋に手を当てがって体をささえると、足を使って尚も両膝を割ろうとする。戻れた足首に縄がかなり強く喰い込み、それでも両膝がやっと左右に開く。あぐらをかいたポーズに変化したとき、否応なく黒の陰湿なかげらいが私の

視野にはいった。濡れた上唇がさながら象徴的に、男の慾情を煽り立てるように肉感的にぬめついで、うっすらと開いている。閉じた瞳の上の弧を描くアイシャドウの青黛が、ねむり人形が眼を閉じたようで、余りにも判然とし過ぎて、あどけない表情のバランスを崩していた。

髪を驚掴みにすると、ぐいと顔を持ち上げて、彼は私のカメラに被虐の相をまざまざと突きつけたが、桜子に拒否の反応の色はなかった。ほんの先程まで、自虐の心理を分析し議論を斗わせていた娘の、これは眼を瞞る豹変のポーズであった。あの時の桜子と、いま眼前にある桜子が、同一人物であるとは到底思われぬ位、それは被虐にすべてを委ねきったポーズになりかわっていた。

しかし、それは、桜子のあの発言とは、決して異質のものではなかったかも知れない。今の彼女は、みずからを自虐の淵に追いやったときの桜子の姿であった。それは赤裸々な心情の発露から現われた、ごく自然のなりゆきのポーズに違いなかったのだから――。

息をつめて私は凝視した。そこには女子大生としての桜子のイメージは全然影もなく、あらわに息づく一匹の女豹の悦虐の姿のみが



レリーフの如く浮き上っていた。

掴んでいた髪を離すと、ぐらりと揺れて女体から緊迫感がスッと抜けた。ぐったりと前かがみになり、開いた花がいつしか、貝殻が閉じるようにすぼめられた感じであった。縄をとくのに一分もかからない。虚脱した状態で娘は、そっと腕をさすっている。

腕を撫して立上るとは、こんな状態をいう

ものなのだろうか。今の私の心は、桜子の全身をキリキリと心行くまで締めあげ、縛りあげたい欲求にひたすら駆られていた。それにドサリと投げだされてある、一束の細い真田紐が私の欲求に拍車をかけた。賀山氏の所有の紐で、彼のフォトに往々みかけるシロモノである。

「いよいよ、やる気十分ですな」

彼は、真田紐を手にした私を見て、ニヤリとほくそ笑んだ。

「かなり長いようですね」

「ええ、切るのが惜しくて、長い一本になっていますが、それだけに使いにくいですよ」

「縦横無尽の乱取りと行きますかね」

縄を捌き乍ら、緊縛の手段を考えている。

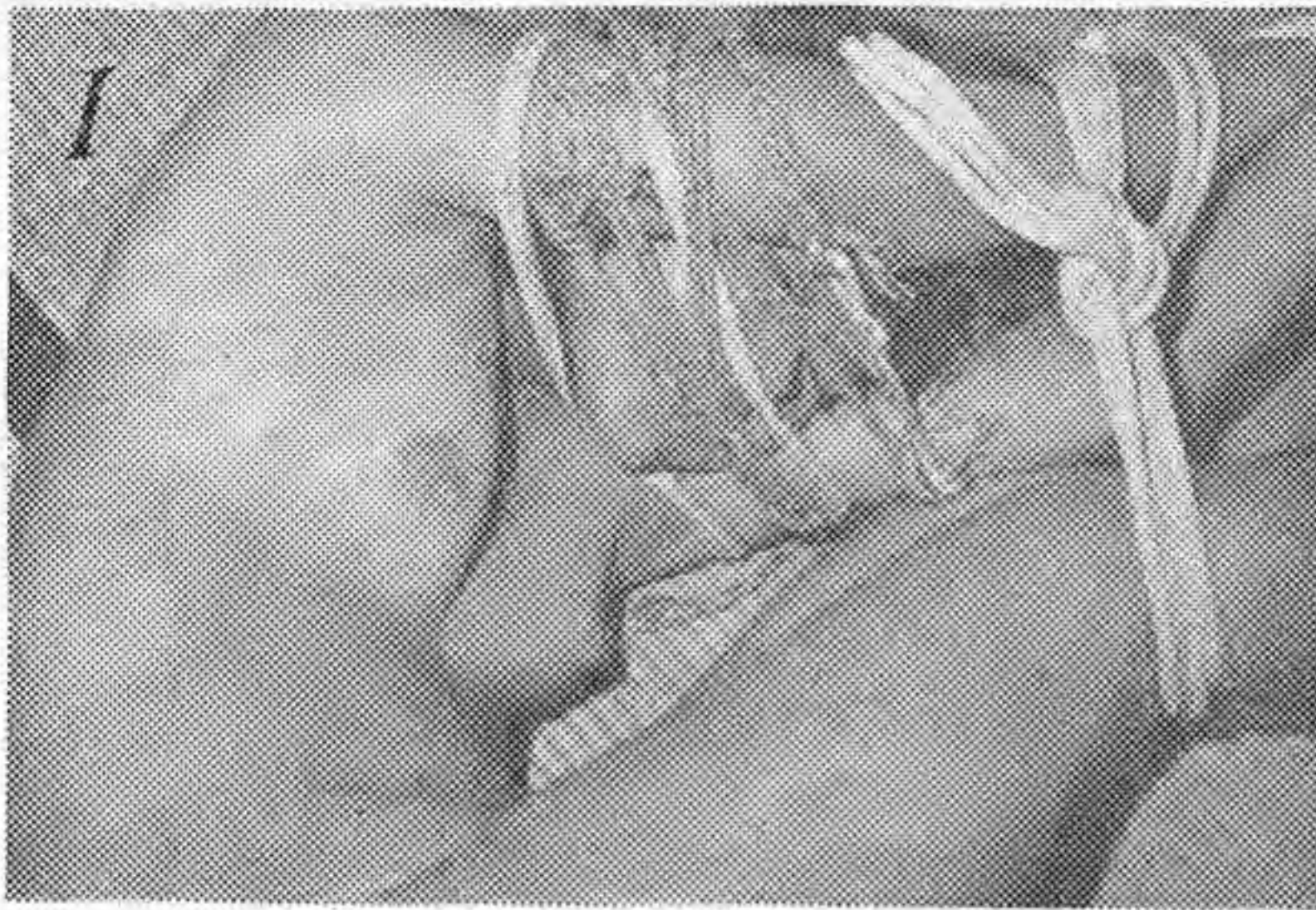
桜子に近づくと、そっと肩に手をかけて

「立ち上ってくださいませんか」

声に応じて無言で眼を起すと、彼女は虚脱からさめたように、弾みをつけて、さっと立ち上った。小麦色の健康美に溢れた全裸と正対して、私の眼は刹那、途迷う。

佇立した桜子に、かなり早い縄捌きで私の手のうちの真田紐が、順を追って彼女の裸身を締め上げていった。

真二つに折って首輪をつくって嵌め、双胸



の谷間で結んで腰へ廻し、胸で菱形にくっつきりと区切って二の腕をしめる。肘を直角に折り曲げさせて両手をかなり強いめに縛る。大きい菱形、小さい菱形が交錯して、女体に鮮やかな縞模様が縦横に走った。私の真田紐は除々に下降し、腰で分れた紐が、双丘を二つに隔て、再び前へ戻って臍上で結び、垂直に

縦断し深々と喰い込んで、ぐいと引き締めて両手縛りの縄に繋いだ。しかも真田紐は尚且数メートル以上も余剰を残していた。

この縛ってゆく過程に、彼の閃光は光りつづけていた。私の猛りきった顔が、まざまざと彼のカメラに、永久に映像を残している筈であった。

ポックリと盛り上った双の乳房の、乳量はその上に弾みをつけて薄桃色に半円を描き、更にポツリと三つ重ねに、乳頭が突出していた。釣鐘型と謂われる、この見事な造形の美に私はしばし縄の手を休めて見とれていた。若し心の在るが儘に獣性を発揮出来る私なれば、必ずや、むさぼる様に乳頭めがけてしゃぶりついていたかも知れなかった。

仰向き加減の桜子の鼻孔は、スースーと甘い呼吸を乱してなっていた。私は正直いって鼻というものに、さして興味を抱く方ではなかった。しかし今、眼前に微動して開閉する鼻孔の余りのかたちのよさに、そして、ややまくれ上った象徴的な上唇に、私の魂は、まったく奪われてしまっていた。

正面から見て、さして特徴のあるとも見えぬ桜子のハナが、一旦こうして振り仰いで眺めた時、まるで別人のハナのように素晴らし

く巍然として屹立しているものであった。

女体を全般的に見た時、一見ありふれてみえた桜子が、今こうしてその部分部分を一つ一つ観察してゆくと、実に得難いチャーミングに充滿しているのである。乳房しかり、唇しかり、そして鼻又しかり。この美の宝庫のような彼女の深奥を探ることを許されるならば、そこにはより以上のえもいわれぬ、珠玉のような美泉もたたえていたのではなからうかと思われるのであった。(D)

この佇立の下半身をカットして撮り終った私は、つい矢も楯も耐らず、余剰の縄を再び前面に戻して、このプリプリしたオッパイに巻きつけて、抜けぬようジワジワとしめつけていった。ポクリと球形に飛び出した乳房が、かたくなってプリンプリンのゴムマリのように円形になる。乳房責めがかくも愉しいものであることを、私は桜子の双乳に始めて見出した思いであった。

その間、彼女は私の手の為すが儘に見じろぎもせず、唯、呼吸のみが激しく乱れ始めていた。指で先端を弾くと、呀っと眉根にしわがより、キュッと唇をかねて、その表情が徐々に快楽に似た、恍惚の伴った顔に変化していったのであった。

今は心の理性の支柱も、音を立ててくずれ始め、私の指先はジリジリと、桜子の乳頭をねじり上げ、揉みつつづけていた。苦痛と悦虐が交錯し、けいれんの様に体を震わせると、ああと絶え入る呻きが、思わず彼女の唇から洩れてくる。

「ああ、やめて……いやあ——」

それはエクスタシーに似た吐息の叫びであった。五指を握りしめるようにして、縛られた指先が、私の乳房責めの執拗さに、悶えるように、しきりに肘に激しい爪を立てつつづけていた(E)

口中をカラカラに乾上らせて、固い唾をのみつつけながら、私の手は尚もネチネチと蠢めく。近寄って来た賀山社長が、ジジジと電動音を響かせて、携帯バイブレーターを一方の乳首の先端にあてた。

絶えいるような呻きが一入たかまり、それが激しい恍惚の嬌声にかわっていった。急にヘナヘナと崩れ落ちるように、桜子はその場にへたり込むと、俄破と両脚を空に蹴上げて長々と仰臥してしまった。

× × ×

真田紐を解き放ったあとも、桜子は羞恥をかなぐり捨てて、だらりと両脚を拡げて投げ

出した後、長々と仰臥していた。嵐の如く全身を襲ったエクスタシーの一過のあとの、茫漠たる虚脱感が、ヒタヒタと彼女の身を浸しているのだろうか。

その裸身を抱え起こして坐らせたものの、まるで魂の抜けたなきがらのように上半身がぐらぐらと揺れている。張りつめていた精根を、すっかり使い果たしたような虚無感が、スッポリと全身を包んでいるようであった。

「疲れたの？」

そっと耳許へ声をかけると、微かなうなずきがかえって、

「私ってダメな女ね」

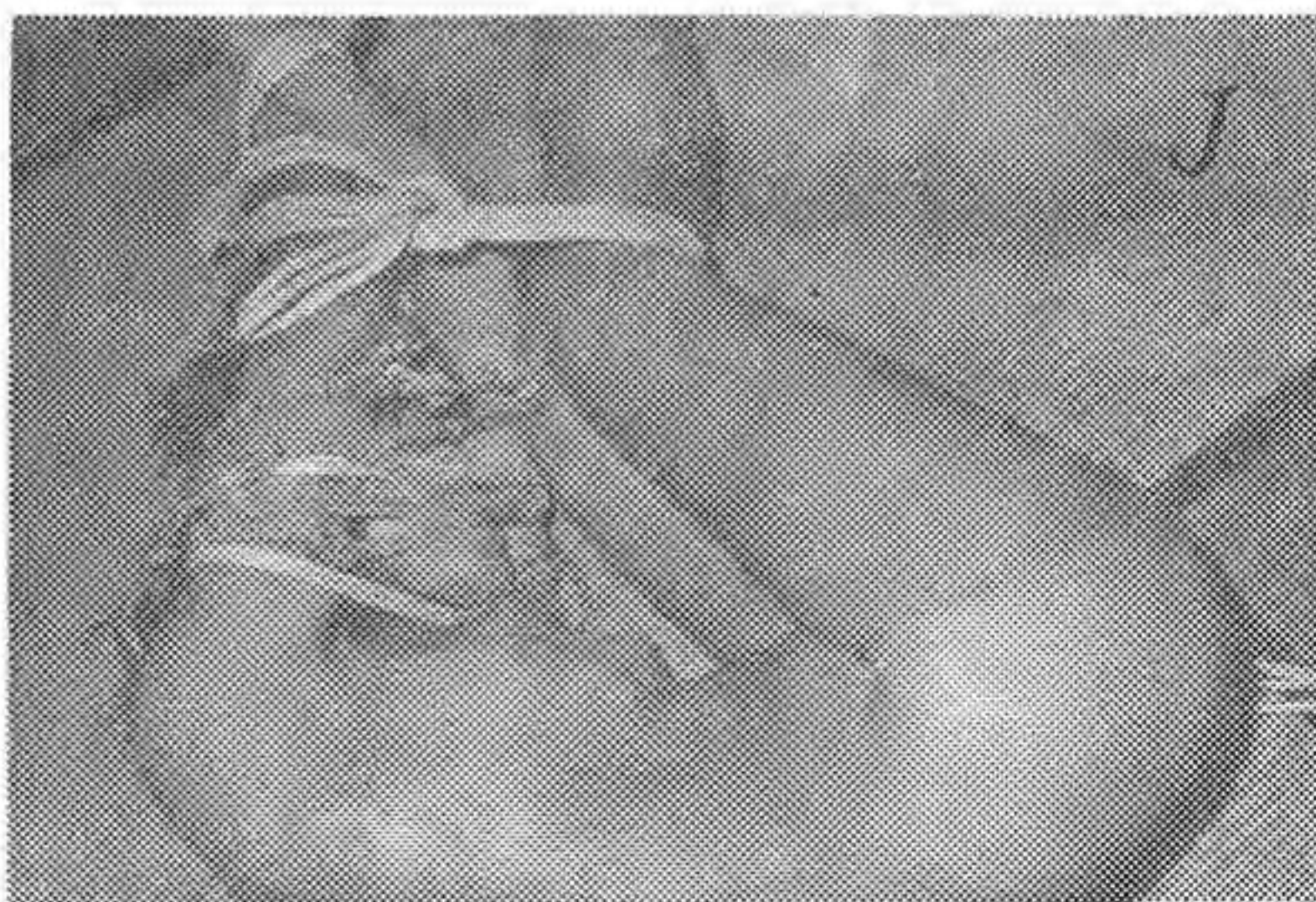
と、まるで歌の文句のように呟く。

「まだまだ、これからだよ」

「ええ、分っているわ、その氣でいるんですもの。いいから、どのようにでも好きなように虐めて……」

もうどうにでもなれといった、濡れた女のふてぶてしさが覗く。そこには女子大生の怜恃も清楚も純真さもまったく影をひそめ、あるものは悦虐を求めて、快楽にのたうつ一人のオンナの赤裸々なナマの姿のみであった。

この個々に独立した若さと美貌を、滅茶苦茶に破壊しつくしてしまいたいような、狂暴



なSの血がその時、脈々と波打ち始め、私の心を激しく疼かせ、喚めき立たせ出した。

私の心の変化を読みとったかのように、賀山社長は、彼方のソファに腰を落して、サントリーゴールドを傾けながら、じっと静観していた。

桜子の両腕を高々と上げさせると、両手首

をしっかり交叉して縛り合す。長く余った縄尻を顎の下にかけて腋下を巻き、腕もろとも頬も歪む強さで鼻下をしめつけ更に一卷きしてひたいを巻く。しかし縄はここで終わった。もう緊縛の美醜にこだわってはおられなかった。だんだら縄を手早く継いでひたいをしめてゆく。狂暴な私の動作に、桜子の眸は微かな恐怖にまたたいていた。

「舌を出すんだ、舌を——」

私の命令に、あわてて、紅い舌を、つと覗かせる桜子。

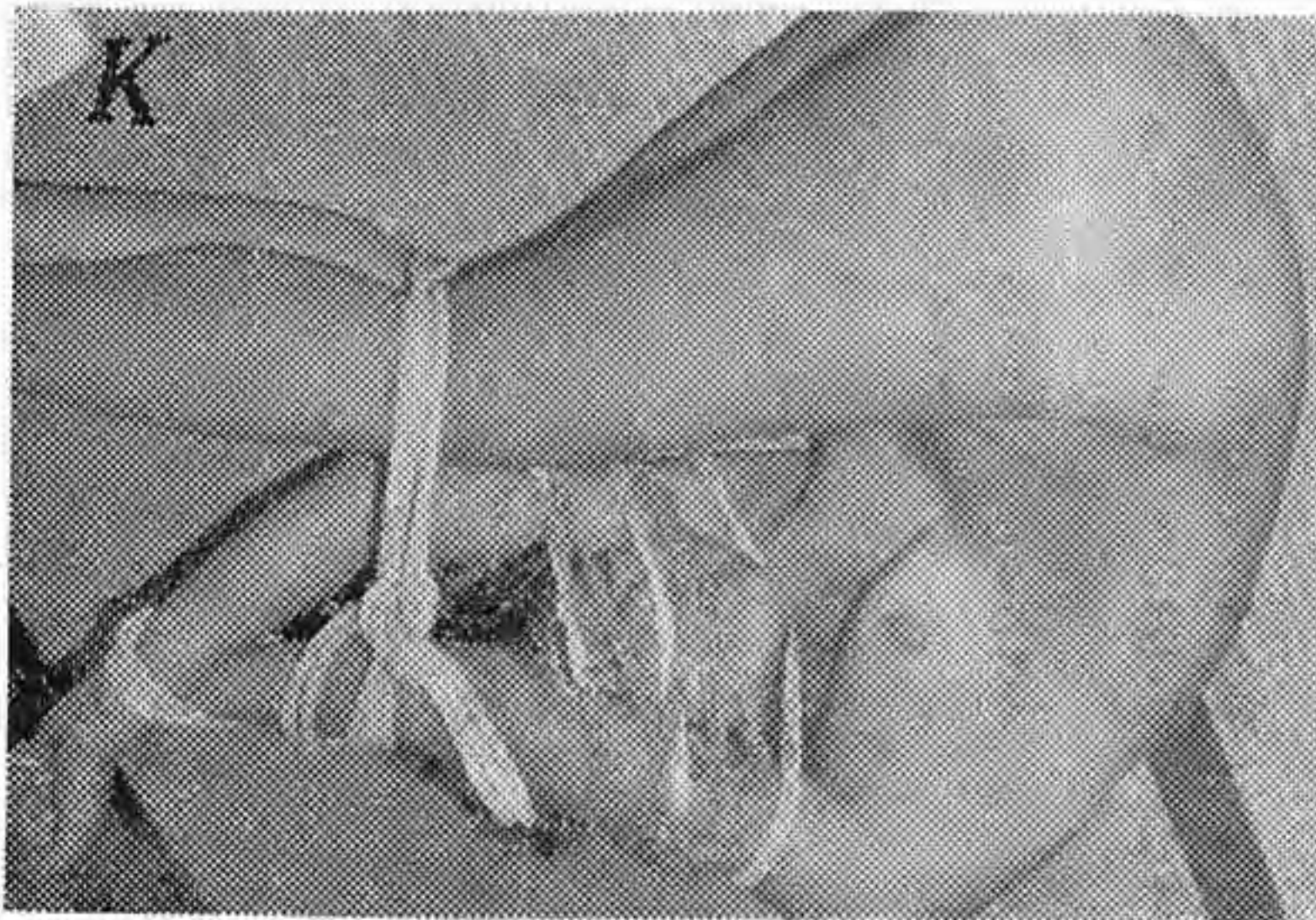
「もっと一杯に、思い切り出すのだ」

その声に怖れをなして更に長く押出す。出された舌の上下に縄は深々と喰い込んで、力一杯ひき絞った。縄目に挟まれた舌端が唇から太くはみ出して赤く濡れていた。鼻孔がヒクヒクと蠢めき、強烈な縄の猿轡に、桜子は喘いでいた。

剃り上げた腋毛が五ミリ許りのびて、硬い黒さを、腋に疎らにバラまいているのが、眼に痛かった。腋毛の剃りにフト反射的に、私の目線は下降すると、その個所に眼がヒタと止る。若い女のたしなみかそれとも自虐の現われか、形よく整ったデルタの周辺は、蒼色をただよわせて、毛根の芽ばえがちらほらと

散見していたのである。

腋毛を剃る風習が、近頃の若い娘達に蔓延した結果、いつしかその個所の手入れも人知れず行なわれている事を、私は確認した。ぼうぼうとなびく在るが尽のそれよりも、形をととのえる事が、若い娘達の条件となりつつあるのは、ツンパに近いパンティをつける若



い娘の、それはたしなみでもあるかも知れない。再び顔面に眼を転じた時、閉じた双眸の上のアイラインが、瞼から遊離して、三日月型の弧円をありありと見せつけていた。

体を傾けてのしかかると、ソツと鼻をつまむ。十数秒でウウと苦しげに呻いて、半身をのけぞらす。息詰まる刹那に女は酔ったように、一旦開いた瞼を再び閉じた。

顔を近づけて舌を出す、押し出された桜子の舌端を、首を振り振り舐めつつ行く。引っ込めもならず、気配で男の匂いを嗅いで、桜子は動けぬ首を振ろうとした。私の意識の中に、最早や賀山氏の存在はなかった。SMのプレイに耽溺する、一匹の野獣化した私は更に桜子を、もっともっと虐めようとする、ハレンチなたくらみにほくそ笑んでいたのである。(F)

両肘を徐々に顔面をかかえ込むように、そろそろ移動させ始め、頭を上げさせると、更に一本のだんだら縄を追加して、両腕と顔を挟んでしめ上げるようにぐるぐる巻きにしていった。腕の動きにつれて縄がゆるんだのか挟み込んでいた舌端がスルリと抜けて、舌は引っ込み、縄のみが口辺を蔽う、恰好になった。(G)

長く伸びた下半身に眼をやっていた私は、つとその両足首を握り、いきなりぐいぐいと弯曲させていった。腰が浮き、背が持ち上り肩胛骨で辛うじて体を支えるまでに屈曲した時、柔軟な若い女体は、縛った両手を挟み込んで、完全に両足をタタミにつけた。太い綿ロープで、手足を一括して縛り合せる。灼けていない双丘の白肌が高く屹立して、腋に廻った縄が、深々と喉頭に喰い込んでいた。これは最も苦しいポーズであろうと思われ、手を離しても、じっとその姿勢を保つ、桜子の被虐性に、私は感嘆の念で、しばしカメラとる手も忘れて、みとれていたのである。腹壁を圧迫されて、ウンウンという、苦悶の呻きが、断続して流れる。それでいて、やめてほしいという言葉は一言も洩れない彼女の芯の強さであった。

呆然と見惚れていた社長が、あわててカメラを構え、背伸びするようにこのポーズを真上から狙って閃光を放った。私もこの機を逃さず数ポーズ慌ててとりまくる。(H)

「倒れぬように、私が足許を押えていますから、鞭打ちやりませんか」

社長がそっと耳許で囁く。

「やりましょう、革バンドでいいかな」

「いいですとも、彼女飼育済みですよ。ただし、多少手加減してやって下さい」

カメラを措くと、社長は足許に回ってぐつと両脚首をかかえ込んだ。ズボンを脱いで革バンドを引抜くと、私は高く振りかざした。さっとふり降ろすバンドが真白い双丘に炸烈する。

「ヒューッ」と絶叫がしじまを裂いて、流れた。つづく二閃、三閃に苦楽の交錯した激しい呻きが鞭数と比例して口をついてはとばしつた。凝脂の乗り切った背に、腰に、容赦なくバンドは飛び交い、そしてその勢いと強さは徐々にましてくる。

急に賀山社長は手を離した。カメラに向って走ると、この凄惨なSの極致のシーンをカメラに納めたかったのだらう。しかしその前に、既にのたうち、重心を失った桜子の女体は、あわやと思う間もあらばこそ、ドタリと横倒しに倒れたのであった。のぞける彼女の表情に悦虐の陶酔がありありと泛んでいた。

追打ちをかけるように、更にその倒れた体に革バンドの洗礼を加えると、ウウと甘い呻きを口走らせて、芋虫のように、体をにじらせ、五体を波打たせて、表情に恍惚が加わってきた。

バンドを捨てて、私もカメラを構える。悦虐にひたる、この若き女子大生の表情をとらえるために――。(I、J、K) この俣つづけければ、桜子に失神がおとずれることは間違いなかった。それを見てやろうという気持といじらしいばかりに協力する彼女の、限界ぎりぎりのSのプレイに、私は相剋する。

「苦しいかい？」

と問いかけても、返事のしようもない、強烈な緊縛である。私はぐいと口辺の縄を押し上げ、押しさげて、口の開けるようにしてやった。

「解いてやろうか？」

「ええ……」

「鞭打ち痛かった？」

「痛いけど、我慢出来なくもないわ」

「恍惚としてたよ」

「ウソ――、けんめいに我慢してたのよ」

パツと桜子の頬が染まった。羞恥が蘇ったのかも知れない。

「喋ってばかりいないで、早くといて……」

あわてて、縄を解き始める。顔面に縄跡がくっきりと色づいている。

「ああ、疲れちゃった」

桜子は、案外サバサバした表情で、ペロリ



と舌を出して、大きく背伸びをした。

× × ×
入れ代り、立ち代り、桜子は縛りつづけられていた。

流石に緊張して、積極的に行動したためか疲れを覚えて、私はソファにぐったりと凭れていた。社長の注ぎ置き洋酒をぐいと口の中に流し込むと、彼の緊縛を見つめていた。

縛られても、又責められても、強靱な女体はそれを撥ね返して、若さを誇示するように桜子は佇立していた。

私の縛り方を真似て、社長は首縄を垂直に脛の辺りまで降ろすと腰で二巻きして股縄に

して背後で締め上げていた。

両手は縛っていない。その俣長く伸びて、腰の縄で自由を奪っている。胸にダンダラ縄をかけてあったのが、乳房の谷間で一巻き交叉していた。

近づいてパチリと一発全身を撮る。ついでトリミングして上半身をもう一枚。ノコノコとソファに戻って、私は社長の出方を静観していた。彼はパイプがお好きなようである。……を用いるより、電動に頼ろうという

処であろうか。見てみると、股縄にパイプを動かして挟み込む。

「じっとその俣立っているんだ、いいね」

ダンダラ縄を数条に折って、それを鞭がわりにペタペタと、女体の周辺を巡り乍ら叩き廻ってゆく。

時によろめき、そして態勢を整えて、桜子は私達の前で、曝し者のように裸身をまざまざとさらしていた。

小鼠をいたぶるような、払拭調の鞭打ちとパイプの単調な低音が、部屋の空気を裂いていた。桜子の唇から、微かに鳴悦に似た呻き

が洩れ、臉がうるんで、ピクピクと上唇がケイレンし始めた。耐えようとする羞恥の呻きが、思わず知らず洩れては、ぐっと噛み殺そうとして、それが否応なく女体の深奥から吐き出すように、歎戯に似た大きな吐息となって喘いでいた。(L)

「ああ、もうやめて……」

中年男二人の目線をジカに受けて桜子は恥じ入るように叫んだ。又しても襲うエクスタシーの境地を、彼女はこれ以上みられたくなかったのかも知れなかった。

「よし、よし、解いてあげましょうネ。いい子、いい子」

社長が猫撫で声でいたわるようにいうと、サラサラと縄を解く。

「こっちへおいで、いい子だから」

手をとって洋間の方へ引っ張ってくると、さっと裸身を抱きかかえて、私の目の椅子に、逆さにねかしつける。私も社長もよくやるポーズである。

「手伝いましょうか」

声をかけると、

「いいんですよ、休んでいて下さい。私一人で大丈夫ですから。さあ、いい子ちゃん、ぐっと足を開いて」

開ききった両脚の太腿を肘掛けに縛り、余った縄で手首を縛りつける。シュッシュッとフロアを這わせて、ロープで胸を締めつけてゆく。

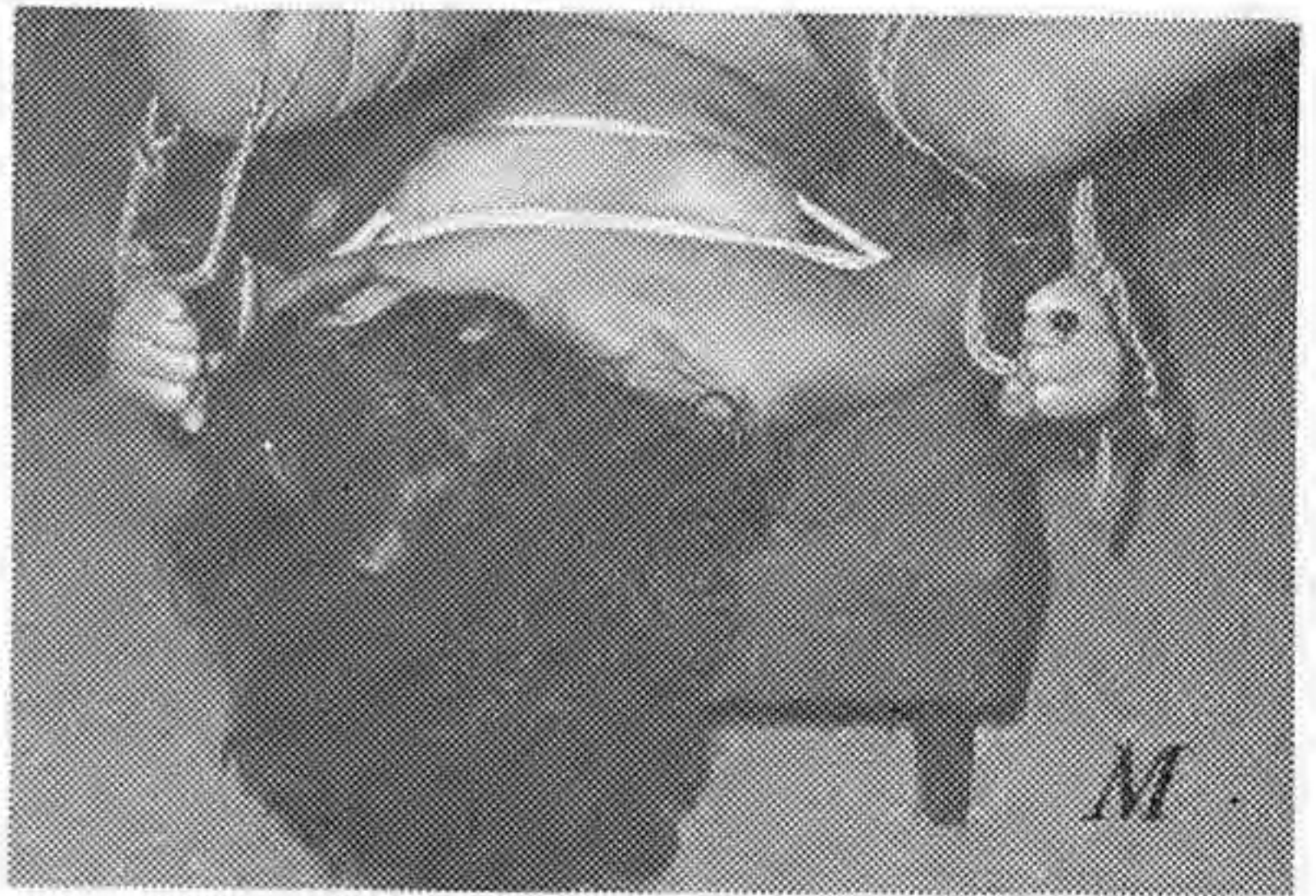
立上り、興深げに私は椅子の後部に回る。否応なく開ききった美体に私の視線は焼きついていった。

この羞恥の極のポーズにも、桜子はあえて非難めいた表情をみせなかった。自虐に徹した時は、かくもハレンチに振舞えるものだろうか。構図にはなり難いポーズではあるが、精一杯さけてトリミングを撮る。しかし私のカメラは、このシーンにかなりのフィルムを費やして、アップもかなり多くとっていた。

「ローソクがあれば面白いんだけどね」

「言うにや及ぶ。その点ぬかりはありませんよね」

社長のとり出したのは、クリスマス用のねじり飴のような、真赤なラセン状のローソク一本。使用法は暗黙のうちに云わずと知れていた。点火して、この女体の燭台を、私達二人はじつと見入っていた。社長は二方の窓の厚いカーテンを引き、部屋のスイッチをパチリと切った。漆黒の暗闇に、めらりゆらめくローソクの光のみが、仄かに桜子の白い女体



を照らし出し、天井に反映して、ボアーンと黒い大きい陰翳を浮き上らせていた。私達の蠢きが、まるで物の怪の様に、壁面に黒くゆらめく。ヒタヒタと妖しい雰囲気は部屋一杯にこもり始めた。

社長の閃光一発が、一瞬の残像を瞳孔の奥に残して、反って光に射られた眼が、真黒な

闇となって、ローソクの光すら、鈍く灰色にぼんやりと漂うのみであった。

「いかん、いかん、あとが真黒ですね」

ストロボを光らせた社長自身、言訳のように私に闇から声をかけた。暫時で眼が馴れてくると、ローソクの微かな傾斜が、立ち昇る光をゆらめかせていた。

「あッ、あつい、ああ……」

蠟涙が流れ始めたのか、黒い頭がしきりにうごめいていた。つれてローソクがゆれる。パツと、電光が再び輝くと、あれ程神秘的だった蠟燭の炎が、赤茶けた一条の哀れな存在に下落していった。吹き消すその辺りに、斑々と赤くこびりつく蠟滴の塊り。桜子は、ぐったりとして、言葉もなく、ガックリとこうべを垂れていた。(M)

×

×

×

口移しに、無理矢理流しこまれたウイスキーを、ごくりとのみ込んで、桜子は苦しい息を大きく吐いていた。

狂態に喚き、痴戯に絶叫した、桜子の長い黒髪は藻と乱れ、じつとりと汗ばんだ顔面にまとわりついていった。ゆるめられた縄目の下に、三枚並べて敷いた座布団が、先程迄の戯れを如実に物語っていた。(N)

その事実を書きたくない、中年男二人の野獣の姿であった。私も半裸、そして今、社長はザブザブと湯音を立てて、バスで体を洗っている真最中である。

SMのプレイの耽溺の果て、プレイのルールを逸脱しての行為が、桜子の体をべっとり濡らしていた。

いつまでも、そしていつまでも桜子は、乱れたポーズで凝っとしていた。若い娘の悔恨がヒタヒタと、彼女のハートをじっとりと悲しくしめつけているのではなからうか。

暗黒の洗礼が、彼女にとって、それが私であるか社長であるかは分らないにしても、二人の共犯であることは間違いない事実であった。

はやり立ち、いきり立つ心は人一倍強い私なのに、既にプレイで昇華した私のセックスは、意志とは全く逆方向に萎縮の一途を辿っていたと言っても、果して彼女はそれを信じるだろうか。しかし、彼女の唇を吸い、あのマルメロのようなボインを愛撫したのは、この私であるとしたならば、悦虐に酔い痴れ、度重なる恍惚の呻きを洩らせた一因は、勿論私にもある筈であった。

私はそっと抱きしめるようにして、彼女の

裸身を起こした。

「悪かったね」

言わずもがなの言葉であったが、女体をふみにじった男の、うしろめたい言訳である。すっと瞼を開くと、桜子はまじまじと私をみつめ、放心した顔に血の気が昇ると、いきなり私の首を抱えた。



「いいのよ、知ってるわ私、何もかも。辻村さん好きよ——」

つと唇を自から寄せてきたかと思うと、熱い舌端が私の唇を押し拡げて入ってきた。強い抱擁の数分——。そして桜子はそっと身を引いた。

「明日はケロリとしているかも知れないわ。でも、今日はこれでいいの、これで……」

燃えるだけ燃えて、SMプレイの対象にしたつもりが、案外本人は、とろけてしまいそうな恍惚境をさ迷って、おこりの落ちたようにさばさばしているのかも知れないのではなからうか。

「後悔していない？」

「後悔？ していないわ。するくらいなら、社長さんについて、わざわざ京都くんたりまでやって来やしないでしょ」

「割り切ってるんだね」

「趣味と実益——なんていうと軽蔑する？」

「いや、でも不自由しないだろ、別に」

「ああ、お金のこと。でもあるにこしたことないじゃないの」

「それはそうだけど」

「古いのね、辻村さん」

彼女は妖しい媚態を満面に泛べて笑った。

サイケとハレンチの時代は、かくもセックスの観念を変えているのだろうか。確かに私の想念は古いかも知れなかった。一方では、このようにサバサバと割り切った女性を求めているくせに、さて自分の同じ年頃の娘達となると、桜子のように割り切っては貰いたくなかった。父親の奇妙なジレンマとでもいうのであろうか。

「気にしなくていいのよ。又いつか逢えるかも知れないけど、又その時、楽しく遊びましようね」

正に桜子の観念は、楽しく遊ぶという言葉で表現した、プレイをプレイとして判っきり区別した態度に尽きていた。反対に、慰められる立場になって、私は苦笑を禁じ得なかった。

私の、SMカメラハントの根底に流れる想念は、確かに古いかも知れない。しかし、中年の坂の私は、やはり私流式の観念で、これからハントするより仕方ないだろう。所詮は二十才と四十代の後半との、世代の相違であつた。

「よく洗ってこようっと——」

ポンと立上ると、憶面もなく全裸で私の眼前に立ちはだかり、彼女は社長の入っている

バスヘスタスタと消えていったのである。

× × ×

「ここら辺りで別れましょうか。辻村さん、約束あるんでしょ。あたしもこの子とメシでも喰って、ヒョットすると、どこかにシケ込むかも知れない」

「プレイのダブルヘッダー？」

「ということですかね」

「疲れますよ」

「なかなか」

タフな社長である。湯上りの顔を酔気にはてらせて、ニコニコと喋べる。社長と私と、六、七年違つと、もう観念も違っている様であつた。

「いや、楽しかったですよ。じゃここでいいんですね」

「ええ、恰度木屋町も近いし、何なら御一緒にしませんか」

「どうぞ御遠慮なく。邪魔者は消えますよ。」

それに約束もありますし」

「邪魔者なんてトンデモない。でも今日半日喜んで頂けたでしょうか」

「勿論、得難いハントの経験です」

「早速、書きますかね」

「許されればネ」

混雑する三条河原町で二人は降りる。ケロリとした顔で、桜子は私にチョイと手を振ると、降りたその手を社長の腕に組んで、もう振りむきもしなかった。

プレイに息づいた女豹は、古都の夜を、飽くまで貪らんに痴戯に耽ろうとするのであるうか——。

× × ×

六時半、京都会館で梨花悠紀子と会って、立川談志を楽屋五号室に訪れ、悪酔した彼の蒼い顔に、芸能人の苦しさを察しても、悠紀子と二人席を並べて「笑点」に心ならずも笑つても、今宵の私の心ここになく、空ろな気持ちで、去りにし志摩桜子の、あの強烈なイメージを強く噛みしめていた。

浅井優子と談志——。志摩桜子と談志——

談志と会う日、私はいつも不思議にハントに縁のある日であつた。

梨花悠紀子の物問いたげな視線を外らし、いつになく三条京阪であつさり別れた私は、夜の一号線をヒタ走りに走り乍ら、幻の桜子の、妖精のような白い腰間のなまなましさに思いを走らせ続けていた。

(おわり)



A子さんのプレイ

大川 恵子

A子さん（ということにしておきます）と何回かプレイをしました。はじめからのことを思い出して少し書きます。

最初の時から両方が、浣腸の好きなものを知っていますから、「便秘なのだから」などと言わなくてもよいのですが、かえっていつもとはちがって何か恐いような気持ちでした。

一番はじめの時私は思いついて、先にA子さんを責めてあげようと心をきめました。雨が降っていてうすら寒い日でした。私の体中が好奇心と寒さで震えていました。私達二人とも裸に近い姿でしたから、一層寒かったのだでしょうが、A子さんも震えていました。

A子さんも私も、浣腸にしか興味をおこさないで、責めるといっても特別な責めかた

など、私が知っているはずはありません。

私がA子さんを押えつけるように膝小僧で踏みしめて、イチジク浣腸の箱からピンクの小悪魔を取り出して、A子さんにわざと見せつけてあげたのです。すると急に顔が赤くなってきたのでした。

畳の感触が冷たいのかしら、A子さんは両手で胸を隠すようになさって、簡単に横向きになりました。私の押えている膝小僧なんか、なにも役に立っていないらしいのです。ちょっと頭に來た私は、少していねいすぎるくらいに、いちじくを浣腸してあげました。つぶしたいいちじくはわざとゆっくりした手付きでA子さんの顔の前に並べてあげるつもりでした。

「A子さん、いつもはあなた、ご自分で浣腸なさるの？」

と訊いてみましたが、A子さんは答えずに頭を横に振りました。

「じゃ、もっとしてあげる」

と私は意地悪く言って、硝子製の浣腸器に八十℃くらい満たしたのを、

「私ね、いつもこれを自分でしちゃうのよ」と言いながら、注入してあげました。A子さんは少し苦しくなったらしく、もじもじし始めたのを見届けてから、私の愛用のオムツカバーをはじめ使ってあげました。まるで可愛い赤ちゃんのようなでした。

A子さんのこらえている様子や、ころげ廻って苦しさを楽しんでいる様子が羨しくなっ

た私は、お風呂場で湯舟の端に手をついたまま、A子さんにお返しをしてもらいました。じわじわと効いてくるのを味わっているとA子さんたら、わざと私の顔をのぞき込んで見詰めるものですから、何だかとても恥ずかしくなって目をつぶっていました。

それから十日ばかり経って、二日目のプレイの時も私のところでしました。一回目の時は私達、二人共黙ったまま服を脱ぎましたけれど、今度は慣れたのかしら、Aさんは少し、だだをこね始めました。

「脱ぐの？」

「そうよ」

「脱がなきゃ、だめかしら」

「あなた、着たままするつもり？」

「でもいいでしょ、寒いもの」

私も寒いのは違いありませんが、着たままだんまりするのは何となくいやでしたから、結局は私だけ恥ずかしい姿になりました。

「恵子さん、あなたお独りでなさい。私、見ていてあげる」

そうAさんは言って、私に五十CCのリスリン浣腸器を持たせるのでした。

私はこの前の別れ際に、確かに独りで浣腸して眺められたいと、Aさんに言いました

けれど、やはりいざとなると恥ずかしくて仕方がありません。でも、自分の言ったことですから、意地でもやらない訳にはいけなくなり、思い切って処置しました。そして、五分程、意地悪いAさんの言葉に乗って、がまんにがまんを重ねて二本目も注入してしまったのでした。めったに使った事のないオマルが、こんなにうれしく思われたことも初めてでした。先日、Aさんにオムツをしてあげましたから、Aさんにしたら、きつとお返しのつもりだったのでしょうか。でも独りプレイでは得られないくらいの素晴らしさがありました。

A子さんには、エネマシリンジでグリセリンを一ピンぶんしてあげました。以前、同じ事を私もしてみましたけれど、仲々便意が去らなくて困りました。これを使ってあげたのは、さっきのお返しのつもり。そして、私と同じようにして処置してあげました。ずい分恥ずかしかった事と同情はしてあげましたけれど……。

三日目のプレイの時は、服を着たままだAさんにオムツをしてあげました。手で顔をおおって腰をかかっていたのが印象的でした。この時はドナンを使ってあげたのですが、少

し可哀想でした。

そのハネ返りでしょうが、私は裸でいちじく浣腸でじわじわと責められました。三十分くらいもかかったようでした。

以前、私、家人の留守に、少し厚化粧をして、いちじくや硝子の浣腸器で五十CCくらいしてから、少しぬるま湯のうちに湯に入り、熱くなってくるまで手鏡とにらめっこをして楽しんだ事を思い出して、Aさんとの四回目のプレイに使うと思いました。あの時の鏡の中の苦悶する自分の顔を、美しいと感じたからなのですけれど、Aさんも綺麗だから、多分おもしろく気に入るだろうと思いました。私はお湯の中だとお腹の痛くなるのも弱く感じられますから、お湯が熱くなるまでがまんできましたけれど、Aさんはどうかしら。ちょっと心配。

Aさんはその日、黒の生理帯をつけていらしたから、それを利用することにして、五十CCのリスリン浣腸を行うとすぐお風呂に入れてしまいました。もしAさんが生理帯をしていなかったら、下ばきのままお風呂に入れるつもりでした。私、経験したのですけれど、浣腸して下ばきのままお風呂に入っていると、何となく下ばきが肌について気持が悪

いものです。だからA子さんにもそうするつもりでした。でもAさんは下ばきではありませんから少し残念でした。似た感じはするかもしれませんが、私も一度試してみようと思いました。

お風呂へ入れる時になって、私、ふと気がついたものですから、Aさんの手だけを後手に縛ってあげました。ご自分の顔を見るのをいやがられると水の泡ですから。

私が鏡をさし出すと「まあ」と言ってお下を向いてしまいましたけど、上を向いても下を

向いても、鏡は許しません。Aさんのお顔が上気して、私にはとても美しく思われました。途中でいちじくを一つ追加しました。

お湯が熱くなるまでは駄目だといってありましたが、Aさんはがまんなさって、ようやくお風呂から上げてあげるとほっとしていらっしやいましたけれど、私は許してあげませんでした。もうかんにんしてというのを、縛った手をそのまま、五十CCのリスリン浣腸をしてあげました。

そして、ポリバケツに坐らせてあげたので

すが、生理帯をつけたままですからとても気持は悪いはず。少しいじめてあげすぎたようにも思いましたが、ちょっぴりいい気味。

このあと逆に私がAさんと同じようにされました。この時は生理帯ではなく下ばきでしたけど、すこしAさん頭にきたらしく、お返しに大分おまけがついていました。あんなにきつく縛られたのはじめてでした。もう少し他の事も書くつもりでしたけれどプレイのことだけになってしまいました。

S・C・R・へ質問なさる方へのお願いと要領

弓削 達人

性問題相談室を開設以来、多数の方々から

誌上回答、個人回答を求められ、今更ながら性的倒錯という問題の意味するところの重要性と、小生の責任の重さを痛感した次第です。誌上回答の原稿が遅れがちになって、編集部の方に御迷惑をおかけし、また個人回答を待っていただける方には、御返事が遅くなってしまうて申し訳なく思っております。

ところで、このような遅滞が小生の都合でおこることも勿論ですが、熱心な質問をお寄せ頂くにもかかわらず、要点がはっきりしな

いために、こちらから問合わせることもしばしばであり、これが相談室の運営をさまたげていることも事実です。それで、この相談室の円滑化をはかるために、皆さんへ、次のことをお願い致します。

(1)住所、氏名は明記すること。

郵便局止めになっているものもあります。が、これは連絡がスムーズに行かないのであるべく現住所にして下さい（局止めであっても回答は致します）

(2)年令、結婚、職業、最終卒業の学校名も書

いて下さい。

回答は、いくらか精神分析的になりますし、また社会精神医学的な要素も入ってきますので、このような条件が明示してなくては回答ができません。

(3)性交経験の有無、オナニーの回数、その方法、その時の空想内容等も書いて下さい。

即ち一般的な性生活という背景がわからないと、性問題（この場合多くは倒錯的行為ですが）の解明はおぼつかないのです。

(4)その倒錯的行為の原因と思われるものも書

S.C.R.(性問題相談室)開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の方の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

いて下さい。

勿論、その原因のわからないものについては、自分には原因不明と思われると書いていただいて結構です。この、原因と思われるものを書いていただくことによって、その方の自己洞察の能力及び程度を知ることが出来るのです。

(5) 相談の目的を明記して下さい。

自分の悩んでいる性癖を、細大もろさずくわしく書いていられる方が、さてその性癖をどうして呉れといわれるのか、治療したいのか、その性癖の成り立ちを納得いくまで説明してほしいのか、あるいはまた、自分の性癖をうちあけるだけのファンレターと解してよいのかわからないものが少なくないのです。正常、異常の判定か、症状成立の説明か、倒錯行為を続けて行く際の心身上的諸注意か、矯正、治療への可能性の判断か、治療の具体的指示なのか、そのところを忘れずに書いて下さい。

以上のことを書いていただくと、この相談室の運営も、よほどスムーズに行くようになると思います。

以上、皆さんの御協力をお願いします。

最後に、今年もまたKK誌という貴重な存在を中心にして、意見をたたかわし、欲をあわせ、有意義な一年を送りたいと思います。



鬼 六 談 義

一 皮 む け ば

団

鬼

六

見かけは大層立派なようでも、ひょいと裏をめくってみて、実はその正体が不潔極まりないものだとは知った時、全く嫌な気分になるものだ。一見、清潔で豪華な作りに見えるレストランなどの中で、ふとトイレに立った時などに、油虫がうようよと這い廻っている炊事場を見てしまい、やり切れない嫌悪の情を催す事がある。

私の住んでいる所では七宝焼と称する陶器が名物になっていて、私は陶器などには全く知識を持ち合わせていないが、その七宝焼というのは一見、トルコ石みたいに華奢な、なめらかさを持つ焼物で、かなりの高級品だと

いう事だ。その光沢の美しさにふと心ひかれて、一万円以上もする花瓶を一個奮発して買い求め、自宅の書斎に飾り、毎日花をかえておけと家人に命じ、わかったようなつもりでその陶器を毎日しげしげ見つめていたのだが——つい最近、その七宝焼の製作所を偶然のぞいて見て、実にやり切れない不快な気分になった。

その焼物の製作工場は、山の中に建てられた掘立小屋に等しい粗末な建物で、油で真っ黒に汚れたジャンパーを着た職人——それも松葉杖をついたのやら、喧嘩でもしたのか頭に包帯を巻いたのやら、寝不足がつづいてい

るのか眼^{やに}脂を一杯溜めたのやら、そんなガタガタのメンバーがてんで勝手に冗談口をたたきながら、ペタペタと刷毛で焼物に薬をぬたくっているのである。仕上げを待つ焼物は、埃りっぽい土間に無雑作に並べられてあるのだ。私の部屋で大事に扱われ、燦然^{さんぜん}とした光を放っているあの陶器は、実はこんな所で製作されたものであったのかと思うと、急に何か一種の皮肉を感じ、不快な気分には陥ったのだ。

女性に対しても、こんな皮肉な、くすぐったさを感じた事もこれまで幾度もあった。学生の時だったと思うが、当時、私は、梅田新

道の酒場の女に夢中になり、年少多感の頃であっただけに、その酒場女のK子が神秘的にさえ感じられる位、気高く美しい女性に思えて、彼女の仲間の女給にことづけて、K子に手紙をはさんだ花束など送るという齒の浮くような事を平気でやったものだ。月に二度か三度、彼女を映画に誘うか宝塚歌劇に誘うかそんな事を無上の楽しみにしていたのだが、或る日、店（酒場）へ出向いてみるとK子はこの所病氣らしく二、三日休んでいるとバーテンが私に告げる。

病氣の時、自分を看病してくれた男に、女は恋心を持つものだ、と悪い先輩に教えられていた私は、これは彼女に自分を強く印象づける好機会だと勇躍し、バーテンにチップを渡してK子の住所を聞き出し、その夜K子の家を訪ねたのである。それまで私はK子がどこに住んでいるのか知らなかった。尋ねてもK子は曖昧な事ばかりいって教えようとはしなかったのである。それだけに私としては何となく興味があつた。バーテンの教えてくれたのは手紙を出す時の宛名住所だけでそれを頼りに探し廻り、尋ね廻り、やっと見つけたK子の住所は工場町の路地を幾つか廻った所にあるほとんどバラック建ての傾斜した家屋

だったのである。

煤煙で汚れたつぎはぎだらけの表のガラス戸をガタガタいわせて開けると、まるでボロをひっかぶったような子供が三人、寒々しい上り框に並んで、鼻を垂らしながら恨めしげに私の顔を見つめ、それはK子の弟達であつた。親父は日雇いの土工で、母親は風呂の紙張りを内職にし、つまりK子の一家は貧民窟に住んでいたのである。

たしかに彼女は風邪をこじらせて、奥の四畳半で布団に入っていたのだが、私が見舞いに来たという事を知ると怒ったらしく、すぐに帰ってもらってくれ、と私の来た事を告げに奥へ入った母親にキンキンした声でどなっているのがまる聞こえなのである。私がK子の家を訪問した事で、彼女の自尊心は大いに傷つけられたのだ。すると、せっかくこまで来て下さったのだから一寸、上ってもらえば、と母親は娘をなだめるようにして説得し始め、つづいて、「おい、上れや」というだみ声が、こっちへ飛んで来たが、それは酒を飲んでる彼女の父親であつた。こっちも何となく気づまりで、持って来た見舞いの果物を子供達に渡して、早々に引揚げようとしたが、そこで、再び、親父の声、「おい、上れ

いうとるやろ。敵にうしろ見せる気か」などとおかしな事を口走るのだ。娘によりたかってくる男の顔を酒の肴にして一杯やる気でいるらしい。これは、えらい事になったと私は情けない気分になった。

だがこうなってしまうては止むを得ず、おずおずしながら、すり切れた畳の上へ足を踏み出した私は、子供が捨てたチューインガムのカスを踏んづけてうろたえつつ、向う鉢巻きして酒を飲む親父の前へ恐縮しきって坐つたのだが、何とも、チグハグな気分。のこのこと彼女の家を訪問した事を深く後悔したのである。

まあ、一杯やれや、と親父に一升瓶を突きつけられ、すぐに頭にきそうなきつい合成酒を私は飲まされたわけだが、そんな酒を飲まされる間も、私は、娘にいい寄って来た事をネタに、このがめつい人相の親父から強請られるのではないかと戦々競々とした気分であつた。

親父は、ジロジロ私の顔を見つめながら、お前、いくつや、とか、どこの大学や、とか横柄な口ぶりでネチネチと質問を発し、時々何がおかしいのか突然に大きな口を開けて、カッカカッと笑っていたが、その内、茶碗

を箸でたたきながら、土方殺すにや刃物はいらぬ、雨の十日も降ればよい、といい気嫌で唄い始める。そういえば、その日は昼から小雨が降りつづき、親父は仕事に出られず、ずっと家でこうして酒を飲んでいたらしい。彼女の見舞いに来たのじゃなく、これじゃ酔っ払いの親父の見舞いに来たようなものだ、やり切れない気分になったが、破れ障子をへだてた次の間で横になっているK子は、私を枕元へ近づける事を許さず、依然として何か腹を立てている様子。全く、雨の降る中を何しにここまで来たのやら、わけがわからなくなった。

次に、親父は、朝鮮の民謡を唄い始めた。こわい顔やごつい体格に似合わず、なかなかの美声で彼の唄うその哀調を帯びた朝鮮の民謡は、本場仕込みといった感じであったが、私の、さっきから気になっていた事は、それで、とうとう正体をさらけ出したわけだ。親父のニンク臭い事、そして、剥げた茶ぶ台の下に散らばっていた韓国文字の新聞が何かがかりだったのだが、やはり、彼女は韓国人——あとでわかったのだが、彼女の母親は日本人で、つまり彼女は日韓の混血児だったわけだが——そう感じると私は、彼女が自分

の家へ人を寄せつけたがらない理由がわかったような気になった。

私はふと自棄になったような気分で、この韓国人の親父と一緒に大声でアリランなどを唄いまくり、今日はすっかり御馳走になりまして、と腰を上げたが、その時になって、K子はようやく私を玄関まで見送るため、破れ障子を開けて姿を見せた。

色褪せたネルの寝巻、油気のないバサバサの髪。自分の正体を口惜しくも見破られたといった腹立たしさの故か、まるで捨て鉢になったように何の化粧もせず私の前へ顔を見せたのだが、化粧した女の顔としない顔はこうも違うものかと女性については無智だといっていい当時の私は一瞬、気が遠くなる思いだった。のっぺらとして、どこか空気の洩れているような実に間の抜けたK子の顔だったのである。「だしぬけに家へなんか来てもらっちゃ困るわ。失礼よ」などと、彼女の言葉まで葉すっぱで一層情けなかった。

ところが店（酒場）にいる時の彼女はどうかろう。ふと、傍をすれ違うだけでも脂粉の香りが甘ずっぱく鼻に来て、ふと胸がときめくような不思議な色気を持つ魅力的な美人なのである。

とにかく、彼女の家をだしぬけに訪れた事で、私は、貧窮の一家の支柱となって働いている彼女を知る事が出来たわけだが、そういう彼女に感心するというのとは別に、何か興奮めし、嫌な気分になったのは事実である。韓国人の父親を持つという事も正直、胸にひっかった。やはり彼女もニンクを好み、生肉の刺身など食うのかと思うと、むしろ不愉快であった。

帰りがけに彼女の家の便所を借用したが、その恐ろしいばかりの汚なさ——木の板に四角に穴があけられていて、男も女もその穴一つで用を足すらしく、田舎の田圃（たんぼ）の中に建てられた臨時の公衆便所みたいなもので、たまらない悪臭が鼻につき、矢鱈に落書きなどもしてあって、こんな不潔な厠を彼女が平気で毎日使用しているのかと思うと、十年の恋も褪める心地がするのであった。店ではきばき敏捷に動いて、癪性（さくせい）なといいたい位に綺麗好きに見え、酔客が汗ばんだ手で手を握ったとかいっては、あとでブツブツいいながら、店の手洗いで石鹸をタップリ使って手を洗っているような彼女なのだが、家にいる時は、こうもだらしくなってしまうものなのか。外面、華麗に装って、妖しい色香を発散させて

いる夜の蝶も、一皮むけば、こんなものなのか、と私は、彼女達の秘密をそこに見出したような気持ちにもなったのである。

時折、空想して、もしK子と体の関係が生じた暁には、もとより、緊縛プレイ、飼育してMに育てあげようなどと甘く考えていたがそれは彼女が心身ともに清く美しく、また可憐なものにこっちの眼には映じていたからであって、しかし、彼女の正体を知り、横板に四角の穴をぶちあけてある彼女の家の廁を見てからというものは、どうも、そうした甘い気分がわいてこない。空想する時の対象物として彼女は失格してしまったのである。暗々裡にマニヤが求めている緊縛シーンというのは、やはりロマンチックなものらしい。

などと、年の瀬に来て、下らない昔の女の事を思い出したのだが、つまり、いいたいのは、さっきいったよう七宝焼のように、買った本人は何も知らず有難がって珍重しているけれど、その製作場所をのぞいてみれば、実に粗末なものであきれ返る時があるという事である。しかし、製作態度や製作過程が如何に粗野であったとしても、あれだけの光沢が出て、美術品めいたものになるのだから、大したものだ。別に美術品ではなく自分達が日

常、身につけるもの、口に入れるものでも、本人の気づかない間に、製作者の汚らしい汗や垢がどれだけついていくのかも知れず、すまし顔をしているのは滑稽な感じがしないでもない。

話題にするのは、もう古いかも知れないが例の『徳川女刑罰史』を見た時、そんな皮肉な感じを、ふと私は持ったのである。

あの映画は、出来、不出来はとにかく、かなりのヒットであったという。しかし、何時か、この談義にも書いたと思うのだが、あの映画の企画から製作に至るまでの過程は実に単純なもので、製作者達が穴倉酒場で一杯やりながら、拷問刑罰ものは、どうして当るのか、と小森白の拷問映画の話から、KK誌というこの種の専門誌のある話、そんな事をうだうだやってる内、よし、一丁、やったれ、という事になってしまったようなものだ。マニヤを悦ばせるための映画を作ろうというのではなく、会社を儲けさせるための映画を作ろうという意欲に燃えたわけで、いいかえれば、マニヤをひっかけするための映画製作といえるかも知れない。

だから、本当の意味のマニヤが、これを見て、あの映画はマニヤ向きでないなどとブツ

ブツいったところで、そんな事は製作者の方では問題にはしていない。観客の動員数だけが問題なのだ。

企画から製作、そしてイレブンPMや週刊誌などを利用しての宣伝工作を見てみると、うまいなあ、とその商業政策にほとほと感心させられる。映画の中で、沢山の外人女をぶら下げて、なぐったり、蹴ったり、キャッキャット、お祭り騒ぎをやっていたが、これも観客に対する、大サービスのつもりでやっているのだから、真の責めとはあんなものではない、羞恥がなきやいかん、エロシズムがなきやいかん、などとむつかしい顔なんかしてるのは、かえって阿呆らしくなってくる。もっと、やれ、やれ、とこっちもお祭り気分で見えて、ゲラゲラ笑い、あれを大いに楽しまなきゃ損なわけだ。あれで何億何千万、会社が儲けたか知らないが、何となくあの企画が立てられたのは、穴倉酒場の一杯二百円のハイボールを何人かが飲みながらであったと思うとそれが何とはなしに面白いのである。

結局、あの映画を見た私の感想は、内容が面白い面白くないはさておき、やはり、あの種の映画は当るのだという面白さを更に感じとったという事になる。

緊縛指導などと前代未聞の肩書きで辻村氏を起用したという事は結果的にはそれで映画の内容が面白く盛り上ったという事より、識らず識らずの内、会社の宣伝に彼は一役買わされてしまったという事にもなり、これは会社の最初からの計算でもあったろうし、私もそれは想像していた。緊縛指導などというポスターを見た人は、何事か、と驚き、専門的な縛りが次から次と登場するのだらうと、その種のマニヤは子供みたいに意気込んで映画を見に行ったに違いない。

私は、辻村氏がカメラハントの材料を大いに仕入れ、大いに楽しんで来ればいいだろうと見ていたが、彼は私みたいにひねくれてはいず、物事を率直に悦び、しかも、人がいいだけに、会社の宣伝に大いに一役買っていたようであった。それは、KK誌に出ていた彼の記事でもわかるが、あのポスターを見て、映画館に出かけた人も、かなりいると思われる。

辻村氏の人間的な長所は、皮肉な眼を持たず、何でも善意に解釈する事で、それがふと行き過ぎると、不美人でも彼の筆になれば大変な美人になってしまうという事にもなるわけだが、考えようによれば、それとて一つの

才能である。

五社の映画にせよ、独立映画にせよ、自分達で作った作品を自分達でけなすというような事はまず有り得ない。何だか奇妙なものを作ったぞ、と心中おだやかでなかったも——いや、そんな事とて滅多にないが——人に話す時には面白いからぜひ見てくれ、と胸をはるのである。

だいたい、人に何か品物をプレゼントする場合に、これはまことに粗末なものです、と遠慮して見せるのが日本人的な礼儀だと聞いていたが、こと映画や芝居に関してはそうではないようだ。

一本の映画を監督した人や、それに出演した俳優に逢うと、かなりこっちは親しい間柄であるのに、実に面白いからぜひ見て欲しい、と胸をはった、もののいい方をするようだ。あの拷問映画だって、関係者から電話があり、「御覧になりましたか、どうです、凄いでしょ、あのどじょう責め」などと頭ごなしに云われてみれば、もうケチのつけようはなく、ああ、感激した、などと調子を合わせ事になってしまう。関係者は、あれで充分マニヤを満足させたと思っているのだ。

マニヤの空想を充分満足させる映画なんて

ものはまず製作不可能で、そのけのある映画が作られたという事に、満足すべきである。正直、あの拷問映画は、KK誌愛読のマニヤが、大騒ぎをする程の内容を持つ映画ではなく、辻村氏の緊縛指導を大騒ぎする映画であろう。

見てしまっただけからは、いくらつまらないとあったって、入場料はそれでも、ちゃんと取られてしまってるのだから、結果的には悦んで見たと計算される観客の一人になってしまってるわけだ。

私の好みは、つまり、花と蛇的なものだから、ああいう、吊ったりぶったりの拷問映画とは党派が違い、一つも興奮しなかった。興奮するために映画を見に行くといつては何だか浅ましいが、私なんか映画を見る場合、芸術的に興奮してみたい時と、性欲的に興奮してみたい時の二つに分けている。あの拷問映画を見に出かけた人は、芸術的より性欲的な興奮に期待したに違いないと思うのだが、私の場合には興奮しなかったから期待外れというわけだ。

ピンク映画だって性欲的興奮を期待して出掛け、背負い投げを食わされ情けない気分になり、それでも、この次はこの次はと期待し

て三本立てを全部見て、ああ、阿呆くさいと唾を吐き、無駄に時間を費した事にむしろしゃ腹を立てながら引揚げる観客が半分以上ではないかと私は思っている。しかし、こんな人達は一度や二度ではこりず、また性こりもなくピンク映画館へ興奮を期待してやってくるのだ。五社の拷問映画がマニヤ向きでない、という事より、ベッドシーンを売り物にしなきゃならぬピンク映画が助平向きでないという方が余程腹が立つ。

ところがおかしい事に五社の拷問映画を製作する人々は、これがサジズムの極致だと勢いこみながら、何か一つ感違ひしている所があり、独立ピンクプロは、これがエロシズムだと張り切っているが、何かミスをしていてる所があるようだ。女をムチでひっぱれば、これがサジズム、男と女がベッドで抱擁していれば、これがエロシズムとすまして割り切っているのである。

■そうした製作者に、真のマニヤ、真の助平―おかしいいい方だが―は、たぶらかされてしまっているのである。と、人事みたいにいわず、そんなら私がピンク映画でマニヤ向きのものを撮ればよさそうなものだが、最近では、俺がマニヤなんだから、俺が楽しめばいいんじやないかとロケの現場へかけつけては女優を口説いて個人的なカメラハントばかりやっている。配給会社が小首をかしげたり、映倫が眉をひそめるようなものを作ってガタするより自分で、秘かに楽しんでればいいわけだ。

前にもいったようにピンクの配給会社なんかは、少くともベッドシーン五つ以上、などと云ってくるのだから、マニヤ向きのものなんか作るのは無理。こうした奇妙な制約がなければ、ひよっとすれば面白いものが出来そうに思うんだが―。

だから、お客と私が合致するところは、やはり花と蛇という事になるが、これがまた最近、はつきりいって、自分でもいささかマンネリになって来たと思っている。続編だけでも、もう五十回を突破し、これでマンネリにならない方が、おかしいと別に言いわけはしたくないが、家にじっと腰を落着ける閑もなくなつた最近の多忙さが原因で、しかし、マンネリになつたからとはいえ、自分好みでない、つまり、党派の違う責めのあの手、この手を盛りこむという事はしたくない。そば屋は、うどんまでは出すが、カレーライスまで店頭飾れば、もう店の風格がガタガタになるのと同様、やはり、今のペースのまま、少し、味つけを変えて続行していくより方法はないと思われる。伊藤晴雨を書いた時、久方ぶりで一回、花と蛇を休載したが、実は、三回ばかり休載し、エネルギーを補給してからまた続けようかと思っていたのだ。しかし、箕田氏より、次は花と蛇休載せんと頼んまっせ、と叱られてみれば、やはり私のKK誌における働き場所は、伊藤晴雨よりも随筆よりも、やはり花と蛇という事になるのか、と疲労した肉体に鞭うったわけだが、間もなく体調も整う事と思う。とにかく、この珍小説を書く時は相当なエネルギーを消耗するのは事実なのだ。

この間マニヤの友人T君に道でばったり出会い、近くの喫茶店に入ったが、その時、熱心な花と蛇の愛読者であるT君は私に、来年は一体、花と蛇はどのように展開するのかその構想を聞かせてくれ、などといひ出した。そんなものどうなるか何の設定もしていないんだから、わからないと、私は答えるより方法はない。

捕われの美女達がどんな事になるのか、原稿紙に筆を動かしているうち、登場人物が勝手に動き出すだけの事で、作者の方は文字通

りお先真暗である。まるで前回と同じ責めが今回行われ、同じような描写が現われたとしても、事実、そのような責めが今回も行われたのだから、作者は、そのように書くわけだと、人を喰ったいい方を私はするのだ。

しかし、T君と話し合っている間、彼の希望を取り入れて一人のニューフェイスが来年——といっても、この原稿が本になる時は今年になっっているわけだが——から新しく登場

する事になった。彼は新珠三千代の大変なファンだという。ぜひ、あいうタイプの美女を登場させろ、というので、すでに予告してある「千原美佐江」という深窓の令嬢と前後して、もう一人、静子夫人と同じく大家の令夫人という設定に恐らくなると思われるが、新珠三千代そっくりの美しい人妻、珠江夫人が登場するかも知れない。静子夫人が山本富士子、珠江夫人が新珠三千代、この天下の美女を二人揃えなければ面白くない、とT君は鼻の穴をふくらませて、私に意見するのであった。

それで、私は、彼の希望を、諾く事にしたが、花と蛇の登場人物に映画女優を当てはめて楽しむという読者が、かなりおられるようだから、ここだけの話、珠江夫人が登場して

来たなれば、T君の憧れる新珠三千代を空想してやって頂きたい。などと、全く変な話だが、こうした読み方も一興だと思われる。そして、来年、つまり今年中には、静子夫人をいよいよ妊娠させる予定だ。——何時の間にか、今年の花と蛇の予告みたいになってしまったが、こうした、新人の登場する事によって、現在のスランプを何とか脱却したいものだと思っている。

話は再び変わるが、この前に書いた、伊藤晴雨——これはT映画会社の三月以降の企画作品となるだろうが、最初、プロットの形で書く予定だった所、出来れば文芸作品にしたいという映画会社の意向を聞き、小説の形をとってみた。

花と蛇が小説じゃないとか読物だとか雑文だとか、むきになって何かピント外れの事を叫んでいる人がおられるようだから、俺だって小説まがいなのは書けるんだぞ、と別に気負ったわけではないが、「これは小説である」などと恨みでも返すつもりで最初に断わったわけである。ところがやはり三文エロ作家が書いたものだけに技術拙劣、真に赤面の至りだが、実は、もうこれを書き始める前から嫌気がさしていたのだ。

というのは、私は、晴雨に関しては、ほとんどその知識がなく、晴雨を研究している先生方の情にすがって資料集めにかかり、大体の輪郭をつかもうとしたわけだが、そして、何人かの街の晴雨研究家の人達と逢ったのだが、奇人を研究する人は、やはり奇人であるらしく、この映画化が持上った話をする、馬鹿にむつかしい顔つきになって、あたかも私が聖域を犯し始めた如く、非難めいた白眼を向けるのであった。もとより、晴雨をエログロナンセンスに扱う気持ちは毛頭ない事は告げたが、心地よく協力を示そうとはしてくれない。かといって、晴雨の映画化に全面的に反対するのでもない。つまり、自分に何の挨拶もなしにこの映画化をすすめてもらっては困る、という事をいいたがっているように、それなら、それなりの方法をこっちでは考えない事もないのに、ただ妙に奥歯にものささまったいい方ばかりするので、実に不愉快になってきた。高級レストランに招待し、高い酒などしこたま飲ませて損であった。辻村氏のように、気軽にものを頼める人達ではないようだ。

また、或る別の研究家は、私がわざわざその人の自宅附近まで車を飛ばせて、電話で面

会を申しこんだ所、映画島の人間は信用出来ない、とか何とか、何だかわけのわかぬ事をいって、面会するのも嫌がるのだった。

そんな事で、資料らしい資料が、手に入らず、しかし、編集部に宣伝しておいて今更中止するのもみっともない故、マニヤの友人が見つけて来てくれた、わずかな資料をもとに見つけて来てくれた、二回に分けて発して、大体の輪郭をつかみ、二回に分けて発表したわけだが、実に苦痛で、もうこんなものは二度とKK誌に発表すまいと思った。やはり、私は花と蛇を書いている方が、自分にふさわしいようだ。

それに、まともな小説とか、まともな映画というのが現在の私にとっては、どうも面映ゆい感じだ。

まともな映画といえば、最近、久しぶりでまともな映画を一本見た。神々の果てしない欲望——これは、親しく交際していた松井康子が百八十度の転向。芸術映画に出演したとあって、何はともあれ、お祝いの意味で、何人かの仲間達と映画館へ押しかけたのだが、重量感のある仲々見たえのある映画であった。近親相姦が一つのテーマになっていると宣伝文の記事の中にあつたが、扱い方によれば近親相姦というものも、ああも美しく描け

るものかと感心させられた。

『徳川女刑罰史』でも第一話が近親相姦をテーマにしていたと思うが、あれは何のために近親相姦を持って来たのか、理解に苦しむ。近親相姦も、マニヤ向きのテーマだと思ったのだろう。近親相姦にも高級品もあれば安物もあるわけだ。

花と蛇の中で、近親相姦的な描写が現われて来た事はけしからぬ、と或る読者が、まるで噛みつくような記事を、本誌に寄せていたが、また一方、花と蛇の中に近親相姦の場面を希望するマニヤもいるのだ。この珍小説を読む人の中でも趣向が正反対に分れている場合があるのかとおかしくなったが、私自身は近親相姦を書いているつもりになっているのではない。

何故なら私は、はっきりいって、近親相姦など、陰惨な感じがして嫌いだからだ。ただし、そこに私好みのエロシズムが出てくれば話は別だが。けしからん、という人がある所を見ると私のエロシズムは理解出来るものではなかったらしい。しかし、近親相姦の嫌いな私が書いているのだから、自分では、あれは近親相姦ではないと思っているのである。間接的なものに押しとどめたに過ぎないが、

私は、自然の成行きに任せるつもりだから、あれが遂に近親相姦という事になってしまったとしても、それは私の故ではないと今からいっておきたい。

好きだという人に顔を立て、同時に嫌いだという人にも顔を立てるなどという事は出来ないから、とにかく、自然の成行きに任せより仕方がないが、どっちに転んだとしても、そう眼くじらを立てず、不快な場面に出喰わせれば頁を飛ばしてもらえばいいと思っている。

ただし、京子と美津子の姉妹は、その内、プレイを悪人達より強要される事になるだろう。女同志の場合、これは近親相姦の範疇に入るのかどうかかわからないが、美人姉妹のそれは決してグロテスクなものではなく、異様で特異な、ムンムンとしたエロシズムが惨んで来るのではないかと思っている。

とりとめのない話ばかりくり返したが、この近親相姦も人生の底辺に蠢く一つの馬鹿に出来ないテーマで、次の鬼六談義で、私が実際に目撃したこの不気味な人間関係を、少ししゃべらせてもらおうかと思っている。

アマゾン考察

女性乗馬のクリテリオン

(Criterion)

佐野 寿



今回は我々が女性乗馬を観賞理解する上に必要になる大よその評価水準をとり上げ考察したいと思っています。この面の世界の他の芸術分野と類似している点は、これが正しくリアルな実体であるにも拘らず感覚の世界に属する事であり、従ってこの一種の美の世界を、数値を持って

定量化しようとする試みはナンセンスであると云えましょう。先に私が「大よそのクリテリオン」と表現しましたのも、正にここでは或るアマゾンに対する絶対的普遍的評価を行うことが不可能であるのみならず、殆んど無意味であることを示唆し、それ故に「一応便義上」と云うつもりで大よそのと云う表現を使いました。前置きはこの程度にとどめ早速具体的な考察に移りたいと思います。

以前に一度私は「……通常の美的及び運動感覚を有する、若いきれいな乗馬服を着る女性、長靴をはき手に鞭を持つ女性、それ等の女性による乗馬シーン及び乗馬の運動の直前直後のシーン、並びに乗馬の習慣のある又習

熟度の高い女性等は、すべてマゾヒスト及び長靴フェチシストの、讃美と崇拜の対象になる……」と解説を加えました。そこでは一応考えられる大半のマゾヒスト等にとって、願わしい諸条件が記述されましたけれども、ここで私共が注意したい事は、どの一つをとってもそれは絶対必要条件ではなく充分条件である事です。

今長靴を取り上げて見ましょう。成程M性の人にとっても、又MF（マゾヒストとフェチズムの結合）者にとっても、今見つめて、或いは問題になっている女性乗馬者が馬に跨る際に、新品の皮革製の拍車のついた長靴をはいて居る事は、きわめて好ましく又願わしいに違いありません。何故ならば、乗馬には拍車付の皮革の長靴を使用することがオースドックスだからでして、大変重要な条件の一つにはなりますが、絶対必須条件ではないのです。実例として今ブリジットバルドーの様な金髪美人が、ミニスカートの姿でパリの高級遊園地で回転木馬に、健康な乳房と白く輝く太腿を露呈せんばかりに跨ったシーンを想像してみましても、やはり広い意味で、マゾヒストにある場面を連想させて喜ばせる可能性は充分あります。

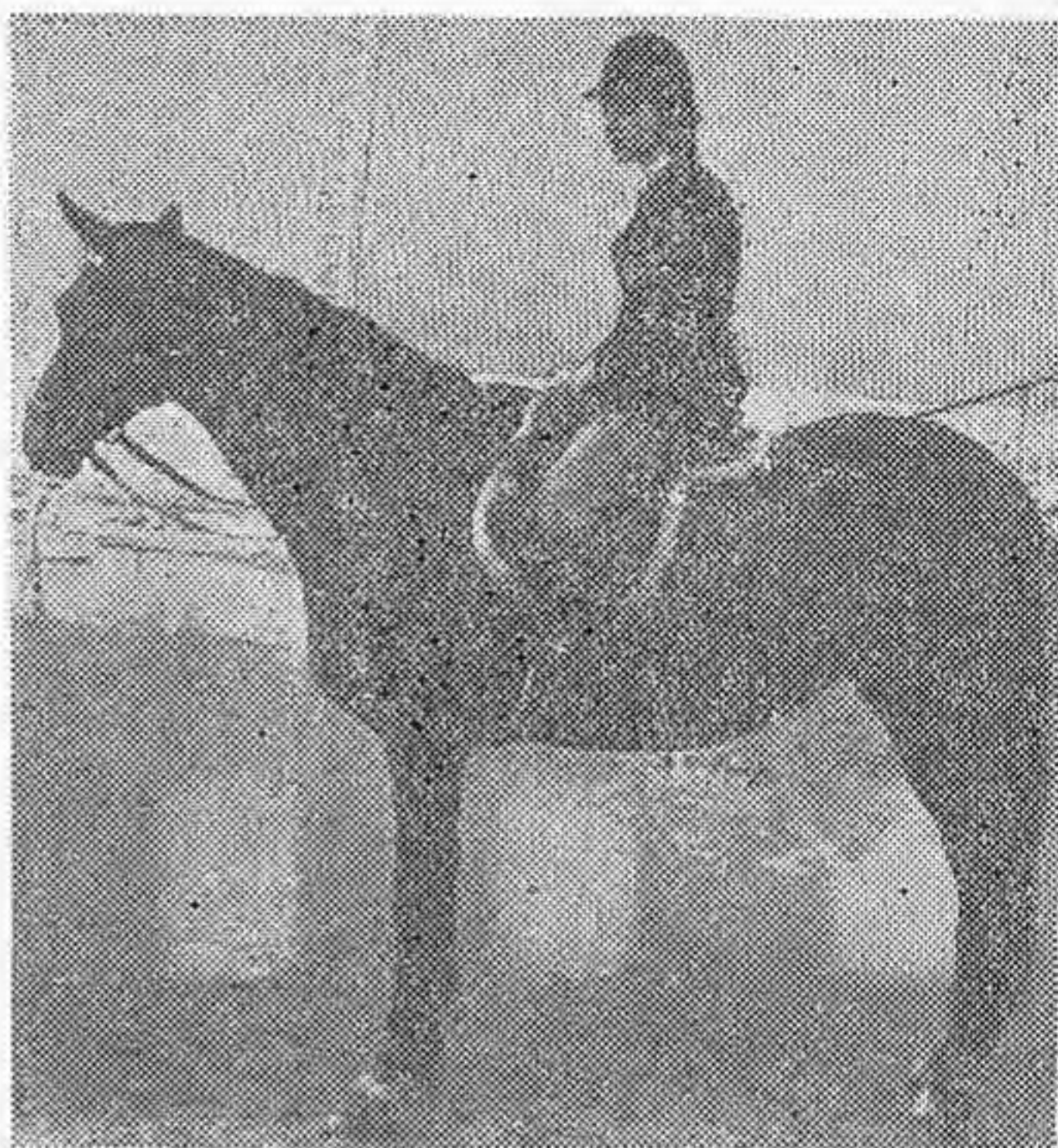


更に又、オランダの田舎の牧場で、数人の若い娘さんが白い作業服に、細めのすらりとしたゴム長靴をはいて牛の乳をしぼっているシーンを、たまに観光客として見掛ける時、又一つの新鮮なすがすがしい印象を受けられないでしょうか。大きなアルミニウムの容れものに牛乳を集め、それを車に積んで馬に曳かせるのも彼女等の仕事ですが、馬に跨ってはいないが、御者台で長い笞をもって黒乃至は色もののゴム長姿で、馬を駆る娘達の姿は、め

ずらしくも鮮明な好ましさで胸をわくわくさせるインスピレーションを与える事でしよう。

又、北ドイツ辺りの郊外の厩舎で働く馬好きの、若い体格のすばらしい、ティーンエイジャー娘達が、水着姿で近くの湖水迄馬に乗ってきて、そこで馬を洗ってやるシーンを目撃するならば（正式な馬装はして居ないが）マゾヒストのおどろきと魅惑しつくされる興奮は、いか程強いものでしよう。

適度にさわやかで冷たい草の生えた湖水に、殆んどビキニ姿に近いティーンエイジャーの娘達は、各々自分の世話をする馬の背に跨り、喜々として浅瀬から深みへと乗り入れ、白い水しぶきが立ち、かなり大きな波のうねりが岸迄数回どぶりと打ちよせます。すぐ沖を水鳥がさえずり、又、ヨットらしい帆が見えます。彼女等は乗馬して、四年にもならないのに、鞍のない裸馬に水ろくと手綱一本で勇敢に馬に乗り、上手に馬をなだめすかしつつ、深み迄乗り入れ、馬首と乗り手の胸元辺り迄進みますが、その時の水のヒタヒタと打ちよせる音が



こころよくひびきます。何んとも形容し難い上品なエロチシズムが、あたりの雰囲気にも満ちています。

長靴に関してですが、中にはずい分やかましい評価をする人が居て、ゴムでは駄目で、必ず皮革製のものでなくては不満足な人も居ます。

私も女性乗馬者がキュロットや乗馬ズボンをはいているからには、それを引き立てる為

に、そして彼女の馬上での安定性の為にも長靴の使用を希望はしますが、何も本物の皮革でなくともスタイルのよい細目の長いものであれば、人工皮革や合成ゴムのブーツでもさほど見おとりはしないと考えています。しかしゴム長でも、太い労働用の短いのはしまりがないのでいいだけませんが、私はコペンハーゲンで本物そっくりのセンスの優れたゴム乃至は人工皮革の乗馬用長靴を、ショーウインドーに並べてあるのを見て、思わず見とれたことがあります。

従って長靴の材質よりその洗練されたデザイン色彩が、はく女性にとってものを云うことになります。彼女が拍車をとりつける事によって、更に一段と女性乗馬者の意志と強固な決断を想念せしめ、引き立たせることは云うまでもありません。けれども一見して明らかにゴムと判る様な、きちゃな光沢のあるものは、感覚を一般に減殺することを指摘するにとどめます。

さてそれでは、女性乗馬者評価のクリテリ

オンを著しく低下させる、好ましからざる諸要因について考えて見ることにしましょう。先ず度のつよい眼鏡、それもセンスをうたがわれる下品なデザインのをかける女性。色黒や出歯、悪性鼻炎、皮膚炎および姿勢の悪い女、極端な不快感をいだかせる肥満性体質、女性ホルモン欠乏に依る、中性的感じのする者、及びこれは写真撮影には無関係と思われるが、声がゼーゼー云うひからびた者は勿論、論外で、対象とはなりえません。口臭や体臭の極度に強いのもいけません。以上の欠点は本質的にマイナスです。

次に致命的とは行かぬ迄も、中乃至軽度クリテリオンにマイナスをもたらすものは、ノーマルでない乗り方や、服装に無関心で、薄よごれた又は破れて膝小ぞうの見える乗馬ズボンや、古くて光沢のなくなった磨いてない長靴、及び短靴をはいて平気な女性。前かがみや振子がぶらさがる様なだらしない乗り方や、平衡障害者、神経症、小児マヒ性の人の乗馬も感心出来ません。又、19世紀的服装、例えばあまりにも長いスカートによる横乗りの鞍に乗る婦人もあまりさえませんし、長靴なしでキュロットのみの姿もしまりがないのでいただけません。眼鏡はよほどセンス

の良いものを掛けていても性的魅力を多かれ少なかれ減少させますし、又横乗りの旧式婦人鞍はいかにも不自然で、そこからは真の乗馬の味を得ることは困難であるに違いありません。又西部劇でよく見られるズボンとタイツスカートと長いものとの折衷のものもやや中途半端な感じを与えます。今日でも、ある国々では、異端視される女流競馬のジョッキーは、光沢のある色とりどりの快い感じのユニホーム姿での乗馬姿は、見るものをしてはっとさせ魅きつけますが、競馬での乗り方はいわゆる「浅い乗り方」を採用していますのでちょこんと乗っている感じが、やや残念ですが、これも馬体に出来るだけ負荷をかけない為の手段ならば止むを得ません。しかし女ジョッキーが我国にも誕生すれば、さぞかし見物でしょう。

それに反して非常にバラエティに富むものに、サーカスでの女騎手、或いは、長靴をはいた女調教師のスタイルがあります。ライオン、豹の女猛獣使いの多くはミリタリー룩で、眼もさめる赤い服に黄金色の線が走っており、紺の乗馬ズボンに、黒の乗馬靴をはき、するどく長くじらのひげの入った鞭を右手にする女調教師を、しばしば外国でも我

国でも見かけますが、仲々一種、異様な迄の雰囲気を与え、マゾヒストを喜ばせる服装をし又、猛獣に命令する口調も女らしくセクシーです。又一方サーカスの女騎手は、夏冬とも大体に軽装で、水着よりは複雑ですが四肢は白く露出し、いろんな模様やスタイルの長靴をはいています。拍車は常には用いない様です。その服装は多くの場合、その方面でのセンスある興行師の氣に入ったデザインでしょうから、相当強度な性的魅力を観衆に与え、その雰囲気を一層熱気を帯びた妖しいものにさせましょう。

従って、サーカスの女調教師や、女乗馬者の人々に与える評価水準は、平均的に考えて高いと云えましょう。

特に、下町的雰囲気、しかも美しい女乗馬者が化粧の香りをただよわせ、金銀宝石飾りで輝く服装に、長い鳥の羽を頭につけ、長めの笞を手にさっそうと馬に乗って行進する

所は、いかにも生き生きとせまるものがあります。馬上でのアクロバットや、馬背から飛び降りたり飛びのったりを繰返しつつ、円を画いてライトの光を遊び、観衆のため息もつかぬものが聞こえる様子は、マゾヒストを異常に興奮せしめるでしょう。

しかしここで注目したい事は、どこのサーカスのショウでも女性乗馬者は、時々その方面の雑誌のさし絵や風俗画に現われる様な、胴と腰をうんとしめつけたコルセット姿に、しかも数センチ以上もあるかかとのとがった



ハイヒールブーツに、固定式拍車をつけたかっこうでの馬術姿は見ることは不可能で、それは殆んどいわば空想の姿態にすぎません。

御存知の様にあの様なコルセットを着用する事は、胴体を堅く緊縛されると同時に、自由で柔軟な女体の運動を妨げ、血行にも悪影響を与えるのみならず、又、極端にとがったハイヒールブーツで馬に乗る事は、若し落馬した際に致命的に危険であり、鎧にかかとがひっかかり、落馬したまま馬に引きずられたりけられたりする恐れが充分ありますから、どこの乗馬学校でもハイヒールで乗る様なシャレタ真似は厳禁するからです。

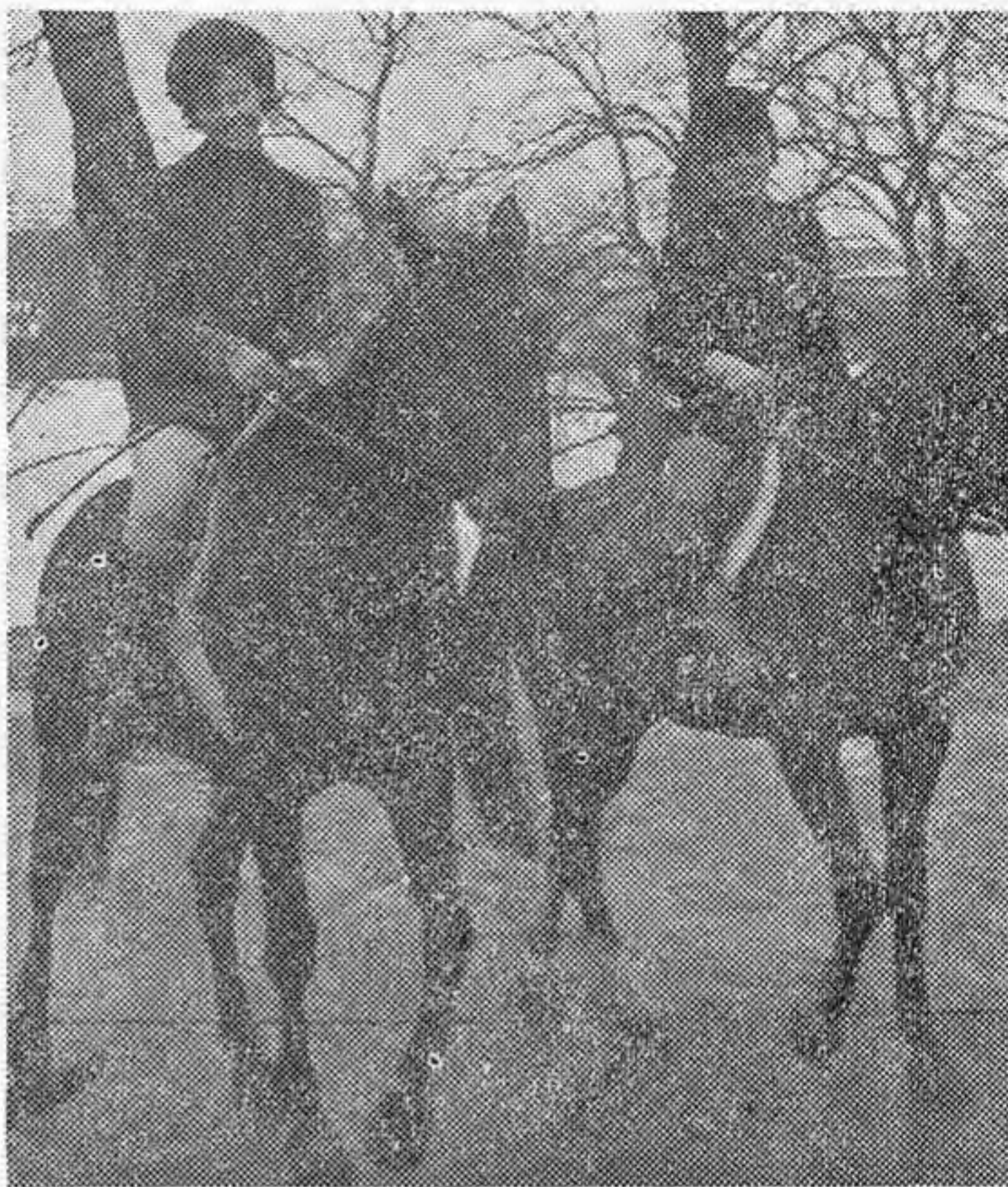
SM画としてのクリテリオンは、その場合成程高いに違いありませんけれど、実際のシヨウでは、全く実見することは出来ないのです。

確か六年程以前に大阪の女性の方によって書かれた「私の乗馬」と題するものの中で、夏の深夜に私邸の馬場で水銀燈をつけて、水着姿にハイヒールブーツで馬術の猛練習をされたことが絵入りで書かれ、当時は私も感銘を受けました。特に其駿馬と美しい女体との相互作用や、激しい調教ぶりがリアルに描写されて、その絵にはハイヒールブーツの拍車

が大きくくっきりと画かれていました。正にそのかもし出す雰囲気の評価水準は最高に思えました。が、唯一つ、先述の理由でハイヒールブーツの点のみがやや気にかかりました。深夜と云う背景も又、不気味な程すばらしく夏なので水着で、普段とても実現出来そうもない大胆な乗馬は、その方にとってさぞかし楽しかったでしょう。読んでいる人々が、あたかもその女の人の馬にでもなって、快くしごかれてゐるか、又はピーピングトム（のぞき見をする男）としての錯覚さえ感じる程でした。

ついでに述べさせていただければ、女性乗馬の方での古典とでも云っていいかと思いますが、美しい小説「ダイアナ夫人」物も、そのクリテリオンたるや正にプラス百点でしょう。あれ程、うるわしくもなつかしい読物もめずらしいでしょう。その内容は質量共に誠に充実していました。どこの貴婦人をモデルにした小説か全く見当はつきませんが、実際には仲々ああいう女神様は居らっしゃらないのではないのでしょうか。そのようなすばらしい描写があるかと思うと、又別の女性乗馬者の物語には其の実体をわきまえず単に空想で書かれ、又田舎の自我流の百姓馬術しか御存

知ないとみななければ、とても恥かしくて書けない様な描写をして得々としている物もあります。が、其等のクリテリオンは残念ながらもなりの低減をまぬがれ得ないでしょう。その様な観念的描写に限って、妙に中性的なサジスチンとか、乗馬と人間馬とを混同したおかしなものが見られるのです。そこにはしばしば、女性による支配の優美さを描写せず単にエロチシズムとひわいさのみ強調されているのを感じますが、決してクリテリオン向上には役立たない筈です。又同時に読者の方の目が肥えて来るにつれて、そのさし絵等も次第に次元のより高いクリテリオンのものを渴望する様になってくるのも当然の帰結でしょう。又SMと関係あるからと云って、いつも好んで、残忍なアマゾンが馬を鞭打つ如く、痛々しく周囲の男性下男や馬丁、又友達をやらに理由なく笞打ちさえすれば良いと考えるのも、オーバーでしょう。時には馬にはきびしいが、周囲の男には、彼女はいかにも優雅に女らしい描写があっても、決してクリテリオンを降下せしめないどころか、かえって向上させるかも知れません。話の筋がいつもマンネリ化すると拍力が抜け、クリテリオンも低下する危険が考えられます。



更に云うならば、もはや単に馬の振動によって、乗っている女性が直接的なエクスタシーを覚えると云った描写は、もう古くさいかも知れないと云う事です。私は数年前、やはり経験豊かな女性乗馬家の卒直なお話の中で『……正しい姿勢で馬に乗る時は、決して変な慾望などありませんわ。馬に乗る事はごく普通の事で、そこからは決してエロチシズム

聞する残酷な馬の調教や、馬場でのアブノーマルな乗り込みでは、しばしば汗ばんで興奮した美しいサジスチンが居る事です。私の知ってる若い英語の女教師は、長い赤毛を黒リボンで結んでいます。彼女は馬場で馬に乗って、調教用の笞で思いきって馬を乱打しないと気分がさわやかにならない、との事ですし、そのような実例が多くあること

を覚えるなんてことはあり得ないわよ』と云われたのを記憶しています。健全なスポーツと考えている女性の代表的な意見としては、当然のことでしょう。しかし、中には例外的な女性も皆無だとは断言出来ないこともたしかでしょう。その反例として、幼時から性教育を受けると云われる北欧当りの女子生徒等の乗馬クラブ活動で、時々見

でしょう。その女教師はアナ・レナさんと云い三十過ぎですが、もう十年近くも、殆んど唯虐める楽しみの為に、馬術をしていると云うタイプの女性で、又、交っている事は、上着、乗馬ズボン、長靴とも皆黒一色にいつも統一して、乗馬姿も一種侵し難い気品が感じられました。歴史の女教師モニカさんに至っては、自分の別荘に愛馬を持っています。

戦後の日本では、生徒に対する体罰は禁ぜられているが、西ヨーロッパ等では教師の権威が高い為か、体罰は各教師の自由な判断にまかせられて居るので、女教師と云えど生徒があなどれば当然痛い張り手位は、又、下手をすればコサック笞で、お臀をいやと云う迄たたかれることも多いそうです。アナレナさんもモニカさんも、はっきりと「手に負えない男の子は、いくら口でいってもわからないので、お馬の様にびしびし、しつけるべきよ」と時々云っていましたが、こういうシーンを想像するのは、むしろ大人の男性にとっても、充分楽しい事といえないでしょうか。特に英国の上流家庭の娘さんなどを預かる女家庭教師は、体罰を与える権利を与えられていて、ある定まった形の笞を、本当に持っているのです。

太田憲子さんの短歌を評釈する

征

服

劇



田 代 俊 夫

カット・春川ナミオ

新年号サロン（二四六ページ）の太田さんの短歌は、女上位族（？）たる私にとって、全くうれしい作品でありました。歌中の情景を想像すればする程、私の好みにぴったりなうえ、作者「体験」が補足説明にあるように満更フィクションとも思えず、鑑賞に一層の興趣を増します。

さて、この十七首の短歌を私なりに解釈・鑑賞してみました。ただし、鑑賞力不足による誤解や妄想力過多に伴う曲解を、予め作者にお詫びしておきます。（以下作者の敬称を略す）

○

力強くたくましいドミナが年下の男子を膝下に組敷き、豊臀の重圧下に呻吟させつつ、思うがままに凌辱を加えとどめを刺して、ついにその抵抗を封じ驕れるドミナの軍門に降らしめる——この悦ばしい征服劇の過程を、作者の心理を主題として、全十七首の短歌はいかにもダイナミックに詠まれていると思われます。

まず、この征服劇がいわゆるSMプレイでないこと、つまり八女王と奴隷V役が、予め当事者の合意の下に、設定されているのではないことに注目したいのです。

憲子は自己の意思と体力で良夫の抵抗を粉碎、制圧して勝利を得るのです。双方なれあいムードで事を行なうのでは、何ら感興を生ぜず感激もないわけで、この点を看過してはなりません。憲子・良夫両人の真剣勝負を詠んだ点に、私はこの作品の最大の価値と意義を認めたいのです。

しあわせは手をさしのばし捉えよと学

びしままに今ぞ男子を（憲子冒頭歌）

冒頭のこの勇壮なる一首は、征服劇の開始にあたり、良夫少年を膝下に組敷き制圧せんとする不退転の決意を表明し、併せて現実とその好機を得たよろこびを、格調高く表現していると思います。「手をさしのばし」が、明らかに相手を力づくで打負かすことを意味して、ドミナの勇武な心意気をしのばせます。処世訓としての教えを、男子との闘争次元にまで発展させたユーモア感覚はすばらしいものです。

憲子が何故良夫を征服しようとしたか、また、二人の間柄がどういうものであったか、それは不明です。がしかし、憲子がある機会をまえまえから慎重に狙っていたらしいこと

は確かで、多分良夫を欺いて二人きりの場所へおびき寄せたことでしょう。待望の獲物を眼前にして、念願の思いを正にとげようとする心の高ぶりとおののきを末尾の一句が力強くあらわしました。

うとましと蔑まれつつ貯えし、わが身の力、男子に勝れり（憲子第二首）

文夫少年は小学生ではありません。年令は十八才、既に成年男子並みの体格と体力の水準に達しています。そう簡単に組伏せうとも思われない。年下とはいえ十八才の男子を打負かすには、それ相当の力が必要です。第二首はこの点の可能性を補足説明し、憲子に武芸の心得あることを示しています。女だてらに、と非難されている以上、通常のスポーツではありえない。柔剣道・空手・レスリング（失礼）等の格技にちがいない。おそらく有段の腕前なのでしょう。

一方、文夫は比較的非力で、憲子より小柄な体格の持主であろうと想像するのですが、どうでしょうか。さすれば、憲子の自信のほども充分首肯されようというもので、勝負の終末は明らかです。

尚、第三句の「貯えし」の語句が、女性の貯蓄観念を無意識に示していて、ほおえましと思えます。

さて、このような次第で、敵の魔手に陥ったことを覚知した良夫少年は、たくましい憲子の武芸のたしなみを承知していたのでしょうから、絶望的な気分にならざるをえない。良夫の第一首は、その悲痛な心境をうたってそくそくと、心に迫るものがあります。ただし憲子の容貌を「鬼に似て」を形容した箇所は、「驕れるを」とでも、修正すべきでしょう。

跪くとも逃るることは叶うまじ汝の胸はわが身に圧されて（憲子第三首）

巨いなるおみなな尻わが胸に、打ち跨りて苦しかりけり（良夫第二首）

いよいよ戦いの火ぶたが切られ、二人の組打ちが始まります。だが、力と技の差はいかんともしがたく、良夫はやはり、逃れ得ずして憲子におおむけに組敷かれてしまったようです。このような屈辱的ポーズで押えこまれるまでに、良夫としても精一杯の抵抗を試み

たのでしようが、やはり憲子の敵ではありませんでした。

組敷き方にもいろいろありますが、被乗者の胸の上に臀部を置く姿勢が力学上最も能率的とされます。

まず胸部に跨り乗って自己の優位を確保する、これが押えこみの第一歩です。とはいえ良夫もこの段階ではまだ降参しなかったらしく、かなわぬまでも何とか跳ね返そうと必死に跳き暴れた様子です。

右の二首はその情景を描写したものと思えます。憲子の上の句は、無駄な抵抗を止めよとの呼びかけと解すべく、良夫の口惜しさを一層つのらせる効果を狙った、心にくい表現です。良夫の末句「苦しかりけり」を「打ち跨られているので」と早合点してはなりません。騎乗者憲子が大鵬やG・馬場のような超大漢ならいざ知らず、単に組敷かれただけで苦しいわけではないのです。跳ねかえそうと跳くから、つまり無駄なエネルギーを浪費するために苦しいのだ。そう解釈するのが正しいでしょう。

蛇足ながら、良夫の第一句「巨いなる」は次の語「おみな」のみに、かかるものでしょう。すなわち私は「大柄でたくましい」とい

う意味であって、「おみな尻」を修飾するのではないと受けとります。女性臀部の「巨いさ」は自明のことであり、わざわざ説明する必要はないからです。

抗いて突き上ぐる手を捉えられ右と左の膝に敷かれぬ（良夫第三首）

「膝下に組敷く」とは右の状態をいいます。二の腕を両膝の下に踏みしきその動きを完封しえた時点で、はじめて完全に組敷いたといえるのです。私はこの形態を「胸乗り」と呼びますが、良夫の身体的抵抗は、ここに於て終了いたしました。

さて、第四首からは兩人とも「顔面騎乗」を題材として詠んでいます。この絢爛たる征服の祭典を鑑賞するまえに、二、三の補足説明を要します。

第一、「胸乗り」から「顔面騎乗」へ移るまでにかなりの時間が経過していること。

第二、同じくその中間に、「首乗り」なる重要な組敷形態を補充推認すべきこと。

第三、騎乗者憲子と被乗者良夫の間には、心理的闘争が依然として継続していること。

第三首と第四首の間には、このようにきわ

めて意義深い充実した内容が含まれており、それを正しく認識することが、作品の実りある鑑賞へとつながるのでありましょう。

「胸乗り」から「顔面騎乗」へ直ちに移行することは、時間的・物理的に多大の困難を伴う。征服劇としての構成上からも、得策であるとはいえません。「顔面騎乗」は被乗者にとって耐えがたい最大の恥辱ですが、反面、多分に不安定な組敷形態でもある。おとなしくしていればいいが少し暴れると、すっぱりと逃げられてしまう危険性をはらんでいる。したがって、安全騎乗を持続するには、それ以前の段階で被乗者の反抗心を完全に消失せしめるか、又はその体力を奪っておかねばならない。次に、「胸乗り」時に於てドミナの優位性を顕示し驕慢性を發揮しておくことがこの征服劇の華麗なるフィナーレに錦上花を添える効果をもたらす。以上の理由が、前記補足事項を基礎づける所以であります。

では、良夫を膝下に組敷いた憲子が、顔面騎乗にてとどめを刺す以前、具体的にどういう攻めかたをしたか。また、良夫はそれにどう反応したか——ということが、私の想像力をそそのかしました。

憲子はまず、その姿勢で傲然と良夫を見下

しながら、征服劇をかねてより立案企画し今それを実現したと、舞台裏の事情を告げ、良夫に逃れえぬ運命を悟らせようとしたようです。そして、抵抗の無益性を説き降伏の意思表示を求めるとともに、良夫の体力の弱さを笑い、その屈辱的なポーズを揶揄して、高らかに凱歌を奏します。

敵に生捕られ組敷かれた口惜しさに四肢震わせ、憤辱と恥辱に胸はり裂けん思いの良夫は、しかし、絶望的衝動にかられて騎乗者憲子にさんざんの悪罵を浴びせる。すると憲子は、不従順な態度をとる敗者を屈服させるため、あるいは豊臀の重圧をかけて胸板を踏みにじり、あるいは激しい平手打の連発、また全身へのくすぐり責め等の弾圧手段を行使、長時間に亘って徹底的に痛めつけたことでしょう。このため良夫は全身の体力を消耗しつくし、かりに組敷体勢から解放されても一人では身を起こせないくらいグロッキーになり反抗の気力も萎えて、ついに降伏の意思を表明したに違いありません。

そこで憲子は、嗜虐性を更につのらせ、事の順序として顔よりも近くにある喉首の上に臀部を据え、馬乗りに跨がってしまう。これが「首乗り」の状態です。それから、先程良

夫の示したふとどきな態度を懲戒すると称して力まかせに絞め上げ、良夫を失神寸前の状態にまで何回も追いこむ。「首乗り」が「胸乗り」よりも苦しいことは力学上当然であるし、その上こうして責められては、苦しみは倍加します。良夫はただ、憲子の慈悲を哀願する他ありません。したがって、

見降せば息荒くして弱き者、許し乞う

さまいと愛し (憲子第七首)

右の一首は「首乗り」時の情景をうたったものと思います。「顔面騎乗」の状態では、「許し乞うこと」は不可能でしょう。良夫の全存在を臀下に制圧しきったドミナのよろこびが、余裕を伴なって表明されています。ただ注意すべきは、すでに全面降伏した良夫であっても、それを潔しとしない心情をいくらか持っていることで、そのことが顔面騎乗のとどめとしての意義を、一層価値あらしめるわけです。

喘えぎつつ物言わんとするその口を、

押し塞ぎやり降伏を待つ (憲子第四首)

罵れど重き圧力わが口を押し塞ぎきり
声を封じぬ (良夫第四首)

良夫は首乗りの重圧に苦悶し、ドミナへの隷従を誓わせられますが、未だ本心からではなく、まして顔面騎乗による凌辱など、予期していなかったでしょう。だが、憲子にしてみれば、これなくして何の征服劇ぞという次第。胸乗りも首乗りも顔面騎乗への布石であったのであろうと思われまます。良夫の驚愕と狼狽。そして苦悶。

右の二首は、全く同じ情景を詠んでおり、「物言わんとする」と「罵れど」は、当然同じ意味と解されます。「罵れど」を「悪態をつく」と考えてはまずく、「狼狽して抗議する」程度に理解すべきでしょう。また、憲子の末句「降伏を待つ」は、良夫がすでに降参の意思を表明している以上、通常の「降伏」ではありえず、「汝の地位と職分を自覚し、ドミナへの奉仕を、光榮に思う心境に立ち至れ」と無言のまま教えさとしていなのです。

唇つけてあらわせよ、わが手におちて

逃れ得ぬ想いを (憲子第六首)

ドミナは驕慢且無慈悲です。顔面騎乗自体が最高の凌辱形態なのですが、それだけでは物足りなく感じて、征服の記念行事たる儀式を良夫に強要します。第四首末句は、この歌の上の句へ連結するのです。既にこういう征服の形を得て、尚「唇つけて」とは……などと考察することは、野暮に近いといえましよう。

この状態に追い込まれた、良夫の憤辱はいかばかりであったか。泰山のごとき重圧を押しつける体力はすでになく、要求された儀式の拒絶は窒息を意味するのみ。死は甘受しても息が詰ってはたまりません。このディレンマに陥った苦しい胸の内を、良夫の第五首及第六首（省略）はよく表現しています。この二つの歌と憲子の第五首（省略）に、単なる生理的苦痛だけを読みとってはならないでしょう。

結局、良夫はデンマーク王子とは反対に生きる途を選択したのでしょう。

大波の高まるごとく上りくる、わが悦びは、汝の苦痛か（憲子第八首）

生きて来し甲斐今ぞ知る悦びをわれに

捧げし犬の息荒し（憲子第九首）

男子征服のめくるめく喜悦をうたった憲子の絶唱です。その歌品高く力強い調子と含蓄深く余韻ある表現を再思三考して味読する。

第八首上の句——これは単なる修飾と比喻ではない。修辭的にはむしろ「わが悦び」にかかるとは、それだけの用法なら「上りくる」のすぐ下にある読点が無意味且不要でしょう。つまり、「わが悦び」の他にも「上りくる」モノが存在するのです。それに思いを致せ、というのがこの読点の存在理由でしょう。

第八首下の句——「わが悦び」と「汝の苦痛」は、どちらも心理的生理的両面の感情であること。これは当然でしょう。ここでは、「苦痛か」の表現に千鈞の重みがあります。「か」は単純な疑問よりも、むしろ反語に近い。「苦痛ではあるまい。私にはもう分っているのだよ、お前の心の底が……」と一歩踏みこんで解釈したいところです。

第九首も相当にむつかしい。この歌には読点が一つもなく、しかも語句の続き具合が一読して明らかとはいえません。つまりそのわけは、鑑賞者の自由な判断で補ないなさいと

示唆されているので、その結果第八首同様に重層的解釈を可能ならしめます。まずこのことを念頭に置く。

「犬の息」——この強烈な語調から、ドミナの大いなる法悦感と、男子を完全に征服しきった満足感を読みとる。と同時に、「犬」の形態を正確に理解しましょう。

「悦び」の主体——征服者と被征服者の両方です。前者は当然として、後者の場合、私は「悦びを捧げた犬」と修辭関係を定めます。そして私は、良夫にはすでに被虐願望が目ざめて、憲子の凌辱行為を悦びと感ぜうる心境になっているとみるのです。

「生きて来し甲斐」——何故、「生きがい」としないのか。句法上字数を合わせる必要にも基くでしょうが、「生きて来し」の表現にすぐ下の「今ぞ」という簡潔雄勁な語句と照応して、「生をこの世に享けて二十余年……」ともいうべき作者の無限の感慨がこめられているのでしょう。

憲子はこの時はじめて良夫を征服したのですが、また最初の男子征服体験でもあった。そうも推測されましょう。

これを「甲斐」を「貝」。「生きて来し」を「生き生きとしてきた」「生気がみなぎっ

てきた」という風にうがってみたり、作者の生れが山梨県であるなどと、的はずれな推定をしてはなりません。

絶え絶えに仰ぐ眼差し哀れなり、男子の頬は赤く染りて (憲子第十首)

〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変った体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変った蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽規定と賞金△

一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお願いいたします。

今や良夫は、顔面騎乗を甘受した奴隷でしかありません。聖賢の重みは、彼の心をして凌辱を悦服と感ぜしめ、一種の没我恍惚状態に浸らせているのでしょうか。氣弱げに騎乗者を見上げるその眼差しは、次なる命令を忠実に待ち受けているかのようで、そういう良

一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。

一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト(或はMフォト)を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。

一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。

一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として『応募原稿』の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

夫を、憲子は「哀れなり」と感じて、心の優しさと思いやりをしのばせるのです。

恥しらぬおみな心の憎みつつ、いつしか待ちぬ次の責め手を (良夫第七首)

この最後の一首には、被虐者の赤裸々なMS心理が平明に詠まれています。自己の全人格を蹂躪した騎れるドミナへのはげしい憎悪と、それにもまして全身に潮のごとく湧き起る口惜しい歓喜——これぞM人士の本来の姿であり、そこに人間存在の根源的矛盾、すなわち靈肉の相剋(チト、オーバーかな)を認めるのであります。

「恥しらぬ」の冒頭句は、正に絶妙、これを「はしたなき」などとしては、この一首の価値はありません。そして、「おみな心」とは、単なる加虐心理ではなく、ドナミの全感情、憲子その人と解釈すべきでしょう。

以上、この得難い十七首に魅かれた私の、まことに失礼な解釈を、作者の太田さんに重ねてお詫びします。この征服劇のような情景を夢見るもののたわごととお許し下さい。

(おわり)

濡れにぞ濡れし

聖牡丹餅の洗礼



芳野眉美

八厠で一番忘れられない印象を受け、今もをりをり想ひ起すのは、大和の上市の町で或る鯉鮓屋へ這入ったときのことである。急に大便を催したので案内を乞ふと、連れて行かれたのが、家の奥の、吉野川の川原に臨んだ便所であったが、ああ云ふ川添ひの家と云ふものは、お定りの如く奥へ行くと一階が二階になって、下にもう一つ地下室が出来てゐる。その鯉鮓屋も、さう云ふ風な作りであつたか

ら、便所のある所は二階であつたが、跨ぎながら下を覗くと、眼もくるめくやうな遙かな下方に川原の土や草が見えて、畑に菜の花の咲いてゐるのや、蝶々の飛んでゐるのや、人が通つてゐるのが鮮やかに見える。つまりその便所だけが二階から川原の崖の上へ張り出しになってゐて、私が踏んでゐる板の下には空気以外に何物もないのである。私の肛門から排泄される固形物は、何十尺の虚空を落下

して、蝶々の翅や通行人の頭を掠めながら、糞溜へ落ちる。その落ちる光景までが、上からありあり、見えるけれども、蛙飛び込む水の音も聞えて来なければ、臭気も昇つて来ない。第一糞溜そのものがそんな高さから見おろすと、一向不潔なものに見えない。飛行機の便所へ這入ったらこんな工合なのではないかと思つたが、糞の落ちて行く間を蝶々がひらひら舞つてゐたり、下に本物の菜畑がある

なんて、洒落た廁が又とあるべきものではない。但し、此の場合廁へ這入ってゐる者はよいが、災難なのは下を通る人たちである。広い川原のことだから家の裏側に沿ふて畑があったり、花壇があったり、物干し場があったりするので、自然その辺を人がうろうろする訳だが、始終頭の上に気を配ってゐられまいから、「此の上に便所あり」とでも棒杭を立てて置かなかつたら、ついうっかりして其下を通ることもあらう。とすると、どんな時に牡丹餅の洗礼を受けないとも限らないのであるV

谷崎潤一郎「廁のいろいろ」(全集第二十一巻 中央公論社)の巻頭の一節を抜粋。昭和十年七月号の「文芸春秋」に発表されたものである。

菜の花が咲き乱れ、蝶が舞う川原の廁とは美しい。こういう廁掘のある古びた家と、妙麗な夫人を設定して、その家の奥様を憧憬する少年が、川原に立って、奥様の香ばしい牡丹餅の洗礼を受けるといふM小説が書けると楽しいのだが。

「武州公秘話」(全集第十三巻)の巻の三に「上ろうの廁の事」というのがある。

△少しく尾籠ながら、その頃の高貴な婦人が

使ふ廁の構造について述べることを許された。むかし吉原の或る有名な太夫はびん銭を毛蟲と間違へたふりをして上品さを衒つたと云ふが、大名の家庭に生れた貴婦人たちは錢を知らなかったどころではない、自分の体から排泄する物質をさへ、一生人に見せなかつたのみならず、自分でも見ないやうにした。それにはどうするかと云ふと、廁の下に深い縦坑が掘つてあつて、彼女が死ぬと永久にその坑を埋めてしまふのである。蓋し糞便の処置方法として此のくらゐ高雅な仕掛けはない。

蛾の翅を無数に積み重ねてその上へ固形物を落し、落ちると同時にそれが翅の中へもぐり込んでしまふやうに造つたと云ふ倪雲林の廁なども、贅沢さに驚かされるけれども、掃除人夫さへ見せないで済みます点では、到底前者の奥床しさに及ぶべくもない。かの平安朝の宮廷の美女は、色好みの平中を魅惑するため丁子ちやうじの実で自分の排泄物を模造した逸話があるではないか。かりそめにも上ろうと云はれる者にはそのくらゐな嗜みがあつたのであるそれに比べると現代の水洗式装置などは、清潔で衛生の趣意にはかなってゐるけれども誰よりも自分がまざまざとそれを見せられることになるので、無厭ぶしつけな、人の居ない時にで

も礼儀と云ふものがあることを忘れた、浅ましい考案だと云はなければならないV

この「武州公秘話」は歌舞伎で上演され、歌舞伎座の舞台に、前代未聞の上ろうの廁があらわれて、観客を驚かせたのである。十一代目が、黒漆塗りの枠の中から舞台に登場して上ろうにお目通りする場面。

点線の部分がヒントになり、贋作したのが「妙心尼覚書」と、いうわけ(奇ク四十一年一月号)

倪雲林の廁の故事は「廁のいろいろ」でも触れている。

△志賀君が故芥川竜之介から聞いたと云つて話された話に、倪雲林の廁の故事がある。雲林と云ふ人は支那人には珍しい潔癖家であつたと見えて、蛾の翅を沢山集めて壺の中へ入れ、それを廁の床下へ置いて、その上へ糞をたれた。つまり砂の代りに翅を敷いたフンシのやうなものだと思へば間違ひはないが、蛾の翅と云へば非常に軽いフハフハした物質であるから、落ちて来た牡丹餅を忽ち中へ埋めてしまつて見えないやうにする仕掛けなのである。蓋し、廁の設備として古来このくらゐ贅沢なものはあるまい、糞溜と云ふものはどんなに綺麗らしく作り、どんなに衛生的な工

夫をしたところで、想像すると汚い感じが湧いて来るものだが、此の蛾の翅のフンシばかりは、考へても美しい。上から糞がポタリと落ちる。パツと煙のやうに無数の翅が舞ひ上る。それが各々パサパサに乾燥した、金茶色の底光りを含んだ、非常に薄い雲母きんものやうな断片の集合なのである。さうして何が落ちて来たのだから分らないうちに、その固形物はその断片の堆積の中へ吞まれてしまふ。と云ふ次第で、先の先まで、想像を逞しふしてみても、少しも汚い感じがしない。それともう一つ驚くのは、それだけの翅を蒐集する手数である。田舎だったら夏の晩にはいくらでも飛んで来るけれども、今も云ふやうな目的に使用するのには、随分たくさん翅が必要なのである。さうして恐らくは、用を足す毎に一遍々新しいのと、取り換へなければならまい。されば大勢の人手を使って、夏の間に何千匹何万匹と云ふ蛾を捕へて、一年中の使用量を貯へてでも置くのであらう。とすると、とても贅沢な話で、昔の支那でもなかったら実行出来さうもないことであるV

排泄物を誰にも見せないという奥床しさを求めるなら、人間便器ぐらい最適で贅沢なものはあるまい。上ろうの排泄物は食道を落下

して、臓物に収まってしまふのだから。ついでだから「青塚氏の話」(全集十巻、大正十五年作)から一節。

「彼はいきなり床の上へあおむけに寝た。股を開いてしゃがんでゐる人形が、彼の顔の上へびたんこに据わった。彼は下から両手をあげて人形の下腹を強く押えた。人形の臀の孔からガスのもれる音が聞こえた。わたしはこのヒビジイの顔からはげ頭へねっとりした排泄物が流れ始めたのを、皆まで見ないで窓から外へ飛び出してしまったV

Pigmaliornism に Coprolagnia が結合したものの。

谷崎潤一郎の作品を長々と引用したのは、最近の奇ク誌上に、神酒拝受だけではつまらなくなつたのか、Urolagnia の話だけではなく、Coprolagnia の話が多く見受けられるようになったからである。

津川博氏の、「スカタロジーに憑かれて」「M的飲食物考現学」や、香川泳三氏の「フルツカクテル」浅羽やすし氏の「華麗な惑溺」等。

「私は思う。過去十数年、KK誌を読んでゐるが、その間、神の美酒を拝受するというシ

ーンは、しばしば登場した。しかし、こちらのほうまで進展する場面は、かぞえるほどと記憶する。

何故ならば、神の酒の、ロマンティックな情感とはことわり、こちらのほうは、食べものというべく、あまりに無残で不遜で手におえるものでないからだV

「眼くらめく不潔感と、不倫の念が先に立つて、私にはどうしても全量拝受など思いもよらぬことなのだ」

と浅羽氏は書いていられる。

神酒拝受でさえ、不潔で汚穢だと顔をしかめる読者が多いことだろうから、一步先に進めてこちらのほうまで書くのは、やはり、えんりよしてしまう。

接吻で唾液をのみ、ソワサントヌッフで愛液をすするくせに、ことUrineとKotになると、同じ排泄物なのに敵視してしまうのだから固定概念を打ち破るのはむづかしい。

「Feischism」の中でも最も変痴気な心酔は、尿尿を見きき、また嗅ぎ、摂取しようとする欲求心理だとされている。

しかし、われわれ新心理学者や新しい精神医学者には、このScatologyをそれほど異常ではないと云う論者が多いのであるV

高橋鉄「アプノルム」(交痴崇物症概説のうち排泄物狂崇の項。あまとりあ社刊)

そこで「古事記」(岩波文庫、倉野憲司校注)から「神々の生成」の抜粋。

△(伊邪那美命が)……次に火之夜芸速男神を生みき。亦の名は火之炫昆古神と謂ひ、亦の名は火之加具土神と謂ふ。この子を生みしによりて、みほと在かえて病み臥せり。たぐり(嘔吐)に、生れる神の名は、金山昆古神(鉾山の神格化)次に金山昆売神。次に尿に成れる神の名は、波邇於須昆古神(ねば土の神格化、窯業)次に波邇夜須昆売神。次に尿に成れる神の名は、弥都波能売神(灌漑用の水の神)次に和久産巢日神(若々しい生産の神)。この神の子は、豊宇氣昆売神(食物を掌る女神、以上農業)と謂ふ。故、伊邪那美神は、火の神を生みしによりて、遂に神避りましき▽

伊邪那美神の尿尿から、土器製造や食物生産、水の神たちが生まれたというわけ。尿尿をもっと神聖視してもいいと思うのだが。

神武天皇の「皇后選定」のところに、面白

いことが書いてある。
△(神武天皇が)……然れども、更に大后とせむ美人を求ぎたまひし時、大久米命日しけ

らく此間に媛女あり。こを神の御子と謂ふ。その神の御子と謂ふ所以は、三島溝咋の女、名は勢夜陀多良比売(雷神、蛇神と密接な関係あり)、その容姿麗美しくありき。故、美

和の大物主神(蛇神、雷神)見威でて、その美人の大便まれる時、丹塗矢に化りて、その大便まれる溝より流れ下りて、その美人の陰を突きき。ここにその美人驚きて、立ち走りいすすきき。すなはちその矢を將ち来て、床の辺に置けば、忽ちに麗しき壮夫に成りて、すなはち、その美人を娶して生める子、名は富登多多良伊須須岐比売命と謂ひ、亦の名は比売多多良伊須須岐比売と謂ふ。故、こ

こをもちて、神の御子と謂ふなり。とまをしき。——(中略)——ここにその伊須氣余理比

売命の家、狭井河の上にありき。天皇、その伊須氣余理比売の許に幸行でまして一宿御寝しましき▽
めでたく、神武天皇の皇后になったという一節である。
富登は陰。多多良は雷神。ここでは大物主神。伊須須岐はあわてふためいた意。そりやそうでしょう。容姿麗美な勢夜陀多良比売が用便中。丹塗りの矢に化けて厠の下から忍びこんだ大物主神に。あらぬところを突つかれ

たのでは、まったく「立走伊須須岐伎」ですよ。

それにしても「こはそのほとと云ふ事を悪みて、後に名を改めつるぞ」なんて、ことわりが書いてあるのは、正五位上勲五等太朝臣安万侶も、稗田阿礼があまり調子のいいことを誦むので、少々気がとがめたのかな。

古代は、おおらかで明かるくて、いいですねえ。

では、もう一つ。「応神天皇」は「秋山の下水壯夫と春山の霞壯夫」の項に、

△……ここにこはしらの神ありき。兄は秋山の下水壯夫(紅葉)と号け、弟は春山の霞壯夫(春霞)と名づけき。故、その兄、その弟に謂ひけらく、吾伊豆志遠登売を乞へども、得婚ひせざりき。汝はこの嬢子を得むや。といへば、易く得む。と答へ日ひき。(中略)その嬢子の家に、遣はせば、その衣服また弓矢、悉に藤の花になりき。ここにその春山の霞壯夫、その弓矢を嬢子の厠に繫けき。ここに伊豆志遠登売、その花を異しと思ひて、將ち来る時に、その嬢子の後に立ちて、その屋に入る即ち、婚ひつ▽

とある。藤の花に化けて厠で待っていたわけである。

但し現代の法律では、ですよ、

刑法第三百三十条の住居侵入罪——故ナク人ノ住居又ハ人ノ看守スル邸宅、建造物若クハ艦船ニ侵入シ又ハ要求ヲ受ケテ其場所ヨリ退去セサル者ハ三年以下ノ懲役又ハ五十円以下ノ罰金ニ処ス。

罰金は50倍で計算。厠に侵入するなんて、とんでもないことで、覗いただけでも、

軽犯罪法第一条第二十三号——正当な理由がなくて人の住居、浴場、更衣場、便所その他、人が通常衣服をつけないでいるような場所を、ひそかにのぞき見た者、と定め、拘留または科料に処せられることになっている。

拘留は24日間、留置場にぶちこまれる。

以上、「ブレイボーイ」十二月十日号「佐賀潜のゲリラ版法律セミナー」より。

神々には、この法律は無用らしい。

「覗き——は未知の女体に対する好奇心の現れである。覗かれた者が覗きに気がつかぬ限り、被害感情はない、が、これを知ったときの羞恥を考えると、ゆるがせにできない問題である」

と元検事の法律家であり推理作家である佐賀潜は書いている。現代人であれば法律に従うのは当然で、法を犯すようなことは、さけ

なければならぬ。

神聖な厠をけがしては、神々に申し訳ないから、あえて一言。

ハローマ皇帝カリグラ（三七——四一）は正気ではなかったらしいが、妻の糞を食ったといわれている。ペルシャの女郎屋では、排便行為の光景を見て性的に興奮する人たちのために特に部屋の調度ができている。ガラスの床と腰掛けがあり、その部屋の床の下からのぞくと、女の排便の光景が近々に見られる仕組みになっている。このような光景のエロチックな性態は、マルキ・ド・サド侯の小説の中でも言及されている。

糞は、それだけとってみれば、エロチックシンボルのうちでも、ほとんど美的魅力を持つていないように見えるものへ転移された形態として確かに役立ってきたので、糞の存在には看過できない動機がある。そこで筆者はまず、臀部の性的フェティッシュになる傾向に言及しなければならない。

臀部は、あらゆる時代、あらゆる場所で、女体の中で最も審美的に麗わしい部分の一つと見なされてきた。おそらく、この正常な魅力を基礎として、そのうえに、数種のエロチ

ック・シンボリズムが、多かれ少なかれ、作り上げられている。臀部の審美的魅力は女性たちにムチ打ちの刑を加えなくなる慾望を取り立てる動機の一つであるという。ある場合には確かに、多くの場合には多分、このようにして、臀部の性的魅力は、次第に肛門の付近へ、排便行為へ、そして遂に排泄物そのものへ進んでゆくのである。

ハヴロック・エリス「エロチック・シンボリズム」（小野武雄訳・新流社刊）より。

臀部に対するFetischismが、Coprolagniaになるというわけ。直訳みたいで、読みづらい文章だ。（失礼）

「糞尿フェティシズムは、時には連想されているが、必然の結びつきがあるわけではない」

とハヴロック・エリスはいつている。

「嗜尿症の方が確かに一そう数多く見出される。放尿行為は、排便の観念よりずっと、エロチックなシンボリズム的観念を示唆し勝ちである。なぜかは、理解するのに困難ではない。放尿行為そのものが性的シンボリズムへ走りやすく、生殖機能が一そう親しく連想され、放尿行為は排便行為よりもずっと回数が多いし、ずっと目立っている。そのうえ、糞

よりも尿の方がずっと五管を害さない」

というのであるが、これでは舌足らずで、解説としては不十分のように思われる。

嗜尿症に関しては、かなりくわしく解説しているのだが、イギリスが生んだ世界的な性愛の心理学者、社会学者、批評家も、いささか首をひねったんじゃないのかしら。

いくら精神分析とはいえ、無理に理屈をつけることもないだろう。とにかく、この方面の心理学はまだまだ未開拓なのだから、勝手なことはいえるというものだ。だから私は医学博士であるクレイジードクターに、会うたびにけしかけているのである。

モルモットが眼の前にいるのだから、研究してごらんなさいよ。死んでも名は残りますよ。男子一生の仕事として、あまりある大問題ではありませんか。ホントカシラ。

Scatologyの一般論としては「アプノルム」で、日本のほこる精神分析学の権威は、「近代の新心理学（精神分析学）で観ると、この排泄物心酔は、もっと複雑である。」

元来、幼児時代は殆んど皆、尿尿の心酔者なのだ。判り易くいえば、口唇で吸いとり快感オラルエロチック（口唇性感）について、排尿する快感と排便する快感とおぼえる。これを尿道性感、

肛門性感という。

尿道や肛門の性感Erogenaというのがおかしいと思う人は性交の際、尿道や肛門も快感を強めることも知るべきである。女性がオルガスムスの場合に、尿を洩らす者も少なくないし、また、男性の場合、鶏姦によっても射精するのが普通である。

ただ一般的に云えば、人間は成育するにつれて、口唇、尿道、肛門などの性快感は次第に弱まり、性の焦点は完全に性器へ集まって他の部の性感は補助的な役目をするだけになる。

「ところが、人によっては、幼い日の口唇、尿道、肛門などの快感がいつまでも強く残っている者がある。そのような素質のある者が親や教師から性器への正当健全な探究を禁止されると、性の好奇心が幼児期の快感であった尿道や肛門へ転移されてしまう」

とっている。こうなると潜在意識で、そんなものかいな、てなことになって、ただ感心しているだけである。

確かに、SEXへの関心が強まれば、未知の世界であり、魔力を秘めた女体の神秘に好奇心が先走り、女体が裸になるところは浴室とトイレしかないし、特に排泄行為をとま

う下半身の露出に、興味が集中するのは当然で、そんなことを考えすぎる前に、あっさり女を知って、実地検証をすませてしまえば、Scatologyといわれる前に、そんな関心を示さなくなることもあると思う。

が、いくら女を知ったって、Scatologyがぬけきれなければ、外の理由を考えなければならぬだろう。

Scatologyを性愛の手段として、独立させるより、説明のしようがないと思うようになってきた。

Scatologyはabnormalだというのも古色蒼然とした固定観念であれば、Fetischismのただで解説されるのも、世界を小さくしてはいやしませんかと思うのである。

ScatologyがSadismと、masochismがどうことになるか、これまた別問題である。

高橋鉄も、同書で、

「相手の性対象によって汚洗される、その尿を見せつけられる、それを飲食させられる……と、こういう気持で尿尿に心酔するものはマゾヒストである。」

また、裸女に踊らせたり、跳ねさせたりした挙句、放尿させる男なども、彼はむしろ心理的姦淫を遂げる願望なのだと云える。（サ

デリストだ)

このように、フェティシズムは、屎尿狂崇のみに限らず、複雑な形をとるV

とのべている。

私もよく「神酒降奮」などと書くけれど、考えてみると、こんな場合は、MではなくSのほうの心理状態になっていることは確実である。

話は違うけれど、Mだなんていっている人は、仮面をかぶったSで、Mより、むしろS的性格が強いんじゃないのかな。

人間の性格は、自分自身でもあわてるほど逆説的で複雑怪奇で、わかったようなわからないような、妙にヘンテコリンなものであるらしい。

谷崎潤一郎全集やら、ハヴエロツクエロスやら、古事記や奇クヤ、雑多な本をカウンターにお借りだして、あっちこっち引用しているのだが、書いているうちに、何をいたのか、ますますこんがらがってきてしまった。

こんがらがったのがわかっただけでも、いいじゃない。

十一月二十五日号「女性自身」に、

「お便所を使っているとき、自分の姿を見ることが出来る」

という説明つきで、エリザベス・テラーのおトイレがカラーで紹介されている。

おトイレがバスルームに同居するのがあちらの方式だが、壁が鏡だから、排泄作用が丸見えということになっている。カリザマ号の化粧室を公開したもの。

十一月十八日号「平凡パンチ」の「海外話のタネ」に、

「十月一日ニューヨークの下町にハブラックライト・ハウスVというサロンバーが開店した。将来は、世界中のアブノーマル・セックス愛好者たちのたまり場にするつもりだそうだ」

とあり、

「いまのところ当局の出方を見るために、アブノーマルなのはトイレだけ。トイレに入ると浴槽があり、男女いずれかが全裸で浴槽に横たわっている。ご用をたす人は、浴槽の中の人間にかまわずジャージャーと浴びせかける。かけられるほうはそれが趣味だから、大喜びするのだ」

婦人客専用のトイレになりたい希望者は、すぐにニューヨークに行く手ですね。

浴槽は浴槽でも、シャンパン風呂にホステスをいれて、一杯一ドルで売っているニューヨークのキャバレーが客にうけているそうである。「うまいらしい」

シャンパンだから、彼女がC.H.E.をしたってわからない。発泡酒には違いない。

「プレイボーイ」十二月三日号の「プレイバ―」から。

本来の酒風呂は、

「ブランドーかダークラムをコップ一杯程度風呂に入れ、その香りとゴージャスな感じを楽しむのが目的」

だそうです。おためし下さい。奥様が御使用後、お酒の弱い方は、そのホットブランドーやホットラムをお飲みになると、ほろ酔いになること保証します。

話題の雑誌「血の薔薇」第二号が、貞操帯特集をしたそうで、その紹介が、「平凡パンチ」十二月九日号にのっていた。

李礼仙や芦川羊子が、貞操帯をしているのは、なかなかイカスよ。

その中で「貞操帯が変えるSEX」として暗黒舞踊家の土方選が、

「コイタスそれ自身ができなくなるから、オシッコを飲んで、よろこぶような価

値轉換がやってくるでしょう」

なんて、哲学者みたいなことをのたまわっている。

露出の時代には、貞操帯というアクセサリが必要なんで、そのほかに意味はないだろう。

価値轉換は、もっと本質的なもので、そんな甘っちょろい遊びじゃないぜ。

それにしても、貞操帯をして、鞭を持った裸女（福島晶子）の下に、裸の女が這いつくばっているフォトは、ちょっとよかったよ。

少年少女向きの週刊誌は、青少年の健全なる育成に支障を与えないように編集しているから、右のようなすばらしい記事にお目にかかれるというわけである。

週刊誌をめくっただけで、Scatologyの香りがするという見本である。

梶山季之が、せっせと食糞狂を書いて、少年少女をびくくりさせているから週刊誌の編集者たちもつられてしまうのかもしれない。

梶山季之の小説が人気があるのは、簡単明瞭で、直線的だからである。食糞狂などあっさり書けるのも、彼にその趣味がなく、ルポライターとして興味本位に見ているからである。そのスケベ話が、読者にうける原因な

のは書くまでもない。

Coprolagnia が喜びそうな奇ク名作展を開いてみましようか。

「早くトイレの準備をなさいよ」

言い捨ててひらりと軽快な足取りでトイレの方へ向うのである。トイレットルームと云っても、ベットルームと私の書斎の間にある一坪半程の仕度部屋であった其所にジュートン敷いて、彼女の為に専用のトイレットとして居るだけのことである。神聖なる女神の月々の生理的行為を、側で私が奉仕するのに、便利にする為に、普通の便所と区別しであるのである。

彼女は煙草を吸い、新聞を読みながら、悠々と私に奉仕させつつ朝の此の部屋での行為を楽しむ。勿論、彼女の此の行為の始めから終りまで一切は全部、私が手を下してするのであって、彼女自身は全然、自分の手を使う必要が無いのである。彼女の用が済んで、容器の中に顔を近づけ、馥郁たる香氣に私は酔いしれることが出来るのだ。

女神の香物の入った容器を捧げて、始末をしに行く私に、「どんなお味で、何時もと違ってて？ 妾、昨夜は少しお腹の具合が変だ

ったのヨ」

「註」があって「今年妻は二十九才。私は三十八才。結婚して今年で八年です」とある。

「忘れもしない。結婚して三年目の、彼女の誕生日の、夜の事であった。彼女に命令された、パンティの洗濯を忘れたために酷く折檻された事があった。その汚れた彼女のパンティを口に押し込まれ、ブラジャーで猿ぐつわをかまされて、家の周囲を三十回、真裸で四つ這いで廻れと命令された」

というステキなシーンもある。

二十八年九月号「幸福なる隷属の告白」鐘坊巡。Mの一例。

「よし、じゃあ、この洗面器に、小便をしる。紙は昨夜あれに使った紙を伸ばしておいたからこれで拭くんだ。早くやって見せろ」

あきれたような顔の浜子は、それでも観念したものか、私の手から京花紙を受け取ると洗面器に跨って浴衣の裾をまくり上げて跪み込んだ。（中略）

浜子は放尿して私に見せて呉れた。別に何の交哲もない、生理の処置に過ぎないのであるが、ただ便所の中で、他人に見せぬ行為だけに、不思議な魅力が私を興奮させるのであった。勢よく放尿された尿は洗面器をはじい

て飛沫が彼女の股下に散って顔を近づけていた私の眼にまで泌み込んだが、私の錯乱した情感は火の如く燃え抜いて、総べてが夢中であつた。私は次々に尿意を訴える浜子に（註——彼は塩を多分に交ぜた水を、浜子の尿道にガアゼの端を詰め込んで腰巻とズロースで緊縛し、細引で裸の浜子を縛り上げ、無理に塩水を注ぎ込んでいるのである）もう一度放尿を許し、京花紙で拭く動作を吟味して観察した。（中略）

私はやや満足したが未だ便所の秘密は残っていた。それは女の大便をする有様である。

これを浜子に命じたのである。洗面器の後ろに彼女の腰巻を敷き、新聞紙を更に二枚に折って敷いた。

「これが便器のつもりだ。ここで大便をして見せて呉れ。やれ」

浜子は泣き顔で、それでも、顔面に朱をそそいで、いきみ返り乍ら、あお動い健康的な便を肛門一杯開いて脱糞した▽

二十七年十二月号「サディストの懺悔より——錯乱の倫理」近藤規矩也。Sの一例。

三十七年十月号に山田那津子さんの「下痢願望マニアの告白——トイレへの郷愁」というのがあるのだけど、これは私にはよくわか

らない。

「浣腸の過程の中に、注入の方よりも排泄の方にも興味を持つと申しましょうか……」

「プレイに使用します使用法を御参考までにお知らせしたいと存じます。すべて下剤は一回量に限度がありまして、それを超えるとひどい腹痛が起こります。最初に休日の前日、昼前に一回量の適量を服みます。」

次に夕食後に一錠位を服んでおきます。すると夕食後間もなく、第一回の便通がありますが、最初普通便で後大部分はダラダラした極軟便を相当大量に排泄致します」

「下痢の症候によっては、最初普通の軟便を排出して終わった頃に、さして便意もなくほとばしる様に水様軟便を噴出する場合もあり、この様な時に終ったつもりでお尻を持ち上げた途端に噴出したものならば、その他に相当な腸内粘膜の損傷による粘液が混っていることもあります」

医学的な話である。narcissusに scatology が結合すると、こんな願望も生じるといふ、一例。肛門性感。

最近では、葉山啓氏のシナリオ「いちじくの実を持つ女」が最高に美しい。

△有田の前に、黒塗りの懷石膳が、美也子の

手によって置かれる。膳の上には、同じ塗りの、一對の、飯碗と、汁碗が、のっている。添えられている箸は、青竹を割って、くしけずったもの。（中略）

美也子（笑って）「これから、有田さんの目の前で、私の御馳走を、調理致します——今宵のために、一昨日から、準備した御馳走です。……どうか、召し上って下さい……」

有田の前の、懷石膳を捧げ持ち、二枚折りの影に、かくれる。

美也子「有田さん——」

有田「はい——」

美也子「御覧になっても、ようございますのよ……私の御馳走が、お膳の上に、盛りつけられるところを……」（中略）

美也子、ほんの少し、身を、かがめる。

有田「——ああ——」

美也子、目を閉じ、下半身に、少し、力を入れる。

有田「ああ——奥さん——」

仄かな、光がたゆとう画面の中を、美也子の身体で調理された御馳走が、時には太く時には細く、そして、時にはゆるやかに、時には流れるように早く、実体のない、シルエツトになって、よぎって通る。（中略）

美也子、陶醉からさめたように「さあ、できました……お待ちどうさまでした……」

どうせ書くなら、このシーンのように美しく書いてほしいと思うのは、私のささやかな願いでもある。

女王様にたべさせられるM的光景を最後に紹介すると、

△「犬のくせに人間の言葉を使って、駄目じゃない。随分お腹がへったらしいね。じゃ、これでも喰べるんだね」

とおっしゃって、フタをした、どんぶりと割箸を持って来て下さるのでした。一体何を食べさせて下さるのだろう。

「さあ、ワン公！御主人様の体から出たものだよ。有難く頂だいするんだよ」

——(中略)——

光子様は、割箸で小指の先程の大きさの固形物を取り上げると、

「さあ、お食べ。これにも、女王様の栄養のかすが、少しは残っているんだから」

とおっしゃって、無理やりに私の口をこじあけて、箸の先を押し込むのでございます▽三十八年九月号平伏人氏の「終身刑」。

こう並べてみて、気がつくことは、すべて△間接▽だと、いうことである。便器、洗面

器、懷石膳、どんぶり、奴隷や犬の口に直接排泄するのではなく、道具の中にはさんでいるのも面白い。

直接拝受と間接拝受は、またまた別問題だから、次のことにしよう。一口にマニアといっても、なかなかデリケートで広範なのである。

日誌を書く習慣はないが「濡れにぞ」が神酒拝受の日記みたいで、読み返してみても、一人一人の女性が思い出されるのである。まったく露出的な告白で、赤面恐怖にかかりそうなのだが「濡れにぞ」のおかげで、種々と面白い目にも合ったし、功罪相償うというところだろう。

四十年四月号の「濡れにぞ」の「初神酒拝受」の項、

△一月七日

……それが途中で止まってしまった。

顔をはなすと、

「ちょっと待ってね」

と笑いながら云った。

寒いので、お湯を浴びたらしい。熱い湯が足にかかった。

蘭子の美しい眉が、きつとあがった。

起きあがると、

「顔をよく洗いなさい」

と化粧石けんを差し出した。

「首も胸もよ」

そう云うと、湯を浴びて、さっさと和服を着た。

「口は」

「えっ」

「ゆすがないの」(中略)

三面鏡に向いながら、蘭子が妙なことを云った。

「前はいいけど、うしろはだめね」

「うしろ」

「匂いがあるから」

「ああ」

江戸棲模様の蘭子が、ふっと笑った▽

とある。神酒拝受だけで、そのほかのことは書いていない。

この会話、本当は蘭子から聖牡丹餅の洗礼を受けたときの会話なのである。

神酒拝受の場合には、直接に受けるから首や胸を汚すことはまずない(私の場合は)。ということ、乳を吸うように吸うからである。

浴びせられたときは、私は正直だから、す

なおにそうように書く。

顔を洗え、胸を洗え、口をゆすげと、蘭子がうるさく云った原因である。

三面鏡に向って蘭子が云った言葉は、私の口中に落下させたあと、やはり気が咎めたのだらう。あやまるような口調だったことを忘れられない。

私は決して、梶山流の食糞狂ではない。いくら「スカタロジーに憑かれて」も、津川氏のように。(氏が食糞狂というのではない。念のため)

八女性用の、彼女のトイレに入る。

この喜び。この感激。ぞくぞくする快感。心臓の高なり。身体中が、熱っぽくなってくる。すぐ眼の下、真っ白なチリ紙の下に、彼女のまだぬくもりをもつ、憧れの置土産がある。

夢中になってそれを戴く。多少の匂いは感じられたが、味はまさに満点。よく消化されていて実にうまい。

(M的飲食物考現学——駅のトイレで)

これほどまでの心境にはなれないし、直似することなど絶対にできない。

蘭子も変わった女だった。私に平気で Urine をのませたあと、nektrophilie の話をして私を

からかうのである。屍体愛好とでもいうのだらう。

要するに、私を心神状態にしておいて、自分の好きなような振舞いをしてみたい、というのである。それこそ、生かすも殺すもわたしの勝手という責めになる。

ひげをそってあげるといって、わざと顔を切ったりするような強烈な彼女だから、とてもじゃないけど、言葉の遊びだけで沢山であった。

そんな蘭子だったから、あの時もつい思いつきで私に別のものをたべさせてみようという気になったのだらう。

蘭子が私の顔をまたいだとき、恐怖で顔がこわばったことをおぼえている。

排泄物の不潔で汚穢である先入観が急激によみがえったのと、彼女からその固形物をたべさせられると思っただけで、すでに嘔吐しそうな状態になったのである。

夢と現実の違い。Scatology には空想家のほうが多いのである。クラフト・エビングがいつているところの「観念的マゾヒズム」の人たちばかりであるといっても決して過言ではない。

空想なら、どんなことでもできるさ。

口をおさえて、蘭子の攻撃を待った。嘔吐してしまったら彼女に悪いと思ったのだから不思議であった。

私は微妙な動きを続ける彼女の一点を、恐怖(おおげさかもしれないが)と戦いながら凝視していた。

この恐怖は、彼女のが口中に落下したときのをふさがれて、そのまま窒息してしまうのではないかという恐怖もあった。

しばらくして、小指大の蘭子のそれは、容赦なく、私の口中に、顔に、胸に、落下したのであった。

口中にはいったのは無味無臭だったと書いてたら、知らない人はウソツケというかもしれない。

知る人ぞ知る、ということでしょう。

もう一度、蘭子と私の会話を読んでいただきたい。たべさせるのに四苦八苦したり、途中でお湯を浴びて一服したり、口をゆすぐのも忘れて茫然自失している私に、あれこれ命令したりしている蘭子を、短い会話の中にこめたつもりだったのである。

それにしても、蘭子のだったから、たべられた(少々)のだらうと思う。それだけ、サディスティックなムードを蘭子は持っていたの

である。

蘭子がトイレにきてきたものをたべるといわれても、私は拒否したのに違いない。あくまで、蘭子から直接にたべさせられるという状態でない、このプレイは成立しないのである。

神酒拝受ばかりでなかったという意味で、「ソドムの百十日」から、*Room* に関係ある箇所だけをぬきだして紹介しておいたわけである。

△「直接よ」

という蘭子の言葉が耳に残った。

……とはいえ、夢はこわしたくない▽

と日記は結んでいる。蘭子にたべさせてくれとたのんだものの、彼女からいいわといわれて急に不安になったときの心境である。

現実はずべてを破壊するから、せっかく大切にそだててきた夢が、無惨にこわされたら泣いても泣ききれない。

それでも、やはり、蘭子のをたべてみたかったのだから、好奇心が強すぎるのかもしれない。

四十年十月号の「濡れにぞ」の「襟子のこ」との項。

八七月十八日

……私の頭に腰掛けて襟子は考えている。

襟子の柔肌で、眼は見えない。

考えながら、私の鼻をつまんだり、鼻の穴に指を突っ込んだり、唇をつまんだり、両手で口をふさいだりするから、息苦しくて仕方がない。

考えているときは、何かしらじくつけないと迷案が浮かんでこないらしい。

と、

暖かいものを感じて、あわてた。(中略)

唇をまさぐっていた襟子が、私の口をこじ

あけると、腰を浮かした。

開いた口に、襟子の暖流が、少しずつ流れ

込み始めた。

「うっ」

襟子が首を締めたのである。(中略)

「いつまで、俺の顔に腰掛けているんだよ」

「まだ、でるもの」

あろうことか、私の両手と両足をまとめて

襟子は縛った。その上に坐ったのである。

襟子の可愛いお尻が顔の上にゆらぐ。

以下、また今度▽

この時も書くのをやめてしまった。あまりにも常識的な、道徳的な考え方しか出来ない人達に、くだらない誤解をされたくないから

からである。

神酒拝受だって、誤解のされっぱなしですからね。況んや……をやである。

「そこですねえ、そこまで書かないほうがいいのじゃないですか」

と忠告して下さった誌友もいた。

襟子はトルコさんである。三原寛氏が、彼女のトルコ名そのまま、奇巧に発表している。三原寛氏が惚れた一人であることには間違いない。

襟子ぐらい、金銭的に淡泊な女にお目にかかったことはなかった。始めから終りまで、チップの話は一度もでないのである。客がおいっていくのを、ただ黙って受取るだけであった。従って、金がかからないから、せっせと通うことになる。

襟子に神酒拝受の話をしたときも、聖牡丹餅の洗礼の話をしたときも、彼女はうなずいただけであった。別に驚くわけでもなく、無駄口をきくわけでもなかった。おそろしく無口なのである。

彼女が「まだ、でるもの」といったとき、別に期待はしていなかった。そう簡単に洗礼式をあげられるかどうか、疑問だったからである。

彼女のちんまりしたお尻が、顔の真上にあ
り、上体を前にかたむけて、彼女が息張って
いるのに気づき、事の重大なことにあわてた
のであった。

襟子のまるまっちいお尻に、小判鮫のよう
に吸いついた。蘭子のときは、落下するのを
下から見上げて、待っていたから嘔吐感が湧
き上ったのである。

見ていなければ、不潔とか汚いとかいう。
排泄物につきものの不安から少しでも解放さ
れるかもしれない。しかし、窒息するのでは
ないか、むせて吐き出してしまうのではない
かという恐怖は、どうしてもぬぐうことは不
可能であった。

彼女の小さな秘宝は、外気に触れることな
く、こぼんいただきの口から、食道に吸い込
まれていったのである。

やはり、無味無臭であった。
顔からおりた全裸の襟子が、
「でなかったわね」
と私にいった。

「えっ」

彼女の顔はいつもの表情と変らなかった。
何事もなかったように、彼女は身体を洗って
いた。

襟子の言葉は、量が少なかったという意味
なのである。

たべるのも、たべさせるのも、それが当然
のような彼女の態度であった。彼女なら、S
EXがどんなに型を変えても、自然に順応し
てしまうと思われた。

彼女の天性なのかもしれない。

必要以上に懷疑ぶったり、いたずらに不道
徳視するのが、なんだか阿呆らしくなったか
ら不思議であった。

なんでもないことが、終わったのにすぎなか
った。

私が襟子に惚れた現由である。

四十一年八月号の「濡れにぞ」の「初夏の

香Vの頃、

〆五月三日

……「男に飲ませた感想を一つ」

「馬鹿」

「馬鹿ですか」

「知らない」

ビールが続けて空になった。

「そんなに飲んで、大丈夫かな」

いきなり香が立ち上った。

「いらっしゃい」

浴室の戸を開けた。

「脱いで」

タイルに立って、香は命令する。

「寝て」

命令しながら、横を向いている。男の裸か
ら視線をそらしている。

バスタオルを巻いたまま、香はタイルに寝
た男の顔をまたいだ。仁王立ち。

見下ろして、

「かけてあげるわ」

と、ぶっそうなことをいった。

「しゃがんでよ」

「だめ」

「それじゃ、胸をまたいだほうがいい」

香の顔が赤くなった。一步、うしろにさが
る。

タオルの裾がはねかえった。

放射線が視界を奪った。V

事件は、この直後に起こった。

香は決心したらしかった。

Urineなら許せても、kotはどうしても許

せなかったのである。それを見せることは、
成人式をまだむかえていない香にとって、た
えがたい恥辱のように感じていたのに違いな
かった。

浅羽氏のいう通り「ロマンチックな情感」

と「あまりにも無残で不遜で手におえない」ものの対決なのである。

私が香にその話をしたとき、彼女はどうしてそんなものがたべたいのか、どうしても理解出来なかった。

「理解してくれなくてもいいんだよ」

と私は香にいった。

「香が許してくれさえすれば、ただ香のをたべてみたいんだ」

これでは理由にならない。

「香にキスがしたいのに、いちいちその理由を話さなければならぬのかい」

「話をそらさないで」

「そらしてなんかないよ。俺にとっては同じことだ」

詭弁かもしれない。

しかし、SEXに（私にとっては）理由なんてあるものか。何故、そのまま素直に肯定することが出来ないのか。そう叫んだところで仕方のないことであつた。

「山がそこにあるから、登るんだろう」

「それとこれとは違うわ」

「同じだよ」

Nホテルのバーで香と待ち合わせてから、こんな話を繰り返したのである。香が根負け

したのか、そのつもりになったのか、あまりうるさいのでこらしめてやろうと思ったのか、香の心境はわからない。

かなり抵抗を感じたことだけは確かなことであつた。

神酒拝受の約束は、前にしてあつた。そのつもりでのデートであつた。香と一日だけのデートを、私なりにデラックスにしてみたかった。香との約束をとりつけてから、この日のために費用を準備したのである。

Nホテルのバーから、Tホテルのシアターレストランで食事をし、約束はしたものの、約束が約束だけにその話になると頑なに眉をひそめる香を、柔かなムードで、もみほごす必要があつた。現在の私の経済力では、そうそう費用を捻出することは出来なかつた。

蘭子から洗礼を受けたときの気持ちを、襟子からたべさせられたときの感情を、私はわかりやすく香に話した。

「誰でもいいの」

二人の女の名前をだしたのは、まずかつたかもしれなかつた。香だけだといったら、彼女はもっと素直に、私に許してくれたのかもしれない。その点は微妙である。

香は、二人のことを、くわしく聞きたがつた。

た。

仁王立ちで私に浴びせたあと、そのままタイルの上に長々と寝ている私の顔に背を向けて、香が位置を変えたのである。

胸に巻いたバスタオルをからげ、私の顔の上に……。

『濡れにぞ』の続き、

「香はね、犬に飲ませているつもりなの」

「香は処女だものね」

「おだまり」

仕方なしに、四つ這いで、部屋を、一周した。

「もういい」

勢よく、首を引っ張られて、見事に横転した。香の足が頸を、顔を、首を踏みつけた。痛い。

「しゃくだわ」

その時、香の本音を聞いたように思った。犬に飲ませているつもりを、犬にたべさせたくもりと、かえて読んで下さい。

香の全量を拝受したわけではなかつた。

事後、トイレから出て来た香が、

「みんなたべたら、窒息してしまったかもしれないわ」

といったのが印象的であつた。

（了）

「ねえ、お願い。うがいをさせて頂けないで
しょうか」

「よしよし」

夫人の今までの熱演に大いに気を良くした
川田と鬼源は、二つ返事で洗面器と水の入っ
たコップを用意する。

緊縛された上半身を、鬼源がうしろから支
え、川田が夫人の口に、コップの水を含ませ
た。

夫人は口の中の水を深く首を曲げるように
して川田の差し出す洗面器の中へ静かに吐き
つづける。

「なかなか……方もうまくなったぜ。も
う少し、舌を使って強く……げるコツを覚
える事だな。そうすりゃ全く申分なしという
所なんだが——」

鬼源がうがいを続ける夫人の光沢のあるス
ベスベした背を、さすりながらいった。

「わかりましたわ」

「今夜あたり、捨太郎を相手にして、よく練
習してみる事だな」

鬼源がそういつて笑った時、襖が開いて、
千代が和枝、葉子の二人を、再び家来のよう
に従えて入って来る。

「フフフ、如何が奥様、男二人を上手に楽し

ませる事が出来まして——」

静子夫人は、千代から視線をそらせ、消え
入るように首を深く垂れてしまう。

鬼源が代って千代にいった。

「へへへ、やはり頭のいい奥さんだけに、す
ぐにコツを呑みこんで、器用に二人の男を遊
ばせてくれたぜ。だから、その努力に免じ、
あの中国の技術ってやつは、今日のところは
何卒——」

勘弁してやってほしい、と鬼源が頼むと千
代は、笑顔でうなずき、

「これから社長達と大事な相談があるので今
日の調教は、これで打止めという事になった
のよ。あとは明日のお楽しみってわけね」

千代は、そういうと、うしろからぼんやり
首をのぞかせている春太郎と夏次郎に

「それじゃ、あんた達、この女を地下牢にぶ
ちこんで来て頂戴」

と命じる。

二人のシスターボーイは、夫人の肩や背に
手をかけ、台から引き降ろすと、縄尻をとっ
た。

「明日から、この部屋で三日間の調教を開始
するわ。今夜は男二人を夢中にさせた御褒美
に一人でゆっくり休ませてあげる。さ、連れ

てお行き」

千代は、静子夫人の陰影を沈ませた悲しげ
な横顔を、小気味良さそうに見てから、もう
一度シスターボーイ達にいうのである。

夫人は縄尻を取られ、悲しげに眼を伏せな
がら疲労しきった体をやや前屈みにして、ゆ
っくりと歩き出した。

「へへへ、また、二三日すりゃ今みたいな方
法で、こつてり可愛がってやるからな」

鬼源は、静子夫人の量感のある見事な双臀
と、眼に沁み入るような艶やかな白さを持つ
優美な両肢を眺めながら、からかうように声
をかけた。

ふと、静子夫人は立上ると、思い切ったよ
うにうしろを振向いた。

「川田さん——」

暗く沈んだ物悲しげな瞳を哀切的にしばた
いた静子夫人は、

「川田さん。静子ととりかわしたお約束、お
破りにならないでね」

「ああ、千原美沙江の事かい」

川田は、鼻をピクピク動かしながら、夫人
の顔を面白そうに見た。

静子夫人は、うなずいて、
「千代さんのおっしゃる、その恐しい調教を

お受けしたって静子は決して恨みません。だけれど、千原流のお嬢さんだけは、川田さん、後生です」

今にも泣き出しそうな静子夫人の表情を見て、川田は、

「心配すんねえ。そのために奥さんは、俺達二人に大サーブスしてくれたんじゃないか。あんたの氣持を踏みにじるような真似はしねえよ」

それを聞くと夫人は、ほっとしたように長い睫毛を震わせ、再び、首を垂れ、盛り上った双唇をゆるやかにくねらせながら、二人のシスターボーイに縄尻を引かれて歩き出すのであった。

片頬を歪めて、そのあとを見送った川田と鬼源は、ほっとしたように顔を見合わせる。

「お互に充分堪能したって顔ね」

千代は、二人を見てクスクス笑った。

「全く絶品だよ、あの女」

と川田が舌を巻き、

「久しぶりで楽しんでみたが、ああも見事に成長してるとは思わなかったね。お羞しい話だが全身が痺れちゃったよ」

実際、川田は、未だに全身が上気しているのだ。遠山家の運転手であった頃の自分にと

っては、静子夫人は、正に天上人の感、まばゆいばかりの存在であった。それがどうだ。

かつての高嶺の花は、きびしく緊縛された、眼に沁みるばかりに白い優雅な裸身をくねらせつつ、その甘い美しい紅唇……押し包み、口……撫したのだ。夫人のしっとり濡れた舌先のあの甘い柔かい感触、何度も何度も嘗めつけたあの濡絹のような心もしびれる舌触り、……吸いついたり、押し包んだりしたあの唇の真綿のような柔かい優しい感触、時々、褶りつける夫人の形のいい高貴な鼻、上気した香わしい鼻息——

そんな夫人の動きを思い出し、川田は、未だはつきりと意識が元に戻らないのだ。そして、俺がとうとう緊張を解放させてしまった時、夫人は、一瞬哀しげに眉を寄せたが、静かに唇を廻しながら、まるで、……までやってのけるよう、そして、最後まで優雅で、柔媚な口吻だったわけ——

次に鬼源がニヤリと黄色い歯を見せた。

「何しろ、あれだけのものを持ってる女は、滅多にいるもんじゃありませんよ。それにあのコツを呑みこんだ廻し方、俺だって、さっきは体の奥から——」

鬼源は、そんな事をまるでのろけるような

調子でとくとくとしゃべっていたが、ふと、千代のむつかしい顔を見て口を噤んだ。

やはり、女だけに、そんな事にも嫉妬がわくのだろうか。フン、といった顔つきを見せた千代は、

「下らないおしゃべりはその位にして、そろそろ社長の部屋へ行こうじゃないの」

「一体、何の話があるんで——」

「きまつてるじゃないの。千原美沙江誘拐についての打合わせよ」

大塚順子も来て、これから、皆んなで作戦を練り合う事になっているという。

ああ、そうだったか、と鬼源と川田がうなずくと千代は葉子と和枝を眼でうながし、大奥の意地の悪いお局みたいに、冷やかな顔つきで、さっと踵を返し、先に歩き出すのであった。

巨大な責具

その恐しい光景より思わず眼をそらせると忽ち、銀子や朱美の叱咤が飛び、吉沢が美津子の顎に手をかけて、ぐいと顔を正面にこじ上げるのだった。

「ああ、嫌、嫌よ」

人の字型に固定された文夫を、桂子が……し始めると、美津子は、狂ったように首を振り、次には肩を揺わけて哀泣するのである。「フッフ、嫉けるのね美津子。そりゃ無理もないわ」

朱美は美津子のベソをかく顔をのぞきこむようにし、面白そうに笑い出す。

文夫の顔に覆いかぶさるようにして口を吸っている桂子は、緊縛されたままの……、しかも、その縄尻は銀子にとられ、まるで猿廻しの猿にされている。

銀子に号令された桂子は、美津子が思わず身震いし、再び、顔をさっとそらせた程の大胆な姿態をとり出したのだ。銀子に縄尻をひかれて、よろよろと立上った桂子は、文夫の首を両肢で跨り、すつくと立ったのである。

あらかじめ、銀子と朱美に、そうした仕草を桂子は強要されていたのだろう。

「ねえ、文夫さん。よく御覧になって。ううん、嫌。眼をそらすなんて失礼よ」

一瞬、文夫は狼狽して、眼を……指ではせたが、朱美がいきなり……指ではじいて、

「あんたに好かれようと思って桂子が一生懸命サービスしてるんじゃないの。大きく眼を

あけて、しっかり見ておやり」

文夫は、もう自棄になったような顔を正面に戻し、気弱に眼を見開いた。

「ねえ、美津子さんくらべて、どっちがおいしそう？ お願ひ、何とかおっしやって」

モジモジ体を揺すって見せた桂子は、そのまま、そっと……かがめていく。

「ねえ、あなた、お願ひ、キッス、なさって——」

それを見て、吉沢は口を開けて笑い、

「あんな風に挑発されりゃ男は完全に参っちまうぜ。なかなか桂子、やるじゃねえか」

と朱美の顔を見、次に、床柱に緊縛されている美津子の、涙に濡れた横顔を楽しそうに見つめるのだった。

もう美津子は、先程見せたような狼狽ぶり示さず、血の出る程、かたく唇を噛みしめて、憤怒の色を沈ませた視線をじっと桂子の行為に注ぎかけている。

銀子は、それに拍車をかけるよう、更に桂子の耳に口を寄せ、何かを命令した。

桂子は、耳たぶまで真っ赤に上気させながら、しかし、その指示には柔順に従って、ぴたりと文夫の顔の上へ……としたのであった。

あまりにも惨鼻なその光景に美津子の顔は青ざめ、ひきつってしまった。

その上、桂子は、そのままの姿態で、ゆるやかに円形を描くよう、……ねり出したのだ。文夫の顔も、それにつれ、ぐるぐると回転し始める。

「ああ、すばらしいわ。何ていったいいかわからないわ、——」

桂子は、もう銀子の命令を待つまでもなく自分の心身を、この異常な世界に完全に没入させてしまったよう、一途な思いになって、全身を躍動させ始めたのだ。眺めている朱美や吉沢や美津子の胸にまで泌み入るような妖しいばかりの一途な涕泣を、その口から発して陰密で惨鼻な……感の中に全身を攪らさせているのである。

「ああ——」

桂子は、急に体を前のめりにさせ、ぴたり正座するように慄える……文夫の両頬を……んだのである。そのまま、石のように深く首を垂れて静止したと見えだが、突然、桂子は絹でも裂くような悲鳴に似た声を上げたと思うと、文……にすりつけるようにして、……へ倒して行ったのである。桂子の背中の中程できびしく縛り合わされている桂

子の両手首までが汗ばみ、断続的に波打っているようだ。

常軌を逸した桂子の今の行為に、美津子はもう声も出なかった。

「男がいいと、やっぱり女もあんな風に夢中になってしまうものなんだな」

吉沢は、ニヤニヤしながら、煙草を口にしてお火をつける。

「一寸、どうしたのよ、桂子」

銀子もクスクス笑いながら、がっくり体を前へくずしてしまった桂子の縄尻を引き、上体を起こさせた。

「ごめんなさい。ゆ、ゆるしてっ」

桂子は、急に激しく泣きじゃくりながら、文夫の胸に顔を押し当て、肩を慄わせるのである。

「自分だけいい子になってちゃ、文夫さんに悪いじゃない。早く、お始めよ」

銀子は朱美の方を見て、ニヤリと舌を出しながら、桂子の縄尻を邪怪にひっぱるのだ。

桂子は、幾度もすすり上げながら首を上げ文夫の……方へ体を移動させた。

そして、しばらく気持を整えるかのよう深く首を垂れていたが、やがて、八の字に割られている……あたりに頬ずりし始め、

「今度はあなたよ。いいわね」

桂子は、再び、銀子達の傀儡となって、わざと甘ったるい声を出しながら、文夫……まで口吻しつつ、

「遠慮なんかすっちゃ嫌よ。あなたがすつきりした……なるまで、桂子、うんとサービスするわ」

そして、桂子は、緊縛された……もどかしげに動かして……ようやく唇を触れさせると、まず、熱い接吻を幾度も浴びせかける事から開始したのである。

その頃には、銀子と朱美は、床柱に緊縛され、世にも哀しげな表情を見せている美津子の両側に立って、美津子の乳頭や臍を指ではじいたりしながら、

「よく見ているのよ美津子。これは桂子の得意中の得意なんだから。井上さんや私達で随分と練習させたのよ」

この世のものではないような異様な愛欲図絵が、美津子の眼前で生々しく展開しているのだ。

美津子は、もう耐え切れなくなったのか、涙でキラキラ光る黒眼の中に悲痛な色をおりまぜて、そんな瞳をゆっくりと閉じ合わせながら、顔を横へねじ曲げるようにするのだっ

た。

「見なきゃ駄目だよ」

朱美が、そっと身をかがめて、いきなり、柔かい織……っばる。はっと眼を開け、再び、悲痛な表情で、眼前のおぞましい愛欲図に視線を送る美津子であった。

桂子は、横の角度から、幾度も幾度も……し、軽く歯型を……りして、文夫を極限状態へ巧みに追いこんでいくのであった。

「ね、あなた。こんなに、こんなに桂子は愛しているのよ」

桂子は、切れ切れに上ずった声で叫びながら、一層、激しく――

うっと押し殺したような声が文夫の口から洩れ、彼の固定された二肢は、ブルブル小刻みに震え出した。

桂子の深く、口……んだ貪るような口

吻。息の根も止まるような激しく……よい痺れに……、全身を攀らせたのだ。

「許して、あなた――」

桂子は、ふと……離して、上体を起こすと、火のような熱い……にのたうって

いる文夫の……がったのだ。

「あっ、嫌っ、嫌よっ」

美津子は、それを眼にした途端、再び、ひ

きつったように緊縛された裸身を激しく揺さぶり次には、狂ったように首を振って、激しい涕泣を始めたが、そこで一………なった文夫と桂子は、そんな美津子の逆上ぶりなどもう耳には入らず、深い海底の海藻が揺れ動き合うように、しっとりと身………かせている。

——それから、一時間ばかりたって——美津子は、吉沢に縄尻を取られ、廊下を歩かされていた。

文夫と桂子とが夫………りを結ぶのを、銀子と朱美の計略で、はっきりと眼前に見せつけられた美津子は、身も心も無残に打ち砕かれ、未だ悪夢の中をさ迷っているような、茫然自失した表情で、吉沢に背を押され、よるけるようにして、冷たい廊下を歩いて行くのだ。

「ここが俺の部屋だ」

吉沢は、一つのドアの前に立つと、ポケットから鍵を出して、鍵穴に差しこむ。

「お前の姉さんとここで何日か暮した事があるんだが、あの気性の強さには随分とてこずったよ」

ドアを開けて、美津子の中へ押しこんだ吉沢は、ドアに内鍵をかけてからさういい、唇を舌でしめした。

美津子は、今まで受けた精神的拷問の疲労が、どっと出て来たのか、その場に腰を落とし、小さく身をかがめたまま冷ややかな横顔を見せている。

吉沢の部屋は余り広くはないが洋風に作られてあり、青い絨氈のしかれた床の上には、ダブルベッド。そして、庭に面している窓の近くには、円柱型の柱が一本立っていて、

「これが調教柱さ。毎日、京子をこれに縛りつけて、見よう見真似で色々珍芸を教えようとしてみたが、京子の奴、とうとう最後まで俺に反撥しやがったよ」

吉沢は、そういつて苦笑し、煙草を口にして火をつける。

合ねむ欲の葉のような柔かい睫毛を悲しげにそよがせて、床の上に立膝して身をかがめ、線の美しい繊細な横顔を見せている美津子を吉沢はほくほくした思いで見つめながら、静かに煙草の煙を吐いていたが、

「俺は、今夜からおめえの調教師だぜ。いいな、甘ったれるんじゃないぞ」

威嚇するような大声を出してから、煙草を灰皿に捨てると、うしろから、美津子の華奢な肩に手をかけて、上へ立上らせる。

「さ、一度、調教柱を背にして立ってみな」

吉沢は、美津子の体を押し立てて調教柱を背にして立たせると、別の麻縄を使って、美津子の体をかちりと立位で柱に固定してしまったのである。

美津子は、ムチムチと引き緊まった太腿をびったりと密着させ、虚無的な冷淡さで、物悲しげな瞳をじっと一点に注いでいる。

麻縄で上下を二巻三巻を緊め上げられている白桃を思わせるふっくらした乳房は、年令相当の稚さを匂わせているが、柔らかく温かそうな全身像は、完全に成熟した女のそれであった。

吉沢は、嘗め廻すように美津子の全身を見つめていたが、

「文夫と桂子のおんな実演を見せつけられてさぞ頭にきたろうが、早速、今夜より調教を始めるぜ。その方がおめえにとっても気がまぎれるってものだ」

そんな事をいつて口元を歪めた吉沢は、ポケットから巻尺を取出し、美津子の前にそつと身を沈ませる。

「まず、ちよつと寸法を、調べさせて頂こうか」

ほんのりと周囲をかげ照らしている未だ幼い、柔………みの間に、それは喰いこむのだった

が、美津子は大して狼狽の素振りは見せず、全くの無抵抗で吉沢の仕事を甘受しているのだ。

「へへへ、さて、何から始めるかな美津子。果物切りか、それとも卵割りか、おめえの好みに合わせてやるぜ」

吉沢は、面白そうに下から美津子を見上げて笑ったが、

「ね、吉沢さん」

美津子は、その美しい容貌に、ふと敵意と反撥を滲ませて、キラキラ光る濡れた黒眼を吉沢に向けたのである。

「美津子は貴方の調教を素直に受けますわ。」

でも、美津子は貴方の女にはならない。これだけは、はっきりお約束して欲しいんです」

「さあ、それはどうかな」

吉沢は、ニヤニヤしながら立上った。

「今日からおめえは、俺の部屋で暮すんだ。」

しかも、布切一枚許されねえ素っ裸のままだぜ。それで夫婦にならねえというのが、おかしいじゃねえか」

「だ、だから私、貴方をお願いしてるんです。約束して下さるなら、美津子、どのような調教でも喜んでお受けしますわ」

美津子の言葉には必死なものが含まれてい

る。吉沢は、鼻をこすって苦笑した。

「あんなにまではっきり見させられても、おめえ、文夫の事が忘れられねえんだな」

吉沢がそういうと、美津子は、ふと、顔を横へ伏せ、悲しげに眼を閉じるのだった。

「色々な芸当を身につけて桂子を打負かし、文夫を自分のところへ連れ戻そうっていう肚なのか」

更に吉沢は、美津子に浴びせたが、美津子は、眉を寄せ、口惜しげに唇を噛みしめながら、はっきりとうなずいて見せたのである。

可憐といおうか狂気とでもいうのか、吉沢

は美津子の一種の異常な執念に舌を巻き、

「成程、俺と関係が出来りゃ、文夫に顔向けが出来ねえってわけか」

吉沢は、声を立てて笑い出した。

「よし、わかった。しかしな。俺は少々意地の悪い性^{たち}なんだ。おめえの方で、どうしても俺を受入れたくなるような調教をするかも知れねえから、自分の意志を強く持つ事だな」

吉沢は、美津子の膝元から立上ると、開き直った口調になる。

「それじゃ、調教を始めようか。調教ってのはな、体だけを矢鱈に鍛えるだけが能じゃねえ。色気たっぷりの女らしい女に仕上げるの

が、調教師の仕事だ。その事はおめえも鬼源に嫌という程、教えこまれた筈だ」

「ハイ」

美津子は、無意志な位の卒直さで頷く。

「いくつだったかな、おめえは」

「十八です」

「そうか。ここにいる女達の中じゃ一番若いってわけだ。女にされたといっても、まだ十八じゃ、むつかしい芸当を覚えるのは無理かも知れねえ。今夜は、筋肉を徹底的に鍛えてやるぜ」

吉沢は、そういつて机の抽出しから、油紙に包んだものを取り出した。

ふと、それに眼を向けた美津子は、さっと白い頬に朱を走らせて狼狽を示し、はっきりと横を向いてしまった。

「ハハハ、少し、おめえにゃ大き過ぎるようだな。だが、こいつは羊の眼玉で作った高級品なんだぜ。しかも、おめえの姉さんが使ったお古だ」

美津子の恐怖に更に一種のショックが加わった。

「やっぱり大き過ぎて、お前の姉さんに、こつを呑みこませるまでに随分とてこずったぜ。だが一旦、こつをおぼえてみりゃ、味の

ほうは天下第一品、実物以上だというからな。あの気性の強い京子が、大声で泣きわめいたもんだ」

吉沢は、魔法瓶の湯を洗面器に注ぎ、水を注ぎ足して微温湯ぬるまゆにすると、それを洗面器に浸し、

「いいか。男心をとろかせるようにうんと色っぽく燃えさかって、こいつを……みこむんだ。おめえの演技が気に入らねえと俺は宝刀を使い出すぜ」

吉沢は、そういつて、更に机の抽出しからブルーのフレーザーリボンを取り出して、美津子のカールされた黒髪にとりつけ、

「可愛いね、全く。いっそ食べてしまいたくなるよ」

そして、美津子の耳たぶ、頸筋、ふっくら

した乳房、縦長の可愛い臍に至るまで香水をすりつけていき、更に身を沈めると、内腿から、……分に至るまで香水をふりかけるのだ。とりわけ、以前見た時よりは一層成熟して来た感のある悩ましい……分には、

心ゆくまで口吻してやるつもりであったからたっぷりとすりこんで、ようやく上体を起こした吉沢は、

「じゃ、始めるが、その前に、——しておかなくていいかい」

と、羞かしげに顔を伏せている美津子の線の美しい鼻先を指でつく。

美津子は、消え入るように首を左右に振った。

「そうかい。じゃ、始めよう」

吉沢は、チリ紙の束を美津子の足元に置く

天星社刊

△限定版グラビア写真集▽

在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

と、腰を据えて、薄い、幼………を触れさせていく。この、周囲をひっそりと………せる程度にしかなくていい薄…………大きな突き破ってあの巨大な責具が攻撃を開始するのかと思うと、美津子の………以前よりは成熟しているとはいえ、ふと稚さを感じさせているだけに吉沢は何か傷々しいいたいた気持ちになるのだった。

「そ、そんなの嫌——」

美津子は急にすねるような声を出して、もどかしげに腰をひねった。

「——いを——ねえ、お願い——」

美津子は、羞恥に火照った顔をのけぞらせるようにして、甘い声を出したのである。

「ハハハ、すまねえ。こっちは気分が高ぶっちゃまって、ガツガツしちゃったんだよ」

吉沢は、体を起し、美津子の背後に廻ると柱ごと美津子を抱えるようにして、柔らかな胸のふくらみの頂点を両………でゆるや………始めた。

「もっと強くしようか」

吉沢は、ふっくらした白い丘を………さすり山頂の赤い蕾を………まみ、同時に美津子の耳たぶや咽喉首に柔らかい口吻をつづけるのだった。

（続く）

女相撲物語

ある夏のできごと



女の斗志

作 及 画

海 野 三 津 男

(1)

敬一が、岩蔭での快い眠りを覚まされたのは、女の争うような声によってであった。それは、つい四カ月余り以前の、夏の陽差しのもたらした出来事のように、敬一には思えるのである。

○

喧嘩ではなかった。
ビキニ姿の女が二人、砂浜に円を画いて、

相撲を取っていたのである。

敬一は、息を飲んだ。

そのあたりでは、女のビキニ姿も滅多に見られなかった。それがしかも、相撲を取っているのだから彼が驚くのも無理はなかった。そして二人はどちらもグラマーであった。

「エイ！」

と叫んだのは、髪をショートカットにした方であった。

抱え込まれた腕を大きく振られて、ドシン

と尻餅をついた方は、髪を後ろに無難作に束ねていた。

倒された女は、「チクショウ！」と叫ぶと直ぐに起き上り、「今度こそ、やっつけてやるぞ！」と、組みついていった。

しかし、言葉の激しさの割に、女達の表情は柔かく、ショートカットの方は、白い歯を見せてさえいた。

○

だが、例えそれが戯れであっても、敬一に

とっては、まさにシヨッキングな情景であつたといえた。

彼は、見世物も含めて女相撲がこの世にあるということを全く知らなかった。

女相撲どころか、東九州の片田舎に生れ育ち、真面目一方で育った敬一は、女が格闘する場面のある映画ひとつ見たことがなかったのである。

映画の、そうした場面を載せた雑誌や、女プロレスの写真の載った雑誌などにもお目にかかったことがなかった。と言うより、そうしたものには目もくれなかったのである。

そしてまた、その町の娘達に、ビキニ姿になれる者はまだ居なかった。

○

敬一は、見てはならぬものを見てしまった時のように、岩蔭に身を沈めていた。

しかし、それを見ないでいることは到底でしなかつた。

今度も、髪の毛の短い方が、束ねた方を押し出しに負かしていた。

「二対ゼロ！ やっぱりあたしの方が強いんだね。体重の差だな」

短い方は確かに肉付きが良かった。

肥満型とまではいかなかったが、腕も腿も

太く、大きな臀がビキニからはみ出さんばかりであつた。

だがもう一方も、なかなかいい体をしていて。細面の割に肉付きは良く、そして引き締まっていた。

「まだわかるもんか！ 今度は絶対勝ってみせるから！」

束ねた方はそう言うと、サア来イとばかり手をひろげていた。

三回目は、言葉どおり、相手の首に巻きつけた腕でひねり倒すようにして、束ねた方が勝っていた。

倒された方の、大きく跳ね上ったのびやかな足を目にした時、敬一は体の奥底から熱いものが衝き上げてくるように感じた。

しかし、その昂奮は、まだまだ序の口であつた。

「あと二回よ。それで勝負をつけようよ」束ねた方が言った。

「よし！ いいわよ。ただし、あと一回で勝負をつけてみせるから、見てなさい」

「何言ってるのよ、負けてくやしがつてもおそいわよ」

二人の相撲は、相かわらず言葉の割には激しくはなかった。

四つに組んで相手の肩に乗せた顔には、依然として戯れの表情があつた。

しかし、敬一にとって、アツと言う間に勝負の決まったそれまでの相撲とは違って、ガップリ組んでのそれは、ずっと刺激的なものになっていた。

何故なら、揉み合う女体をじっと眺める結果になったからであつた。

動く度にブルンブルンとふるえる臀や太腿が。力を入れるごとに見えかくれする肩や腕の筋肉が。流れる汗が。砂まみれの肌が。揉み合う女体の全てが、彼の昂奮を否定なしに昂めるに十分な力があつた。

髪を束ねた方が、相手を引き付け、足を掛けて倒した時、敬一は思わず溜息をついていた。肌には、汗がじっとりとにじみ出しているのが感じられた。

だが、その昂奮はまだ最後の取組みの時のそれには及ばなかつた。

いよいよ最後の一番となった時、女達からは戯れの表情はさすがに消えていた。

二人の女は、無言で睨み合い、同時にぶつかっていた。

今度も四つ相撲であつた。

はじめに相手のビキニをマワシのようにつ

かんだのは、束ねた方であった。

短い方は、慌てて自分もつかもうと、手を伸ばしたが腰を引かれて、どうしてもそれを取ることができなかった。

短い方は、

「ずるいじゃないか」

とか言って抗議したが、束ねた方は答えるかわりにビキニをつかんだ両手をぐいと引いていた。

短い方のムッチリした臀の、陽に灼けていない部分の白い肌が、半ばムキ出しになっていた。

敬一は、思わず手を握り締め、身を乗り出していた。

短い方は、けんめいに束ねた方を投げようと、相手を右に左に振ったが、その度に敬一の方へ向けていた半ばムキ出しの臀がふるえるのだった。

次の瞬間、短い方に外されたのか、それとも自然に外れたのかは、分らなかった。ともあれ、束ねた方の胸当がパリと砂の上に落ち、その胸が露わになっていたのである。

そこだけクッキリと白い乳房を目にした瞬間、敬一は自分自身をすら、忘れていた。

「やったわね！」

と叫ぶと、今度は束ねた方が短い方のそれを外してしまったのである。

敬一は、半ば我を失っていた。

女達は、露わになった胸にも構わず揉み合い、離しては投げを打ち合っていたようであった。

気付くと、短い方が束ねた方の下になって倒れていた。



束ねた方の足が外から搦まっていたから、恐らく外掛けか何かであったろう。

敬一は、放心したように、岩蔭にうずくまった。

(2)

女達は、自分らのやったことを男に見られていたとは露知らず、

「ワァー、オッパイまで砂だらけになっちゃった」

「あんたが、外しちゃうからよ」

「あたし、絶対外さなかったからね」

「まあいいや、お相撲だもん仕方ないさ」

「そうだな。海の中で洗っちゃおうよ」

と、明けっぴろげな大声で話すと、ジャブンと海へ飛びこんでいた。

しかし、敬一にとっては、オッパイとか、

「外した」とか「外さない」とかいう言葉のひとつひとつが、強い刺戟以外の何ものでもなかった。

その場を逃げ出したいような気持と、若しかしてもう一度それを見ることができるのではないかという気持が、敬一の心の中で争っていた。

しかし、彼はじっと動かなかった。

また、逃げ出そうにも、その岩蔭からの出口は女の居る方にしかなかった。

○

敬一は、それまで女達は何者で、どこから何のためにやって来たのか、どうして相撲など取ったのかなど考える余裕も無かったことに気付いていた。

言葉と、巾の狭いビキニ姿からして東京あたりの女であることに間違いはなかった。

だが、学生なのかBGなのか、何のためにそんな所までやって来たのかは見当がつかなかった。

想像できるのは、ヒッチ・ハイクのような方法でフラッとやって来たのだろうということとだけであった。

彼の住む半島の突端のそのあたりは交通も不便で、観光地としては全く知られていなかったし、研究に値する遺跡も無かったから、滅多に旅行者を見かけることがなかった。

特にその浜は、町から幾つかの岬を廻らねば来られない、極く稀にしか人の来ない浜であった。彼自身、三年ぶりで泳ぎに来てみた位だったのである。

彼はまた、どうして彼女らが女だてらに相撲など取ったのか考えてみようとしたが、ど

うしても分らなかった。

○

やがて敬一は、『そんなことはどうでもいい』と思い始めた。

そして、女達がもう一度組み合ってくれることを願った。

考えることが余り得意でないためもあったが、何より彼の、精神より肉体がそれを求めていたのである。

だが女達はまだ海に浸っていた。

フト、砂浜に残された土俵のあとと、その中に乱れる二人の足あとに目をやった。

目をつむると、四つに組んだ女の姿が臉にありありと浮かんできた。

たまらない気持、と表現するほかはなかった。彼は、無意識に『早く、もう一度やってくれ!』と心の中で叫んでいた。

○

女達は、ようやく海から上って来た。

だが、女達は取組まなかった。

しかし敬一は、それ以上のものを得たのである。

(3)

ぐ反対側に寝ころんで話を始めた。

声の低い方が髪の短い方だということは、

先刻の相撲の時から分っていたが、その名をみよ子と言ひ、もう一方は和子であるということが、話を聞いているうちに分った。

二人は、『九州の空や海って、何てきれいなんだろう』というような話をしていたが、敬一は、声の低い方も高い方も、どちらもそれが甘くソフトであることに気付いて、戸迷いを感じていた。

どう考えてもそれは女の声であり、つい今しがた相撲など取って暴れていた者のイメージとは合わないからであった。

しかし二人が、

「男みたいに取っ組み合って斗うって、気持がいいね」

「だって同じ人間だもの、正しい意味での斗争本能が女にもある筈だわ」

と話し合った時、敬一の中で、その声の甘さと、それとは全く逆に見えた行動との間の距離が縮まっていた。

そして二人がその先を話し合った時、敬一は、『なるほど』と頷いていた。

○

和子と呼ぶ方が言った。

「だって私ね、高校時代にバスケット部に居た頃、それ、随分経験したのよ」

「それって、斗争本能のこと？」

「うん。相手のチームにずるいことする人がいた時なんかサ、猛烈に腹が立って、とびかかっていきたくなったことが何度かあったのよ」

「そうね。しゃくにさわった時なんか、ブン撲りたくなったり組み伏せたくなったりすること、私も何度かあったわ。そう言えば、そうそう、小学校何年の頃だったかなあ、四年生だったかしら。私、同級の民子っていうのと組み合ったことあるわ。とうとう組み伏せちゃったけど」

「へえ。私はせいぜい追っかけて行って背中を打つ位しかやってないな。でも、やっぱり小学校の時だったけど、男の子と組み合いの喧嘩をして、先生に怒られたのが居たわ、そう言えば」

「でしよう。あるのよ、私たち女にも、男と同じ本能が」

「なのよね。だのにサ、いつの間にか女と男は、区別されちゃうのよね。男と女の違っていて、子供を産むかどうかだけだって、私思ふな。優しさなんて自然に出てくるもんなんだ

な。それを優しさを必要以上に押しつけるのよね」

「それより、体と精神をもっともっと強くすることが大事だって、あんたいつかも言ってたわね」

「女は強くなったなんて言うけど、私、まだまだ弱いと思うんだ」

「だから、大学一年の夏休みをヒッチ・ハイクで行ける所まで行ってみようって二人は約束した」

「もう三週間になるわね、東京を出てから。海岸ばかり伝わって来た。こんなことする連中はかに居ないだろうな」

「随分、いろんな海岸があったけど、ダメね本州の方は。埋め立て地に工場ばかり建つてて」

「紀伊半島ぐらいだったわね、良かったの」

○

『なるほど』、敬一には女達の旅行の目的も初めて分ったのだった。

だが、全く知らなかった女の一面を知って彼は考えさせられていた。

環境が古かったためか、そして女の子の喧嘩もせいぜい口喧嘩ぐらいしか見たことがなかったこともあってか、それまでの敬一の女

性観は、『女は優しく、ただ夫のために……』と言う、それだけのものではあった。

○

彼はフト、波江のことを思い出していた。

高校を卒えた彼は、父親がなかったので大学をあきらめて今も勤める町の缶詰工場に入ったのだったが、その事務員をしていたのが波江であった。

彼は初めての強く深い恋心を波江に抱いたが、遂に彼は自分の心を打ち明けることができなかった。

波江が、自分より五つも年上であったことが、そして年上の女との結婚を到底許さないだろうその地方の環境が、彼をためらわせたのである。

彼は十九才で、波江は二十四才であった。それから二年。昨年の春、波江は東京に嫁いで行った。

その心の傷あとは敬一の中から殆んど消えようとしていたが、今、考えてみると、波江の美しさは、か弱い美しさであったのかも知れなかった。

なるほど彼女は、体は弱くなかった。グラマーと言えは言える体格でさえあった。しかし、何かと言えはすぐ涙ぐむあたり、

人間は弱かったようであった。

だが、敬一はそうした弱さを女に求めているのではなかったかと、今思うのだった。

○

先刻の昂奮は、すっかり冷めていた。

彼はいつになく、考えさせられていた。

彼は、良く相撲も取り、喧嘩もした。

それは、それに勝った時の快さから求めて行なったと言えたが、「男は男らしく」と、必要以上に言われ、そしてそうなるうと努めて行なった面がないとは言えなかった。

今でも泳ぐ時、六尺褌を締めるのは、漁村の多いその地方の習慣もあったが、「男らしく」と考えるせいもあるかも知れなかった。

妹の加代は、母に良く叱られた。お転婆娘は貰い手がないと言われるのである。

彼も加代に、もっと女らしくあれと説教した。加代はせいだい木登りをする位のお転婆であったのである。

敬一はまた、今年の春、大阪の姉から寮母の職が見つかったから、と、妹といっしょに大阪へ出た母のことを思い出していた。

先祖代々の家を手放したくないと言う母の気持ちを汲んで、彼はただ一人残ったのであった。

今では波江のことよりも、母や姉妹がなつかしく思われる敬一だった。

今日、そこに一人泳ぎにやって来たのも、そのなつかしさ、寂しさのためであった。

○

しかし、二人の話が更に先へ進んだ時、敬一の物思う心はどこかへ、けし飛んでいた。

「誰か、こう、逞ましい男性にサ。そうだなあ、バレーの大松監督みたいな、チームを強くするんだって言う一念だけで、ビシビシ鍛えるような男性にサ、徹底的に鍛えてもらえればって思うなあ」

「そうねえ。もしもそんな人にお相撲を鍛えられるんだったら、私、腰が立たなくなるまでやれるわ」

敬一が物を思っている間に、二人の話は、そこまで来ていたのだった。

彼は、反射的に立ち上っていた。

しかし、彼には自信が無かった。

それに、二人が本気で言っているとは思えなかったからであった。

あとで二人から聞いたことだったが、確かにそれは本気ではなかった。

但し、二人が相撲の味が忘れられず、ヒッチ・ハイクなんかしているよりもそれをずっ

とやりたいと思ったこと。そして、どこかそれができる所はないかと話し合った所までは本当だったのである。

○

「じゃあやっぱり、二人でやるか。どこかダレーも居ない所探してサ。案外と山ん中の方がいいかも知れないわよ。海だと、気持はいけど、さっきみたいに沖に船が通ったりするから」

「そうね、やると決めたからにはやりたいわね。夏休みもまだひと月はあるし。でも山ん中にもあるかしらね、そんなところ」

「俺ん所が良か、一番良か？」

フト、そんな言葉が口から出かったが、敬一は、やっと押えていた。

○

どうにも抑え切れなくなって敬一が飛び出したのは、みよ子が、

「どうせやるなら、やっぱり土俵が欲しいわね。まーるく画いたってどこが境か分ないし、土俵際でがんばるなんてことができないしね。私、あの土俵際の攻防が好きなんだなあ、テレビなんか見ててもサ」

と言い、和子が、

「それに、どうせって言うなら、褌かマワシ

つけてもいいな。だって、ビキニじゃつかんでも力がいらないもん」

と言った時であった。

土俵と輝と、そのふたつの言葉が決定的なものになったのであった。

もちろん、女達がただその言葉を口にしただけでは、彼は決定的な行動には出なかったろう。

そこまでに至るのには、それなりの過程があった。

しかし、それがなかったにしろ、男にとって女自身からそうした言葉を聞くことは、非常な刺激であることには間違いなかった。

○

にわかに現われた男と、半ば身を起こしかけた二人の女との間に暫らくの間、沈黙が続いた。

敬一は、何を言ったか良く覚えていなかった。

女達も、自分らが何をしゃべったか良く覚えていないと、あとで言った。

敬一が覚えていたのは、自分が、「急に現れてすまん、何もかも見て、聞いてしもうたんじゃない」と言ったこと。そして、「ともかく俺ん所へ来い。やりたいようにさせてやる」

と言ったことと、女達が、何もかも知られてしまったのでは仕方がないと言ったことだけであった。

二人はあとで、敬一が、「若し俺の前でいやならば、俺が勤めている間に自分らだけでやれ」と言ったと言ひ、「それなら」と思っただけからついて来たんだと言ったが、彼自身は良く覚えなかった。

また、「あなた自己紹介までしたわよ」と言われても信じられなかった。

○

三つほど岬を廻って、漁港が遙か南に見える丘の上の家に戻った時、敬一の足はまだ宙に浮いていた。

女達も、黙ったまま立っていた。

敬一は、夢ではないかと思った。

しかし女達は確かにそこに居た。そして、

彼女達が炊事もしてくれだし、夕飯もいっしょに食べた。

だが三人は、必要なこと以外、口を開かなかった。

寝る前、彼は、ほんとうに俺について来て良かったのか、と二人に聞いた。

みよ子が、「良かったかどうか、まだ分らないわよ」と言った。

和子は、黙っていた。

○

その夜敬一は、マワシを締めた女がしがみつき、足を搦ませてくる夢を見た。

その女は、不思議と波江であった。

(4)

二人の女と一人の男との、世にも稀な生活が始まっていた。

二人は最初、彼の居ない昼の間、それを行なった。

浜での、「大松監督のような男に鍛えられたい」という話は、ついはずみで出てしまった言葉だと二人は言った。

敬一は、当然のことだと思った。

敬一と二人との対話は、最初のうち不自然で硬かった。

敬一は、それも当然だと思っていた。

彼は、努めて平静を装った。

そして、黙々と二人のための土俵を裏庭に作ってやった。三日目の夜であった。

俵は土蔵から見つけ、何度も浜から砂を運んだ。二人も、黙ってそれを手伝った。

敬一は、土俵ができた時、ひとこと、「相撲を本当にやりたいのなら押し合いだけを先



M.U

言い出すことを強く願った。二人が、美しいと思えば思うほど、敬一は焦った。

○
二人を、美しい女だと思ったのは、一夜明けてからであった。

「ず徹底してやれ」と言った。
二人は、黙って頷いていた。

○
二日経ち、三日過ぎると、彼は家に帰って二人と顔を合わせている間は、平静さを自然に保てるようになっていた。

二人の方もそのようであった。
冗談も飛び出すようになった。彼は、慣れを感じていた。

だが、昼勤めている間、そして夜一人で床に入っている時、彼は二人の取組み姿を想うと、どうにもならなくなるのであった。
彼は、二人との間が一日も一刻も早く自然になり、できれば二人の側から、その指導を

ような気がした。一夜明けるまで、敬一は女達の顔を見ていて見ていなかったのである。

飛び抜けて美しいと言うのではなかったが二人は、波江を除くそのあたりの女よりも美しかった。少くとも彼にはそう思えた。
そしてそれは、波江とは全く違った美しさであった。

みよ子は、体つきに似て顔もふっくらとしていた。笑った時、その右頬に笑くぼが見えた。和子の方は、細面で引き締まった顔をしていて、眉が濃く、沖縄の女を思わせる顔立ちであった。

どちらの肌も、三週間の海岸伝いのヒッチハイクで、よく灼けていたが、もともとは、

みよ子の方が色白なのであろうか赤く灼けていた。和子は、まるで漁師の娘のようにこんがり、と、気持の良い灼け方であった。背は、都会の女らしく、和子のそれが一六三、四センチ、みよ子も一六〇センチ近かった。敬一は、自分の身長が一六七センチしかないことを思い出していた。それでも田舎では高い方であった。

○
どちらの胸も高く盛り上って見えたが、肉付きとは逆に、和子の方が豊かに感じる。

波江との違いは、ひとことと言えばその健康美にあった。

○
その二人が押し合い揉み合う姿を想うと、敬一の胸は高鳴り、昼間は、仕事を手につかず、夜はビッシヨリ汗をかくのだった。
夢に出てくるマワシの女も、いつか波江ではなくなっていた。

二人の、敬一に対する態度が急に変わったのは六日目の夜であった。

お互いの会話は、慣れるに従って随分と自然なものになっては来ていたが、まだまだどこちなかった。ところが、その日の夕食の時から、二人の話しぶりはまるで妹が兄貴に対する時のように変わったのである。そして二人

は、自分達の相撲ぶりを報告した。

「私達、大相撲にあやかっ、毎日十五回ずつ星を争ってるんだ」

「あれ、三日目からだったね、みよ子」

「うん。三日間の成績はね、一日目が九勝六敗、二日目七勝八敗、三日目の今日は九勝六敗って訳でサ。私の方が、だんぜん強いんだな」

「何言ってるのよ、今日なんて稽古の時は負けてたくせに。敬一さん、ずるいのよ、みよ子ったら。稽古の時には力出さずに居るんだから」

というような調子であった。

敬一は、急に変わった二人の態度に初めのうちは途惑っていたが、いつの間にかその雰囲気引きずり込まれて、

「どうやら、みよ子の方が押しでは強いらしいな。やっぱり体重のせいかな？ 君はどっちかと言うとアノコ型だからな」

という冗談も飛び出していた。

みよ子は口をとがらせた。

「まあ失礼ね！ 私ちっとも肥満なんかしてないわよ。体重だって和子と変ないのよ、たった二キロしか。力よ、力の差よ」

「あら、二キロ五百違うじゃない。私が一六

四の五七、みよ子は一六〇の五九・五キロじゃない」

「また嘘を言う、五九キロちょうどよ、私」

敬一は、二人のやりとりを聞いて声を立てて笑った。二人もつられて笑っていた。

○

だが、二人が「明日の日曜日、私達の相撲みてよ」と言った時、敬一の表情は一瞬こわばっていた。

それを見ることを強く望んでいたくせに、そして、それを二人の側から言い出すのを今日か明日かと待っていたくせに、いざとなると逆の気持ちが働く自分を、敬一は齒がゆく思った。

それにしても、何故二人の態度が急に変わったのか、自分から言い出したのか、彼には分らなかった。しかし、そこでためらって、またとない機会を逃してはならなかった。

敬一は、上^{うわ}ずりそうになる声をやっとなげ、

「よし、見よう」と言った。

「さあ、いよいよ押し合い相撲決定戦ね」

「私、負けないうわよ、あんたなんか」

二人は、くったくもなく笑い合っていた。敬一は、全身を硬ばらせた自分が少し恥ず

かしくなった。

○

態度が何故変わったかは二人の口から聞くことができた。

それは簡単に言えば、彼と六日間いっしょに居て、彼を兄貴のように接して良い人間だと思ふようになったということであった。彼に純朴さを感じると言った。

「失礼な言い方かも知れないけど、東京の男には敬一さんのように純朴な感じの人居ないわ。ね、和子」

「そうよ。大体、東京の男っていやらしいのが多いわよね」

「敬一さん。馬鹿にしたと思わないでね、純朴だなんて、言い方したけど、何て言うのかな、私達の妙な願いも素直に受け取ってくれてサ、全然いやらしい顔しないでしょ……私、どう言っているのか分ないけど……」

「そうね、つまり兄貴みたいに思えるんだなとにかく。私達、敬一さんのような人初めてだって話し合ったのよ。何でも打ち明けて、何でも頼んじゃおうって。ね、みよ子」

「うん。何もかも知られてしまってるっていうこともあるけど、知られてなくても私達の方から話しちゃってたかも知れない。敬一さ

んでそんな人だって、話したのよ」

彼は、恥ずかしさの上に面映ゆさも感じていた。『純朴』と言う言葉を聞いた時には、瞬間気に障ったが、みよ子が断わるまでもなく、彼に『いやらしさを感じない』という和子の言葉を聞いて、逆に、恥ずかしさを感じるのであった。

だが、一面では寂しくもあった。『兄貴のような感じしか持たない』と言うことは、自分に『男を感じていない』と言うことではないかと思うからであった。

敬一の心中は複雑に変転した。しかし、二人の側が彼を兄貴のように感じそれを見てくれとさえ言っていることが、彼にとっては最も大切なことである筈だった。

思えば、そんなことは他の男に全く経験できない筈のことであった。

敬一は、もう一度最初の日のように、それを『夢ではないか』と疑ってみた。

だがそれは、間違いのない現実であった。

○

敬一は、その後二度とためらわなかった。彼は、それを想って日夜穏やかならぬ状態を来たしていることには全く気付かず、自分をいやらしくない頼りになる『兄貴』として

感じている二人に感謝しつつ、与えられたこの上もない条件を最大限に生かすことだけを考えたのである。

(5)

二人の言う、『押し相撲決定戦』は、日曜日の、陽もまだ高い午後四時に始まった。

二人はビキニ姿で土俵に上った。敬一は、一週間前の浜での光景を思い出していた。そのことはすなわち、その時の昂奮をも思い出すということであった。

彼は思わず拳を握りしめていた。

しかしその昂奮は、一週間前とは違って二人の相撲が進むにつれて逆に下降していた。

それは、二人が、正に真剣であったからであった。二人は敬一に、女を感じさせる余裕を殆んど与えなかった。

そして、もうひとつ。

真剣であったが故の、けんめいに相手に勝とうとする結果、思わず飛び出した滑稽な技が彼をして昂奮から救ったのであった。

二人は、実に真剣に、そしてきびきびと斗った。そんなきびしい表情を、敬一はかつて女に見たことはなかった。

いったん熱っぽくなった体も、冷水を浴び

た時のように引き締まっていた。自分でも不思議であった。

砂にちよっと手を下して、二人ははげしくぶつかった。そして、両手を相手の肩や腋の下に当て、或いは相手の腕をぐいと掴んで、全身をふるわせて押し合った。「エイッ!」「ソレッ!」と言うような気合が、どちらからともなく、ほとばしり出ていた。

滑稽な技に思わず吹き出してしまったのは四回目であった。

和子は、それまで三回のうち二回まで、みよ子に負けて必死であった。だがみよ子は、ジリジリと和子を押し返していた。

土俵に片足が着いてしまった時、和子はいきなり、みよ子から手を離しクルッと横に回った。何とかして勝とうという気持が働いたのであろう。みよ子は、「アッ」と言って上体を泳がせた。その瞬間、和子が横から両手で思いきりその臀を叩いたからたまらない。みよ子は勢い余って土俵から飛び出し、両手をついてしまっていた。

真剣であった結果であるだけに、そのおかしさは増した。

送り出しというのはあるが、「叩き出し」などというのは聞いたこともなかった。

バチッと臀を叩かれて四つん這いになったみよ子の恰好に、敬一は思わず吹き出してしまった。

○

そのお蔭で彼は、最後の勝負までは平静で居ることができた。時折、腰を落とせとか、足を踏んばれとか言う注意さえ与える余裕も生れていた。

だが、八回までに五対三で負けていた和子が、夢中になってみよ子のビキニをマワシのように纏んで、ぐいぐいと引いた時、平静さがフキ飛んだ。

みよ子の白い臀が、最初の浜での再現のように、ムキ出しになった。みよ子も和子のそれを引いた。

二つの女体は激しく揉み合った。

女体が折重なって倒れた時、敬一は大きく溜息をついていた。

○

彼は、その後も同じ反応を繰り返した。

真剣な表情と、キビキビした動きを目にした時、彼の心は引き締まり体は平静を保つのであったが、二人が或る姿勢と状態を示した時、彼は平静さを保つことができなかった。

慣れるに従って、そうした回数は減ってい

ったが、逆にその反応の強さは増していくのであった。

しかし、二人には彼のそうした体の奥底の激しい反応を知る術はなかった。

二人は逆に、その時の敬一の、『大声を立てて笑ったり、注意を与えたりするスカッとした態度』を見て、一層敬一を信頼したのであった。

二人はその夜の夕食の時、それを言い、マワシを締めての本格的な相撲を、しかも、見ていて指導してくれと申し出ていた。

二人の口からマワシという言葉が出た時、敬一の肉体は一瞬うずいたが、二度とためらわぬことを心に決めていた彼は、そして、二人の信頼が一層増していることを知った彼は自分でも不思議な位、平静な態度を保つことができた。

敬一はフト『俺のことを純朴だと言うが、二人こそ底抜けに純真じゃないか。それこそ東京には今どきこんな女は居ないだろう』と思った。そして、『それにしても、一体この女達はどういう女なのだろう。相撲を、しかもマワシを締めて取ろうという。この二人だけが特別な女なのか？ それとも世の中の女の心の中には、皆この二人と同じようなこと

を考える要素があるのか？』とあらためて考えていた。

だが二人の表情にも態度にも、特別な女を感じるものは何も無かった。

話していることは特別のことであったが、その表情や態度は全く普通の女であった。

それは、浜でその声から感じたソフトな、女らしい女でさえあった。

二人は、夏休みの残りまで残り三週間しかないのだから、これから本格的にやってみよう。自分達だけではうまくいかないから、ぜひ見ていて、教えてくれと言った。二人はまた、マワシの生地と色まで決めていた。

(6)

マワシの生地は、敬一が次の日の勤め帰りに隣町から買い入れて来た。

二人の希望は、紺のデニムであった。隣の町までわざわざ行ったのは、二人が居ることを誰にも気付かれぬためであった。

彼は、かねての買物にも随分気を使っていた。食料品なども、二、三軒に分けて買い入れていた。そうしておけば、丘の上にポツンと離れている『一人暮らし』の彼の家に誰かがやってくる気遣いは殆んど無かった。

丘の上の家への小道を登り乍ら、敬一は、女の体に締め込まれるであろう生地を、思わず握りしめていた。何とも表現できない不可思議な、しかも熱っぽい気持であった。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

○適當な長さを決めるためには、それを締め込んでみるはかなかった。締め方を教える時も敬一は、体にはできるだけ触れないよう

一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お申込み願います。継続のお申込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

にしようと思い、二人に自分達でそれを扱わせ、傍で締め方を教えた。

だが、口ではなかなかうまくは教えられなかった。最初、みよ子が締め始めていたが、手伝っていた和子がたまらず、「敬一さん、やってみてよ」と言った。

さすがに二人とも素裸にはなり切れず、上にシャツを、下にはパンティをつけていた。

しかし、敬一にとっては例え間接的にであれ女の肌に触れるということは初めての事であった。彼は、またためらった。

だが敬一は、立ち上っていた。

そして、心身の動揺を押しかくすように、「ここで、こうするんだ」、「いいか、締め上げるぞ、痛いなんて言うなよ」などと声をあげまして、わざと手荒くした。

「この辺を切ったらよか」

二人分に、少し余るだろう長いままの生地を一人に締めるのは大変であった。三ツ目に結び終ると敬一はそう言った。和子がそこを缺で切った。簡単な仕立てであった。

みよ子は、はりきって四股を踏んだ。

「さあ、これでお相撲さんとおんなじだ」

「何だ、自分ばかり」

と和子が口をとがらせた。まるで子供のよ

うであった。敬一は、三たび二人の雰囲気を引きずられていた。

「よし、それなら、和子の番だ。向うを向いて、その端を胸に当てて……いやもう少し高くだ。……そう」

などと言いつつ、彼は、和子にそれを締め込んでいった。

二人はそのまま、裏庭へ飛び出して、敬一の降りてくるのを待ちかねるように喜々として、堂々と四股などを踏んでいた。

自分を何とも思わずにそうしている二人に敬一は一種の安らぎを覚えた。

そして、四股の踏み方から教えていった。

○

初日は、そうして何ごともなく過ぎた。

二日目の夜も何ごともなくあった。

二人が、太腿をブルンブルンとふるわせて四股を踏んでも、彼に教えられるままに四つに組んで上手や下手投げを試み、大きく足を開いて仰向けに倒れても、ハツとする程度でどうということはない。

しかし、それは、二人の彼に対する態度からだけではなく、その真剣さと、そして何より、シャツとパンティをつけていたというところからであったことを、四日目の夜、彼は思

い知らされた。

その夜二人は、敬一から大急ぎで習った突きと寄り、そして投げ技の幾つかを実際に星を争うことでさらえてみたいと言った。

彼は、まだ早いと思ったが、残る日数も考えて同意し、一回取組む度に、拙い所を彼が指摘することになった。

はじめのうちは冷静に二人の相撲を見つめて批評することができた。場合によっては、もう一度その所を再現させて注意もした。

だが、七回目、その冷静さは最初の浜でのそれ以上の昂奮に圧倒されてしまった。

押し以外の技が加わってくるに従って、和子の星はふえていた。敏捷さのためであろうと思われた。

六回目まで二勝しか上げていなかったみよ子は、完全にエキサイトしていた。六回目の取組の彼女の拙い技を指摘している時、敬一はそれに気付いた。みよ子は、彼の言っていることなどまるで上の空で、和子の方ばかり睨んでいたのである。

立上るなり、みよ子は和子のシャツの胸の所をわしづかみにしていた。まるで、柔道か喧嘩で、相手の襟をつかんだ時のようであった。そして、絞り上げるようにして押した。

敬一は、「そんな手はないぞ」と言おうと

したが、まあ、やらせておけと思い、黙っていた。二人の相撲は、女だと思えば相当激しいものであったが、男のそれに比べればまだまだであった。特に斗志がまだ足りないと思っていた所だったので、二人がエキサイトすることをむしろ望んでもいたのだった。

シャツをつかんだまま押しまくる、みよ子に和子も昂奮したようであった。

ビリッと、シャツの破れる音がした。

今度は激しい突っ張り合いになった。

十分に稽古の出来ていない突っ張り合いである。突き出された手が相手のどこに当るかわらなかった。パチッと言う音がして和子の掌がみよ子の頬に当たった。

「やったわねっ！」

みよ子は再び和子に武者振りついていた。

二人はそのまま激しく揉み合い、声を発して争った。シャツはみる間に破れ、どちらの胸も露わになって、そこだけが白い乳房が揺れていた。

みよ子が遂に和子を吊り出した時、彼は思わず大きく息をしていた。ランニングの胸の所を汗の玉が流れた。



ガラガラとあのやかましいシャッターを降ろす音が聞こえたかと思うと、もう彼女が履物をぬいで上って来た。

店先に立って、お客に愛想を振りまいている時のにこやかな表情は今はなく、何か思いつめたような、然しいきいきとした表情で鏡の前に坐った彼女の横顔を見て、私の胸もはずんで来る。

「もうお店はおしまいにしたわ。シャワーをお使いになったら」

と彼女は私の方をふり向く。

私は汗ばんだ体にサッと湯を浴びてさっば

ミ・フィクション

或る女

大久保

新

りした気分になった。汗のない肌には微風もこころよい。

ザーッと一しきり水音が聞こえていたのが止んだ。どうやら彼女もシャワーが済んだらしい。私は立ち上って用意して来たビニール管を握って浴室に這入った。

「あら、まだ駄目よ」

と振り向く彼女を背後から抱きしめて私はささやく。

「外側ばかりじゃなく中もきれいにしてあげよう」

「いやーっ。こんな所で——」

しきりにもがく彼女をおさえ、前で両手首を縛り合わせる。縛られた手首を見下して、

「あらーっ。用意の良いこと」

「うん。シャワーから上る時にちゃんと紐をここに隠して置いたんだよ」

と私はあごで壁の吊り鏡を示した。

タイルの上に、仰向けに横になった彼女の足首を縛るのももどかしげに、私はその縄の余りを首にかけて引きしぼる。

「サア、もっと脚を上げて」

「いやー、こんな恰好」

私は、恥かしそうにしきりに腰を動かして

いるえび責めの彼女を見下しながら手にしたビニール管を水道の蛇口につなぐ。このビニール管は太いので、更に一まわり小さいビニール管を継いで、はずれないように布切れで継目をぐるぐる巻く。

「何をするの？」

いつもと違った私の動作に、いぶかっている彼女に言っている。

「一寸変わったことさ」

石鹼泡を十分にぬりつけたビニール管の先端は斜めに切つてあるが、それでもなかなか思うようにゆかない。しきりに「痛い痛い」を連発する彼女をなだめながらの準備は、楽しいながらも一苦労だ。

「さあ、始めるよーっ」

そつと水道の蛇口をひねる。「グルグル」と言う音は、ビニール管の中の空気が水に押し流される音らしい。蛇口を更にひねる。

「あーっ。いや。よして」

彼女は叫ぶ。えび縛りの、豊かな体がくねる。

十秒余りぐらいのごく短い時間だけれど、彼女の腹部はさつきより大分膨らんだような気がする。

「あーっ」

彼女のうめき声がかすかに聞こえる。私は蛇口をひねって水を止める。

「ひどいわ。あーっ」

言葉の割には彼女は怒ってもいなければ、困ってもない様子である。むしろ目を閉じてこの遊びを堪能している様でさえある。

「起こして」

私は急いで足首の縄を解いてやる。

「ひどい人ね。手の方も解いてー」

「そうは行かないよ。全部出してしまったら解いてやる」

「じゃトイレに行かせて」

「いや。ここでいい」

私は彼女の肩を押さえて動けないようにする。水だけだから、何だか苦しうだが、さしたる切迫感はないような様子である。

私は落ちていたロープを取り上げてウエストを二巻きして締め、背後から両腿に分けて廻し、ぐーっと引きしぼった。前から見ると丁度三角形に縄が走ってその三角形の中で白い腹部が大きくせり出している。

じっと、私のするままになっていた彼女もその内にやっと、限界を覚え始めたらしい。

「ねーっ、オトイレに」

私はそんな言葉に耳をかさず、背後から彼女を押さえつけて動かさない。

その内に彼女の方で堪え切れなくなってきたらしい。悶えが激しさを増す。

「さあ」

私は背後から抱え上げた、親が赤ん坊にさせるが如く。……大きな児は重い。

縄を解かれた途端、彼女がいきなりとびついて来た。そして私の肩や胸に唇を当てた。

「素敵、とっても。だけど、ひどい人ね」

そう言ったかと思うと逆に私の手をとってクルリと背を向けた。

「ねー、ちゃんと縛って」

私はその言葉を待っていた。その手をちょっと捻ってやってから肩を軽く叩いておいて浴室をとび出す。

洋服ダンスの下の抽出をあけた。レースのついた色とりどりの下着の下に、木綿縄がきちんと巻かれてあるのを私は掴んで戻ってきた。彼女は腰の後で両手を組んだまま、顔を落して待っていた。

緊縛は私たちの遊びの第一歩である。どのようなにして緊縛するかは、絵に書いて自ら研究したり、絵や写真を参考に彼女の希望を聞

いたりして、頭の中では色々な方法を知っては居るが、実際に縄を掛けるとなると、いつも旨く行かない。と言うのは彼女から発散される強烈な魅力に私の冷静さは失われ、ああして欲しいという注文や、こうして緊めてやろうなどと言う始めの構想はフツ飛んで、ただ気の急^せくままに、縄を巻きつけることになる。その結果、いつも同じ平凡な縛り方になってしまうのだった。

後手首の縄の余りを鴨居にかけてほっとする。彼女のくびれてもり上った乳房を見てみると、彼女は片方の脚をくの字に曲げて視線を遮ぎろうとする。必然的にお尻が後へ突き出る。私は近寄って平手で一発、それへお見舞いしてやる。

「ハァーッ」

彼女は顔をつき出して胸をそらす。このお見舞いはいつも彼女の好むものだ。五、六度平手打ちを加えている内に、例によって彼女の顔に赤味がさして来る。

「ねーっ、鞭で」

「よし。今日は痛いぞ。覚悟はいいな」

私は、さっきの抽出から鞭を取り出して軽く打つ。最初は尻から。そして首から下の、あらゆる部分を鞭が走る。

随分と加減して打っているが、次第に体が赤く彩られて来る。その時分になると彼女の目はうつろになり、口で荒々しい息をしながら悲鳴ともため息ともつかぬ声が、絶え間なく半開きに開いた口から洩れて出る。

「ニャーン」廊下で彼女の愛猫の鳴き声を聞いて私は鞭打ちを止めた。

汗でしっとりとした縄を解く。右手で左腕をさすりながら彼女はうずくまる。彼女の背中が汗で光っている。

「痛い目にあわせたから、今度は変ったことをしてやるよ」

そう言って障子を明け、縁側にうずくまっている猫を室に入れてやる。

「ねー。もっとひどくぶつてもいいわよ」

鞭打ちの後こう言うのが、彼女の口癖のようである。この言葉を聞くたびに、私は、本当のサドではないのかも知れないと思う。みみずばれがしたり、くつきりと鞭の跡がつく程、強く打つ気にはどうしてもなれない。

「さあ、テーブルの上にねるんだ」

促されて彼女は、そっとテーブルに上る。

ミシミシとテーブルがきしむ。

素早く大の字にしばりつける。

傍の猫はそ知らぬ顔である。主人が裸にむ

かれて縛りつけられているのに薄情な奴である。その上に、この猫自身が今度は主人を責める立場になるのだから面白い。

冷蔵庫から牛乳を取り出してそっと彼女の胸の谷間に数滴落とす。猫は私の顔とその牛乳を交互に見てそっと近付く。私がだまって見ているのに勇気を得てか、猫は彼女の胸に上る。胸や手足が鳥肌になる。

「いやーっ」

彼女がふるえる。余り動くと猫が爪を立てるのを知っているので、ふるえながら必死に不快感をこらえている。

猫は牛乳をなめ始める。自己の食欲を満たすべく、主人の気持ちに意に介す暇はないらしい。

彼女の全身がこまかくふるえて来る。テーブルがミシミシと鳴る。

私はさらに牛乳をまき散らしてやる。猫が喜ぶ。呻きが高まる。テーブルがきしむ。その繰返しが幾度続いた。そしてついに彼女の呻きが哀願に変わって、ぐったりとなってしまう。私は、縄を解いても起き上ろうとせず、横たわっている彼女を見ながら、今はもうすっかりMの悦びをさらけ出すようになってしまったこの女を、この次はどの様にし

て、責めてやろうかと思いをめぐらすのだった。

私が彼女―春子―を始めて知ったのは一年前の小雪のちらつく寒い日であった。

『大雪の東京で軍のクーデターが起こったのは何年前の今日だっただろうか』と考えながら人通りの少ない通りを歩いていた。目的は、いつもの店へ行くことであつた。K誌の新刊がもう出ている筈である。

私が本屋に着いて、硝子ごしののぞくと、一人の女性が立読みをしていた。もう年の頃は三十に近いであろうか。

“美しい”

客は他には居なかつた。私は静かに戸を開けた。と、その女が、はじめたように読んでいた本を置いた。そして、入ったばかりの私の傍をすり抜けるようにして、反対側の書棚へ廻った。

私はいく分その女に氣をとられながら、女のいた辺りへ回った。そこが、いつもK誌の置かれている場所だからだ。あつた。幾冊かのK誌が、積まれている。その一番上の一冊が、少しずれて置かれてあつたのだ。

“もしや”と思つたとたん、戸の開かれる音

がして、その女が出ていった。

私は急いで「K誌」を買い求めるや、彼女の去った方向へ大股で歩いて行つた。

見当らない。“早い足でもないのに。とにかく町の前の大きい道まで出て見よう”大通りに出てから横断すべきか、左右何れに曲るべきか、一瞬迷つて立ち止つた私の目に、バス停留所に立っている彼女の姿がとび込んで来た。私は彼女の傍まで歩み寄つた。然し彼女のすぐ背後には女子高校生二人がしきりにしゃべりながら立っている。小心者の私にはこの二人が邪魔で、彼女に話し掛ける事が出来ない。

“仕方がない”私もバスを待つ事にした。バスは程なくやつて来た。

彼女と向い合ひに坐る。私は仔細に観察する。背は大して高くはなく体つきもやや細い。胸は大きくもり上がっているが、これは実際の所は判らない、などと勝手な想像をしながら見つめる。

ゆっくり彼女が立ち上がった。この次で降りるのだろうか。

二つ目の停留所で彼女は降りる。私も続いて降りる。ぶらぶらと後をつける。しめた。人通りのない狭い道に入つた。私は歩みを早

めた。呼びかけようと思うが言葉が口から出ない。その内にとつとつ賑やかな通りに出てしまつた。

“駄目だ”私は私の意気地なさかひどく腹立たしかった。急に彼女が右に曲つた。彼女はすぐ二軒目の小さな化粧品店の前に立ち止つた。そして本日休業の木札が掛かつたシャッターを、ガラガラと半分程開けて、中に消えた。

翌日、私はその店にポマードを買いに行つた。彼女が出て来た。店の奥をそれとなく覗いても人の気配はしない。私は昨日買ったK誌を、わざと陳列台に“忘れ”て、逃げるように立ち去つた。

私の作戦は成功した。翌日「忘れ物」を取りに行った私は、思いきつて本屋で感じた第六感をありのままに話した。彼女がはにかみながらも否定しなかつた事だけで私は満足して帰つた。そしてそれから一カ月程して交際が始まつた。

彼女―春子は数年前サラリーマンの夫と死別して幾何もなく、姉嬢を頼つて此の地にやつて来て、姉嬢から資金と店舗を貸して貰つて細々と暮らしていたのだった。

Mの世界には夫と死別した後に、興味を持

ち出したと言う。それまでは、ただ単に想像のMの世界に遊んでいた春子は、初めて私―男性の相手を得て、縛られ、打たれ、弄ばれる悦びを覚え、今や春子は私の責めに充分に反応し、責めを誘い、ねだりさえする。肌の艶は輝き、皮下に適度の脂肪が乗り、水々しい張りのある魅力を増して来た。マゾは女性を美しくするのだろうか。

いつか私は、春子から「これ、どお―」と見せられた週刊誌を読んで、驚き且つ新しい興味を覚えたことがあった。その婦人週刊誌には自ら求めて背中に天女の刺青を施した或る人妻の物語が書かれてあった。春子は刺青に興味を持っている。私が読み終わった時、春子は天井を見ながら言った。

「私って、刺青するならどこにしようかな。矢張り下着で隠れる部分が良いわね」

「彫りたいのかい」

「判んない。だって痛いでしょう。何だか怖いわ」

判んないのは私の方である。彼女は刺青を彫りたいのか彫りたくないのか。――後でポツンとつぶやいた。

「矢張り蛇ね。こわい蛇が体に巻きついていて何だか素敵みたい。ぞくぞくするわ」

春子の裸身を縛り、吊り、枷にはめこんで責め上げる。彼女の肌の上で苦しげに、又喜ばしげに蛇が動く――私の頭の中にそのような光景が浮かんで来たものであった。

彼女がフーッと大きなため息をして目を開いた。が、まだテーブルから起き上がろうとはしない。猫は、もうこれ以上牛乳の御馳走は貰えぬと知ってか、障子の傍で、開けて呉れと言わんばかりに鳴いている。時計を見るともう大分遅い。勝手知ったる家の中、窓や戸の錠をして室に戻る。

「起きたのか」

「ええ。疲れたわ」

「もう帰ろう。僕も疲れた」

「そう？ でも、もっとゆっくりして行けばいいのに」

私の手に、犬の首輪と鎖が握られているのに気付いて、春子は首をすくめる。無言のまま私は彼女に近寄り首輪を春子に装着する。鎖をつけてその一端を柱に掛ける。鎖に引張られて彼女は、のけぞって倒れる。喉の奥で「グーッ」という音が聞こえた。

「このお皿にミルク、このお皿に水を入れて置くからね。この洗面器はこの隅に置いてお

く。粗相をしたら承知しないよ。―オット、大事な事を忘れていた。両手を後に回して。これでよし。犬は手を使わないからね」

私は背後で春子の両手首を縛った。そして水差しを持って彼女の口に近付けた。しきりに水差しを避けようとする。私は一発お尻に平手打ちを加えて、左手に春子のあごをしっかり握り、水を口に流し込む。たっぷり水を飲んだ春子が解放されて「ホーッ」とため息をつく。

「これで今夜はこの洗面器を使う事が出来るんだね」

「はい」

首輪を掛けられた時から、彼女の目つきは催眠術をかけられたように弱々しくなっている。犬になろうと自ら努めているのか。犬の待遇をあきらめて甘受する気になったのだろうか。言葉づきまで変わって来る。

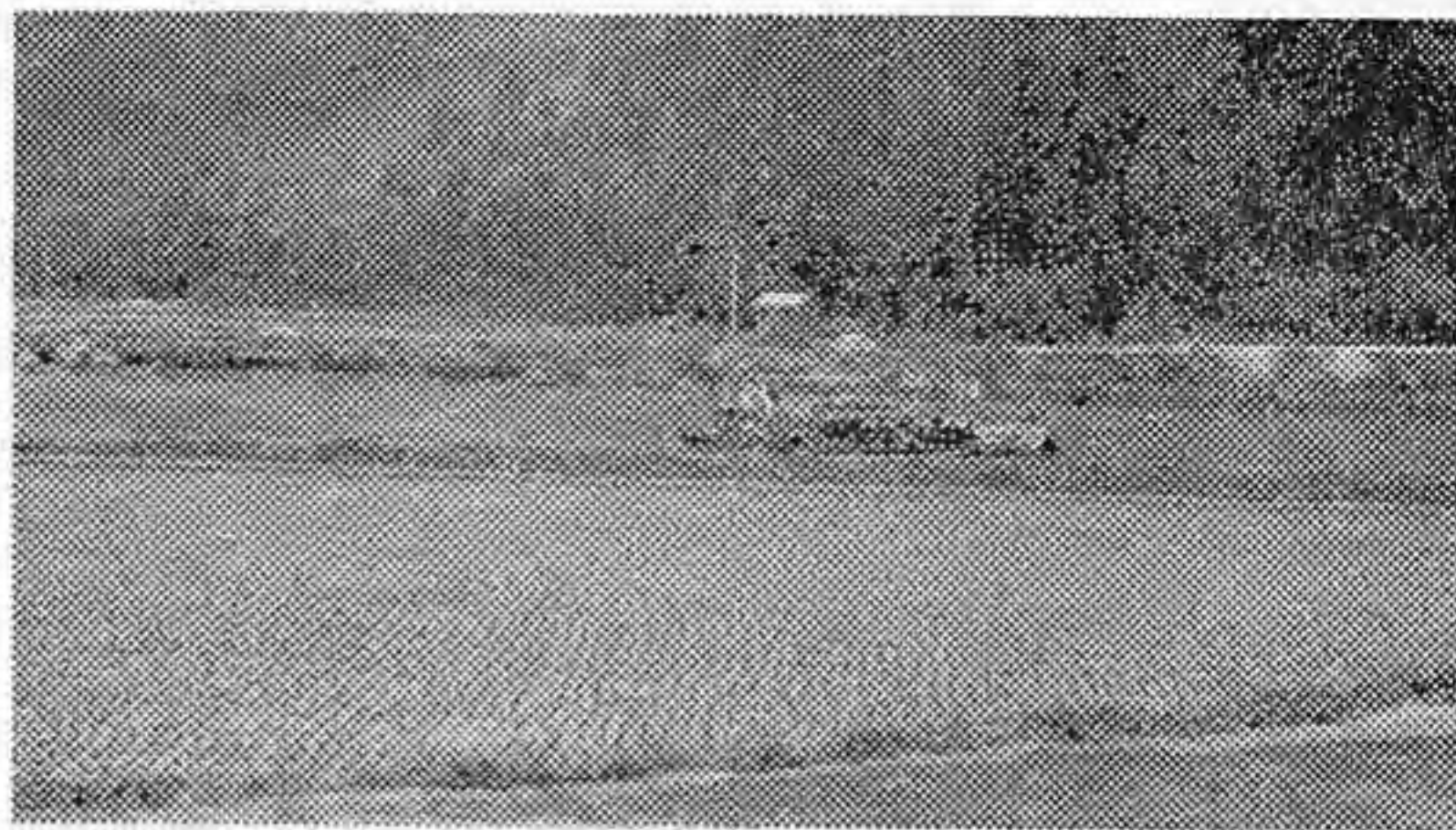
「この毛布の上に横になって寝るがよい。蚊は居ないだろう。居たって犬は平気だ」

「はい。有難うございます」

「じゃあ、おやすみ。明日の朝、七時頃又来てやるからね」

可愛い大きな白犬が、こっくりと頷いて微笑した。

(完)



東映正月作品『元禄女系図』

にわかスター

出演の記

(附録・尾花ミキの人生体験)

辻村隆

静かな辺りを行くところを、杖を頼りによりばいながら追い縋るといった設定――。

このシーンには私は用事がなく、午後三時頃からの第三話のワンカットのため随行したのだが、それはのちほど追々説明しよう。

昼飯には少し早かったが、早メシを喰って撮影にかかることになり、ロケバスは、食事処を目指して、近江八幡の長命寺門前に止まる。急の多人数のこととて、二軒の、雨で佗しかった茶店はテンテコ舞い。玉子丼一杯に約三十分以上待たされて、やっと出発。

目指すは安土八幡の水郷である。このシーンのロケの一行は、ここより、蒸気船を仕立てて、水路へと出て行く。あとに残されたのは、例の丸刈り女優の尾花ミキと、矢奈木邦二郎、そして、私の三人の別口のスタッフの外、バスとライトバンの運転手さん二人。

尾花さんは第三話の腰元で、後に殿の寵愛をうけて側室になるおみつの、幼い頃の田舎娘の扮装である。矢奈木さんは、そのおみつを養育した、というよりM性に飼育した木樵に扮している。この矢奈木さんは『徳川女刑罰史』にも一寸出ており、第一話で、橘ますみが詮索所で拷問をうけ、海老責め問いされて失神寸前の時、彼女の眼底を観察して、

琵琶湖八景「春色安土八幡の水郷」にロケ随行のこと。

『元禄女系図』の映画もいよいよ追い込みにかかった十二月七日、進行さんよりの連絡でその日、ロケバスに乗り込んで一行と共に、滋賀の里、近江八幡に向かう。

生憎の小雨模様だが、わざわざ雨の日を選

んだのロケだから、生憎どころかうってつけのロケ日和といったわけ。

今日のシーンは第一話のラスト・シーン。おいと(橘ますみ)を散々弄んだ遊び人半次(山本豊三)が、純情なおいとの死を知って愕然となり、遊廓一文字屋の若い衆がおいとの棺をかついで、百本杭の一面に葦の茂った

「もはや、これまでにございます」

と一言、仰有った牢医に扮していた人だ。今回の役も台詞はなく、幼い小娘おみつを、被虐的に飼育する役であった。

このシーンのワンカットの、シナリオを左記に紹介しておこう。

『NO・104「きこり小屋（回想）」

幼いおみつが、縄でくくられている。

背の曲った老樵が、おみつを激しく鞭打つ。

泣き叫ぶ、おみつ。

頭巾で顔を隠した、お紺の方（賀川雪

絵）が隠れ見ている。』

と、これだけである。第三話の物語も、もう殆ど大詰に近い、僅かの回想シーンなのであった。最初このシーンは、おみつ（尾花ミキ）の幼い頃という設定で、子役の可愛い小娘をきめていたのであったが、そのような子供を、被虐の対象とするMへの飼育のシーンに使うのは、或いは映倫辺りから、児童福祉法違反でクレームがつかないかという意見があった、一旦はカットしたのであるが、カントクさんの熱意が通って、幼いおみつという役柄を、もう少し年令を経たことにして、尾花さんが若づくりで、自身でやることにきまっ

て、改めて再び、このシーンを入れるという一幕があったのである。

「シナリオは樵小屋になっていますが、田舎道を縛って鞭打ち乍ら引きずって行くとか、竹藪で緊縛しての折檻というようなことを考えています。辻村さんに任せますから、何か面白いアイデアを考えといて下さい」

石井カントクさんは口早やに私にそう告げて、匆々にロケ船に乗って行ってしまったのである。任された私の脳裡には、いろいろな責めの想念が次々浮かぶ。縛りは勿論、荒縄



縛りである。幼い頃といっても、子役の子供ではないのだから、気分がラクであった。長い長い、逆吊りにも耐え忍んだ尾花さんである。ワンカットぐらいなら、思い切り強烈にやっても辛抱してくれそうな気がした。

雨が上った。徒然な待ち時間。私と尾花ミキさんは、バスを出て、灰色に霞む安土八幡の水郷の土堤で、二人っきりで話した。

尾花ミキとSMプレイのことなどについて、長々と話し合うこと。

「『刑罰史』の頃から、度々お目にかかっていながら、ゆっくり二人っきりで話す機会なんて滅多になかったですね」

「本当ね。私いつか折をみて、こんな役柄の性格について、精しくお聞きしたかったの」「今度の役？」

「ええ、何か被虐という言葉の意味がピンと来ないの。虐められて喜ぶ女の人って本当にありますの？」

「そりゃ随分ありますよ。でもそれは内面的なものでしょう。私はこんな性格だと、判つきり人前で言えるような性質のものじゃないから、そうした慾望を抱いていても口には出さないだけ。でも尾花ちゃんの年では一寸、理解出来ないかも知れないですね」

尾花ミキ（本名尾花節子）さんは昭和二十二年生れである。恰度、私の長女と同年令であるが、恋愛論などは、大いにましく立てても、こうしたSMの世界には、皆目オネネに等しかった。雨上りの水郷の奔流は蒼く流れて、煙ったような彼方の大湖の水平線は、低く垂れた雲と一つになって、白く霞んでいた。辺りには人影もなく、偶に通り返る車が、何事かと徐行してゆくに過ぎなかった。水路に向ってぶらぶらと歩き、私達は雨上りの濡れそぼった土堤草の露に足許をしめらせながら並んでしゃがんだ。

「この間の天守閣の逆さ吊り、随分、長時間



だったから、つらかったでしょ」

「あの時は、そうでもなかったのよ。でも翌日朝、すぐ顔が腫れぼったいの、險なんかまるでかぶさったようになってるので驚いたわ。それに手足のふしぶしが痛くって」

「あとでこたえたのですね。刑罰史では、あんなスゴイ緊縛はなかった。しかし、刑罰史で始めてミキちゃんを縛った時、震えていたし、泣いたでしょう。あの時の縛り方なんか先日の逆吊りにくらべたら、ごく初歩的なものだった筈なんですよ。ということは、それだけ、ミキちゃんが縛られることに馴れたというわけ」

「確かにそうですわ、それはいえませうわ。あの天守閣での逆さ吊りの時、余りショックなかったし、縛られた痛さにも、何だか耐えられそうに思えたのですものね」

「それが私達のいう、飼育という言葉を使うと失礼に当るが、何ていうか、縛られることに馴れた——つまり幾分は被虐の感覚を身につけたということなんですよ」

「そういえばそうですわ。私、最初辻村さんを紹介されて縛られる時、すぐ

く怖い、おそろしい人に思えたのです。それが今では、ちっとも怖くないからヘンね」

「話は変わるけど、第二話の葵三津子さんの役柄は、虐められたり虐めたりで、嗜虐と被虐の両性を持った女性という設定なんですわ、尾花さんは、男でも女でもいい、虐めてみたいと思う？ 例えば鞭なんかで、男の人をビシビシ叩きのめすといった様な——」

「そんな気はありませんわ。私って、男の人とお話したり、交際するのは案外、平気なんですけど、妙な素振りやヘンな振舞いされると、いっぺんに嫌になるんです。それで随分損をしてるんですよ」

「潔癖なんですわ。だからお色気がないのかなあ」

「そう、お色気がないってよくいわれます。でも、そのお色気ってのがよく分らないの。私これでも随分その気になって演技しているんですけど」

彼女自身いうように、この美女からは、妖しい艶冶な色気というものが全然漂わなかった。役柄で小娘に扮しているが、それが又浮世の荒浪とか、色情面からはおよそ縁遠い清潔さであった。現代もので、ビル街に勤めるオフィスレディといった役柄か、鉄火でお俠

んな下町娘といった役どころが、ふさわしいような彼女であった。

「東京生れなんでしょう」

「深川の木場で生まれたのです」

「たしか、おそばやさんだってね、おうち」

「そうよ。週刊誌なんかで、随分身許調査されちゃった」

「歌手をしたって、いつ頃？ これもこの間のテレビで知ったことなだけけど……」

「子供の頃から、美空ひばりの歌真似が得意だったんです。あちこちのノド自慢に出ちゃ大抵、賞金をかささらっていった。古賀政男先生なんかとも審査で顔見知りになっちゃって、又持ってかれるねっていわれたりしたんですよ。それで遂々本格的に歌手を志願してビクターの研究所へ入りました。あの当時、都はるみさんや、水前寺清子さんとも同じように机を並べて勉強したものです。デビューは私の方が早く、第一回の吹込みはビクターで橋幸夫さんのB面でしたのよ」

「へえ、大したもんですね。何て歌？」

「恰度あの頃、橋さんの『潮来笠』がすごく当たったのです。それで、その姉妹篇で、潮来の伊太郎を主人公にした、『伊太郎笠』って唄を、橋さんの『北海の暴れん坊』の裏盤に

入れて、戴いたのです」

「尾花ミキって、名で？」

「いいえその時は歌手名、尾花みさを。

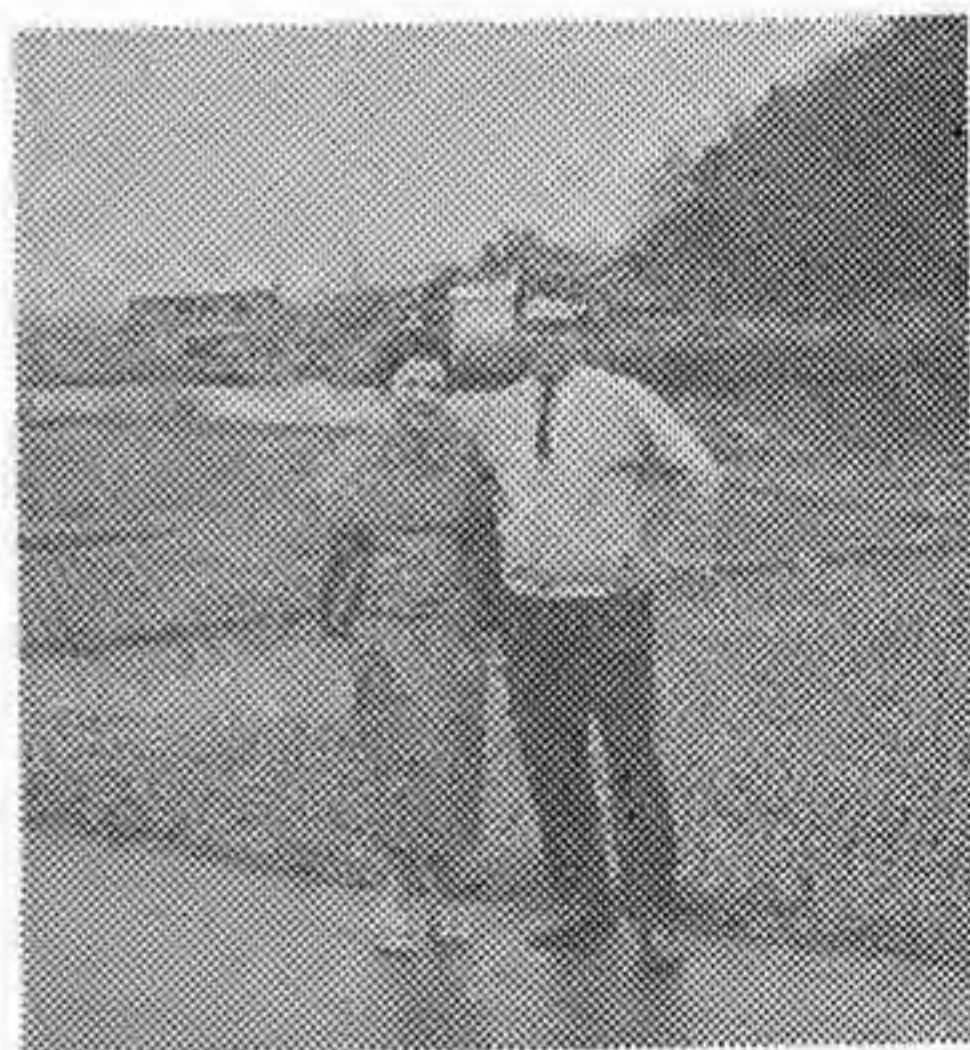
でも、今は絶盤ですわ」

「どうしてやめたの惜しかったなあ」

「それが、私の潔癖な性格がわざわざしたのでしょね。売出してあげるからといって、その代り……いろいろと……」

尾花ミキは口を濁した。こうした世界の裏面の代償は、歌手のセックスが往々にしてかかっているものであることを、私も同好の渡辺プロの人から聞き囁いていて、よく知っていた。私はそれを仄めかせた。彼女はフト暗い表情になり、過去の華やかなステージを回想するように、水郷の流れをみつめていたが軽くなずく。

「でもそんな世界の生活から抜け切れなかったのネ。テレビのコマーシャルガールに出たりしているうち、お話があつて、思い切つて



飛び込んで見たの。並大抵のことじゃ仲々役がつかないでしょ。だから、頭をそつてもいいし、時と場合によつては脱いでもいい覚悟で映画界に飛び込んだのです。だから女優経験はゼロよ。でもファイトでぶつかつてゆくわ。幸い、石井先生（監督）がとてもいい方で、刑罰史の命がけの勇氣

に應えて下さつて、こうしてすぐ又ズブの素人の私に、こんな大役つけて下さったのですもの。人生意気に感ずすわ。石井先生の御期待裏切っちゃ申し訳ありませんから、どんなことにでも体当りでゆく腹をきめたんです」

アプレ女優、ハレンチスターと、言わば言え、嘲笑えば笑え。凄まじいまでの気魄で精根こめてぶち当つてゆく、この尾花ミキの体論と人生感、実に見事であつた。生硬ともとれるういいういしさの中に、私は彼女の処女性を判つきり確認した。何カ月先は知らねども、今現在目前で、こうして淡々と語る、この小柄なニューフェイス尾花ミキは、まぎれもなく処女を誇つていいスターであつた。

彼女は私に逆に質問して来た。

「辻村さん——、男の人って、誰でも結婚して女性をわがものにするって、横暴になって、縛ったり、叩いたりして虐めるものなんじゃないか——」

「いや、そうとは一概に言えませんよ。SMつまり、Sはサジズムの略、Mはマゾヒズムの略で、SMというのですが、S気のない男性なら、ノーマルでそんなこともありましょ。しかし、結婚生活が長年に亘ると、段々に単調で飽きが来て、何かの拍子に夫婦仲が冷めなくなるかも知れませんがね。S気のある男性の場合でも、大抵は愛すればこそ独占して、虐めることによって烈しい愛情を確認するのです。M気の男性なら、妻から虐められることによって、より一層妻を愛する感情が強くなるのです。M男性の場合、馬や犬のような畜生扱いをうけたり、オシッコを要求したり、果ては奴隷にしてほしいと嘆願したりするんですよ。若し、そんな場合、尾花ちゃんなら、SとMの男性の、どちらを好みますか?」

「まあ——、どちらも余り強くなると困るけど、矢っ張り少しぐらいなら虐められる方がいいかも知れない。私、わかりませんわ」

「尾花ちゃんに凄く好きな男性が出来たとして、その彼が、若しあなたを縛らせてくれといたら——」

「そんな人、出来るかどうか分りませんわ。でも仮定でなら、そんな青年が若し要求したら、それが愛情の表現であり、手段ならば、或いは許すかも知れません」

「若し、その青年が、尾花ちゃんに鞭打ちして欲しいと頼んだり、或いはのませてくれと要求したら?」

「困りますわ。何か不潔で……。やはり少々は男性的に振舞って、もみくちゃにしてくれのような人の方が、頼もしいんじゃないかしら」

SMの愛情診断では、彼女はどうかやら被虐傾向であった。唐辛子責め、どじょう責めなど、刑罰史での数々の緊縛を経て、今又、逆吊り、そして加虐の殿に仕える、被虐に悦樂を見出す女という役の設定が、いつしか知らず知らず、尾花ミキを、そうした観念の、肯定の道へ誘導していったのかも知れない。

時計をみると午後二時を少し廻っている。ロケ隊は一向に戻ってくる気配はなかった。尾花ミキは、あーあと大きく伸びをして立ち上った。

「困ったわ、私。どこかないかしら……」

「何が?」

「オシッコ」

暖冬とはいえ、水郷の河岸に長い間しゃがんでいて冷えたらしい。

「近くの家で頼んであげよう」

小川を隔てて、数軒立ち並ぶ農家の、なるべく大きそうな構えを目指して、私と彼女は急ぎ足に行く。

「御免下さい」と数度声をかける。人の好きそうな婆さんが出てきて、彼女の姿を見て吃驚したようだった。可憐な桃割れかつらに、素足を出した短い赤衣着物姿。これでは咄嗟に誰でも驚くかも知れない。屋敷内のトイレを想像していたら物置小屋の肥料溜め兼用の粗末な便所である。

「おトイレ、水洗じゃないのネ」

こんな鄙びた農家に、水洗トイレがある筈もないが、それが都会娘の錯覚の観念なのであろうか。

私達二人は、カメラ片手にそこかしこを散歩した。気が向くと、農家や鶏小屋や水郷を背景に度々カメラのシャッターをきった。

「少しおなか空いたわ。何か喰べるもの売っていないかしら」

時間を持て余すと、急に空腹を覚えたらしい。近くで蔬菜をつくる実直そうな老人にきいて、村で一軒だけの食料店に足を向ける。

みかんを袋に入れさせ、私は火鉢に当り乍ら餅菓子をほおぼり、尾花ミキは店内を物色していたが、魚肉の安いソーセージを握りしめてきて、ムシャムシャやり出した。まずくて到底、私の口に合わないシロモノだが、空腹の彼女はペロリと一本平げてしまう。

近くの女房連が聞き伝えてか、子供を連れて覗きに来る。

「なあ、この子が花嫁さんを一眼見たいちゅうてのう」

と物珍しげにたかってくる。老婆の勘定では頼りないのでミキちゃんと二人勘定して自分で計算して支払ってここを出る。

青空の覗け出した、空気の澄んだ湖畔のほとりは、吹く風さえも爽やかであった。彼女は、屈托なげに何かのメロデーを口吟んでいる。その横顔はとても倅せそうであった。今は幸せかい？ って聞いてやりたい様な——

「今はしあわせかい、って歌知ってる？」

「よくは知らないけど、メロデーは聞き囃りで知ってるわ」

「佐川満男がカムバックしてうたった歌だけ



ど、この歌の作詞作曲をした、中村泰士という青年のことは知っているんだよ。彼自身じやなくて、彼の姉さんをね」

彼の姉の名を告げれば、同好の人なら知ってる筈であった。ナンバー一番でデビューし、美川鯛二と名乗ってロカビリーをうたい、西田佐知子と組んで、大阪の大劇に出演した頃もあったのに、ロカビリーの衰退と共に消えていった彼。そして辛苦数年、新しく作詞作曲家として再出発した彼に、私は蔭ながら祝福を送っていた。かつての彼の吹込第一作が「哀しい姉」というのも皮肉であった。今も私は中村泰士の姉と、折あらば時々電話することがあるが、それは余りにもプライバシー

にわたるのでここでは控えよう。

土堤でちぎった草の一片を、軽く振りながら、彼女は早速「今は幸せかい」のうたのメロデーを口吟み出した。まるで私に聞かせるかのように——。それが桃割姿の村娘のスタイルに奇妙にマッチして、実に微笑ましい。空が暗くなりだし、又しても時雨がパラパラと降りそそぎ始めた。バス中へ退避して、転がっている時間待ちの運転手さんや矢奈木さんに、餅菓子とみかんの配給。とりとめない雑談——、そして時間は容赦なく経ってゆく。運転手等の、彼女ひとりの女性を意識しての、男のみに分るキワドイY談にも、彼女は顔を赤らめるでもなく、キョトンとしてきいている。

そして、遂に私達の出番はないじまいにその日は終わってしまった。遅々と無駄足、といえどそれ迄だが、私にとって、尾花ミキとの二人きりのSM談が、又と得難い収穫であった。所詮、映画とは待つことと覚えたり。その日一日、尾花ミキは着物の下に、裸にじかに、雨降りに備えてのレインコートを着込んで、真白い柔肌をむせ返らせていた。

カントクさんとホルモン焼きをつつきながら、出演をすすめられること



「忙がしいのにお気の毒でしたねえ。私の方が早いから、これに乗ってください」

流石に石井カントクさんは、私の無為をすまなく思ったのか愛用のボルボに同乗することを奨めてくれた。一同を乗せるロケバスの出発はまだまだ遅れるだろう。お言葉に甘えて、スマートな外車にのり込む。カントクさん自身運転し、私のほかには荒井、藤原の二人の助監さんがのり込む。一同を尻目に忽ちスタート。既にすっかり陽の落ちた、宵闇の国道八号線を突っ走る。

栗東インタチェンジの手前の、ホルモン焼きのドライブインレストランで車を止めると食事をしてくるようになった。往く時にかねて目星をつけておいたに違いない。

カントクさん自身は運転するので呑めないが、私達に今日の労をねぎらってビールをどんどんついってくれる。焼き肉の匂いがハラワタまで泌み渡ってしきりにパクつく。そんな相談が、助監さんとも出来ていたのか、何気ない口吻でカントクさんは口を切った。

「ところで辻村さん、今日撮る予定だった回想シーンですがね。木樵になった方には悪いけど、S的な観念のない人にいちいち演技をつける暇がないんです。大分遅れちゃってね。どうでしょう、そこで彼等とも相談したのですが、ひとつ木樵になって尾花ちゃんを虐めてくれませんか。台詞はないんです。辻村さんの思った通りやって戴いて結構ですから——。フトそう浮かんだので、特別に手当てもお出し出来ませんが協力して下さいよ」

やんわりと笑いながら、ハプニングなことを仰有る。

「えッ、この私が……」

「そう、正に適役ですよ。辻村さんのカメラハントの地でやればいいんですよ。どう、やってくれますか」

突然言われて、飲んだビールがカーッと頭

に来て、咄嗟に返事も出来ない。相談しますといって逃げられも出来ぬ、私自身のことである。五社のそれも東映の作品に、例え僅かな役にしても、この私が出演するなんて、それこそ思いもよらなかった出来事であった。「そんなの、出来ますかしら、私に……」

「出来ますとも。嗜虐の心を持った人ほど、やり易い筈です」

「尾花さん、御存知？」

「いいえ、全然知りませんよ。さっきフトそう思いついた許りだから」

カントクさんは、いかにもこのアイデアが愉しくて堪らぬように、哄笑した。

「あの木樵の人に悪いですねえ」

「なあに構いませんよ、私からよく言っておきますから」

荒井さんも傍らから、しきりに奨める。コトここに至れば私も男である。度胸を据えてバーンと一発やったるか。ましてやシーンは尾花ミキを被虐的に飼育してゆくヒトコマである。正にカントクさんの慧眼通りこの役、普通のノーマルな役者より、私にうってつけかも知れなかった。

「やりましょう。ズブの素人ですが、清水の舞台から飛び降りたつもりで——」

「そうくると思った。荒ちゃん、辻村さんのためにカンパ―イと行きましょう」

石井輝男監督の、一見冒険的ともとれる数々の試みは、遂に私にまで及んだ。なればこそ、次々、映画製作の定石の枠をはみ出して行く彼の映画が、受ける一因ともなるのである。

俄かスター辻村隆は、名神高速を喰りを生じてぶっ飛ばすボルボの中で、未知への昂奮とスリルに、心ここにあらず、翌々日の出演の構成に、嗜虐の夢は果てしもなく拡がってゆくばかりであった。

俄かスターに、女房同伴でテンヤワ

ンヤの大騒ぎのこと

「えっ本当！ 父ちゃんが映画に出るって」
途端に女房が眼の色を変えた。

「信じられませんわ、そんなこと——」

そこで私は、今日の一件を多少の得意も交えてはなすうち、つい力がこもってくる。

「キコリ？ 変な役ね。どうせ出るのなら、もうちょっとましな、男前になって出ればいいのに」

まるで大川橋蔵か鶴田浩二のような、二枚目を想像しているらしい。この亭主余程の美男子とでも思っているのか、そこは長年連れ

添って惚れた手前、一寸でもエエ男にしたいらしいのは、年甲斐もなく笑止なことで、笑って済ましているうちはよかったが、
「それじゃ私、あんたの附人になってついていったげるわ」

といわれて愕然、これはエラいことになってきた。女房の眼前で、若いピチピチした娘を手ひどく虐めることになったのかと、あわてて守勢に回ったが時既におそし。ええいこうなれば、一度とつくりと一世一代、嗜虐芝居をみせてくれんと心をきめた。娘達も行きたいといい出したが、これは到底無理。いくら何でも我が子の前では見せられぬ演技。しきりになだめて、やっと納得させて、翌々日



を迎える。

女房のせて撮影所の門を潜ったその日——午前中のセットは、小池朝雄さんの暴君が、侍女を傍らにはべらせて、半裸の乳も露わな尾花ミキの妊娠腹をなでさする闇のシーン。真暗闇のスタジオ内を手探りで歩いて、やっとライト眩ゆいセットに到着する。女房、途端にびっくりして私の手を強く引いた。

「よう、あんなところうつしますな。あんなシーンとって、どないもあれへんのやろか」
と大正生れ、慟慟する胸をハッシと押えて大きな吐息を洩らしている。ここで吃驚するようでは、私の出番ではどうなるか。日頃SM的に鍛えた女房の、心意気の見せどころはこれからというのに——。

既に連絡があったのか、進行さんが呼びに来て、私を美粧部へつれていってくれる。

ヅラ合わせもしていないハプニング調だけに、先日矢奈木さんがつけていたような、木樵風のかつらは間に合わない。数度あれこれ変えた挙句、さかやきののびた、山賊まがいのかつらが私の頭にスッポリと納まる。

午後二時頃より、唯、私と尾花ミキ

のそのシーンだけのために、嵐山方面へロケということにきまった。今日も都合のいい小雨日和である。

「ロケでずぶ濡れになりますけど、準備して来られましたか？」

と進行さんにいわれて、又ぞろあわてる。下着類なんて全然考えてもみなかった私である。それでも身だしなみにと、新しい下着はつけてきたものの着換えはない。

「じゃあ、すぐ買って来ます」

と、かつらを脱ぐや、その旨、表で待つ女房に、しかじかかくかく。

「こんな処で、どこで売ってるか見当もつきませんわ」

といわれりや成程もつとも。車を引出してひる飯前のひととき、あわただしく走って、桂マーケットに飛び込む。シャツ、パンツ、ズボン下と一式揃えて、直ちにUターン。何とも忙しき限りである。

「ほう、辻村さん出るんですか」

と、刑罰史で顔なじみの衣裳部、装飾部、装置部の、あの人、この人から声かけられて多少ドギマギし、照れて笑ったり、一寸胸を張ったり



で、その癖、内心少しは得意になっている。

昼飯もそこに衣裳部で、薄汚い木樵姿に身をやつし、美粧部へと行く。

私の坐った隣りに、狂言廻し役の医師に扮した吉田輝雄さんが顔をつくりに来る。

顔なじみで、声をかけると、

「あれッ、辻村さん出るんですか。見たいなあ、セットじゃないんですね」

「ええ、ロケらしいです」

「残念だなあ、緊縛指導の御本人が虐めるところをトクと拝見したいですよ」

と真顔で仰有る。

鏡の前の私が、段々と、私でなくなっていく。忽ちにして出来上ったのは、みるもむく

つけき木樵おやじ。かつらの上から近視眼鏡かけて、改めて自分の顔をまじまじと見さだめたら、まるで世にも可怪しい人物が一人そこに坐っている。

「辻村さん、今まで御経験おありですか」

メーキャップしながら、美粧の人がきく。

「いえ、生まれて始めてですよ」

「それにしちゃ、悠然と構えていますね。何だかまるで馴れた感じですよ」

と、必死にさりげなく振舞っている私の、ドキドキする心も知らないで、そんなことを顔の前で言う。大柄で、ドッシリしているから、そう見えたらしい。

終ってこの姿、一服入口で待つ女房に、早々見せんものと出ようとしたら、

「あらッ、辻村さんじゃない？」

声をかけられたが、眼鏡外した私にはよく見えず、女性の声を頼りに近づいて、

「あッ、今日は——」

と、咄嗟の返事で、眼を細めると、賀川雪絵さんの素顔。

「どうしたの、その恰好」

「チヨイ役で出るんですよ」

「まあ、辻村さんが……ホホホ、是非拝見したいわ、どのスタジオ？」

「生憎ロケですよ」

「あらッ、惜しいわね。それじゃ」

と喋ってしまった。テレビの用事で来たの
だろうか、玉川良一さんが、私のすぐ傍らを
通り、ペコリと頭を下げて、

「お早うございますッ」

と行ってしまふ。この俄かスターを誰かと
間違ひしたらしい。確かに私は着ぶくれて大
男めいていた。木樵の衣裳の下に、雨よけ用
にレインコートを着込んでいるのだから、着
ぶくれも当然である。

女房のうしろから、ポンと肩を叩くと、振
り返り、私の姿を見て、ギョギョッと二、三
歩あとずさりをした。

「わあ、えらい恰好。子供には見せられまへ
んなあ」

と、あきれて感心している。私はかつらの
上から眼鏡をかけ、鼻めがねになるのをしば
しばずり上げていた。知った人に会っても、
分らぬからである。

安土八幡にロケした時の、バスの中でY談
に花を咲かせた、ライトバンの運ちゃんが通
りかかる。

「お早うす」

と挨拶したら、けげんな顔――。

「私ですよ、ツジムラ」

「ああ、誰かと思いました。交替で出るの
すか、あの役に？」

「そういうことになりました」

「ロケについてゆきますから、とっくりと拝
見させてもらいましょ」

大きく笑って振り返っていった。

いつもは私が、この手で撮るカメラである
が、当の御本人が出演ときは、カメラも撮
れない。急拠、京都の徳永氏に連絡したら、
欣喜雀躍、我が意を得たりと、OK。その彼
が、タクシーでかけつけてくる。私の扮装を
女房と二人、或いは私独りで、しきりに撮影
所広場で撮ってくれた。

「まあ辻村さん、カメラの方は任しといて。
近頃相当上達しましたからね。いい動きをと
りますよ」

と、頼もしい言葉。

嵐山へのロケバスが広場にとまる。いよいよ
出発の時は迫っている。

俄かスター、尾花ミキを縛って残虐

シーンに大奮闘のおそまつ。

小雨降る嵐山への道を、スタッフを乗せた
ロケバスがゆく。そのうしろから、木樵姿の
私の運転する軽自動車がチョロチョロと、女

房と徳永昭三を乗せて追ってゆく。

嵐山、高雄のパークウェイにかかった辺り
にある、鳥本神社という小さいやしろの裏山
が、目指すロケ地であった。ロケバスの一行
が降りたのに気づかず、バスのうしろをつい
て行って、Uターンした空バスに、あわてて
引返す一幕もあって、今日の主役スターは、
竹藪を背景にした、やしろの前に到着する。
「ドキドキするわあ」

と女房胸を押えるが、やるのは私。はたの
人間がハラハラしているらしい。

小雨降る薄暗い天候の上、竹藪の中ときて
は、黄昏に近い仄暗さである。

「どうぞよろしくね。まさか辻村さんが出る
とは夢にも思わなかったわ」

尾花ミキは一昨日と同じ扮装で、興味のま
なざしで私を見た。

「私も――。思いきって虐めてあげるよ」

「お手柔らかにね」

覚悟はしているものの、流石に彼女の表情
に一抹の緊張が流れた。

私は映画二作を通じて、いつも感じたのだ
が、緊縛用の縄が乏しいことであった。もっ
と使い古した縄や、手頃な縄が欲しかった。
今日も度々装飾へ出掛け、武ちゃんにも頼ん

で、山男の使いそうな古びた太目の荒縄を、頼んでいたのであるが、間に合わなかったと見えて、持ち込まれていたのは、真新しい荷造用の荒縄であった。仕方なく、適當の長さに数本きると、これを灰泥にまぶして黒く汚す。

「辻村さん、適當にやって下さい」

カントクさんは、すべてを私に一任したという風で、ただ一言それだけ言った。

ロケ地を見るのも今が始めてという私は、めまぐるしく構図を考える。

小高いところに生えている、太い竹藪の数本に眼をつけると、そこを使おうと心に決めた。

「こういうのはどうでしょうか。彼女を後手に縛って、縄尻を持って枝で尻を叩き乍ら、竹藪の方へ追い上げてゆく。足が滑って転ぶ処を、縄尻を引いて起こし、蹴上げて、あの太竹に縛りつける。足許はしっかり縛り、上体はすこし竹より離して縛りつけると体が前にのめって泳ぐでしょう。そのポーズで、小枝を鞭代りにしてビシビシ振りつける——」

「いいでしょう、その方法で——。じゃあ、早速、始めましょう。一、二度テストしますからね」



監督さんの命令一下、忽ち縛る目的の太竹を中心にして、バッテリー充電のライトが輝き、小雨では物足りない、ホースで雨を降らす準備が整い、カメラが角度をつける。

お堂の前で、私は尾花ミキを後手に縛る。

「痛い？」

「ウン、大丈夫——」

彼女は、粗末な継ぎはぎだらけのジュパン一枚の寒そうな姿。時季は初冬の小雨降る昼

下り。そうでなくても薄ら寒いのに、彼女はさっと脱いで両手を後ろに神妙に回した。

「女房の前で、どうもやり難いよ」

小声でいうと、

「でも随分理解あるのネ。いい奥さんだわ」

尾花ミキは白い歯を覗かせて、ニッコリ笑った。カントクさんは私に何一つ演技をつけない。すべて私のやる通り黙って、軽い微笑を浮かべてみつめている。

「どうすればいいの？」

尾花ミキが困った表情で私にきいた。

「かなり乱暴に扱うよ。ここから、あの小高い竹藪の辺りまで縄尻を握って、小突きながら追い立てて行くよ。一度滑る、それを私が荒々しく起こして、小枝でお尻をなぐる。果ては竹に縛りつけて、小枝でぶちつづけるという段取りだ。せりふがないから、悲しげな表情で、小枝で叩いた時は、苦悶の呻きをあげてのたち廻ればいいんだ。分った？」

「ええ、大体——」

三十人近いスタッフの前で、私達の演技は始まった。ストロボ御禁制だから、閃光も発せられぬ俤、徳永氏はしきりにあちこちよりシャッターをきっていた。既に私の脳裡にカメラ意識はなかった。私のカメラに対して、



さして懇切に指示も与えぬ俣、彼に任せていた。カメラへ向かう心の余裕がなかったといった方が正直である。

「ライトの伸びがききませんね」

カメラマンの吉田さんが、あきらめた様にカントクさんの方を振り向いた。

「バッテリーだから暗いな。じゃあ、歩いてゆくところはカットして、竹に縛りつけたシーンから行こう。辻村さん、いいですね」

つまり、私が歩いてミキちゃんを追っ立て行く長シーンに、ライトがついてゆけないのだった。カラーフィルムだけに、ライト位置が、非常に重要であったのだ。

折角のアイデア、忽ちオジャンで残念だが

致し方ない。前半を省いて、太い竹に縛りつけて力任せに鞭打ちするシーンから始まる。荒縄で後手に縛り上げ、別の縄で、竹より十数センチ距離をとって、体をつなぐ。足は両脚で竹を挟み込むようにして、しっかりと縛りつける。このポーズで、尾花ミキの体が前かがみに宙にうく。そうしないと、彼女のおしりを小枝でぶてないからであった。

もう私の眼中に女房も徳永氏もなかった。全神経は、この加虐のワンカットに凝集されていた。助監さんが手頃の、葉っぱのついた枝を折ってくる。

「ハイ、テスト」の声で、ライトが光り、ホースから天に向かって垂直に噴き上った放射水が、やがて激しい滝となって、私と尾花ミキに降りそそいできた。

私はもう必死だった。パシリ、パシリと彼女の体を中心にぐるぐる廻り乍ら、
「ウヌ、これでもか、これでもか——」

と、いつしか力がこもって、叩き続けた。葉が飛び散り、力任せに叩く小枝は、ミキの体で炸裂し、折れてはじけ飛んだ。棒だけになった生枝で、私は発止と叩いたのが、むき出しの彼女の裸の太腿に運悪く当たった。

「ヒューッ！」

と一瞬、絶叫が夕闇迫る竹籬にとどろいて必死にもがく彼女の臉から、ポロポロと熱い涙が滂沱と溢れ出た。しまったッと思ったが遅い。みるみるうちに真白い太腿の、その当った個所が赤く腫れ上ってくる。迫真力ありと雖も所詮は演技。私はその演技を忘れて、いつしか心はSMの真剣なプレイに没入し、深々と耽溺していたのであった。

「よろしい、本番いきましょう。辻村さん、もう少し顔を挙げて、ミキちゃんを身体で隠さぬようにして、ぐるぐる廻って下さい。ではいきますよ」

カチリとなる。カメラがジジとうなる。尾花ミキはテストの一発で、真から泣いていた。ポロポロと頬に溢れる涙は、強烈な苦悶と斗い、被虐にのたうつ、余りにもなまなましい姿であった。

出せといわなくても、呻きと絶叫が、のたうち廻るミキの口から、絶え間なく流れ、それが辺りの静寂の中に、一入切実に響いた。

私はもう夢中であった。

「ハイ、カット」

と叫ぶカントクさんの声で、ハッと我に還った時、新たに握った小枝の葉はすべてけし飛び、尖った枝先がとげとげしく、ささらの

ようになり果てていた。あわてて、縄をとくと、ぐったりと失神寸前の彼女は、ずぶ濡れの体を私に倒してきた。抱えるようにして、

「痛かったらう。御免、御免」

としきりに謝る私に、返事はかえってこなかった。

時間にして、この二分にも満たぬシーンの果してどこ迄が映画にうつるだろうか――。

しかし、この二分そこそこの間、私も尾花ミキも、全身全霊をこめて、演技を離れたSMの境地をさまよっていたのだった。

放心したように私はしばし、ずぶ濡れの俤でその場に突っ立っていた。

「御免なさいね、本当に御免なさいね。ひどいことをして……」

女房が尾花ミキの顔を拭いてやりながら、しきりに私に代って謝っていた。

「いえ、いいんですの。そんなに気になさらないで」

微かな羞じらいの笑顔が、やっと人心地にかえった彼女の頬に浮かび上る。

「痛かったでしょうね――。一度お暇の節、遊びにいらっしゃいね」

「ええ、有難う」

女同志のやりとりを、私は黙ってきいてい

た。

「辻村さん、本当に御苦勞様。じゃあ先に失礼しますよ。いづれあとで」

カントクさんが、表情も崩さず、いつもの柔かい微笑を泛かべた俤、私に手を振って去っていった。

「全部フィルムをとり終ったよ。いやあ、凄かったネ」

昂奮ぎみで、徳永氏はカメラを差出した。

「有難う、かなり暗いけど、開放なら撮れてるかも知れない。多少ピンボケでもネ」
礼をいってカメラを受取った私は、何気なく反射的に絞りを見て、呀っと思った。

シャッター速度六十分の一。絞り五・六。あッ、ダメだった。開放で絞り一・八の、三

十分の一でも判っきりしないのに、これは又どうしたことだ。バッテリーライトの光に欺

瞞され眩惑されたのか。近々と、広角レンズでうつす映画カメラと、遠くからの悪い位置

から撮すのでは、余りにも条件が違いすぎるのだ。何卒うつっていますようにとの、私の

願いも空しく、カメラは正直。その夜あわただしく現像したら篠の中のシーンはすべて白

ボテ。微かに側面で光るライトの光とその周辺の竹簾のみがボツリと黒く斑点のようになっ

つっているに過ぎず、尾花ミキの残酷の肢態は、白一色の奥の奥に、かすかに霞んでいるに過ぎなかった。この残念さは、どこへ持つて行き場もない腹立ちであった。

バスで別れ際、尾花ミキは、すっかり元の笑顔を取り戻し、軽自動車の私に窓から手を振っていた。可憐ないじらしさが、ぐっと胸をしめつけ、熱い塊がこみ上げて私の涙腺を刺激した。尾花ミキの栄光の座を、私はその時、心から祈らずにはおられなかった。

かつら衣裳をバスにぬいで来ただけの、薄よごれのグロテスクな私の顔が、バックミラーにうつる。

ドーランでどす黒く彩られた顔の俤、私は車を操って、徳永氏の自宅ですべてを洗いたがすべく、夕闇迫る嵐山の道を、数多の感懷を胸に秘めて走っていた。

(附記 十二月廿一日夜、大阪梅田東映の試写をかねたナイターの特別有料封切で、仲間が早速見に行き、私の五秒そこそこの、ラストに近い、回想シーンの演技を確認してくれた。是非なき所用で、未だに試写を見る機会のない私のため、彼はその夜おそく、ただちに知らせてくれた。奇巧の読者諸君、どうか辻村隆の迷演技を、しかとあなたの方の眼で確かめてください)



私の緊縛写真観 間宮芝利

私は若い女性の緊縛写真が大好きである。近頃は実際に手を下して女性を縛るなどということとは、戦前派の私にとって出来ない相談なので考えてみたこともない。戦争以前より集めていたコレクションは文献も写真も戦災によって一切失われてしまったので今は

何一つとして残っていない。

私は女の肌に傷をつけたり血を流したりすることは好まない。只若い女を縄で縛ることのみに没頭している。これは最初から現在に至るまで変わっていない。

服装としては完全な裸体か又は腰巻一つの裸体が最も良い。パンティ姿は余り好まない。芸者などの日本髪を縛るときは緋の長襦袢姿なども捨て難い。

髪型については最近余り問題にせぬようになったが、昔は日本髪だけを対象にした。そうはいっても矢張り長い髪の娘は私にとっては魅力的である。

緊縛度については、手首、二の腕、胸部、乳房、足等すべて縄が皮肉に没入（喰い込む）するほどの厳しさであること。乳房が縄目の間からすぐ飛び出している乳房責めを大いに好む。視覚的に強烈感があつて最高の美である。

横坐りにさせられて（片足立ても良し）女性のプロフィールの美しさ、哀れさ、哀艶切々たるその表情、これは何とも云えぬ妖しい美しさである。この場合うなじを垂れた羞恥のポーズがまた最高である。

縄で縛られた二の腕、手首、

などにも表情がなくては気分をこわす。殊に若い女性の足の指の表情は顔以上に大切である。縄目の痛さに反りかえった足の指は、最高の被虐美の具現である。

猿ぐつわは口から鼻へかけておおう方が良い。洋風の口や歯の間にかますやり方は好まない。材料は豆絞りか白い日本手拭が良く、タオルや色物は美観をこわす。

縛り方は必ず後手縛りに限る。

後手首は高からず低からずの高さで十分交叉して強く縄を掛けられていること。尚そのときの指の動きなのだが、握らずに開いていた方がよい。如何にも観念したといった指の表情が美しい。私はこれを観念型と名づけている。

縛り縄の材質は私が古風な人間であるためか、細い麻縄、白木綿縄（綿ロープ）、荒縄、この三種に限られている。太さは太からず細からず適当なものがよい。釣籠に用いるような極端に太いものは緊縛感を出せないのが好まない。映画などでは、よく極く太い縄をぐるぐる巻きに使っているが、緊縛感が薄くてまことに味気ない。それに、沢山の縄をむやみやたらと巻きつける縛り方は美観をそこない、全く頂けない。

これも映画やテレビなどでよく見かける縛り方だが、只乳房の下に二筋ばかり縄を掛けたような簡単なものは興味をそぐことが甚しい。やはり本式に背後に回した両手首をきっちり縛り、手首から首縄へとか、本縄（菱縄）又は縦縄を加えた縛り方が最も良い。縛られた女の体位での好みは、エビ責、逆エビ責、後手首を縛って吊す方式、柱に縛りつけること（それも成可く身体を柱から離して縄を延ばし柱に繋ぐやり方）、女六方など、いろいろ工夫してやってきた。若い頃の私のモデルは女中と妻の二人だったが、今は全く縛らず、専ら写真を鑑賞したり奇クを読んで楽しむだけである。

三、四年前の奇クグラビア写真で活躍したモデルの中で、絹川文代、梨花悠紀子、大塚啓子さんなどが素晴しく、本当に美しい緊縛感で目を楽しませてくれた。

モデルの方には、まことにお気の毒ではあるが、一層の厳しい緊縛感と縛られる女の哀れさ、痛ましき等が十分表現されるよう縄目の苦痛に耐えて下さるよう心からお願したい。私達ファンは、限りない憧憬と敬愛の念を以て貴嬢達の姿態を隅々まで鑑賞しよう。

□□□□□『ボクの責め方』遺稿□□□□□

＜古 寺 巡 礼＞

□□□□□宝 塚 二 三 夫□□□□□

〔レイ子の巻〕

昭和四十年はボクにとって最も活躍した時期といえるだろう。極寒の二月でも、愛用のフォードを駆って奈良や京都をはじめ、遠く兵庫県の山奥や北陸、山陰まで足を伸ばしたものだ。

一緒に連れていった女性は十指に余るが回数も一番多く又マゾっ気の最も横溢していたナンバー・ワンのレイ子のことについて述べてみよう。

レイ子はボクの行きつけの喫茶店Fのウェイトレス。

少女趣味のボクにとってぴった



りの、日陰に咲いた野の草のような十七才の乙女。ドライブに連れて行ってやろうかと誘うと、「いいわ」と二つ返事で、うれしそうに



OKをした。

ここは、オフィス街なので喫茶店も日曜日が休みになっている。

喫茶Fの前を待ち合わせ場所指定してボクは朝九時

に愛車を横づけにする。

日曜日の朝のオフィス街はおそろしい程静かだ。奈良から京都へ走らせて、南禅寺前の瓢亭で昼食をとる。今日はレイ子を馴らすため、主に車中でマゾ教育をするだけにとどめ、専ら名所を選んで走りまくった。この教育効果は十分であったらしく、次にF喫茶へ行ったときウィンクしたら「社長さん、マゾのこと書いた本を見せてエ」と、無邪気な挨拶をかわすほどに成長していた。

第二回目のドライブの約束をした日、「喫茶店で着ているお揃いのユニホームを持っておいで」と命じた



ら、レイ子はげんな顔つきで、「なんでエ？」と聞いていたが、ボクが「なんでもいいから、持ってきて」といったら、持ってくるんだ」と強く言ったら「ハイ」と素直に返事した。

これから、どんなことでも素直に「ハイ」と返事するように訓練しなければならぬ。このレイ子だったら、きっとボクの言う通りなるだろう。

本照寺というお寺は人気がなくボクの行動範囲としては恰好のプレイの場所である。レイ子にユニホームを着るように命ずる。胸に店の名前の入った制服を着るのは彼女にとっては、嫌なことだろう。だがボクにとっては興味のあることだ。

ウェイトレスとしてのレイ子、この乙女をお寺の中で縛り上げて



みたいのだ。勿論、狙いは脚にあるが、これはハダシにするだけで勘忍してやろう。

制服のままでもたもたしていると「素っ裸にして縛りあげるぞ」と、一発かます。「いや、いや」という文弥節が、ボクの耳を快くくすぐってくれる。

しかし、口では「いや」といっていても、両手はうしろで組んでいて、ボクが縛りやすいようにしてポーズをとって待っているのは

流石である。

「靴を脱げ」と言うと、素直に靴を揃えてハダシのまま、如何にも恥かしそうに土の上を歩く。虫の喰った古寺の本堂の中をハダシで歩かせると、白い素足だけが、浮きあがったように薄暗い中に明るく見えている。

やはり、この足の美しさはボクの狙いどおりだ。

ボクはこの足を、どのようにして責めてやろうかと、レンジ窓からのぞいていた。



映画通信

美津木 守

ピンク映画で緊縛シーンのある映画を列記してみます。

「変質魔」は、ある片田舎につきつき起こる婦女暴行事件。美しい妻がありながら、妻のけっぺき性のため欲求不満に陥り、若い婦女をつきつきに犯す男。この男は日頃はまじめな村の防犯係である。犯行の時はナイロンのストッキングで顔をかくす。隣家の人妻に扮する谷ナオミが、この男の真相を知ったために小屋へ連れ込まれ、裸にされて変な椅子（農機具のようなもの）にしばりつけられ、その椅子のまま宙吊りにされます。ナオミちゃんの魅力を満喫しました。

「残酷女医日記」は、三人の脱走犯が、ある女だけの病院へ押し入り怪我をした一人がキズがなおるまで居すわる。その間、三人の女医は犯され、いじめられ、オモチャにされます。怪我がなおって病院を出るとき、三人の女医はパンティ一枚の裸にされ、猿ぐつわを噛まされて後手にしばられます。

「乳房の密猟」は、祝マリがトロツコのレールの上でパンティ一枚の珍しい開股しぼりを見せてくれました。

「惨忍マル秘女責め」は、大きなテールブルをさかさにし、全裸にされた女が大の字に四肢をテールブル（座卓）の脚にくくりつけられ変態の老人にステッキでいたぶられます。手足の指が疼れんするさまをカメラはクローズアップします。

「鞭と淫獣」これは前回見なかった前半の部分を見ました。谷ナオミが裸にむかれ、首に鈴をつけられて、メクラのやくざの親分からなぶられます。

これと同じシーンを「女色のもつれ」で、辰巳のり子が演じていました。

「肉の競艶」ヤマベプロ、団先生の脚本。主演、谷ナオミ、祝マリ花木かおり、高月旬子とあるので期待して見ましたが、残念ながらがっかりしました。ただ女を寄せ集めて縛るだけという感じですが、テーマが面白かっただけに惜しまれます。緊縛シーンで一番いいと思ったのは、花木かおりがセーラー服をはぎとられ、パンティ一枚で地上一米ぐらいに宙吊りにされるシーンでした。

刺 青 讃 歌

江戸川乱走



ヤクザ映画の流行で、銀幕に浮かんだ毒々しく画かれた刺青を見る機会が多くなった。

しかし、その反面、強い者へのあてがれから、武者絵を背中一面に刺青して競いあった古きよき時代は、遠い昔に消え去らんとしている。

現在、江戸彫勇会として愛好者が集まっているとのことですが、老人の懐古趣味の集団で、若い世代には見向きもされぬ存在になってしまった。刺青がヤクザ者の代名詞と変化し、テキヤ的の肩から腕にかけての筋彫や、局部的の腕だけの刺青で、職業を誇示するだけの存在へ墮落していったのは、愛好者の一人として残念なことと思

います。

女性の肌を彩る刺青には、女体のふくよかな色香と陰湿の耽美性が交錯して、その作品は見事であればあるほど、民族の伝統、古典美の遺物として、消滅することなく、持続していただきたいものだと思います。

近年、外国のTATTOOが紹介されていますが、単に異国趣味の局部的刺青が多く、日本の背面全身の構図と比較して何か物足りぬ子供の写し絵的作品の集積のような感じを抱かせます。

山原清子のカラー分譲写真の数葉を手にした時、本物の刺青の重厚さに一瞬ただ息を呑むだけでした。朝桜楼国芳の「玉取り」の版

画を刺青的に図案化したそれは、玉を手にした腰巻一枚の海女と波との構図は、見事な傑作でした。やや陰のある流し目の美女の顔。大胆に裸身をくねらせる海女の肢体。定めし名ある作者の最高作品だと思います。

しかし、右尻下部から腿にかけて未完成らしく、波間の千鳥型の空間に作者名が入っていないのを見ても、完成作品ではないようです。海女の腰巻が、国芳の版画では緋色であるのに、これは筋彫りだけで朱が入っていないのは、作者の意識的配色であるとしても、白い裸身と紺青の波との対照をさにおいて、緋の腰巻である方が、より効果的であると思いますが、如何でしょうか。

山原清子さんが如何なる職業で現在、如何なる生活をされているのか知りませんが、出来ることならば、若い女性の身として、永久に消えることのない刺青で体を飾るまでの告白手記を、発表していただきたいと思います。

それにより今後、第二第三の山原清子が発見され、または誕生して、民族伝統美の静なる再現に発展したいものです。

<短歌>

「正坐」

関 輝 穂

縛られて冷たき床に正坐する白
い股さえ赤く色そむ

○ 首繩にうつむくことも許されず
かたく目を閉じたただ正坐する

○ 縛られて押し倒されればあわれ
にも空を蹴る足指反りており

○ もがく足ひしと吊られて背に折
られ手首の縄につながれてゆく

○ 細い腰折れんばかりの弓なりに
曲りに曲る逆エビの責め

○ 足首を手首の縄にななぎゆくふ
るえる肌に縄しまりゆく

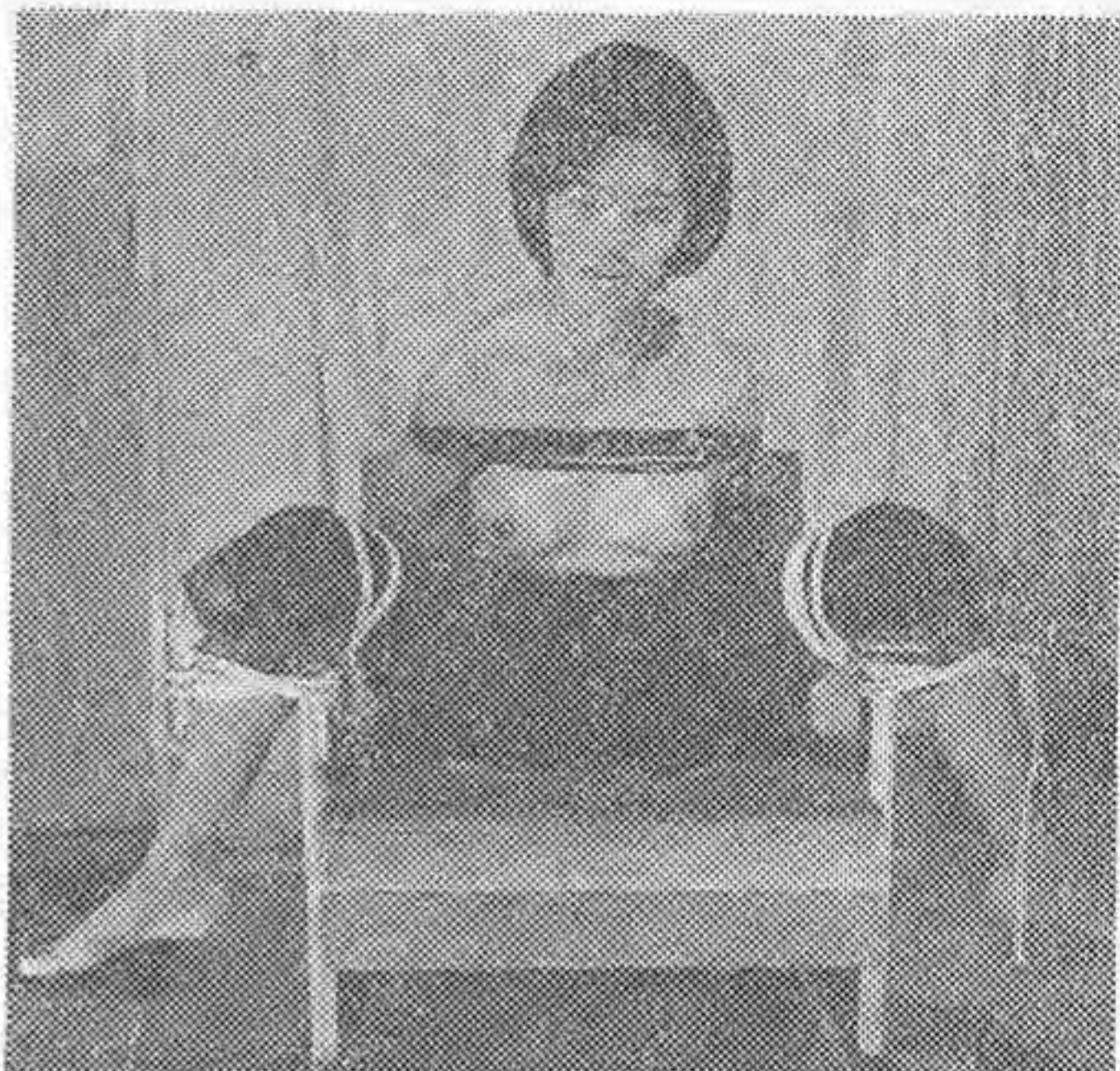
○ 練絹を思わすやわき白肌に縄ふ
かぶかと喰い込みて消ゆ

○ ぶっくりと乳房いまにも飛び出
さん激しき責めに顔はうつむく

○ 縦横に生れたままの素裸をいま
しめられてあえぎつついぬ

忘れ難き梨花嬢

風流極道軒



十二月号で、辻村隆先生が「11 PM」御出演後、梨花悠紀子嬢から電話ありたるよしの記事を読み新年号「サロン楽我記」にて、先生、梨花嬢とプレイなされましたるよし、しばし垂涎・嫉妬の思いにふけりました。

梨花悠紀子——この名は、奇クのある限り忘れられない名でございます。

川端多奈子嬢に発する奇ク登場モデル諸嬢、厚狭春江・伊吹真佐

子・中富綾子・杉美美・村田那美子・坂口利子・萩千恵子……以下綺羅星の如きなかで、ひときわ私の心をそそりましたのは、昔(！)梨花嬢、今、安井女史なのでございます。

私には癖がございまして、よい写真はすぐきりとしてコレクションにしまします。よって、さだかにはわかりませんが、多分昭和三十四年の十二月号だったでしょう、「縄に憑かれて」という最大

のホームランがございます。今眺めて、これに勝る緊縛フォートが果してあるでございましょうか。責められる女の美しさが、これ以上に済みでた作品はございますまい。又、次のようなフォートもございます。

座敷、柱。うすべり半畳、竹。両手を左右に、胸元に三筋。足をだらしなく崩して、ぼんやりと放心したように見開かれた眼。腰のあたりを僅かにおおっている布。同じポーズの二枚のうち、一枚は初々しく、他の一枚は全身の力を抜いているフォート。しかも、縄のかけ方、周囲の小物類の乱れからして、何かを現わしている、まさに貴重なフォート。

梨花嬢については、書きたいことが山ほどございますが、ただ今日は辻村先生にお願いがございします。梨花嬢が恋人に去られましたることは諒解。その諒解の上で、現在の梨花嬢の艶姿を一目見たいのでございます。これは私のみでなく、奇ク多年の愛読者であれば心で必ずそう思っていることでしょう。

梨花嬢を女として成育させたのは、辻村先生であり奇クではないでしょうか。そして女が、一番美

しいのは、新妻……或いは、一児の母となった二十歳代の年頃こそしみ出す美の花盛りなのではありませんまいか。

誌上にのせることが不可能ならば、せめて、分譲写真の片隅にと、辻村先生のコレクションから梨花愛好者におわち願うことはできますまいか。

現在の平凡な生活を乱されたくない——と言われる悠紀子嬢の気持……。十分理解しながらも、奇ク・オールド・ファンである私たちには忘れられぬ人であり、二十五歳の現在の梨花嬢のヌードに、一目にても接して見たいと思うのです。

梨花嬢よ、すこやかなれ。そして願わくば、御夫君ともども奇クの愛好者とならせたまえ。そして私達に、再び楚々として比類なき清纯のポーズを(清纯とは、未婚・既婚を問わざるもの)現わし給え。

最後に、新年号八十九頁葛西六郎氏の御意見、拙文(十二月号)へのものと存じまするが、まことに御卓見、感服。あらためまして私の意見をよりほり下げて申し上げたいと存じますが、本日はこれにて。



(第五十七回)

辻村 隆

別掲の様に、緊縛指導も病こうもうに入ってしまった、遂々『元禄女系図』のワンカットに俄かスターとしてかり出される羽目になっちゃった。こうなればハプニングもいいところである。

この処、異常性愛路線についている映画各社は競作で、やれ嗜虐だ被虐だ、レズだ、ホモだと、盛んに私達の分野に浸入してきているが、奇クの様な、特異な存在の雑誌が、俄然スポットライトを浴びて、企画や宣伝の方でもかなり読まれているというのは、喜こんでいいのかどうか——。余り調子づいていると、ドカッと、そのウラ目が出て、映画のとばっちりを受けて、怖い目が光り始めないとも限らない。

昭和元禄ともなれば、何かゆきつくところまで、ゆきついた感じで、この次に来るものはいったい

何か？ それを思うとウカウカしい調子ばかりにものっておられない感がある。本年も既に東映で、異常性愛の記録ものや、そのものズバリの題名の『責め地獄』という企画もあって、執れ又、或はお呼びではないかと思うが、こうなると私の本職も一体どれが主流か怪しくなってくる。

野坂昭如氏や陳平氏の如く、その時流をうまく擱んで泳ごうというような気持ちもサラサラなし、といって、好きな道なれば、お願いされたらジツともしていられない。

そろそろ私も多角経営にかかる腹づもりでもしなくてはならないのだろうか。

金原奈加子さんのハントはよくよくどういうものか縁がない。前回半分許り書いた処で『元禄女系

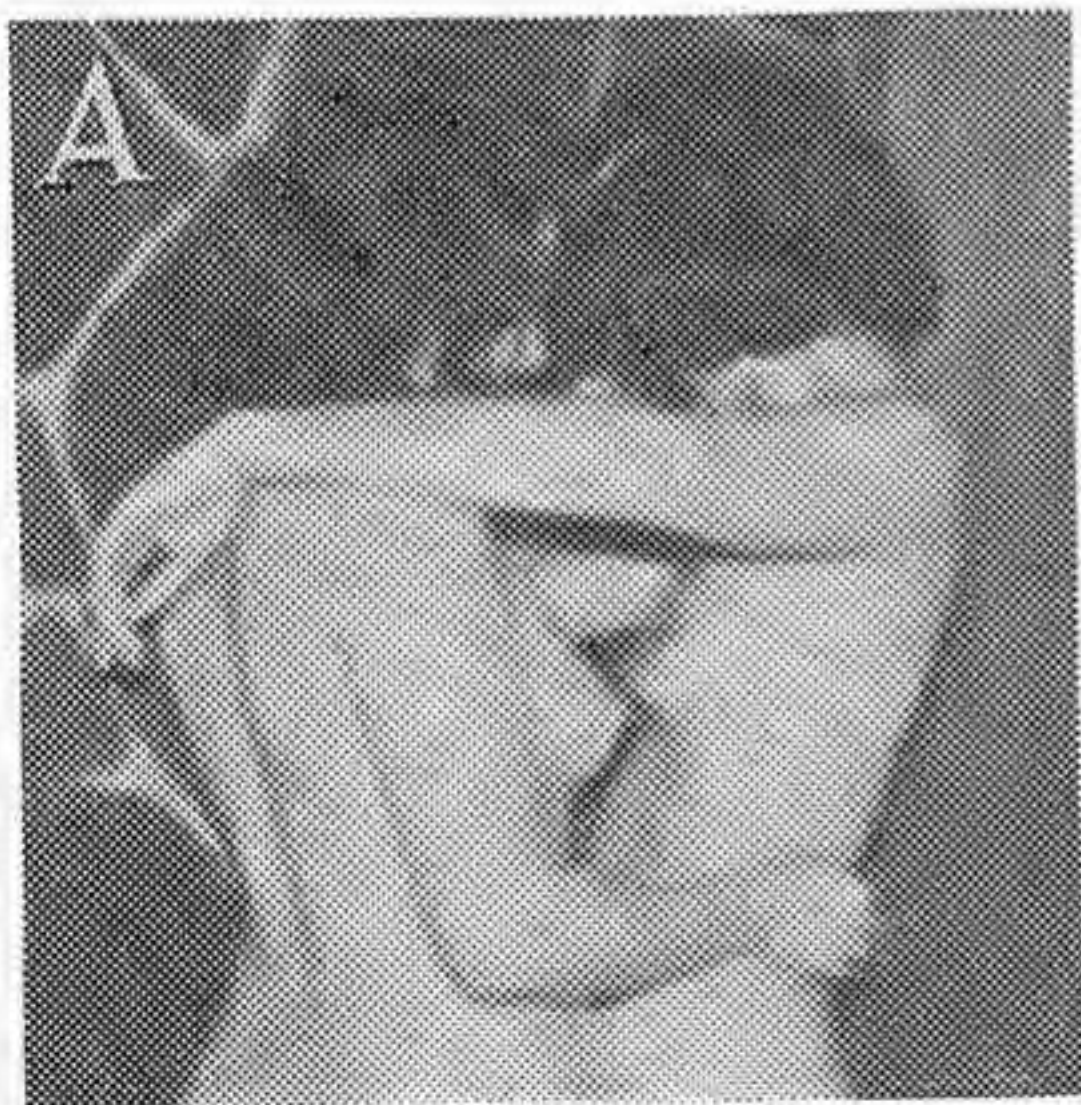
図』に変わり、書き続けるつもりが東京より遥々賀山秀男氏とプレイしにきた、志摩桜子の出現で、忽ちその方に心変わりしてしまつて、又ぞろ延期ということになった。カメラ・ハントしてから、かなり日数が経つてくると、段々とい意欲を失って行く。折角、撮ったことだし、数奇な運命の波を泳いでもいるので、是非一度は書きたいという気持ちは、強い娘なのだ、最初ハントしたフォトが殆んど撮り損なつて、踏み出しでつまづいてしまうと、どういふものか、妙に盛り上がった気分が削がれてしまう。

それに加えて正月もあと数日という年の暮、ひょっこり左近麻里子さんから電話があつて、11PMや映画の方も御存知らしく、一度是非新年勿々会いたいといつて来たので、鬼六氏との対談の熱海の夜以来なのでその方に既に心が走っている。そんなことで、或は又ぞろ、金原さん、オクラになるかも知れない。

左近麻里子も何か誌上をよく賑わしているようだが、よく考えてみると、私との一対一のプレイは未だ一度もないのだ。従つてカメラ・ハントとしては書いてはいないし、大いに意欲をそえられる所である。今年も又私にとつて、大いにウケに入りそうな卦が出ている。

谷山久美子さんとの約束も、その後ののびのびになつていふし、考えてみれば、ホンニ倅せな男かも知れない。

東映の撮影所へ『刑罰史』で日参の頃、知り合つた人で、奇クの読者でもあり隠れた私のファンであつた女性





と、過日又、撮影所内でバツタリと出会った。いつかこの欄でも触れたことのあるくだんの女性は、その日二、三才ぐらい年下の娘と一緒にであったが、私が『元禄女系図』にタッチしていると聞いて、午後からセットへ覗きに来た。

その日の撮影が終わって、午後五時過、私の車で一緒に撮影所をあとにしたが、車中しきりにカメラハントの女性の、あの人この人の噂をききたがり、果ては住所を教えてくれという。

連れの女性に気付かれぬよう、よかったらプレイしないかと水をむけたら、女同志のプレイならO・Kで、特に浅井優子や、梨花悠紀子となら、是非やりたいから、紹介してほしいとイヤに熱心なのである。

ところが彼女の話をよくよくき

いていると、それがどうやら近頃流行りのレスボスの関係を結びたいらしい口吻であって、何も私という男性に興味があるのではなくて、M性のある、私のハントした女性にすぐく惹かれていたらしい案配であった。しかも虫のいいことに、男性がハタでウロウロされたら気が散って困るから女同志二人っ切りでプレイしたいなど言うに及んで、まったくアホらしくなってきた。私という人間を利用して、レズの甘い汁だけを吸おうという魂胆らしい。

その場合は適当にあしらって、そのうち、紹介してやるよといったら、すっかり喜んでしまつて、い

いものを見せますわと、ハンドバッグの底から取り出して押しつけてきたのが、掲載(A)のフォトである。自分で苦心サント何とかDPEしたらしいのだが、少

々ピンボケで、顔も判つきりしない。向いあって接触している女性が、実は今一緒にいる子よと、声をひそめて、頬を紅潮させて囁やいたが、一向に感興も湧かなかつた。むしろ後部シートでおとなしく坐っている女性の方が、レス気が少ないように見受けられた。

最近のレズ流行の風潮を、まざまざと見せつけられたヒトコマであつたが、別れ際、奇クにのせていいかと聞いたたら、意外にも嬉しそうな顔をして、ええいいわと仰有る。向って左が彼女、右が年下の女性であるが、下半身の露出シンは、残念ながらカットしました。念のため。

× × ×

同好の仲間から、SMカメラ・ハントの女性ハントのコツ? といったものをよくきかれる。コツといつても私の場合、そうそう足マメにして歩き廻っているわけでもない。二十年以上の奇クとの馴染から、箕田氏から紹介してもらつたり、ハントした女性からの伝手であつたり、モデル志望の女性の手紙を回してもらつたり、同好の仲間が連れてきたりで、私自身のガールハントは幾許もない。唯、青木順子、秋山夫妻等の場合のよ

うに、これと思つたら積極的に行動することや、ハントの辻村隆というイメージで、私に書かせてやりたいという皆様の親心? の集積がなくなつた次第で、気がついたら四年近くも続いていたということである。

その代り、一旦、私と交際つたら、書かれやしないかという悪名も売つたわけだが、魔子のように三年間じつと辛抱した例もあるのだから、一概に誰でもというわけでない。

掌中にあたためている夫婦プレイや、書かずにいる女性等も十指に余るが、相手によってであるから、どうぞ気軽にSM族は御交遊下さい。風流極道軒様からも、夫婦プレイのお誘い載いて居ります。一寸遠隔の地。執れ春にでもなれば一度相見えましょう。

尚、魔子で想い出したが、近頃大分Mづいて来たらしく、彼女を紹介した大阪のE氏から、過日、十数葉の魔子の緊縛フォトが送られてきた。結構いい線にいつてゐるらしく、ここに掲載(B)したフォトはその一枚であるが、仲々どうして、すっかり被虐の相になつてゐる。もう一度プレイしなおしてみようかしら。

羞恥責め

「あぐら縛り

七態」

安井喜久子



を腰に坐りました。コールドクリームでお化粧を落とす私の姿を昂ぶった目つきで眺めながら、夫はロープを手にして待っています。私がのんびり手を動かし、いますと、夫は私の肩越しに、顔をのぞかせてきます。

「さあ、早くせんか」
「そんなにせかさないで。これから全身美容にかかるのよ」

私の返事もききいれず、待ちきれなくなった夫は、矢庭に私の左手を後に捻じ上げるのです。縛りプレイのときは、いつも文字通り身体中すみずみまで責められるものですから、私は入浴をすまずと

剃毛されたところに至るまで念入りに化粧するのです。

今日はどんな変わった縛りと責めが待っているのか、期待と不安の入り混った、心の昂ぶりを静めるかのように、私は自分から両手を揃えて背後に回しました。

後手首をロープで縛り終えた夫は荒々しく仰向けに倒そうとします。湯上りのまま、まだほてってピンク色に染まっている私の身体は、あられもなくころがり、「いや、いや」ともがく両足は徒らに空を蹴るばかりです。そんな片足を捉らえて、す早くロープを巻きつけた夫は馴れた手つきで他方の足首を引き寄せて交叉させて強く縛り上げてしまいました。

膝を合せようとする私の意志とは反対に、両股を思いきり開かせられて前屈みに押さえつけられ、極端に屈曲させられますと、さすがに私も息苦しくなってきました。

「あぐら縛りだわ」

両膝をピンと左右に開いて、括られた自分の両足首が目の前に迫ってくると、私ははじめてあぐら縛りに気がつきました。今まで幾度となく経験し、そして一番好きだった股間縛りが、

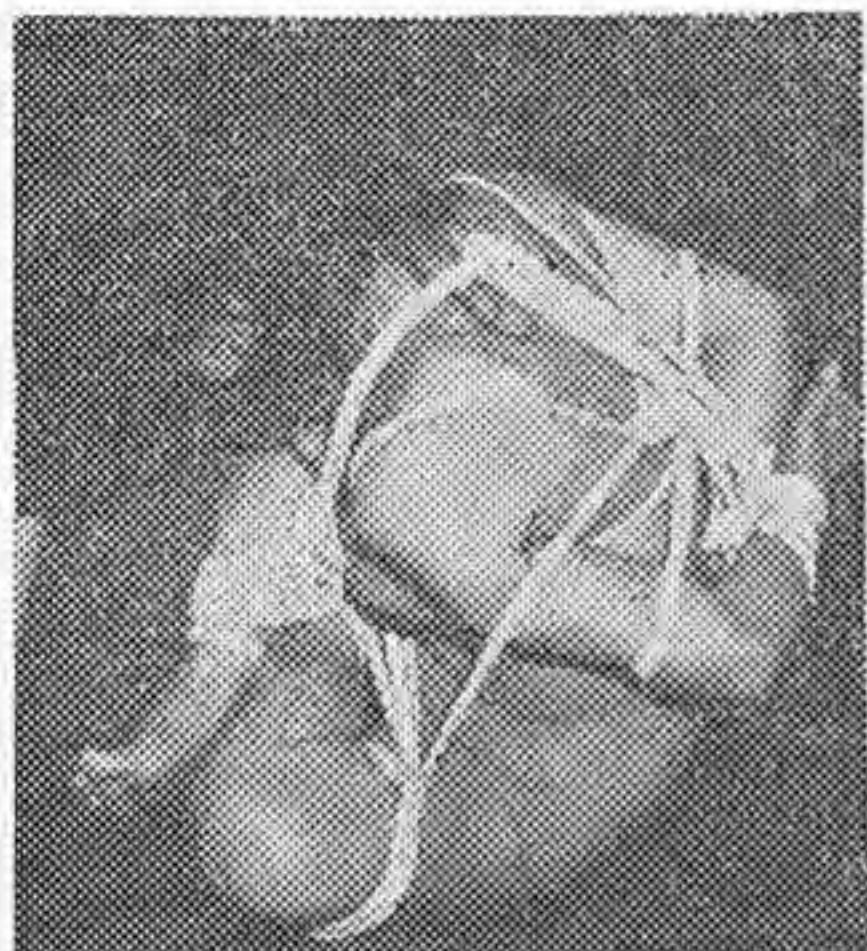


何処で覚えてきたのか、巧みな夫の縄捌きで次々と進行してゆきます。

何処かで他の女性とプレイしたのでしょうか、何のためらいもなく、次々とスムーズに縄が私の肌にからみつきます。心の中でその変った縄の感触を快く反芻しながら、その刺戟に満足しました。気がついたとき、ロープは私の柔肌をひしひしと締めつけ、完全なあぐら縛りになっていました。

縛り終った夫は、ソファアに腰を下して、ころがっている私を眺めながらビールを飲んでいたので、細いロープは肌にひしひしと喰い込んで痛くてたまりません。

夫の巧みな飼育でMとして次第に成長してきた私は常日頃今までの縛り以上に、より多くの痺れるような刺戟を与えてほしいと秘かに心の中で求めています。今夜はその約束の縛りプレイを敢行する日です。これから始まる甘美なプレイを思いうかべて胸をわくわくさせながらお風呂へ入りました。身体の隅から隅まで念入りに洗って鏡の前にバスタオル





「あなた、何処でこんな縛り方覚えてきたの、きついわよ」
夫はビールをあふるばかりで聞いているのか、聞いていないのか一向、返事をしてくれません。
「あなた、痛いワ、ほどいて」
私は甘えてみました。でもこの縛り、あぐら縛りには私は気に入っていません。両股を左右に大きく開かせられている、無理矢理そ



うさせられているというのは私の大好きなタイプなのです。

「SMの先輩にとっては古い縛り方だが僕にとっては開発型の一つだよ。痛いからね、起こしてあげようか。解いてあげてもいいよ」

私はあぐら縛りの苦痛からの逃避と快感からの解放という、複雑な気持ちにかられました。でもそれは、はかない幻想でした。起こしてくれた夫に感謝するどころか、女として最も恥かしい苦痛がはじまったのです。それは女として、見せてはならない部分が、どんな体位に変えても夫の目の前に全く露出してしまいうからなのです。

「いやいや、こんなポーズいや、勘忍して、お願い」

私の懇願ものかわ、夫は、にやにやと、やに下っているのです。

「このポーズが嫌いなら、ほらこれならいいだろう」
右足を挙げて転がしてくれませんが考えてみれば何分両足首があぐら縛りに固定していますので、やはりそこが露出するのには変りはない



りません。

いつの間に準備されたのか、カメラが向けられ、ストロボの光る一瞬を、夢うつつの中で感じとっていました。カメラにうつされていると思っただけで、身体中が燃えるようにほてってくるのです。

あぐら縛りで体位が変る毎に、上から眺め下からのぞくカメラ。

それからプレイ。それはローソクか割箸を用い、夫婦だけの秘密のひとつ。点火されたローソクは目頃管打ちに慣らされている私にとって、瞬間的な熱さ



の苦痛は満足そのものでした。

最後の責めは「膣の括約筋の発達のために」と新婚当時より教育的な飼育された方法で『花と蛇』の静子に負けない能力を発揮するために続けられました。私は今までにない恍惚の世界をさまようことが出来ました。

でも、若しこの場面に夫の他に男性がいて複数で責められたり、眺めていられたりしたら、快感は二倍にも三倍にもなるのではないかと思います。

そんなときは私は本当に感泣してしまいそうです。夫と最高のプレイ場面を眺めていただいてもと考えると、ペンを持つ手もふるえそうです。

淫虐魔の夢 真柄 剣平

前後二回にわたって送っていただきました安井喜久子夫人と左近麻里子嬢の緊縛写真(特に安井喜久子夫人の猿ぐつわ全裸縛りは秀逸でした)が、あまりにも私の好みにぴったり合致し瑞々しい悦虐美に溢れておりましたのは望外の喜びでした。

これらの凄艶妖美な悦虐責めの写真眺めておりますと、又々次のような貪欲な願いと空想が入道雲のようにむくむくと盛り上ってくるのをどうすることも出来ません。稀代の好色悦虐漢と自認する私の願ひでありますから、その実現は無理かと存じますが、完全でなくとも許容される範囲内で何とか素晴らしい悦虐作品を完成いただけるようお願いいたします。

モデルは安井喜久子夫人に限ります。乳房の上下を厳しく緊縛して出来るだけ豊満になるようにして下さい。猿ぐつわは必ず着用のこと。背景は床の間で豪華な方がよいと思います。

△塩水責めの苦悶▽ 四枚組
股間縛りにされた艶麗な全裸身

を床の間の上に仰向けに寝かされヤカンの口から大量の塩水をゴクンゴクンと飲まされて苦悶している令夫人の羞辱地獄秘図。床の前には数人の野卑で好色な男たちがじろじろと眺めている設定。

一、素っ裸のまま生ゴム製のおしめカバーをしめさせられた令夫人があぐら縛りにされている。

二、おしめカバーがはずされ、まだ濡れていないオシメが畳の上にひろげられており、猿ぐつわがおしめカバー代りにされている。

三、股間縛りにされた令夫人が仰向けに床の間に寝かされ、鼻をつままれて無理矢理、ヤカンの水を口の中に注ぎ込まれている。

四、空になったヤカンが畳の上にあるのがっており、夫人は洗面面の置かれてある床の間の柱へと引き立てられてゆく。全裸の身を恥じらいながら引かれてゆく夫人の哀れにも艶な被虐的ポーズの美。

△羞辱地獄の柱立縛り▽ 四枚組
床の間の柱を背に、縄目以外は糸もまとうことを許されぬ全裸身を晒して開股立縛りにされた美

しい令夫人の足元に置かれた淫辱の洗面器が不気味である。

一、厳しい股間縛りに麗身をあえがせつつ、床柱を背に立縛りにされた令夫人の正面の姿に向って、野卑な嘲笑を浴びせる男達。

二、股間縛りの縄だけがはずされ後手からお尻の割れ目を伝って、蛇のように垂れ下った縄尻が畳の上にとぐろをまいていく。

三、令夫人の両脚が思いきり開かれ、足元にはホーロー引きの洗面器が無造作に置かれている。

四、ポーズは右と同じであるが、たっぷり塩水を飲まされて、ぶっくりと膨れあがった下腹に鞭(または物差し)が立てられている。

以上、各々四枚一組の写真場面を二組考えてみました。私が夜の寝床の中で空想しましたものは、もっともっと凄く露骨なものばかりでしたが、それではとても実現は困難だと思い、その中から比較的無難なものを選び出してみました。あくまでも私達見る者に無限の妄想を働かせてくれるような余韻のあるものが欲しいです。

令夫人がS派人士によって、いじめにいじめ抜かれている無惨美の場面も結構ですが、これから、どのような羞かしめられ、責めら

編集部だより

○寄稿家、執筆者、読者の方々から多数の賀状を頂戴した。誌上を以て厚く御礼申し上げます。本年も皆様の御鞭撻に依って一層充実した内容にしたいと願っている。

○今月号から連載を開始した『ピエロ床屋』の筆者鬼山絢策氏は嘗て本誌の全盛時代、昭和二十八年九年頃、名作「らぶ・すれいぶ」をはじめとした一連のM作品によって一世を風靡した作家である。

○現在連載中のS小説の一大傑作団鬼六作「花と蛇」に充分対抗出来るM小説の連載作品として構想も新たに、創作意欲を激しく燃やしていられる由なので、必ずや万天下のMファンの心情をゆさぶり続けることだろう。

○M作家としての鬼山絢策氏、馬族保氏のカムバックに引続いて、同じく十数年前に活躍された女流作家松井籟子女史から久方ぶりに便りを貰った。暇が出来たら書いてみたいということなので、前記二氏と同様、再び誌上に登場して頂けるかもしれない。

○読者通信以外の原稿(奇クサロ

CM・改作遊び

原 喜 一

れるのだろうか、と見る者の胸に凄惨な空想を抱かせる余地のあるものが、より一層興味があり胸に迫ってくるのではないかと思えます。緊縛のきつさ、責めの厳しさ

も勿論大いに必要ですが、私は次に移ってゆく無限大の汚辱への含みが大好きなのです。興の赴くままに他愛のない世迷い言を書き連ねてしまいました。

をすぞす——。一例をあげる。

京美人を、舌でみるよな

しゃぶしゃぶの味

祇園すえひろの「しゃぶしゃぶ」は、

今や世界三十カ国の人々の話題にのぼっております。

「しゃぶしゃぶ」は見て美しく

とてもおいしい滋養100%の、不老



イメージ画「捕獲」赤ちゃん

若し実現が可能でしたら安井喜久子夫人を煩して素晴らしい傑作を完成して、実社会ではとうてい得られない陶酔境をせめて印画で味わせて下さるようお願いします。

長寿回春の核料理であります。

秘伝の「タレ」によって

召し上って頂く味は

「とろけるような」の

一語につきます

右は、京都名物、祇園の、しゃぶしゃぶのコマーシャル。

これを、素直に読んだのでは、

つまらないけど、いろいろの読みかたがあるんです。

第一に、しゃぶしゃぶという、コトバの語感の、おもしろさ。

京美人を、舌でみる、という意味深長。

とろける、とか、タレとか。

タレというのは、ボクたちのグループではネクタールのかくしと

とば。タレと呼べば、いくら人前で堂々と発音しても、誰にもとが

められないのでベンリ。

ついでながら、大きいほうを、バナナと呼びます。このしゃぶ

しゃぶを、ボク流にホンヤクした

ケツ作があるが、ちょっと公開は不可能。でもとても楽しい。

ンの原稿を含む）の御投稿は必ず原稿用紙（四〇〇字詰）を利用願いたい。尚、原稿の返却は原則としてしてないので御諒承おきください。

○夫婦プレイの御照会並に御申込モデルの御応募など多数頂戴している。努めて期待にそうよう取計っている。今後共御遠慮なくお便りを寄せて下さるよう、お待ちしている。

○昭和四十二年一月号以降から本誌に連載している「花と蛇」を特集号として刊行してほしいという要望や何時発行するかという問合せが殺到している。筆者にも諒解を得たので、近い中に企画しようと考えている。いずれ概要決定次第誌上に予告する筈である。

○大方読者の不興を蒙りながら読む雑誌として再発足して以来、地道な精進を続けてきたが、お蔭で牛歩の歩みではあるが一段一段梯子を上ることが出来てうれしい。常連の作家は新しい年を迎えて一層のハッスルを約束してくれてい



いいたい放題

奇クサロンの

投稿に思う

金剛敏三

最近、奇クサロンが言いたい放題で面白味が増して来た。

だから俺も言わせてもらおう。

『花と蛇』に寄せる不満や賞讃。

賞讃の方は別として、不満があったとしても、それをだらだらと記して何になる。

十分満足して、それを楽しむ読者の数の方がいかに多いかを、不満たらたら書く前に、自分自身ヨーク考えてみる事だ。

いや、そんな事をすれば近親相姦だッ。やれ、そんな事をすればエロチシズムは消えてしまう。グロだ、ナンセンスだ。そういう事は不満ではない。不満なら自分なりの、ああなあってほしい、こう進めて貰いたい、と、アドバイスのない方があってしかるべきだろう。二、三年前はこの『花と蛇』に対して、毎号のようにアドバイス的な記事が掲載されていたし、

事実、団氏はそれを採り入れている所もあり、鬼六談義で、氏も読者のアドバイスを求めているではないか。

奇クに『花と蛇』あり、次いでカメラハントあり、なのだ。「地に落ちたか花と蛇」だど？ 落ちたくもならあ——なッ。足掛もう八年間、頁数にしても相当の枚数になる訳だ。オギヤーと生れた子供が学校へ行く様な長い年月である。作者も小説の成行きに不安も持つであろうし、ストーリーに行詰まりも感ずるだろう。

かりに作者が、適当な所でこれを切上げてしまったら一体どうする。今迄それによって満足していた読者が一斉に「残念だ残念だ」をくりかえすに決まっている。

それを読むだけで満足している読者に不安をあたえる様な書きぶりは、やめてもらいたい。

『花と蛇』は読物であって小説ではない、なんてメイ言を、長々と書いていた人がいたが、こんな事もどっちでもいい事なんだ。個人個人がどう解釈しようとする自由だ。泣こうと、笑おうと、他者の喰入る所ではない。学校の教科書ではないのだから、全て同感、同答でなければいけないと言う理由は全然ない訳である。

奇譚クラブとは何か！……奇譚の文字の通り、同志達のものめずらしい体験や事件を記したる書物である。

本文は十二月号の『SMエッセイ』加藤氏に対しての、私なりの意見である。

「食べる」「飲む」いいんだ、それでいいんだ。それに興味の無い者はその部分は読まなければいいんだよ。誰が付けたか「神酒」なるもの所詮小便だと言えは小便に決まっている。何も今さら、あれは汚ないものだ。飲むものじゃない、と言ってみた所で何になる。ただ、フェティッシュの人間がこれにみる夢を破るだけにしか過ぎない訳である。

SMに興味のない人間に、縛りがどうの、鞭打がどうのと言った所で、苦しいだろうに、痛いだろうに、

うに、と言う位ののもんで、その中から何ものをも見出そうとせんのだから、所詮、のれんに腕押し、の形になってしまふ。ましてや苦痛をとまなうとなれば嫌がるに決まっているではないか。それによって結婚の夢が破れたとて、奇ク存在になんの関係がある。「人を見て法をとけ」M的な女を見出し得なかったのに、自分だけのサディズムに満足覚えようとするところに責任がある。

『冬子の日記』その他で、M的な内容のものを主とした作者がいたが、一読者が誌上からつき出たやうな事も止めようじゃないか。覚えのある人々も居ると思うが、「あれは女性名で書かれていたが本当は男の人が書いてるんじゃないか……？」というような内容の文が、読者通信に載った時からピタリとこの作者の筆が途絶えてしまふ、残念な過ぎりであった。ずいぶんと冬子を羨ましく思った読者もいた訳だ。

「冬子よ、逃げたりしていいので又顔を出してくれ。またクリスマスがやって来るイブの夜を、思出しておくれ。お前の主人が責める事が出来なければ、この私が、代

映画「花と蛇」への一考 板橋高志

小説「花と蛇」は大変な好評を博しているが、それに伴い、独立プロ、所謂ピンク映画で二、三年前から盛んに『奇く連載、花と蛇より』という肩書きの付いた題名の、縛りを主体にしたものがたびたび上映されている。

私も、花と蛇のファンなので、一番初めの紫千鶴さん主演のものから、大部分のものを期待して見ているが、一向に原作に合ったものは出来ない。そこで奇く出版社にお願いする。原作と同じもの、と言っても、これは不可能であろう。そこで出来る限りそれに近いものを貴社主催で作ってもらいたい。多くの小説「花と蛇」ファンは、それが出来る事を希望しているのではないだろうか。

又、製作費の面で出来ないものであったならば（そう言う事は無いであろうが）、奇く愛読者からの投資を呼び掛けてはいかかかと思う。映画が当れば（もちろんと思うが）その利益を配当すれば良いし、その他どうしても不可能ならばプロダクションに頼む。

それに原作は今もなお続いている非常に長いものであるが、数巻に分けて行なえば良い。一本で終らせようとしてもこれは本当に不可能で、もし作ったとしても価値は薄らぐであろう。

さて、台本であるが、これはもちろん原作者である団鬼六先生に映画風にアレンジしてもらう。

出演並に縛りは辻村隆先生。出演女優であるが、これは読者カメラハント等から適任者を選ぶのが一番である……が、私はピンク女優で一つ考えて見た。参考にすれば幸いである。

遠山 静子Ⅱ美矢かおる

桂子Ⅱ祝 真理

野崎 京子Ⅱ谷ナオミ

美津子Ⅱ適任者見当らず、

ぜひととも十七、八才の新人を使用。

村瀬小夜子Ⅱ水咲陽子
新しく入るであろう千原美佐江は京マコ。

以上であるが、切に切に本格的SM映画「花と蛇」が出来る事を毎日、夢見て、筆を置く。

りに冬子を別の場所で責めてあげる」

ペンネームを変えて投稿しているにせよ、残念でならない。『冬子のクリスマス・イブ』が想い出される。

いいたい放題の場だからと言えばその通りだが、少しは押えるべき所は押えて行くべきだと小生は思うのだが、いかがだろうか……？

一般の書物や辞書の中にないものを見つけ出し、この実社会にある

りえないものを作り、考え出して行くのも、我々同志の希望であり喜びなのだから、現実に近いければ近いで面白く、又、離れれば遠く離れたで、その面白味もあると言うもんだ、それぞれ自らの夢をみて……。他人の夢を壊すのは止さうではないか。

我 死するとも

我 道を行く

武蔵



イメージ画 「サアお飲み」 西・アキラ



—菱縄マニアの

くりこと—

一月号を

読んで

早木 夢二

一月号を読んで、とにかくこの一年の多幸ならんことを祈る心、切なるものがある。先月は並んでいた店頭に今月は見当たらないということは、売り切れたのかも知れないが、すぐに例の「自粛」か？と思ってしまう淋しさは、永い年月に亘って、奇クに託した生活の一面を持つものとして、はがゆい限りである。

「SMは縛りや拷問ではない。奇クはSMの邪道だ」といっている人がある。「夫婦プレイは、なれ

合いのエセサディズムだ」という人もいる。しかし、縛りや拷問の真似ごとと陶酔出来る私のような人間もいるのだし、なれ合いのプレイが出来ようになるまでの、大変なプロセスを理解して欲しいものだとも思うのだ。

「常連ばかり優遇している」という発言には同感。団氏のもものが三つも載ったり、同一の人のものが二つというのはザラなどではどうかと思う。投稿山積というのだから、もっと素朴なものも採用して貰いたいと思うのだ。自分の胸底に奥深く秘めた願望、切ない心情を、やっとな投稿で吐露している人は多いに違いない。私は、そんな素朴な縛りや責めへのあこがれを、もう一度発見してみたいものだと思っているのだ。

「マンネリだ」という人もいる。私もそう思う。その証拠に、ただやたらとネチネチした責め描写の繰返しには、時々いやになる。

菱縄マニアの私としては、当然かも知れないが菱縄フォトがうれしかった。と同時に、それを眺めながらつくづく、菱縄にあこがれ求めつづけて来た自分の変ななさに、考えこまずにはいられなかったのである。

イメージ画集 「獲物を狙う女」

室井亜砂路



再現する 褌

江川 乱

男性股間下着としての古来より
の褌は現在、日常生活から殆ど忘却されてしまった。

海の男の力強さを印象づけた、六尺褌の若い漁師の裸像も姿を消し、舢舨等に僅かに残っていた海女の古典的褌姿も、保温のためにゴム・スーツに変わってしまった。

古代泳法を受けついだ伝統ある高校の水泳部も、全員、海水パンツに変わり、模範演技をする来賓老人のヤセタしわだらけの肉体にまとった六尺褌が、痛々しい郷愁を

かきたたせていた。

和服を着用する男性も、その下着はシャツやパンツに変わり、日常生活での下着としての褌は、老人を除いて殆ど消失してしまった。

実用性は、ともかくも、純白の褌姿は六尺褌であれ越中褌であれ、その素朴な清潔感と男性的緊縛感で、未だかなりの愛好者が残っている筈だ。

しかし、風俗の流行は怖るべきもので老人を除き現在、褌愛好者は、若い女性に、奇異なH趣味者

イメージ画 「野晒し放置」 宮城 昌子



あの手この手の縛りが色々と発
表されている中で、菱縄のちよっ
とも変らないパターンが、ふとそ
れに憑かれた私の生活の、ちっと
も変らないパターンを思い浮かべ
させたのであろう。

それでも私は、本当に自分の分
身を見るような思いで、菱縄フオ
トを飽くことなく、むさぼるよう
に眺め続ける。……そして「マン
ネリ」がどうの「繰返しは嫌にな

る」などと、本心から思った自分
に苦笑せざるを得ないのだ。私を
も含めて、自分の嗜好にピッタリ
のものに関しては、マンネリ感の
度合が違ふ身勝手さがあるのだろ
うか。余り偉そうなことはいえな
いと反省する。

彼女も菱縄に飽いたとはいわな
い。「ゆりカゴから墓場まで」……
大げさにいえば、菱縄は私にと
ってそんなものである。

と見られるように低下してしまっ
た。米国の男性誌「マスール・ボ
ーイ」等に現われた筋肉質の男性
モデルが、モッコ禪に類似したS
UNNERと呼ばれるものを着用
している。腰紐が調整できる細い
ストラップで、新型モッコ禪であ
る。総じて、外国趣味の若い現代
女性がそれを見て何と言うか、興
味がある。定めし、古典的な日本
禪を再認識することだろう。

明治二十七、八年頃の浅草六区
の興業街で娘剣舞が大流行をした
ことが風俗記に記載されていた。
しかし観客の興味は娘の剣舞にあ
るのではなかった。若い娘が、剣
舞の最終に越中禪だけの素裸で、
白扇を翻して大きな尻を振りたて
「日清談判、破裂して」と、踊り
舞ったためだった。当時としては
それは興行許可範囲内での、最大
限の肉感的刺激ショーであったこ
とだろうと思う。娘が美しければ
美しいほど、その禪姿は、さぞ似
合ったことだと思う。当時の若い
女性には当然、現在以上の羞恥心
を持っていた筈だ。しかし、現在の
若い女性の禪に対する嫌悪感とは
異質のものではないかと思う。そ
の頃は禪は未だ男性標準下着であ
って、若い女性がそれを着用する

ことの倒錯した羞恥感だけであっ
たと思う。剣舞そのものが男性的
舞踊であり、それを若い美女が男
装で踊り、最後に乳房が露出し、
越中禪とのアンバランスの組合せ
が、ハプニング的興味となったこ
とだろう。その頃、アンネ等の生
理用品も市販されていなかった頃
モッコ禪に類似したそれが、女性
自身で手作りされた隠れたる愛好
品でもあった。現在、分譲写真等
で見る六尺禪姿の美女は、その豊
満な臀部、乳房をこれ見よがしに
露出して、余りにも堂々と威圧的
で羞恥心がないように思われる。
美女の禪姿の最高効果は、その羞
恥感にこそあるべきものだ。それ
故に、女性に対する禪着用責めと
もいえる羞恥責めがある。

或いは、興業街で古びた娘剣舞
的流行が再現するかも知れぬ。そ
の時は羞恥心を忘却した若い日本
髪の美女が、堂々たる肉体美を七
彩のライトに映え、原色の六尺禪
をまとった裸女群のハレンチ乱舞
にて、さぞ、愛好者に感謝の涙を
流させることだろう。それが忘れ
去られた古典的禪であればこそ、
珍奇な刺戟を追求する観客に倒錯
した違和感となって歓迎されるこ
とであらう。

煙草責めプレイ

城野道一



してから、火のついたキセルを咥えさせようとしたのですが、彼女はそれが長キセルとわかると嫌がって、仲々煙を吸い込もうとはしません。

そこで、後手に縛ってある上に、別の白いひもで胴を縛り、グイ

グイと締めつけてやりました。彼女の腹部が二ツに分れているように見える程ひもが喰い込んで、完全にひもが隠れてしまった頃になって、やっと苦痛を覚えたらしく吸うからゆるめてくれといいだしました。

そこで、締めつけるのを止めて少しゆるめてやり、改めて長キセルを咥えさせました。今度は素直に吸い始めたのですが、その吸い込む煙りは、ホンの僅かです。日頃は喫煙しない彼女ですから無理もないのですが、それが私の狙いです。



「もっと景気よく、ぐうと吸い込むんだッ！」

といいながら、胴のひもを、じりじりと締めてやるのです。

彼女は身をよじりながら、それでも咥えたキセルを放しめせず、観念したように、横縄のかかった胸を張って大きく吸い込んだ様子がみえました。

私がキセルを取ってやりますとすぐさま顔が隠れてしまうほど、白い煙が一ぱいに吹き出され、彼女は縛られた身をゆるがせて、咳きこみます。

このようにして、若い女性が縛られて

たばこにむせんでいる姿というのが、私にとっては、何にも例えようのない美として映り、飽きることはないのです。

私が一休みする間、彼女には火の点いたキセルやパイプなど、なるべく重い喫煙具を咥えさせておくのが普通です。つまりプレイの間中、彼女は喫煙具をはなすことが出来ないわけです。

このモデルとのプレイは、既に何回か行っていますが、今でも日常の喫煙はしません。だが近頃は慣れたのか、縛られたままでマドロスパイプやキセルを咥え、器用に煙を吐き出したり、鼻から吹き出したりすることもあり、無理に吸わせるところに妙味を覚える私としては少し物足りませんが、眩きこんでむせる姿は満点です。



最近の映画など、奇ク顔負けのすごいのが続出して、何から見てよいのやら忙しいことになってきました。この種の映画で、一度ぐらいは「煙草責め」が出てこないものかと期待して、出来る限り見るのですが、今までのところ、全然なくて残念です。奇ク誌上にも若い娘に葉巻や喫煙具を使った責めなどは減多に載らず、待ち望んでいる私としては失望ばかり。僅かに一月号の鼻へのプレイで、両方の鼻孔に巻たばこを差しこんで喫煙させる楽しい読物にぶつかった程度です。

この写真は、私の過日行ったプレイの時のものです。目かくしを

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円
 大塚 啓子
 足挙げ開股責め
 大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円
 梨花悠紀子
 猪吊り三態
 大手札三枚一組 略号(いの) 四〇〇円
 梨花悠紀子
 責め衣縛り
 大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円
 大塚 啓子
 強烈エビ責め
 大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円
 玉田美佐子
 後手首の高縛り
 大手札三枚一組 略号(ねへ) 四〇〇円
 玉田美佐子
 椅子またぎの責め
 大手札三枚一組 略号(ぬと) 四〇〇円
 玉田美佐子
 全裸脚挙げ縛り
 大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円
 長野 良子
 全裸アグラ縛り
 大手札三枚一組 略号(てへ) 四〇〇円
 長野 良子
 全裸屈伸縛り
 大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円
 長野 良子
 強烈エビ責め
 大手札三枚一組 略号(まと) 四〇〇円
 松本アサ子

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円
 関谷富佐子

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円
 絹川 文子

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円
 絹川 文子

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 略号(ゆす) 四〇〇円
 遠藤百合子

縄目に悶える夫人

大手札三枚一組 略号(ほく) 四〇〇円
 関谷富佐子

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 略号(ほむ) 四〇〇円
 関谷富佐子

膨満正面縛り

大手札三枚一組 略号(へな) 四〇〇円
 長野 良子

マニヤ全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 略号(いな) 四〇〇円
 栗本ミチ子

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円
 関谷富佐子

乳房責の苦悶

大手札二枚一組 略号(もろ) 三〇〇円
 関谷富佐子

全裸ムチ打ち

大手札四枚一組 略号(もた) 五〇〇円
 関谷富佐子

強打に泣く裸身

大手札四枚一組 略号(むち) 五〇〇円
 関谷富佐子

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円
 関谷富佐子

全裸股間縛

大手札四枚一組 略号(せら) 五〇〇円
 関谷富佐子

双胸の強調縛り

大手札三枚一組 略号(そう) 四〇〇円
 長野 良子

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円
 大塚 啓子

色禪の開股縛り

大手札三枚一組 略号(いふ) 四〇〇円
 長野 良子

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円
 大塚 啓子

乳房しばり

大手札三枚一組 略号(うは) 四〇〇円
 長野 良子

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円
 大塚 啓子

木馬責三態

大手札五枚一組 略号(もく) 四〇〇円
 大塚 啓子

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円
 大塚 啓子

檻に入れられた女

大手札三枚一組 略号(もの) 三〇〇円
 山原 清子

浴室の全裸刺青

大手札三枚一組 略号(よな) 六〇〇円
 山原 清子

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 略号(はね) 四〇〇円
 山原 清子

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 略号(はた) 一〇〇〇円
 山原・鈴木

碧玉裸身緊縛

大手札三枚一組 略号(のん) 四〇〇円
 刑部 典子

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円
 大塚・東浦

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円
 大塚・東浦

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 六〇〇円
 大塚・東浦

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 六〇〇円
 大塚・東浦

凌辱されるマゾ女

大手札五枚一組 略号(きと) 六〇〇円
 大塚・東浦

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円
 大塚・東浦

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円
 東浦ひかる

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 略号(なむ) 四〇〇円
 東浦ひかる

全裸の緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 略号(ゆり) 五〇〇円
 遠藤百合子

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

這ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円

美女のおいしい足を舐める

大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号(るは) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ) 四〇〇円

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号(かく) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(か) 四〇〇円

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号(かな) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(か) 四〇〇円

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号(かむ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(か) 四〇〇円

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号(れち) 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(か) 一五〇〇円

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号(きか) 四〇〇円
絹川 文代 略号(き) 四〇〇円

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号(いり) 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(い) 一五〇〇円

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号(かふ) 四〇〇円
東浦ひかる 略号(か) 四〇〇円

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆ) 四〇〇円

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号(ほの) 四〇〇円
絹川 文代 略号(ほ) 四〇〇円

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号(るい) 五〇〇円
大塚 啓子 略号(る) 五〇〇円

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号(るは) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(る) 六〇〇円

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号(ほは) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほ) 四〇〇円

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号(ほい) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ほ) 四〇〇円

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号(へき) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へ) 六〇〇円

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号(へか) 六〇〇円
大塚 啓子 略号(へ) 六〇〇円

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(かる) 四〇〇円
山原 清子 略号(か) 四〇〇円

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ) 一三〇〇円
山原 清子 略号(か) 一三〇〇円

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに) 一二〇〇円
山原 清子 略号(か) 一二〇〇円

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号(けか) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(け) 七〇〇円

いちじく浣腸の実施

大手札五枚一組 略号(けき) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(け) 七〇〇円

百CCのポンプ浣腸

大手札五枚一組 略号(けく) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(け) 七〇〇円

オマルに排便の姿態

大手札五枚一組 略号(けし) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(け) 七〇〇円

浣腸後オシメ着用

大手札五枚一組 略号(けこ) 七〇〇円
大塚 啓子 略号(け) 七〇〇円

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号(のけ) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(の) 四〇〇円

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号(むい) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(む) 四〇〇円

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号(むは) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(む) 四〇〇円

施される浣腸

大手札三枚一組 略号(むろ) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(む) 四〇〇円

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号(ゆか) 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆ) 四〇〇円

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号(ちぬ) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ち) 四〇〇円

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(ちり) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ち) 四〇〇円

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号(ちら) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ち) 四〇〇円

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号(かね) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(か) 一〇〇〇円

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号(かて) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(か) 一〇〇〇円

シリントナーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(か) 一〇〇〇円

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号(かち) 一〇〇〇円
山原・東浦 略号(か) 一〇〇〇円

アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの) 七〇〇円
山原・東浦 略号(か) 七〇〇円

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも) 五〇〇円
山原・東浦 略号(う) 五〇〇円

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ) 五〇〇円
山原 清子 略号(う) 五〇〇円

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号(ぬる) 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬ) 六〇〇円

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号(ぬか) 六〇〇円
美木乃々子 略号(ぬ) 六〇〇円

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号(るて) 五〇〇円
大塚 啓子 略号(る) 五〇〇円

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号(るち) 三〇〇円
大塚 啓子 略号(る) 三〇〇円

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号(ると) 四〇〇円
大塚 啓子 略号(る) 四〇〇円



奇ク編集部の皆様、読者の皆様
その後お元気ですか、お蔭様で私
は元気です。いつも気にかけてな
がらも仕事の関係で以前にお約束し
た作品も思うように書けなくて困
ります。それに皆様の優れた作品
を読ませて頂くと自信はなくなる
し、益々ペンは進みませんが来年
はなんとか書かせて頂きたいと思
います。只身障者のため行動的に制
約されるし、私の性向はサドであ
り一般社会では変態というもので
あり、交際している女性はあるて
も、モデルとして自分の望むよう

なプレイさせてくれる女性はなく
て困ります。身障者であり、読者
の皆様のお便りにあるようなプレ
イは出来ないかも知れませんが、
私なりのプレイを理解して下さる
方があれば、条件とか、モデル料
とか、自宅で仕事をしている……
自分にとって連絡方法など、問題
も多いが、出来ることなら、読者
の女性の方にモデルになって頂き
たいのです。奇ク誌上で良いです
から、条件などを理解して下さい
方があればお聞かせ下さい。お便
りをお待ちしております。

(長野県茅野市・宮田博)

初めてお便り差し上げます。私
は福島県に住む田舎者ですが、年
少の頃よりSに魅かれて現在迄参
った者です。現在郵便局の集配を
しており五十二才に成りました。
労組の役員やPTAの役員なども
しておりますがSに対する趣味は
年ごとに深まって参ります。御誌
に對しましては、もう十数年以前
からの愛読者で大判から菊判にな
った頃からずっと拝見していまし
たが、最近当地方に姿を見せない
ので発行を止められたのかと残念
に思っていました。(書店で聞く
のが氣まりが悪くてというのは、

生じっか労組とかPTAに関係し
ておりますので自分から引け目
を感じるのです)今度京都に旅行し
まして御誌を発見、まことになつ
かしく十月号、十一月号を買って
参りました。私のS歴は幼時から
で、その頃の遊び道具であったメ
ンコに書いてあった縛り絵でS的
なこうふんを感じました。長ずる
に従って縛り絵を求めて古本屋を
漁り回りました。(小学校を出る
と店員として東京に昭和十六年ま
でおりました)オール読物、講談
雑誌、文芸倶楽部などが主な対象
で女の縛り絵なら何でも切り取っ
て集めました。だから店員として
の給料は全部これに使いました。
当時伊藤晴雨先生作品や梅原北
明さんの発行された変態刑罰史な
どは最も私を魅了しました。
だが何といっても当時は検閲がき
びしくて縛り絵も満足なのが手に
入りにくかったのです。戦後は御
誌をはじめ数々の雑誌が発行され
私は手当り次第に買い求め相当の
量になっております。

(福島県・田端四郎)

奇クは最近連続愛読しており
ます。特に団先生ご執筆の「花と
蛇」は非常に興味深く現実でない

夢と希望を描いて下さっており私
にとって楽しみの一つです。特集
号を一気に読み、財閥遠山家の美
しい若妻静子夫人や令嬢、女高生
に至るまで誘拐し屈伏させ、数々
の美肌をなぶり地獄図絵を展開し
ておりますが、息もつかせず堪能
しました。読んだところでは、夫
人並びに京子嬢の責め場面が多く
清純な美津子、小夜子の方がとん
とお留守になっておりますが、こ
の方も是非責めて下さるよう願
います。四十三年七月号より津村に
よる小夜子への恥しいなぶり、更
に断髪とやっとなりの夢を充たして
くれました。特にこの両嬢のもつ
と責め上げられて苦悶する場面が
欲しいものです。特集号の終りの
方には津村によって小夜子が処女
を失う寸前までありましたが、そ
の後の責めが手に入らずそのまま
になっているのが残念でたまりま
せん。私は本年二十五才、やはり
自分より若い女が責められている
場面を読む方が興味があります。
なお四十四年一月号では、又もや
清純美貌の処女千原美沙江をねら
っておりますが、この誘拐に成功
して新しい生贄が激しい責めを受
ける場面を想像し大いに期待して
おります。団先生がどういう具合

ずきずきと通っております。仕事は毎日同じ単調なもので、週一回の休みの日に映画館へ行ったり、本屋で自分の好きな本や雑誌をさがしたりするのが楽しみです。孤独な性格でお友達もないので、いつも一人で行きます。でも喫茶店のテーブルで一人坐っているときは淋しい気がします。どなたか誘って下さる方があったらと思います。すが、みんなアベックでいかにも楽しそうにしています。私を縛って可愛いがって下さる同好の方っていられないでしょうか。私がまだ結婚しなかったときの写真を同封しておきます。うしろの大きなタンクは工場の裏にあるものでヒル休みのときうつしてもらったものです。もし誌上にのせられるのであれば、この写真にして下さい。あとの一枚は、やめて下さい。

(門真市・藤原笑子)

一年前より家庭の事情により山形に住んでおります。たまたま仕事の関係で上京した際上野地下街の本屋さんで奇クを買いました。夜行の列車で奇クを読むのが何よりも楽しみです。最近の奇クは写真、グラビアがなくなり、物足りなく、本屋さんに行くのが遠ざか

っておりますが、いつものくせで本屋さんをのぞいては、チラチラと見ていました。私は谷ナオミさんのファンです。映画シナリオ「赤い拷問」などよかったです。映画はかかさず見てきました。編集部だよりのページに本誌でお馴染の谷ナオミ嬢と出ていました。今後とも谷ナオミさんをいろいろと責めて苦痛と羞恥に満ちた写真をとってほしいと思います。都内で実演をやっているそうですが、場所はどこでしょうか。これから死ぬまで愛読してゆきたいので私の夢をこわさないようにして下さい。

(山形・中川明)

大阪の帝王様、お便り嬉しく拝見いたしました。私をミッチリ調教して下さいとのこと、どうか可愛い女に仕込んで下さいませ。私は貴男様の前で生まれたままの姿となり、身体の隅々まで調べていただくのです。ご命令のままにどのようなポーズでもとりますから、十分に検査して下さいませ。そしてサイズも計測し、女としての機能検査もしていただきたいですわ。貴男様に調べていただいている間に次第にたかまっていき、花びらの開いていくさまをハッキリ

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しうV

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八したV

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しちV

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しつV

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八してV

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しとV

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しやV

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しゆV

あぐら縛りの羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しよV

片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とはV

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とにV

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とほV

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とへV

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とちV

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とりV

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とぬV

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とるV

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とかV

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とまV

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とみV

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とめV

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八ともV

リ見届けて下さいませ。それからいよいよ貴男様のきびしい調教をうけるのです。物を拾ったり字を書いたりはもちろん、バナナ切りや卵割りが立派にできるよう指導していただくのです。それによって、女として一番大事な部分が出来上げられ、魅力のある女として成長していくのです。私は、もう貴男様に奉仕する奴隷ですから、どんなご命令にも従います。もし少しでも、ちゅうちょしたりこぼんだりいたしましたら、どのようなお仕置でも、お受けいたしますわ。そんなときは、どうか貴男様のお手で、すっかり剃り上げて、幼女のような、あどけない姿にして下さいませ。浣腸もして下さいませ。塩水も、お腹一杯のませていただいて、排泄する姿を正面から見ていただきたいのです。その他、調教を受ける女として充分、自覚しているつもりですが、思わず羞恥に身をくねらすようなショッキングな方法を考案して下さい。初枝のお願いきいていただけますかしら。

(横浜・片野初枝)

城山君。三角馬ぐらい直ぐ造れます。もし良ければ携帯用三角木

馬を造って差し上げましょうか。造り方はまず厚さ九ミリ、長さ六十センチ、巾四十センチぐらいのアルミ板を二枚用意し片側を三十度仕上げて蝶番で固定します。アルミ板を開いた頂角は六十度になるようにします。厚さ三ミリ、巾三十六センチ、長さ八十センチの鉄板を用意し、三角の下にあてます。両端は十センチ宛でるのでここに四カ所穴をあけ、松の枝から吊るせばでき上りです。アルミであるから軽く、折りたためば小さくなります。貴女の足には買物袋を下げ、中に石を入れれば、良い重しとなります。またトゲのついた皮製ブラジャーは、如何ですか。貴女の乳房に合った金属製リングを二組用意し、細手の皮バンドをもって背中固定します。皮バンドは二重になっており中の方に五センチ毎に画鋲をうめこみます。皮バンドの画鋲は貴女の肌に喰い込み、リングは乳房に喰い込むこととなります。リングの中の乳房は、お碗型のゴムキャップがあるから、これで引っぱり出せば良いのです。皮バンドは両腕にある箇所と背中の中中に小さなリングを縫いつけておけば、簡単に高手小手に縛ることもできます。

可憐表情の全裸縛り	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆめ	〇円
立縛り正面裸晒し	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆえ	〇円
両手吊り全裸晒し	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆひ	〇円
雁字搦目後手縛り	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆあ	〇円
股間縛り柔肌責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆも	〇円
猿ぐつわ開股責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆに	〇円
豊満な臀部強烈責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆほ	〇円
強制全裸開股責め	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆみ	〇円
股間縛りで悶える	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆる	〇円
全裸縛りに羞らう	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八ゆへ	〇円
私の妊娠腹を見てね	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆわ	〇円
縛られた妊婦横臥す	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆよ	〇円
被虐に燃える全裸妊婦	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆぬ	〇円
尚も見せたい妊婦腹	大手札四枚一組	略号	五〇〇円
中河恵子	略号	八ゆる	〇円
股間縛り首縄正面	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よれ	〇円
両手吊り正面晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よそ	〇円
全裸高手小手の麗身	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よの	〇円
全裸股間縛りの媚態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よや	〇円
強烈な変型エビ縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よい	〇円
正座猿ぐつわの仕置	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よふ	〇円
凄絶海老責め地獄	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よえ	〇円
女体二つ折り縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よぬ	〇円
あぐら縛り全裸晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よあ	〇円
イルリの浣腸責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	八よた	〇円

着る洋服は背中中はチャックでなくボタン式にし、同じく両脇もボタンで開くようにしておけば、細い紐とか革ひもを利用してボタンとボタンの間から縛りあげ、少し暗い所であれば街中でもそのまま歩くことができます。その他、身体二つ折り機械なども直ぐ造れますから、貴女も考えて見てはどうでしょうか。尚貴女の自縛、たよりないですね。私はガールフレンドをモデルに何度も自縛させておりますが、貴女のような、たよりないものではありません。ただし、そのかわり自縛といっても自分では解くことはできませんから、かたわらに刃物を用意せねばなりません。両手首は高々と肩先に上り、縄は肌に喰い込んで、とても自分で縛ったとは思えないぐらいです。方法については、もし希望であれば教えてあげますからご返事下さい。(西宮・和田一)

○ 花と蛇に寄せて……。文夫、美津子夫婦が眼前で繰り広げた、愛し合う若夫婦の肉体の営みも終り今夜の最後の、そして最大の出し物の出演者が入ってきたとき、酒を飲んでいた小さな茶室の中の悪徳弁護士、不動産業者、金融業者

ヤクザ幹部などは酒を呑むのも忘れて思わず息をのんだ。美しい。これから始まるショーを演ずる女が美しすぎる。アップにした髪が似合うウリザネ顔の美しさ。高小手に縛られた一糸まとわぬ全裸豊満な乳房、前かがみに顔をふせてヨリ強調されたムッチリと肉ののった発達した腰。川田、千代達の準備するおぞましい舞台装置。いくら金をつんでも見ることできない、その光景を、この見事な肉体をもつ美人がこれから眼前で堂々とさらけ出すのだ。客たちは息を殺して期待にブルブルと身ぶるいする。固い大きな腰まくら、室の宙に水平に浮く青い長い青竹多量の濃い石けん液。静子夫人の排便ショーなのだ。青竹の両端に足首を縛られ、肉体を大きく割られて高々と吊られ、全てをグラリと反転させ眼前に突き出して静子夫人。客の視線を一点に受け静子夫人は耐える。涙をポトポト流し、歯をきしませ、のけぞった美しい顔を左右に振って、うめきながら耐える。「ああ」又、おそいかかってくる。突破口を求めて荒れ狂う。耐えられない。切り込んでくる突き刺すような、おぞましい便意。「ああ、ぐっぐっ

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

あーっ」遂に全てをつき破った、見るに耐えぬ固形。静子夫人のこのような排便ショートを、ぜひお願いします。(熱烈な静子ファン)

○ 一月号は、ほんとうに嬉しうございました。本屋さんで手にとりパラパラとページをめくっている、と、ゴムマントにくるまった私の写真が二枚も掲載され「私のプレイ・ハイレイン」と菅原様の「ゴム衣と被虐に憑かれた娘」がでてくるのですもの。久しぶりに渴きをいやす思いでした。特に、胸まですっぽり入る、大きなゴム長を身につけて責めにのたうつ真弓の描写は、ただただ圧巻で、読んでいる中に私は夢中になり、例によって素肌にゴム装束をまとい、ゴムマントにくるまってお風呂場へ行き、水道の蛇口にホースをつなぎ、天井からホースをつるし、降りそそぐシャワーの水にうたれながら惚恍となったほどです。その後、菅原様の記事を参考に、いろいろな品をとりそろえ、秘密のプレイにバラエティをもたせております。(京都・梅川幸子)

○ 小生は本誌を読みはじめて、まだ日も浅いのですが、最近では、

すっかり辻村先生のとりこになつてしまいました。辻村先生のカメラ・ハントを読むために本誌を買うのだと言ってもよいでしょう。小生はSとMの両方に興味がありますが、体が余り丈夫でないためもっぱら責める方に、それも激しい方法でなく、時間をかけて乳房などをじわじわ責めることに、あこがれを抱いております。小生の最大の願望は、授乳中の女性の乳房を責めることです。これはしよせん無理な相談のようです。当年二十八才の性格温厚な男ですから、決してご心配はいりません。プレイの経験はありませんので、うまくやれるかどうかわかりませんが、近県にお住まいの女性の方で、なるべく初心の方、お便り下さい。年上の方なら、なお結構です。(兵庫・西山尚志)

○ 新年号に肉便女性集刊行の渴望を書きました。その願いが天に通じたか? 「篠山紀信と二十八人のおんなたち」(カメラ毎日)にわれらがスター大山デブ子のセ・ミ・ヌードの素晴らしい写真がありました。やはり篠山氏は奇才ですな。「アサヒ芸能」十二月十五日号に待つこと久し待望の新人?

開股縛りに喜悦する女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はわV

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はふV

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はほV

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はあV

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八はうV

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はさV

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はめV

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はしV

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八はもV

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はむV

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はめV

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はもV

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 八はさV

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はしV

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はすV

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はせV

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はゆV

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
大島 照代 略号 八はたV

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はちV

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はつV

竹棒の胸絞め責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はてV

竹棒開股胸絞め縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
大島 照代 略号 八はとV

八十三キロのコミカルスター井島和子嬢の偉大なる艶姿がグラビアで紹介されています。又、映画では仲代達矢の「マカロニー・ウエスタン」「野獣戦に死す」に西部女？（イタリア人）のホルセット・ス・タイルの一シーンに随喜の涙がついホロリ！次に小生好みの番付を作りました。芸能人は横綱大山デブ子、大関京塚昌子、関脇松井康子、小結井島和子、前頭筆頭赤坂小梅、同二枚目入江たか子、同三枚目淡谷のり子、同四枚目ヒロセ元美、同五枚目伊吹まり代、同六枚目春川ますみ。奇クモデルは横綱水野香代、大関山原清子、関脇愛知葉子、小結大塚啓子、前頭筆頭長野良子、同二枚目大島照代、張出横綱として小妻容子氏画の女性。

（滋賀・赤畑修造）

○ ゴムファンの皆様、お元気ですか。一月号の目次で梅川様の「ハイレイン」という表題に訝りながら四十八頁を開きましたところ、私が最近、興味を持ちかけた膝までのゴムレインシューズというところが分かり、さすがにベテランのゴムファンと痛感したものです。実は過日、外人が黒の輝きはありますが黒色の、膝まであるゴム

レインシューズを穿いて、さっそうと町を歩いているのを見たことがあり、いいゴム長靴があるものと思ひ羨ましく感じたものです。それが国産で売り出された由、拝読し、羽二重ゴム引きレインコートのなくなった今日、淋しくなつた中に、又新たな楽しみがハイレインによって生み出されたことを、ゴムファンとして、これほど嬉しいことはありません。又、梅川様が、お一人で意のおもむくままに自由にプレイできる幸せを羨ましく思い、ヌメヌメとした幼児の皮膚にも似たあのゴムの感触、プンプンとするゴムの匂い、全身に戦慄をおぼえ知覚まで麻痺させられるが如き冷やりとした冷たいゴムの味、キョンキョンとした特有の弾力等が感じられ、梅川様だけの秘密のプレイでなく、我々ゴムマニヤも充分にゴムの味わい恍惚となるのです。しかし写真が二枚しか掲載されず、そのみに不満を覚えました。十一月号には私の拙文が掲載され、それに対して渴きをいやす時まで評され、私はどれほど嬉しい思いをしたか、とてもその欲びは筆舌ではいい表わすことができません。私にとって、あの記事は初投稿であり、十二月号

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
後手裸身柱縛り		大手札四枚一組	略号一〇〇〇円
後手高小手縛り		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
豊麗な裸身をくびる縄目		大手札四枚一組	略号一〇〇〇円
長襦袢の緊縛色模様		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
緋の腰巻緊縛色模様		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
猿ぐつわに呻く女		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
柱宙吊り強烈縛り		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
ポリウムを縛りあげる		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
縄に苦悶する裸女を狙う		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
東浦ひかる		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
真紅の腰巻着用姿態		大手札二枚一組	略号八〇〇円
真紅の腰巻着用縛り		大手札二枚一組	略号八〇〇円
華麗なる緊縛裸身		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
みだらな開股縛り		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
責めに疲れた諦観		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
真紅の腰巻姿で緊縛		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
羞らいの真正面縛り		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
若肌を喰い込む縄目		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
高手小手後手縛り		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
股間縛りの開股姿態		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
羞らいの股間縛り		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円
中河恵子		大手札三枚一組	略号一〇〇〇円

で何かお叱りか、お意見などあるのではないかと、不安と期待の入りが、ご意見を見出し得ず、どなたの目にも触れることがなかったのかと一寸がっかりしましたが、一月号を手にして、それが日頃、尊敬する梅川様お一人、関心を持っていただけたことがわかり、さながら万人の味方を得た思いがいたしました。この欄に出るゴム通信は赤裸々であり、ゴムマニヤとして、いつも魅力の中心にさえなるほどです。なお、今回発表されました菅原敬夫様、ちょうど梅川様が希望せられた、ゴムマント着用が、ふんだんにとり入れられ、私たちがどうしても表現しにくいものを、きちっとした文章で巧みにまとめられ、ゴムマニヤの一人として楽しく嬉しく拝読いたしました。神戸の大西良子様、貴女の生活に密着したゴムプレイいとも楽しく拝読し、中でも「あれほど好きなゴムが、今では憎くさえ覚える」とのこと、何かわかるような気がするのと同時に、私もそのような感じを味わうことがあり余りの表現の巧みさ豊かさに感心しております。護謨好夫様、津川亜紀子様、その他、古川裕子様、

先輩諸氏諸姉のゴムプレイ、ゴム通信、ぜひぜひおきかせ下さい。

(神戸・弾六夫)

○ 奇クを読んでいるとき、いつも「俺も一つ、書いてみるか」と思うのですが、筆不精のため、つい書かずに終わってしまうのが常でした。しかし今回は、あえて筆をとりました。「SMとは何であろうか？」この質問に対して読者諸氏は何と答えるでしょうか。岩下氏がいつておられるような意見の人もおられるでしょう。その他、色々な意見があるでしょう。美意識の旺盛な人は、SMは美なり、と答える人もいるかもしれません。しかし私は、SMは悪徳であるとして、とみに思うようになりました。虐待する方も、される方も、その過程において自責の念にかられない者が一人としていないであらうか？ と思います。誰しも多少なりは自責の念にかられているはずで、絶対にはそうであるべきなのです。奇クに執筆されている人は、読者より、より強く自責の念にかられているのではないのでしょうか。自責の念にかられながらも、悪徳の中に存在する一条の光りを引き出すことではないでしょ

双胎臨月蛙腹鮮烈写真	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	腰巻一つで縛られる刺青女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
増田みゆき	略号八れや	山原 清子	略号八やみ
双胎臨月腹強烈縛り	大手札六枚一組 略号二〇〇〇円	女相撲迫力投業連続動作	大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
増田みゆき	略号八れゆ	大塚・東浦	略号八なる
臨月腹裸身の媚態	大手札六枚一組 略号二〇〇〇円	恵子の妊孕美観賞	大手札四枚一組 略号一二〇〇円
増田みゆき	略号八れえ	中河 恵子	略号八ぬめ
黒縄縦縛りの媚態	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	孕み若妻の羞らい	大手札四枚一組 略号一二〇〇円
中河 恵子	略号八れぬ	八の字の開股責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
立縛りにあうの裸女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	足枷強制開股責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子	略号八れね	全裸強烈逆エビ責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
開股された股間縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しけ
木村 洋子	略号八れむ	両手吊り足枷責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
豆絞りの猿ぐつわ縛り	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しこ
木村 洋子	略号八れむ	両腕逆手吊り責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
柱宙縛りに喘ぐ刺青女	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	愛知 葉子	略号八しら
山原 清子	略号八やか	豊満なる臀部責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
高手小手に悶える全裸	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	大の字縛りと足挙げ責め	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子	略号八やき	愛知 葉子	略号八しわ
緊縛に映える入墨の肌	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円	お申込みは大阪阿倍野局私書箱	第14号(箕田京二宛)へ願います。
山原 清子	略号八やく		
脱がされた緊縛刺青女体	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円		
山原 清子	略号八やも		
縄にのたうつ入墨裸身	大手札三枚一組 略号一〇〇〇円		
山原 清子	略号八やし		

うか。その光りが何であるか、私にはわかりません。しかし、それは自責しながらも、欲望の方が強いために、行動に移す力によって悪徳ではなく、人間の赤裸々な欲望による真の人間美を引き出し得る光りではないでしょうか？ 私もお且、SMを極限まで発展させたいと思っております。諸氏のSM感についての意見を聞かせ下さい。

(広島・広田勇)

太田憲子さんを讃えて。一月号のサロンの短歌は、どれもすばらしい佳品でした。男子を膝下に組敷き征服する感激的情景を、かくも雄勁且精緻に詠まれた太田さんに深く畏敬と感謝の念を表わします。文武両道に秀でた格斗型ドミナの出現は、正しく近來の快事というべく、良夫少年には羨望の念を禁じえません。力づくで男性を征服する逞しいアマゾンこそ、私の理想的女性像だからです。そこで太田さんにぜひともお願いしたいのですが「四年前の体験」を手記の形式で本文に発表して頂けないでしょうか。「女性による男性征服」を女性の側から記述した作品が、今まで全くありませんでし

た。太田さんの文才豊かな麗筆で誌面を飾ることにより、本誌の文獻的価値を一層、高めるものと確信します。格闘し組敷き凌辱し征服する全過程をドミナの心理と行為を通じて克明に描写、表現することは、すばらしいことだと思います。

(田代俊夫)

小説雑誌のブームとやらで、店頭には数多くの雑誌が、ところせましと並んでいるが、奇くほど哀愁のただよった雑誌は他にないと私は思う。それは単に、本誌が異端者扱いにされるからではなく、本誌の内容そのものが実に孤独なのだ。おのれの孤独をなぐさめるために、私は奇くを愛読しはじめたのだが、そうすることによって益々孤独になってしまったような気がする。奇くを読みふけていくときの私は最高に幸福だが、読み終えた後の、あの孤独な感情は筆舌には、つくしがたいものがある。特に一月号の星野薫さんの告白文を読んだ後などは、無性に淋しくて涙ぐんでしまった。世の中には自分達の夫婦プレイの様子を写真や文章で堂々と発表される幸福なカップルもあれば、プレイのあるいは人生の良き伴侶を渴望し

全裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	脈打つ全裸の臨月腹	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こよ	〇円	中河 恵子	略号	八こふ	〇円
乳房強烈膨隆責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	臨月腹の革紐股間縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こわ	〇円	中河 恵子	略号	八こや	〇円
海老責めに苦悶する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	猿轡の臨月妊婦腹縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こお	〇円	中河 恵子	略号	八この	〇円
全裸の緊縛全身晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	卓上の股間縛り狂態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こる	〇円	長井葉津子	略号	八こそ	〇円
煙草責めに喘ぐ女	大手札二枚一組	略号	三〇〇円	羞恥の足挙げ責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こぬ	〇円	長井葉津子	略号	八これ	〇円
緊縛麗姿に映えるライト	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	悦虐責めの女体終着駅	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こほ	〇円	長井葉津子	略号	八こた	〇円
臀部強調後手縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	片足挙げる鞭打ち責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八ころ	〇円	関谷富佐子	略号	八こら	〇円
羞恥に悶える全裸緊縛	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	柔肌に弾ける惨酷な答	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こに	〇円	関谷富佐子	略号	八こな	〇円
ホステスの緊縛姿態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	あぐら縛りの女体鑑賞	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こち	〇円	佐近麻里子	略号	八こえ	〇円
二つ折りで責める女体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円	対談用に縛られた女	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	八こへ	〇円	左近麻里子	略号	八こて	〇円

ながら、永久にめぐり合えない哀れな人もある。私のように健康の勝れない人間は、奇くを読んで、そのムードに浸るのが関の山だ。それによって尚更、自分が孤独に

の心配の種は、奇ク誌が当局の手によって潰されてしまいはしないかということなのです。そうなのは、編集部の情が、かえって仇になってしまいます。文章は勿論ですが、掲載フォトには、どうか細心の注意を払って下さいと、不本意ながら、あえてお願いする次第です。私は奇クを(すなわち恋人を)奪われることが一番、悲しいのです。

(兵庫・KB生)

梅川幸子さんへ。ゴムマニヤとしての、あなたの告白を、何度か読ませていただいているうちに、「主義に殉ずる人の、気高さ」といったものが、胸にせまるおもいであります。あなたの好んで着用されるゴム衣やゴムブーツは、革服、革ブーツと共に、Fの世界に不可欠の媒体です。掲載された写真だけでは、あなたのFマニヤとしての全容を拝見することができませんが、四十八頁にある斜め後向きのポーズは、ゴムブーツの張りといいい、踏みしめた足もとから想像される上体の緊張が、よく描かれていて、すばらしいと思います。小生、目下ゴム服に注目、この服装による創作を企画中で、ゴム衣に関する資料も少しずつ集ま

っておりますので、交換も可能です。あなたの赤裸々な感想やデーターを、Fマニアの歴史の中にとどめていただこう、ご返事をお待ちしております。

(切腹研究家・城山秀彦)

新年号を拝見、サロンの頁をめぐってまずびっくり。私の拙文がサロンのトップをかざっているではありませんか。嬉しいやら恥かしいやら、ともかく光栄の至りです。でも初めの「本誌はまだ読み始めて間のない……云々」というのは、頂けません。私は奇クに関しては十年選手ですからね。しかしペンネームの美津木守は傑作だと思います。辻村先生のサロン楽我記に、梨花悠紀子の近況が書いてありました。せめて素顔のフォトでものせて欲しかったと思うのは、オールドファンの私一人ではないでしょう。できましたら分譲の方で名花の再登場をお願いしたいものです。ショート・ショートの「或る夜の出来事」は面白かったです。このような形式のものを毎月のせて下さい。「緋縮緬地獄」は快調で佳境に入ってきました。いつもいうことですが、挿画があったら、なおいと思います。ほん

とうに惜しいことです。「SMの一般化について」葛西六郎さんのご意見には部分的に賛成です。つぎに「女の城」を読んで、確か昭和三十六年の十月号にのっていた「三匹の女クモ」を思い出しました。三人の女が一人の同窓生の美女をいじめて学生時代の恨みを果たすという物語で、女が女を責める妖美の世界を描いていました。「続・女の城」を期待します。三十五頁、一九二頁のカットがなかなかイカしかったです。十二月号、新宿町人さんの読者のウップン「私にも一言」は、なかなか考えさせる貴重なご意見で、さすが十六年間、バックナンバーを誇る読者だけのことはあります。奇クサロン二四一頁のイメージ画「面白いお遊びね」は、最近の男性週刊誌のアイデアだと思えますが、少し交って面白く思います。イメージ・モデルは島倉千代子と日野てる子でしょうね。また、団先生のシナリオは必ず毎号のせて下さい。最後に奇クサロンの読者の活発なご意見には敬意を表します。

(東京・美津木守)

藤村千代子さんに。「切腹の魅惑」二月号で拝見しました。「切

腹マニヤ」と自称しておられますが、大体、切腹願望というののは、ナルシズムの系統とされますので、切腹の擬態を以って精神的に自己愛を充足するのは当然ですがその自己愛の対象である腹部を自傷するような行動は、納得しにくいものがあります。人間心理の複雑さといってしまうえば、それまでですが、動機とか状況について詳しいお話を伺いたいものだと思います。

(京都市・中康弘通)

書店で何気なく手にとってみたら斎藤夜居氏の書誌学的な稀書解説が載っていたので購入し、いつの間にか一年余り経ってしまいました。奇ク二月号は目次も見ないで買ってしまい、披見すると斎藤氏の原稿がでないもので、大いに失望しました。辻村先生のカメラハントに一寸目を通すだけで、他の創作などは、執筆者には申しわけないが時間の浪費なので読んだことがありません。「花と蛇」も随分、永く続いているようですが、よくもマア延々と書けるものと感心しています。「大きいことは、いいことだ」はチョコレートのコマージュですが、長いことは、いいことか悪いことか? で

次号(四月号)は二月二十五日に発売いたします

す。惜しまれている中に幕を引いた方がよいのではないかな。

(東京・小山蒙堂)

○ 東北の美川美美子様、一度お会して偉大なる太鼓腹に接したいと思ひます。肥満女性に対する(特に中年の)私のあこがれにも似た気持は、前にも一、二度、本欄に投稿したことがあります。ペンベシたる蛙腹の肥満女性に、食い込みそうな黒いパンティを穿かせて手足を縛り、サルグツワを噛ませて、いじめてみたら、どんなにかエキサイトし楽しいことだろうと思ひます。残念ながら私は最近、関西にとじこめられ、東北は如何にも遠い。一度お写真でも拝見したいと思ひます。誌上でも何かお答え頂ければ幸甚です。申しおくれましたが残念ながら当方四十五才。お世辞にも美男子とは申せません。

(洛北生)

○ 十二月号に「花と蛇」が掲載されなかったことは情けなかった。

それも突然だったので腹立たしさを感じた。「花と蛇」あつての貴

誌だと思ふ。これについてマンネリ説も多いが、私はこれが終れば貴誌を買うのを止める。現在、フィクションになったまま、文面に載せたことがそのまま伏せられてゐるが楽しみにして待つてゐる。静子夫人に対する硬貨拾ひ、黒人とのからみ合いも、期待して待つてゐる。あのムッチリした両肢を拡げ、下腹部をすりつけて硬貨を拾ひ、又、黒人とからみ合う夫人の恥かしい姿等、楽しみである。つぎに中断中の春太郎等によるアヌス責めも、千代等の観賞の中で早く行いたい。クリームをつけて念入りに責め立て、夫人のあえぎを刻明に物語つてほしい。卓上における夫人の菊の花の開花を待つてゐる。つぎにお願いだが、温泉地等のショーに夫人を特別出演させて、違った雰囲気の中で排尿シヨイや大鏡の前でマスターベーションや器具の使用によるシヨイを行つてほしい。そして前後は犬とのからみを！ 花と蛇の発展を祈る。(神戸・花と蛇大ファン)

○ 同封しました新聞記事のように

石巻市で二十七才の女の人が、自分の子供を殺した上、腹に出刃包丁を突き刺し自殺をはかったが義姉に発見され、病院に収容されたので命はとりとめたそうです。私は、この記事を見て凄しいショックを受け、その自殺未遂事件のあったアパートの近くに私の友達がおりますので、早速色々様子聞いてみました。この女の人は肥満体で七十キロ近くも体重があり、しかも、妊娠五カ月だったそうです。そのとき、この女の人は洋服を着ていましたが、スカートをずり下げスリッパを上にくたくし上げて大きなお腹を丸だしにして、おへその下に出刃包丁を突き刺したまま仰向きにひっくり返つて、凄いいしりしりをだして苦しんでいたそうです。私は、この話を聞いて非常に興奮をおぼえ、アパートに帰ると、暮れでお店が忙しいのにもかかわらずその日は休みました。そして、その女の人のようなことがしてみたくて堪まらず、鏡の前でその女の人の人になりきつてやってみようと思ひました。ストリーブで部屋を暖めると、私は上のセーターは着たまふスカートをとり、スリッパを胸まで上げ、パンティをずり下げ、パンパンに張つてゐる

大きなお腹を丸出しにして、鏡に自分の姿をうつして見ました。私は現在また太つて七十八キロにもなつてゐます。その女の人は妊娠五カ月とのことですから、その腹は相当大きかったことでしょうけど、私だってそれ以上、大きい筈です。私は無理して更にビールを三本飲んでお腹を最大限に、苦しくて正座できないほどまでに大きくさせました。私は、おもむろにナイフをとり出し右手に持ち、左手でお腹一面を、いとおしく撫でまわし、オヘソの下の一歩つき出ている部分をナイフで一寸だけ突いて見ました。しかし私は、その痛さに堪えかねて、大声をあげてしまひました。直ぐナイフを投げだし、キズを見ますと、少し血がにじんで出てきましたが、これ以上深く刺すことはできず、大きな太鼓腹を両手でさすりながら、鏡にうつる自分の偉大なお腹に、つくづく見とれてしまひました。そして、もし私のこの部屋に、可愛い、おとなしい美少年でもいれば、私はその人の前なら、このお腹を、もつとついで、のたうちまわったかもしれせん。やさしい美少年にナイフをもたせ、私はその人の前にこのお腹を突き出し

て刺させることができたかどうか素敵だろうと思ひます。

(仙台・美川美美子)

私は友達から奇クを借りて読み非常に興味を持ちました。早速、新刊を申し込み、入手と同時に終りまで息もつかずに読みました。何故もっと早く知らなかったのかと残念に思うとともに、今回はかゝらずも入手できたことを有難く思っています。私のように、まだまだ本誌を知らない人が多いと思います。他の雑誌のように一般の書店には売られておりませんので、このような雑誌があるということ、は、わからないのだと思います。

きくところによると、以前に発行されたものは、非常に高価に売られていたようです。学術書と同様に扱われている本誌は、他のつまらない雑誌に対して、ほこりを持つことができないと思います。今後とも、ますます発展されるようにお祈りいたします。

(横浜・井原つとむ)

「花と蛇」は何かと文句をつけられるが、しかし何年間もつづいてるだけのことはあって面白い。静子夫人以下、スターも揃った上に、更に清純型スターとして千原美沙江の登場。作者は誰に調教させるつもりかわからないが、興味

津々というところか。問題は今後各スターに加えられる責めの場面や工夫だが、読者も大いにアイデアを提供したらどうだろうか。多くの読者の中には創造力豊かな方もおられるに違いないと考える。小生は各スター達には、もうそろそろ肌に刺青をほどこしてもよいと思う。五人の美女たちがそれぞれ、背に腰に尻に下腹に太腿に、美しいバラ、ボタン、カンナ、ダリヤなどの花を刺青されて苦悶する姿。更に刺青が仕上って揃ってショーに出され、夫々色とりどりの色帯をしめさせられての日本舞踊の場面。そして又、五人が各々得意の芸を披露する光景など如何

だろうか。静子夫人はマスチーフ種の巨犬と取り組むショー。京子は青大将の頭を見事に体中に収める美女と蛇のショー。文夫を桂子にとられて奮起した美津子は、黒人兵との一戦を見せる。文夫は、その槍先を真赤に染め上げて出し、桂子と息のあったところをみせる。小夜子は敏感な割合に、その上達が鈍いので罰として静子夫人に先立って人工受精をされる。千原美沙江は、このショーをみせられて半狂乱となる。大塚順子は、この美沙江を散々いたぶった上、千代と相談して静子夫人に美沙江と狎が取り組むよう調教することとを命ずる等。(東京・大宮生)

本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。お早い目に御注文願います。送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約注文以外(既刊号は含まず)は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送申し上げます。

昭和41年5月号	(送共三二〇〇円)	昭和40年6月号	(送共三二〇〇円)	昭和40年7月号	(送共三二〇〇円)	昭和40年8月号	(送共三二〇〇円)	昭和40年9月号	(送共三二〇〇円)	昭和40年10月号	(送共三二〇〇円)	昭和40年11月号	(送共三二〇〇円)	昭和40年12月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年1月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年2月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年3月号	(送共三二〇〇円)
----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------

昭和41年4月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年5月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年6月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年7月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年8月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年9月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年10月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年11月号	(送共三二〇〇円)	昭和41年12月号	(送共三二〇〇円)	昭和42年1月号	(送共三二〇〇円)	昭和42年2月号	(送共三二〇〇円)	昭和42年3月号	(送共三二〇〇円)
----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------

昭和42年12月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年1月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年2月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年3月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年4月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年5月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年6月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年7月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年8月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年9月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年10月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年11月号	(送共三七〇〇円)	昭和43年12月号	(送共三七〇〇円)
-----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------

☆編集後記☆

○今月号を以て本誌は通刊二百五十号を数えることになる。区切りがいいからというのではないが、端数がないということは何かホッと息づく思いのするものである。

○“自由”を謳歌出来る現在に於て、なお少なからざる制約を顧慮し、自粛を心掛けねばならない宿命を背負う本誌の性格を思う時、この二百五十という号数は更に重みを増すものといえないであろうか。

○創刊当初から育てあげてこられた箕田編集長。なお健在にして頼るべき支柱であるがその勇氣と苦勞。更にこれを育てしめられた数多くの読者及び執筆家諸氏の、熱心にして強大な支持があつてこそ、この数字が積み上げ

られたのであろう。編集にたずさわる一人として、長く尾を引く航跡に改めて身のひきしまる想いを禁じ得ないのである。

○本号収載の中で「妖童記」△秤蕩也▽及び娘相撲物語「女の斗志」△海野三津男▽「女性乗馬のクリテリオン」△佐野寿▽の三篇は読切りものであるが、紙数の関係で分割させて戴いた。続きものは、できるだけ長篇連載だけに止めたいのだが御諒承を乞う。

○懸賞、一般にかかわらず投稿は大いに歡迎するが、ベタ書きとか、一語毎に句読点の入っているようなのには手をやく。まして相当な長さのもので、ベツタリと一マスも余さず書き込まれているとなると、発表したくとも整理がつかず、つい見送ってしまう場合がある。よろしく御留意の程を……。

(S)

〔懸賞原稿募集〕

△體驗、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これは
 と思う作品は必ず誌上に取り
 上げます。腕試しの意味で奮
 って御投稿願います。採用篇
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、
単行本或はその他見聞などで
特に興味をお持ちになった事
項の通信をお待ちします。出

用篇には本誌三月分以上又は
二千元以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じ

ないことになっております。故
悪しからず御諒承願います。
◎本文記事中に各種の「懸賞
原稿募集」を致しております
故、御応募の方は項目を御明
記の上御送稿下さい。

△讀者通信原稿▽

卷末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

三月号

昭和四十四年三月二十日
昭和四十四年三月一日
印刷
発行

編集人 杉吉北
發行人 田原俊
印刷人 虹屋稔夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社
△振替口座大阪四二七八三番△
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別承認雑誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意する各条例に指定されな
いよう充分に注意して編集いたしておりま
すが、本来成人向として発行を企図してお
り、下す関係上、十八才未満の方には絶対販
売下さらないよう、特にくれぐれもお願
い申し上げます。